昭和七年十月十五日印刷
昭和七年十月二十日發行

不許複製

國譯一切經 釋經論部 八

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者 渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所 大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地十番
振替東京一九四七一番
電話芝(三二)〇一四〇番
(三二)一一六番

製本所　開角製本所

索　　　引

（頁數は通頁を表す）

—ア—

—イ—

—ウ—

—エ—

—オ—

—カ—

—キ—

—ス—

—セ—

—ソ—

—タ—

—ヒ—

——釋經論部八索引終——

義有り。施戒具足は障礙道を示し、聞具足は無礙道を示す。

三具足經論[三六]憂波提舍終

【三六】「論」の字三本に無し。

し。菩薩も亦爾り。漏と不漏と二種具足するも、智慧力を以て皆一味と爲す。又願、方便は漏不漏の二種具足をして一切智を得しむ。不漏の法は[三四]寶積經の如し。「佛の言く、迦葉、譬へば諸方四維等の處、所有の大河、并及に眷屬一切の水聚、大海に入り已れば、彼の一切の水、平等一味にして、所謂鹹味なるが如く、是の如く、迦葉、菩薩も是の如し。種種の門を以て諸の善根を集む。願菩提の故に、一切一味、所謂、皆是れ一切智の味なり」。

施戒聞等幾ばくの因緣とは、彼の義今說かむ。施具足には二種の因緣。一には貧窮を離る。二には大富を得。戒具足には二種の因緣。一には惡道を離る。二には善道に生ず。聞具足には二種の因緣。謂く、愚癡を離れ、大智慧を得。

又復菩薩、三種具足して自他を利益す。施、衆生を攝し、衆生を攝し已りて戒聞に住せしむ。是の如く他利益の行を具足すれば、自利して阿耨多羅三藐三菩提を成就す。是の如く自利益の行を具足す。

三具足を說くに、何が故ぞ初に施、中に戒、後に聞なる。彼の義今說かむ。漸次の義に依りて、佛法彼の大海の如きを示現す。譬へば大海の次第に漸く深きが如し。佛法亦爾り。初に布施を說き、中に戒、後に聞なり。又復義有り。在家の菩薩食等を施し已りて、彼れ後の時出家の功德を聞かむ。聞き已りて深信し、家を捨てゝ出家せむ。既に出家し已りて、方に淨戒を得む。戒に住するを以ての故に、世間業を離れ、無上の聞を得む。是の故に後に在りて聞具足を說く。又復義有り。上生の次第なり。菩薩最初に自他を饒益す。是の故に施を行ず。彼れ布施し已りて、「次に何者をか行ぜん」と、是の如く思惟せむに、世尊戒及び持戒の人を說く。復「何者の次第相應か有る」と、此に則ち聞を說く。要を以て之を言はゞ、施具足とは世尊檀波羅蜜を示現す。戒具足とは尸波羅蜜、聞具足とは忍進禪慧波羅蜜を[三五]示す。又復義有り。施戒は福德具足を示現し、聞は智具足なり。又復

【三四】所在未だ勘へず。

【三五】麗本「禎」に作る。

正道幢の如し。有智の人は則ち能く禪を修するが如し。修道を伴とするが如し。健の因緣則ち畏る所無きが如し。山の寶饒く、功德寶饒きが如し。海住處の多饒にして希有なるが如し。如來の弟子には戒は大海の如し。是れ入道の行なり。信の果を得るが如し。覺知者の道理に依りて行ずるが如し。水無しと曰ふと雖も、猶ほ能く洗浴し、根莖葉無くして而も香物を生じ、穿たず、瑩かず、金に非ず、寶に非ず、是れ眞珠に非ず、而も是れ莊嚴たり。境界に非ずと雖も、而も能く後世の樂報を生ず。世間人・天・修羅・魔・梵、一切の沙門・婆羅門等の讃歎する所、他に因るの樂は是れ天道涅槃を得るの方便に非ず。不邪を濟ふが如し。泥溺有ること無し。石を離れて石を得、是の如く渡るべし。[三二]渡信濟ふべし。財物等の如し。種種の過を離る。離過道の如し。資糧、柴薪、水及び水泉、正直にして迴せず。高からず、下ならず、惡虫・蛇蝎、青蠅・蚊子、寒熱・賊等、惡物道を離る。犁を須ひず、種ゑず、熟せずして種種の田饒なるが如し。種樹無く、藥無く、林無しと雖も、而も美果を得て、味甘露の如し。高原に在らず、下濕の生ならず、餘人の作に非ず。又人の[三三]穿つ無き、常新の華鬘、乾ならず、燥ならず。善く冷えたる水の淋灌すれば熱を却くるが如し。防護せずと雖も、器仗もて鬪はず。財物を與へず、怖畏せしめず、而も樂具を得。常に富樂を得て、諍鬪の處を離る。大寶山の如し。價直無量にして海を出でず。大衆畏・命畏・罰畏・不活畏・惡道等の畏を過ぎ、影の身に隨ふが如く、此の世、後世、常に身と俱なり。此の是の如き等の種種の功德、戒と相應するが故に。

何が故に聞と名く。彼の義今說かむ。謂く、不善法寂靜と相應す。若し爾る能はずんば、則ち非義の語なり。修多羅等の十二部經、言語の說法、是の故に聞と名く。聖無盡意八十種を說く。謂く、欲修行、順心行等。何の義を以ての故に漏と不漏と二種具足して一切智を得る。不漏法とは彼の義今說かむ。智慧觀察唯一味の故に。蜜蜂王の如し。譬へば蜂王の種種の異物を皆一味と作すが如

【三二】「渡信可濟」の一句意義明かならず。

【三三】三本「取」に作る。

が如し。未來の大闇、戒を以て燈と爲す。河等を過度するに橋に因つて渡るが如し。三惡道を出づるに、諸方便の中、戒を最も大と爲す。清涼の舍の能く大熱を離るゝが如し。煩惱の大熱、戒能く清涼にす。怖畏者の健兒、執刀杖者に歸依するが如し。惡道を畏るゝの人に、戒は是れ歸依なり。菩薩の人には實家に住するが如し。善凡夫人には自己の物の如し。菩薩の人には捨家に住するが如し。行道の人には所行の道の如し。菩薩の人には家家に住するが如し。得果の人は能く他の爲に說く。菩薩の人には慧家に住するが如し。不動の人には平坦清淨なり。諂の直を捨つるが如し。貪の施を捨つるが如し。嫉心の人の不嫉の心を捨つるが如し。幻僞の人の心觀察せざるが如し。沈審の人の高心を捨離するが如し。謹愼の人の放逸の過を捨つるが如し。王の眼有るが如し。無眼闇人は其の境界に非ず。八聖道分は解脫と相應す。不觀察の人は之を去ること甚だ遠し。阿羅漢の涅槃法を愛するが如し。人の自から愛するが如し。佛の出世次第善轉するが如し。正法に住すれば則ち果證に住するが如し。佛世尊の自他を利益するが如し。僕の主に事へて物時方處皆須らく相應すべきが如し。人の須陀洹果を獲得すれば則ち心安隱なるが如し。良時を得れば造作悔いざるが如し。菩薩の願終に解脫を得るが如し。良善の田の如し。善種子を種うれば生長し廣收す。時方[三二]財の因緣具足すれば、智色愛樂自から受用多きが如し。善根熟すれば則ち勢力有るが如し。自の善行自心歡喜するが如し。人罪無ければ此の世、來世則ち畏るゝ所無きが如し。勇健の人の所依の正行の如し。戒は正行の如し。善く喜んで自ら修す。慈を修する者の善心安樂なるが如し。喜を修する者の心常に慶悅するが如し。悲を修する者の心則ち正信なるが如し。捨を修する者の心常に隨順なるが如し。四種の正法を實の如く諦信す。世間法の障礙寂靜なれば樂行に隨順するが如し。聞に出るが故に則ち辯才を得るが如し。巧語の人、則ち畏るゝ所無きが如し。智明の人則ち名稱有るが如し。善語の人、破壞すべからざるが如し。法の法に順つて能く證を成就し、明解脫を得るが如し。正覺の人、

[三二] 麗本「則」に作る。

く。大富の人の身喜樂少きが如く、善法の中に於て増長すること母の如し。惡法中に於て能く護ること父の如し。在俗の人の財物有るが故に一切饒益皆悉く成就するが如く、出家人の戒も亦復是の如し。正導すること是の如し。人正行なれば則ち衰損無きが如く、善人の報恩する所を具足するが如く、世間人の身命を愛惜するが如く、又勝智の世に讃歎せらるゝが如く、[二四]愼王の語の解脫を求むるが如く、人の戒を護ることも亦爾り。解脫を求めんと欲せば、當に佛に歸依すべし。善道に生ぜんと欲せば、當に戒に歸依すべし。安身の本、戒是れ第一なり。知識遇惡なるも、善友は捨てず。戒も亦是の如し。自の利益を欲して死に至るも捨てず。[二五]女の慚愧世人を莊嚴するが如し。人の勝行不諂を最と爲すが如し。梵行の中、見に柔和の勝るゝが如し。大貴ならんと欲するに不幻を本と爲すが如し。不放逸の功德多饒なるが如し。勝法を證せんと欲せば觀察に依て得。善友に近づくが如し。初中後時、學人の時節を悕望す。海の得て過ぐべからざるが如し。諸の衆生の地に依て住するが如し。戒に依て一切の勝法を住持す。水の能く一切種子を潤ほすが如し。戒は能く善法の種子を津潤す。火の根を成ずるが如し。風の能く分分をして開張せしむるが如し。行住物の空にして無障と爲るが如し。果を證せんと欲するの人に、戒は[二六]堅瓶の如し。戒は寶藏の如し。所欲に隨つて之を[二七]犖り得る牛の如し。食資糧の如し。人の杖に因りて行住等を得るが如し。息の命に依るが如し。命慧の勝るゝが如し。國に王有り人の所依止なるが如し。軍に將[二八]有りて軍衆に功德たるが如し。戒は是れ統將なり。婦女の人の一切の樂行、皆夫主に因るが如し。行道人の所有の資糧の如し。若し天道に行かんに、戒は是れ資糧なり。曠野に行くに、主將善導するが如し。善法を行ずる者に戒は是れ前導なり。大海の船の如し。若し人方便して生死海を渡るに、戒を以て船と爲す。病[二九]人の藥の如し。煩惱の病者は戒を良藥と爲す。戰鬪處の所有器[三〇]仗の如し。魔王と共に戰ふに、戒を以て遮防す。潤親の友の得て捨つべからざるが如し。戒は是れ賢聖なり。大闇の中、燈を照明と爲す

【二四】三本「順王」に作る。
【二五】三本「汝」に作る。
【二六】恐らくは「賢瓶」に作るべし。梵名 bhadraghaṭa。四十華嚴第三十三「善知識とは賢德瓶の如し。諸佛の智功德を圓滿するが故に」。
【二七】この一字々義未だ勘へず。恐らくは搾乳の義なるべし。若し爾らば「擘」に作るべきが如し。
【二八】三本「軍勇將」に作る。
【二九】麗本「大」に作る。
【三〇】麗本「杖」に作る。

進し、常に善分を護り、身放逸ならず、口に學句を誦し、意念に發行し、根門を藏護し、食は惟足ることを知り、初夜、後夜に覺寤相應し、善人に親近し、善知識に依り、自から己の錯を識り、犯過を識知し、見已りて改むることを知る。佛菩薩諸の福德人を犯せば、心を盡して懺悔す。是の如き等の分、善法を攝取す。善法を得已りて守護し增長す。若し是の如きの戒、是を菩薩の攝善法戒と名く。

何者か菩薩の攝衆生戒なる。彼の要略して說くに十一種有り。此の義應に知るべし。何等か十一なる。一には種種衆生を饒益す。種種の因緣同事に相應す。二には衆生の病不病等、種種の諸苦伴等を供給す。三には世間出世間の義、彼の法の如く說き、先に方便を示し、先に道理を示す。四には衆生恩を報じて、恩報を忘れず。宜しく護るべき所に隨つて、隨報供給す。五には師子・虎・王・水・火・賊等、種種の畏處に諸の衆生を護る。六には諸の親善友、富樂を亡失せんに、憂悲殃罪、能く爲に除遣す。七には貧窮苦惱乞匃の衆生、一切の所須、皆悉く給與し、行善の人の依正の捨法、功德を攝取す。八には先語問訊、後語問訊、時に應じて往く、九には若し他呼喚すれば、食飲等を取る。世間を饒益して彼此往來す。要を以て之を言はゞ一切所有不饒益の事、愛行すべからず。皆悉く捨離して心隨順して轉ず。十には自の實功德、心に歡喜を生じ、公白正取し、畢竟唱說して以て心を潤益す。若くは治、若くは擯、若くは罰、若くは黜、或る時は驅遣せられんも、諸の是の如き等の不善處の擯を、善處に住せしめ、相應饒益せむ。十一には神通力を以て地獄等、毀呰の不善を示し、佛法に入らしめて衆生を敎化し、其れをして歡喜して未曾有を得しむ。又復聖者無盡意六十七種を說く。謂く、一切諸の衆生の所に於て、惱害を起さゞること是の如き等の故に。又菩薩藏修多羅中、廣く無量の如來戒を說くが故に。

又復此の戒、無量無邊の功德和集す。是の如きの功德、今少分を說かむ。所謂戒を出家人戒と名

苦得難し。懈怠施とは、後に富樂を受け、得と雖も常ならず。報を爲すを先として施するは、後に報を得と雖も、得難くして而も少し。是の如きを初とする過、菩薩は是の如く皆悉く觀察す。既に觀察し已りて、自心淸淨なり。淨心生じ已りて、濁心を遠離す。濁心を離れ已りて、正信と相應し、悲等の功德と相應し、和合し、自手もて施與し、信を先となし布施し、好方處を得、種姓力色、勝富樂を受け、眷屬自在に、名聞辯才、安樂色命、他に欺陵せられず、人に讃歎せられ、第一自在に、勝坐臥の處、止宿等の處、堂舍莊嚴・飲食衣服・塗香衆香・色聲味觸、是の如き等の富樂住處を得む。

何が故に戒と名く。彼の義今說かむ。若し能く非法律儀、惡、不善法を寂靜ならしめば、能く善道に生じ、能く三昧を得む。是の如きを戒と名く。戒に幾種か有る。彼の義今說かむ。略して三種有り。謂く、律儀戒・攝善法戒・攝衆生戒なり。彼の所謂戒律儀戒とは菩薩正しく七衆律儀を取る。所謂、比丘・比丘尼・式叉摩那・沙彌・沙彌尼・優婆塞・優婆夷戒なり。出家在家是の如きの次第、皆律儀の攝なり。

何者か菩薩の攝善法戒なる。菩薩の所有善法及び戒、皆正聚し已りて然る後大菩提善を修集す。若くは身、若くは口、若くは意等の善、是の如し。略して攝善法戒を說く。又復菩薩何の依止する所ぞ。戒に依り、戒に住す。然る後聞を修し、次に思惟を修す。後に奢摩他、毘婆舍那を專一に樂行す。尊長の前、正面して言語するが如き、先づ禮拜し已りて後に起ちて合掌す。時時常に爾り。是の如く時時に是の如く尊長を敬重し供給す。常に病者に於ては悲心供給す。若し善語を聞かば、讃じて善哉と言ふ。功德人に於ては實の功德を說き、是の如きの心を生ず。普ねく十方の爲にせむと。彼の十方一切の衆生の一切の福德の如き、勸心に隨喜す。喜心生じ已りて然る後口說す。他の一切の已に犯觸する者に於て、皆能く忍受す。一切所修の身口意の善、皆悉く阿耨多羅三藐三菩提を取らんと願ふ。時時に種種三寶を供養し、一切種種供養を設け已りて、口に正願を發し、相應精

て多く施す。慳垢無しとは富樂を存せず。是の如く捨施す。無畏施とは謂く、能く師子・虎・竈・王・賊・水等是の如きの諸畏を救濟す。何者か法施なる。倒說法者、之が爲に正說し、次第に句を學びて、彼を敎へて正取せしむ。廣說せば則ち無量種種聖無盡意の說有り。量るべからず。菩薩の施業は所謂、菩薩の須食、與食、卽ち是れ布施、一切衆生の色力壽命、安樂辯才なり。

又菩薩の施は心濁等の過、皆悉く遠離す。彼の濁心施に十四種有り。一には心濁、二には先妬、三には嫉心、四には慢心、五には慢を減ぜず、六には瞋心、七には簡擇、八には疑心、九には惱害、十には亂心、十一には先名、十二には上の法に依准して日時等を選んで次第に行施す。十三には懈怠、十四には報を爲すの力を先とす。是の如き等の法、能く心を染するが故に、名けて濁心と爲す。心體濁有り、故に名けて濁と爲す。先妬施とは、富樂を得ること少く、眷屬愛せず。先嫉施とは、富樂を得と雖も、勝報を樂まず。惟下劣を喜び、坐臥牀敷、止宿等の處、食飮富樂、貪著を離れず。先慢施とは、富樂を得と雖も、下劣の姓に生じ、心正直ならず。慢を減ぜざるを先として布施すとは、後に報を受くる時、他に依つて活くるを得ること、王人に事ふるが如し。伎兒使卒、誑惑の人、防邏戍護し、種種驅使し、市官に平准し、門に當りて戶を守り、畜獸を放牧し、太子に承事し、下賤の官人、他を恐昧する等、博戲等の人、捔力相撲、是の如く種種に廣く方便を設けて强力もて物を取る。復踴躍劫賊の人有り。是の如き等の業、以て自から利益す。先瞋施とは、後に大力畜生等の身を得。師子・虎豹・蛇蟒・熊羆・猴等の中に生ず。簡擇施とは、後に報を得るの時、治生、田業作子、林子、若くは種林人、作林人等、少果報を得て、以て自から存活す。先疑施とは、後に果報を得るも、富樂常ならず。先惱施とは、富樂を得と雖も、夷人中に生じ、若くは隘狹處、若くは災蘖地、邊地に生ずる等。亂心施とは、富樂を得る少く、或は果を得ず。先名施とは、富樂を得と雖も、財富を得已りて而も復喜失す。上法に依准し日時等を選び次第に施すとは、富樂を受くと雖も、勤

成散を得るが如し。是の如く具足す。又復義有り。前の種姓の法堅持して失せず。復彼岸に向ふこと大船舶の如し。先に和集し已りて後に寶洲に向ふ。又復義有り。正圓にして邪に非ず。觀察の如き耳。是の如きの義、故に具足と名く。又復常に一切の勝行を修す。故に具足と名く。又具足とは出過して重擔を荷負して出到度を得んと欲するの義、重擔を荷負するは懈怠せざるの義、三界過の義、故に具足と名く。

又具足とは平等に集修し、平等に負修し、平等に行修し、平等に起修し、平等に作修し、平等に持修し、平等に[一九]拄修し、平等に養修す。故に具足と名く。平等に養修すとは諸の衆生に於て猶し醫師の如し。病者を消息せしめ、衆病等を療治す。負修とは六波羅蜜、船舶等に乘るが如し。行修とは大乘の說等の如し。起修とは菩薩の修學射を學ぶ等の如し。先づ足住等を正しくす。作修とは巧に一切菩薩の諸業を作す。巧作師等の如し。持修とは常無常等[二〇]稱の如く平等なる等。拄修とは一切菩薩能く[二一]法舍を拄ふ。堂の竃柱等の如し。集修とは一切の白法蜜蜂の集まるが如し。是の如き等の義、故に具足と名く。

又自[二二]田の義、若くは和合の義、若くは或多の義、若くは別異の義、若くは或廣の義、若くは寬博の義、若くは或勝の義、若くは堅固の義、若くは牢固の義、若くは和集の義、若くは和合の義、若くは或物の義、若くは或財の義、若くは或取の義、若くは積聚の義、若くは或愧の義、故に具足と名く。

何が故に施と名く。彼の義今說かむ。若くは貪貧を破し、大富樂を得、福德具足す。是の故に施と名く。施に幾種か有る。彼の義今說かむ。略して三種有り。何等をか三と爲す。一には資生施、二には無畏施、三には法施。資生施とは謂く、飮食等、種種捨施す。彼の資生施は色香味勝る。淨潔如法、貪垢を遠離し、[二三]匱悋の垢無し。貪垢を離るとは心狭小ならず。是の如く捨施して、自手も

【一九】三本「住」に作る。拄はさゝへる義。
【二〇】三本「秤」に作る。
【二一】三本「法舍に住す」に作る。
【二二】三本「由」に作る。
【二三】匱は乏の義。

正遍知家の生を　　師說いて種姓と言ふ。

又善方便は是れ菩薩の父。般若波羅蜜は是れ菩薩の母。彼の無垢名稱經の說の如し。般若は菩薩の母、方便以て父と爲す。一切衆導師、是に由つて生ぜざるは無し。菩薩の般若波羅蜜は持の故に母の如し。方便の生は父の子を生ずるが如し。父母の如きが故に、說いて種姓と言ふ。是の如く、種姓、父母二種相似の義の故に。又[一六]奢摩他[一七]毘婆舍那、是の如き種姓正遍知を生ず。一切姓中此の門第一なり。一切の善法、是の姓、是の門なり。經中に說くが如し。佛の正法中、二法雙び行はる。彼の奢摩他は父、毘婆舍那は母。彼の二法は種姓なり。偈に言く、

毘婆舍那は母、　　奢摩他を父と爲す。
一切菩薩を生ずることは　　毘婆舍那に由る。
奢摩他等の故に　　一切正覺有り。

又復義有り。諸佛菩薩、現前に三昧大悲に正住す。此の二法是れ如來の種姓、此の二法に因つて如來を生ず。諸佛菩薩の現前正住、三昧を父と爲し、大悲を母と爲す。又復是の如き此の佛菩薩、現前正住三昧を父と爲し、忍は菩薩の母なり。此れ是れ種姓なり。偈に言く、

佛菩薩現前　　正住三昧は父、
若し大悲戒忍は　　是れ菩薩の母。

此の偈何の義をか明す。菩薩種姓の義を說く。

何の義を以ての故に具足と名くとは、彼の義今說かむ。衆物を[一八]推覓し、處處將來し、擧掌積聚し、計校備辦し、增益和集す。故に具足と名く。又復多法和集の義、故に具足と名く。又復義有り。菩提を荷擔す。故に具足と名く。外道の齋、大會具足の如し。初に羊等を取り、將來營辦す。是の如く菩提も前の如く具足して後に菩提を覺す。又復多法を說いて具足と名く。藥の和集して乃はち

【一六】奢摩他(śamatha)。止の義。
【一七】毘婆舍那(vipaśyana)。觀の義。
【一八】推求覓索。さがしもとむる義。

り。[一三]菩提心憂波提舍の如し。彼の說應に知るべし。

何が故に世尊毘舍離大林精舍に遊び、餘處ならずとは、彼の義今說かむ。是の如きの難は則ち相應せず。隨つて何の處に在らむも、彼の一切の處、皆此の難有り。若し餘處に在るも此の難を離れず。更に餘義有り。[一四]菩提心憂波提舍の如し。彼の說應に知るべし。

何の因緣を以て而も是の如きの三種具足を說いて多少ならずとは、彼の義今說かむ。三分相對の義有るを以ての故に。此の三種を以て貪嫉破戒愚癡を對治す。施具足を以て貪嫉を對治し、戒具足を以て破戒を對治し、聞具足を以て愚癡を對治す。又復三種の福德を示現す。施具足は施福德を示す。戒具足は正行福德、聞具足は修福德を示す。又復義有り。一切衆生隨順淳熟にして施戒具足す。一切衆生既に淳熟し已りて然る後に能く聞く。聞き已りて觀察し相應淳熟す。是の如く一切衆生に隨順して淳熟相應す。是の故に三と說く。又復義有り。[一五]二種具足す。一切佛法聚集の住處、不亂の法を得、不亂に依止すれば則ち聞具足法の如し。正覺一切佛法皆具足す。是の如き一切佛法の聚集の住處を得る、是の如きの因緣、是の故に三と說く。當に唯三種の具足のみ有るべしと爲んや、當に更に餘法の具足有るべしと爲んや。彼の義今說かむ。是の如きの三種總じて具足を攝す。若し佛廣說の無量の具足も皆此の中に攝す。若し大海慧修多羅中に、彼に世尊と言ふ。菩薩所有の一切の具足、福德具足、智具足の攝、應に是の如く知るべし。何を以ての故に。世尊、菩薩若し福德具足を修すれば、是の因緣を以て尊勝富貴にして、復能く他をして尊勝富貴ならしむ。智具足の故に口に善語を說く。一切衆生聞く者歡喜す。彼の施と戒と福德具足、聞は智具足、是の如く違無し。

何が故に菩薩を種姓と名くとは、彼の義今說かむ。有が師說いて言く、四種の家有り。如來の生處なり。偈に說いて言ふが如し。

諦と捨と、寂靜と慧と　　此の四眞勝の家。

【一三】發菩提心經論二卷天親造、鳩摩羅什譯。發心品第二に「見諸如來」の一段あり。これを指すか。

【一四】現行の菩提心經論中に見えず。

【一五】恐らくは「三種」に作るべし。

して之を施與しぬ。又復往勝福德王と作り、破亂の世に於て、財物を傾盡し、怨家の所に近づき、自から己身を縛し、以て他を利益し、饒益安樂ならしむ。又復往摩那婆と作りし時、深山中に在りて餓虎有るを見たり。睡寤て飢急る。身から己身を捨てゝ施して飽滿せしむ。又復往精進比丘と作り、勤精進を發し、一切智智、相應行を求む。衆生淳熟、正法を護るが故に、一切の苦惱種種欺陵、能く忍んで瞋らず。又復往昔堅鉀と作りし時、一正遍知、正像法中、勤苦して持戒せしこと是の如し。八萬四千の身是の如し。阿僧祇那由他百千の苦惱、我れ皆作し來る。我れ一切智智を悕求するを以て、一切の衆生を利益せんと欲するが爲なり。然も我れ曾て菩提心を退せず。大乘に墮せず。本願を捨てず。大鉀を緩うせず。菩薩の業に於て怯弱を生ぜず。曾て檀波羅蜜を捨てず。曾て尸波羅蜜を捨てず。曾て羼提波羅蜜を退墮せず。曾て毘梨耶波羅蜜を破壞せず。曾て禪波羅蜜を放捨せず。般若波羅蜜を修するに疲倦ならず。[二]攝法を捨てず。一切菩薩の道を修行し、具足清淨にして、錯ならず謬ならず。一切菩薩の地に堅住し、一切菩薩の三昧、三摩跋提に倦まず。諸の衆生を敎へて菩提心を發さしめ、疲倦を生ぜず。一切菩提分法を聚集して恩を得ざるに非ず。一切菩薩の行を發行して不退心に堅住し、常に一切菩薩の諸願法門を滿ぜんと欲して畏懼を生ぜず。一切の功德を聚集し、修行し、怯弱を生ぜず。何を以ての故に。一切世間最勝の處、一切所有、學と無學と辟支佛の智、能く證する能はざる所、入る能はず、觀察する能はざる所、此の佛法の名、彼れ得易からず。若し小功德もて和集修行すれば、則ち得る能はず。小善根の者は得る能はざるが故に。是の如く若し人此の宗有らば、我れ當に佛と成るべきを願はむ。是の故に翹勤・修行・精進し、功德法の如く、聚集修行せむ。我れ此の處に於て悕望して是の如きの義を得んと欲するが故に、佛此の經を說く。

何の義を以ての故に世尊と名くとは、彼の義今說かむ。世尊と言ふは供養の義の故に。復餘義有

【二】四攝法。布施、愛語、利行、同事なり。

布施しぬ。又復往昔示一切饒益王子と作り、自から身血を捨て、病人に給與す。又復往利益仙王と作り、肉を割き足を截り、捨して以て布施しぬ。又復往居素摩王の童子と作りし時、自の身骨を破り、脂髓を布施しぬ。又復往昔尼囉拏童子と作りし時、心を捨てゝ布施しぬ。又復往降惡王と作りし時、大小腸・乳肚・肝肺・胞腎・胃膽・脾脂、頭腦以用て布施しぬ。又復往 淨藏王と作りし時、自の身皮を捨てゝ以用て布施しぬ。又復往金脅鹿王と作り、身皮を捨てゝ施しぬ。又復往 光 明王と作りし時、一切の身分、分分に捨施しぬ。又復往 成 就一切饒益導主と作り、一切の愛物皆悉く捨施し、殺さるる者に臨み、復自身を捨てゝ而も之を救濟しぬ。又復往昔身僕使と作り、身を捨てゝ一切衆生に供給す。又復往昔求善語大富王と作りし時、高きこと千肘の山、上に在りて身を捨てゝ大火聚に投じぬ。善く句法を說くの因緣の爲の故に。又復往一切施王と作り、盡く身肉を割き [九]稱りて用て怖畏を救はんが爲に來りて我に歸する者に施與す。又復往不悋王と作りし時、殺さるる者に於て自から己身を捨てゝ救護し饒益す。又復往大悲長者と作り、若くは城內に入り、獄中に繫がるる者を放ちて脫するを得しめぬ。又復往昔象王と作りし時、自身に橋と作りて諸の衆生を度しぬ。又復往魚鼈、瞿陀と作り、一切の苦を受けて自身に忍耐す。又復往師子鹿王と作り、筋脈を惜まず、大衆を救濟し、自身を護らず、怨家の命を救ひぬ。又復往悲心仙と作りし時、自身の臂を然して道を失へる衆生に明を作し道を示せり。又復往說忍仙と作りし時、我が身を臠割して我れ彼の怨を救ひぬ。又復往不休息堅等住菩薩と作り、他我が舍に入りて我が妻婦を侵すも、自在力有りて能く忍んで瞋らず。又復往昔[一〇]熊の身と作りし時、命を失ふを畏るゝの人、我が所に來至せんに、我れ皆安慰して自から愛身を捨てぬ。又復往昔 上 仙と作りし時、心正法を愛し、正法儉なるを以て、法無く、法に渴せり。正法を愛するが故に、身を破り、皮を取り、血を取り、骨を取りて法言を書寫しぬ。又復往昔王の童子と作り、病人の爲の故に自から己れの命を捨て、與に[一一]第一難得の藥と作り、而

【九】三本「秤」に作る。

【一〇】三本「羆」に作る。

【一一】蓋し維摩經に所謂「劫中に疾疫有らば、現じて諸の藥草と作り、若し之を服する者有らば、病を除き衆毒を消す」とあるの類か。

衆生唯口に教言すらく、世間一切の衆生を護り、菩薩の行を學び、諸の功德を修せんと欲すと。而も眞實無し。彼の是の如きの人を說の如く、行の如く、相應饒益す。是の故に如來爲に此の經を說き、彼の人をして一切行を修するを知らしむ。如來世尊彼の人の爲に說く。此の菩提唯だ言語の得に非ず。多種苦行乃し成就することを得。我れ云何が得たる。我れ往昔に於て菩提一切行智を取らんが爲に、一切衆生を利益せんことを悕望し、彼彼の生處、種種苦行し、及び種種を捨せり。所謂種種の美味飮食、種種の騎乘坐臥等の處、園林池水戲樂の處、宅舍・田業・城邑・聚落・寶莊嚴具・冠髻眞珠、及び琉璃・金寶・瓔珞・衆寶・金剛、諸の莊嚴具、白象・牛馬・水牛・輦輿・莊嚴の具、幷及に所乘の諸の牛馬等、僮僕導從、皆以て捨施せり。過去久遠にして[七]我れ爾時、一切莊嚴見王の身と作る。時に、城邑・聚落・國土・山川、海を畔とする大地、幷及に人民、一切の樹林、種種苗稼、及び諸の藥草、無量の華果、鮮淨の妙寶、種種莊嚴諸の粟豆等、滿藏の財寶貧窮に布施す。又復本と善牙童子と作り、我れ爾時に於て所愛の妻子を捨施して悋まず。又復往昔善王と作りし時、滿宮の婇女十千數有り。捨施して悋まず。又復往寶髻王と作りし時、直閻浮提なる上身の寶髻妙莊嚴冠を脫施して悋まず。又復往迦施王と作りし時、上身愛分を捨施して悋まず。又復往無怨勝王と作り、身耳鼻を捨て施して悋まず。又復往月光王と作りし時、靑蓮華の如き無垢平滿廣長の好眼を蓮華面上に自手もて挑り施す。又復往華德王作りし時、白淨無垢にして猶し雪堆及び君陀華の如き乳色の齒鬘を挑り施して悋まず。又復往善面王と作りし時、廣妙長薄、淸淨無垢にして蓮華葉の如き口中の舌根を自手もて拔き施す。又復往給求者王と作り、一切世間の貧窮乞人、我を憶念する者、彼をして心喜ばしめ、一切珠金等の珍寶を以て巧に自身の寶手を作り、用て施せり。又復往知足王と作りし時、手足を以て施しぬ。又復往昔曾て光金閻浮提王と作り、手足の指を捨て、以用て布施しぬ。又復往昔求善語大富王と作りし時、愛法を以ての故に、手足の[八]爪を用て自身の肉を挑り、捨して、以て

【七】以下擧ぐる所の本生說話、その本據未だ勘へず。

【八】麗本「抓」に作る。今三本に依る。

第一善逝子、　種種の畏を離れんと欲せむ。
智慧人覺第一　廣勝の因を示す。
是の故に牟尼尊　此の修多羅を說く。

又復何の義によりて佛此の經を說く。彼の疑者の爲に疑義を斷ずるが故に。彼の大衆の中、人有り、天有り、阿修羅有り、龍、夜叉、鳩槃[六]荼等有り。世尊の勝身口意の不可思議なるを見聞して是の如きの心を生ぜむ。知らず、世尊、幾種を具足して此の三不可思議を獲得せるやと。是の故に世尊、此の疑を斷ぜんが爲に、已に是の經を說いて言く、善男子、菩薩の修行三種具足す。此に已に世尊往昔菩提心を發して、三具足滿ずることを示現す。是の故に三不可思議を得たり。偈に言く、

若し人天修羅　龍鳩槃荼等
佛の勝功德を聞きて　而も其の因を解せず。
牟尼彼の疑を斷ず　故に爲に是の經を說く。

又復何の義によりて佛此の經を說く。菩薩、如來種姓、法種姓中に生じて相應示現す。世尊已に示す。若し人婆羅門姓、若くは刹利姓に生ずるを得む。是の如きの人法性と相應す。若し法種を離るれば是れ則ち卑劣ならむ。彼の人若し如來の種姓に生ぜば法性を離れず。若し法性如來種姓に生ぜば、以て施等の三種を滿じて具足す。若し滿足せざれば是れ則ち卑劣なり。是の故に如來是の如く教へて言く、汝具足を滿じて、後れて卑劣なる莫れと。偈に言く、

若し善逝姓に生ぜば　過を離れて大富樂、
天人の禮讃する所ならむ。　牟尼王彼をして
自の法義を離れざらしめ、　此の無垢經を說く。

又復何の義によりて佛此の經を說く。若し人自から大乘を行じて第一堅固なりと謂はむ。是の大

【六】麗本「荼」に作る。下同じ。

是の故に第一覺　　此の修多羅を說く。

又復何の義によりて佛此の經を說く。菩薩、一切智、第一勝舍に趣くを得んと欲せんに、資糧、乘、及び道、方便を須ひて此の義を示現す。大導師の言く、若し汝一切智、第一勝舍に趣くを得んと欲せば、道資糧を須ひて施具足を取れ。若し所乘を須ひば戒具足を取れ。道方便を知らば聞具足を取れ。此の義を示現す。偈に言く、

佛子若し一切　　智勝舍に趣かんと欲せば
彼の人樂道、　　資糧等の覺と相應す。
世尊彼を饒益して　　此の修多羅を說く。

又復何の義によりて佛此の經を說く。菩薩、境界、生、智の三種具足を悕望するも、其の因を解し、因の饒益を覺らず。世尊已に示すらく、若し汝、境界、生、智を得んと欲せば、唯悕望のみに非ず。汝應に三種具足を修滿すべし。若し施具足せば、當に境界を得べし。若し戒具足せば、汝當に生を得べし。若し聞具足せば、汝當に智を得べし。偈に言く、

菩薩若し善　　微妙の境界を悕望し、
勝生不劣、　　第一增上智を欲せば、
因饒益を示現して　　世尊是の經を說く。

又復何の義によりて佛此の經を說く。菩薩、五怖畏を過ぐるを得んと欲し、其の因を解し、因の饒益を覺らず。何等をか五と爲す。一には不活畏、二には惡名聞畏、三には死畏、四には惡道畏、五には大衆威德畏。世尊已に示すらく、若し汝五怖畏を過ぐるを得んと欲せば、應に當に三種具足を修滿すべし。若し施具足せば不活畏、惡名聞畏を離れむ。若し戒具足せば、則ち死畏を離れ、惡道畏を離れむ。若し聞具足せば則ち大衆威德怖畏を離れむ。偈に言く、

何が施具足、云何が戒具足、云何が聞具足なる。此れ皆難を作す。我れ今解釋せむ。何が故に世尊、施戒聞等無量無垢不可稱量の布施を具足し、身虚空の如く、無垢法に住して而も是の經を說く。彼の義今說かむ。偈に言く、

第一施戒聞　　寂正行苦の身、
空の如く勝法を持し、　　善光明を具足す。
人天の禮する牟尼、　　第一世間覺、
無垢三苦除こる。　　何の義もて此の經を說く。

此の義今說かむ。菩提心を發し、菩薩業を學ぶ、相應饒益(のために)、一切智人此の義を示現す。菩薩旣に菩提心を發し已りて、次に施等三種の具足を滿す。此の[五]菩提の業、唯發心のみに非ず。而も能く阿耨多羅三藐三菩提を證得す。偈に言く、

若し菩提心を發し　　衆生の苦惱を悲しまむ。
彼の相應の善業として　　佛此の勝經を說く。

又復何の義によりて佛此の經を說く。怯弱者の爲に怯弱を除くが故に。彼の始めて菩薩行を行ずる者の爲に無量種種の法を聞修せしむるが故に。爾も乃はち阿耨多羅三藐三菩提を獲得するに怯弱の心を生ず。佛彼の意を知ろしめして、怯弱を除き彼を饒益せんが爲の故に、而も是の經を說いて言く、善男子、菩薩唯三種の具足有り。世尊示して言く、汝怯弱なる勿れ。若し我れ廣く說かば過不可數の菩薩の具足あり。要を以て之を言はゞ三具足に攝せらる。偈に言く、

若し諸の佛子有らむ。　　無量劫を經て、
善法に怯弱にして、　　久遠にして菩提を得るを畏れむ。
如來の自然智　　安慰して彼を饒益せむ。

【五】明本「菩薩」に作る。

第一勝相集り、　　超日光の牟尼、
何の饒益する所の故に、　　此の修多羅を說く。

世尊何が故に、毘舍離大林精舍に遊び、何の義を以ての故に、名けて世尊と爲す。何が故に世尊毘舍離大林精舍に遊び、餘處に於て善男子の爲に此の菩薩の三種の具足を說かざる。何の因緣を以て而も是の如きの三種具足を說き、多からず、少からざる。又復云何が菩薩當に唯是の如き三種具足有りと爲んや、當に更に餘法の具足有りと爲んや。若し此に三と說かば、[三]大海慧經云何が相避けむ。彼に菩薩四十具足を說けり。所謂菩薩布施具足、乃至菩薩方便具足なり。[四]彌勒解脫修多羅中に言く、「善男子、菩薩無量の具足を滿足す」と。更に大乘修多羅中に有りて、彼處に世尊、菩薩の爲に無量の具足を說く。彼云何が避けむ。又復聖者龍樹已に偈を說いて言く、

淨道皆具足す。　　餘人說く能はず。
佛の無量の智慧、　　故に能く具足を說く。
佛の無邊の功德　　是の善根を具足す。
若し是の如きの菩提　　無量の具足有り。

若し餘處に菩薩を說けば則ち無量の具足有り。此の修多羅云何が相避けむ。善男子とは是れ種姓の義。何が故に菩薩を名けて種姓と爲す。此の義須らく說くべし。何の義を以ての故に名けて具足と爲す。施具足とは何が故に施と名く。幾種の施か有る。戒具足とは何が故に戒と名く。幾種の戒か有る。聞具足とは何が故に聞と名く。幾種の聞か有る。又復施戒の二具足は漏、聞具足は則ち是れ不漏、何の因緣を以て漏不漏二種の具足を以て一切智不漏の法を得る。此の義須らく說くべし。又施具足に幾種の因緣、戒聞具足に幾種の因緣ありや。又復世尊三具足を說くに何が故に初施を初とし、戒を中とし、聞を後とする。此の意須らく說くべし。要を以て之を言はゞ、世尊の示現、云

【三】現行の藏經中同種のものを見ず。
【四】前註に準ず。

三具足經憂波提舍飜譯の記[一]

施戒聞の三は備さに衆行を攝す。是を以て如來說いて具足と名く。法門深邃にして、淺識未だ窺はず。天親菩薩、慈心に開示す。唯義を顯はして章句を釋せず。是の故に名けて憂波提舍と爲す。昔中國より出で〻今魏都に現はる。三藏法師・毘目智仙・婆羅門人瞿曇流支・愛敬法の人沙門曇林、鄴城内に於て、金華寺に在り。興和三年[二]の歲次、辛酉、月建在戌の朔次、庚午十三日、千百十言を譯す。驃騎大將軍、開府、儀同三司、御史中尉、渤悔高仲密、啓請供養し、守護流通す。

三具足經憂波提舍　釋論有りて經本無し

元魏天竺三藏毘目智仙等譯す。

是の如く我れ聞けり。一時婆伽婆、毘舍離大林精舍に住し、大比丘僧大菩薩の衆と倶なりき。爾時世尊、無垢威德大力士に告げて言く、善男子、菩薩に三具足有り。何等をか三と爲す。一には施具足、二には戒具足、三には聞具足なり。善男子、此は是れ菩薩の三種の具足なり。世尊說き已るに無垢威德大力士、聞いて心に歡喜を生ず。又彼の比丘、彼の諸の菩薩、世尊の說を聞いて皆悉く讃歎せり。

是の如きの菩薩の三種の具足、我れ今解釋せむ。何の義を以ての故に、彼の無垢勝、無量具足し、勤進正出して、相好身を嚴り、百千日光明に過ぎたる世尊、而も是の經を說く。偈に言く、

無量種具足し、　出身三界の主たり、

【一】 麗本「記」の下に「一卷」とあり。

【二】 西紀五四一年なり。

筆受す。驃騎大将軍開府儀同三司御史中尉勃海の高仲密、檀越と爲りて啓請供養す。並びに經の前序記に見ゆ。而して智仙法師、遊方弘化、沙險を踰越して志利生に在り。既に梵文を啓いて應に部卷多かるべし。但し余の見淺狹にして尋覽未だ周ねからず。視る所五經、件述右の如し。後進儻し遇はゞ幸に希くは續補し、法門をして謬無からしめば豈善からざる歟。魏より唐に及びて傳錄一に非ず。智仙法師、未だ編載を蒙らず。弘法の名著はるゝ莫く、高行の迹彰はるゝ靡し。傷ましい哉、悲しい哉。深く嗟く可し矣。

以上は開元錄の編者智昇の記する所、貞元錄亦これを其の儘轉載してゐる。蓋し智昇は論の前序を發見してこれを毘目智仙の譯出と決定し、從來他人の譯と謬られたるこの三部の論に正當の座席を與へ、譯者の名聲を隱沒から救ひ出したのであつた。これは前序といふものゝ使命が如何に重大なるかを示す一挿話である。

本論中に引用せらるゝ經典は大海慧經二回、菩提心憂波提舍二回、彌勒解脫經、菩薩藏經、寶積經、及び龍樹の偈各一回である。これらは今遺憾ながら現存の藏經中に的示する暇を有しない。後進の士の研鑽に俟つ次第である。

昭和七年九月十日

譯者　泉　芳　璟　識

三具足經憂波提舍解題

本論は菩薩の應に具足すべき施と戒と聞との三行に就て詳說せるもの、憂波提舍(Upadeśa) は譯して論議と云ひ、大綱義門を擧げて歸趣を示すものである。三具足經なる經典は現今藏經中に見出されざるもので、本論標題下の註記の示すやうに、本論は單に釋論のみ有りて本經の佚した希有なる存在と謂ふべきである。

本論の作者は天親 (Vasubandhu) と傳へられ、轉法輪經憂波提舍と寶髻經四法憂波提舍と合して恰かも三部作なるかの觀がある。其の解釋の體裁、用語の樣式極めて相類似し、且つ同じく三藏毘目智仙によつて譯せられしより見るも、流傳の時處を一にせることが推知せられる。尚ほ本文中に屢々菩提心憂波提舍なるものを擧げ、解釋をこれに讓りて略し去つた所があるより見れば、是れ亦同時の流傳なるべく思はれるが、發菩提心經論天親造として鳩摩羅什の手によりて譯されたものが二卷、藏中に存在すれども、果して本論中に指せる菩提心憂波提舍と全く同一なるや否や疑はしい。

これら三部の論書は開元錄に依るに、費長房等の經錄では菩提留支の所譯として傳へられたものらしい。然るに幸にも三部各々前序を有し、これによりて明かに是れ毘目智仙の譯出なることを知つたものであると云ふ。毘目智仙はこの他に業成就論及び迴諍論各一卷を譯してゐる。毘目智仙なる梵名は南條目錄に Vimokṣaprajña-ṛṣi 昭和法寶總目錄には若くは Vimokṣasena ならんかと出てゐるが、今暫らくこれに從ふ。今開元錄卷六によりてその小傳を左に揭げる。

沙門毘目智仙は北印度烏萇國の人、刹利王種にして釋迦の苗裔なり。曩者(さきに)、毘流離王迦毘羅城を壞し、釋種を誅殘す。斯の時に當り、四釋子有り。其の逼まらるゝを忿り、戒を犯すを思はず、外に出でゝ軍を拒む。流離遂に退き、本國に歸還す。城中受けず。告げて曰く、吾れ法種と爲り、誓つて師を行はず。汝彼の軍を退く。吾が族に非ざる也と。既に放斥せられて遠く諸國に投ず。本と是れ聖胤、竟に宗として之を樹つ。四釋支離、皆一國に王たり。今烏萇梵衍王等は並びに其の後也。嗣胤相承けて今に絕えず。智仙法師は卽ち斯れ王種、妙に三藏に閑(なら)ひ、最も毘曇を善くす。瞿曇流支と同じく魏境に遊ぶ。而して瞿曇流支尊事して師と爲す。孝靖帝の興和三年、辛酉を以て鄴城內に於て、金華寺に在りて、瞿曇流支と共に寶髻論等の五部を譯す。沙門曇林

要を以て之を言はゞ、衆生住持して衆生法を示說す。住持とは說法を示現するなり。又復義有り。衆生住持示現とは衆生の心行八萬四千の法を知らしむ。住持とは示現して八萬四千法衆光明を知らしむ。饒益する所多し。又復義有り。衆生住持、此を示現と爲す。衆生平等法受持とは法を示すことと平等。又復此の二、世諦の示現なり。

轉法輪經優波提舍 終

九十一億の前、　我れ無上勝を憶ふ。
此の妙林中に於て、　無上の法輪を轉ず。
此に那由他の　寂靜勝仙人有り。
常に鹿苑中に在り。　故に仙人處と名づく。
是の如きの勝林の中、　無上の法輪を轉ず。

是の如く已に轉じ、又法人の爲に是の如く已に轉ず。

又復世尊、何れの處に初坐して法輪を轉じたまふ。彼の義今釋せむ。世尊彼の大圓殿處、無量清淨妙色珍寶莊嚴師子座上に坐して法輪を轉ず。此れ何處の說ぞ。廣普經中是の如く說いて言く、「諸比丘、諸の地天有り。波羅奈に法輪を轉ぜんと欲するに大饒益有ることを知りて、大圓殿を置く。種種莊嚴廣博嚴麗なり。其の殿縱廣七百由旬、虛空の諸天、蓋幢幡を以て爲に莊嚴す。上空中に於て欲界の天子、八十四千の師子の座を如來に奉施す。如來に施し已りて一一請うて言く、唯願はくは如來、我が此の座に坐して法輪を轉じたまへと。一一の天子各世尊の其の施す所の師子座の上に坐して法輪を轉ずるを見る。世尊是の如く一切諸天子の意を滿足せしめたまふ」。

又復世尊法輪を轉じたまふ時、幾許の衆生、惡を捨てゝ善を行ぜしや。彼の義今釋せむ。憍陳如等五比丘有り。復諸天有り、六十億數。復色界天有り、八十億數、復八十四千億の人有り。此れ何處にか說く。彼の廣普經に偈有り、說いて言く、

[一八]阿若居隣等　是の如きの五比丘
六十億の諸天　皆法眼淨を得たり。
八十億の色天　無上の法眼淨し。
勝法眼淨き人　八萬四千億。

【一八】 梵語 ajñāta-kauṇḍinya

知るべし。畢竟して起らずと。是の如きの次第、彼の義今釋せむ。彼は眞諦の說、此は世諦の說、又此は時說、又此は治信受の爲の故に此の義を說く。已に是を說くが故に今說く。又復此は初業の菩薩の爲の故に是の如く說く。大地を得るの人は是の如く諍はず。

若し衆生法皆不可得ならば、然らば則ち世尊何れの所に住持して法輪を轉ずる。彼の義今釋せむ。佛は大悲を以て、衆生を取らず、亦法を取らず。而も常に衆生及び法を住持し已りて法輪を轉ず。又復世尊、龍王問修多羅に於て說く。「虛空の如く轉ずるを法輪轉と名く」。又復此は是れ世尊の方便、諸法名無し。名字を以て說く。是の故に偈に言く、

一切法無名　　　名を設けて以て法と名く。

世尊法爾として衆生を取らず。而も衆生を治して之が爲に法を說く。法を取らずと雖も、而も常に一切諸法を廣說す。又復般若波羅蜜經、無垢名稱修多羅に說く。「眞諦を知らしめんが爲の故に世諦を說く」。是の如く過無し。又復世尊、何の義を以ての故に、彼の寬博種種勝妙華樹莊嚴無量の勝人多衆の集處を捨てゝ、波羅奈人衆少きの處に於て、波吒離樹影蔭の下、鹿苑の中に在りて法輪を轉じたまふや。彼の義今釋せむ。世尊、往昔已に彼の處に於て、六十千億那由他會、廣く布施を行じたまふ。又彼の處に於て、已に曾て六十千億那由他の佛を供養す。又彼の處に於て已に九十一億千の佛法輪を轉ぜり。彼の處常に寂靜の仙人饒し。是の如き等の諸大德有り。是の故に世尊、彼の處に在りて法輪を轉じたまふ。此の義已に釋す。今復更に說く。又廣普經に偈有り說いて言く、

我れ六十千億　　那由他會施し、
六十千億那由他の　　諸佛に供せり。
波羅奈處勝る。　　勝れたる舊仙人有り。
第一天龍等、　　常に說法を讚ずる處。

【七】前に引く阿那婆達多龍王修多羅と同一なるが如し。

し。此の苦集應に斷ずべし。此の苦滅應に證すべし。此の苦滅道應に修すべしと、此れ第二轉なり。此の苦聖諦已に知んぬ。此の苦集已に斷じぬ。此の苦滅已に證せり。此の苦滅道已に修せりと、此れ第三轉なり。此の說三轉す。是の如く苦智・集智・滅智・道智なり。是の如く苦諦に三轉智有り。是の如く集諦、是の如く滅諦、是の如く道諦、三轉智有り。彼の是の如きの說、十二行有り。何を以ての故に。是の如きの異行、苦諦中に於て三轉智有り。異行の集諦、異行の滅諦、異行の道諦、皆三轉智、此れ是の如く十二行有りと說く。

言ふ所の苦とは之を五陰と謂ふ。五陰苦相、是を名けて苦と爲す。彼の苦相空なり。此の空に通達する、是を苦智聖諦と名く。彼の五陰の因、愛使見因、是を名けて集と爲す。若し愛因、見因を[一四]分別せず、取せず、觸せずんば、是を集智聖諦と名く。若し彼の五陰畢竟して盡滅し、前際來らず、後際去らず、中際得ず、是を名けて滅と爲す。彼れ是の如く知る。是を滅智聖諦と名く。若し道を得已れば、攀緣苦智・集智・滅智、彼れ平等相、彼れ不二智、是を苦滅道智聖諦と名く。又復何が故に少に非ず、多に非ざる。彼の聖諦を說いて是の如く分別せば、此れ則ち無窮ならむ。又復是の如く四聖諦を知れば、則ち解脫を得む。所謂、苦と苦因を知り、苦滅して後に方便を得。是の如きの四聖諦、此の是の如きの義、次第して說く。又平等相何者ぞ。聖諦不虛妄法と名く。不虛妄を以ての故に名けて諦と爲す。各各自相皆不虛妄、是の如く不虛妄の法、是れ平等相なり。又復勝相、何者か勝相なる。苦の逼迮相、能生の相を集め、寂靜相を滅す。道とは出相なり。又十二行、若くは逆、若くは順、十二分因緣生有りて轉ず。又復[一五]廣普修多羅に正分別、能分別を說く。不善觀察、無明を生ず。生法有るに非ず。是の如く乃至大苦聚集す。彼の有及び滅、是の如く法輪十二行轉ず。[一六]居隣若、三寶具足を知れ。

又復世尊、此の中に轉を說く。何が故ぞ如來、不生法門一切法を說く。不轉・不迴、應に是の如く

【一四】原本「不分別不分別」に作る。

【一五】廣普經とは現存の廣博嚴淨不退轉輪經か若くは方廣莊嚴經か。孰れも相當の文を見ず。

【一六】Koṇḍañña 卽ち憍陳如。梵語 kauṇḍinya に同じ。

へば世間に銅の體是れ瓶の故に銅瓶と名け、木體輪爲るが故に木輪と名くるが如く、此れ亦是の如し。法の體輪爲るが故に法輪と名く。是の如く示現す。何者か是れ法なる。謂く三十七菩提分法。此の法是れ輪の故に法輪と名く。又一切法の自體覺の義、是れ法輪の義。又一切法勝莊嚴の義、又取捨の義、是の如き等の義を名けて法輪と爲す。何等の物を捨するを有爲を捨つと謂ひ、何等の物を取るを涅槃を取ると謂ふ。又能く一切の煩惱を破壞す。是故に輪と名く。如時運輪・法王治輪・如輪・王輪・一切世間光明照輪・如星宿輪、又說法輪・不斷常輪・二邊不定又不生輪・如因緣生又不二輪眼と色との如く、乃至意法の不二も應に知るべし。不可得輪、三世の法不可得なるを以ての故に。又復空輪、諸見を離るゝが故に。又無相輪、一切相を觀じ、諸相を離るゝが故に。又無願輪、三界を離るゝが故に。一切分別不別異輪、一切法分別せざるを以ての故に。

世尊復[二一]阿那婆達多龍王修多羅中、龍王に告げて言く、[二二]「賢面龍王、又法輪とは實不壞の行、是の如きを輪と名く。三世等しきが故に。無自體輪、有無二種の見を離るゝを以ての故に。又復離輪、身無染の故に。又不著輪、心意意識等を離るゝを以ての故に。無處所輪、一切有行の生を捨するを以ての故に。又復實輪、大實見の故に。又復諦輪、正修不壞の故に。又不盡輪、示すこと不盡の故に。又法界輪、一切法皆悉く行ずるを以ての故に。又實際輪、前後際非際輪なるを以ての故に。又如如輪、諸法の自體無自體の故に。已無爲輪、一切の疑慮觀察定の故に。又復常輪、聖性集の故に。又復空輪、內外一切の物を見ざるが故に。又無相輪、一切相不分別なるを以ての故に。又無願輪、一切法攀緣せざるを以ての故に。又無爲輪、一切言語の所說、皆空不可說の故に」。是の如く世尊所說の法輪、此等皆是れ法輪の義なり。

又復世尊幾轉幾行にして法輪を轉ずとは、彼の義今說かむ。[二三]法輪三たび轉じて十二行有り。此れ苦聖諦、此れ集聖諦、此れ滅聖諦、此れ苦滅道聖諦と、此れ第一轉なり。此の苦聖諦應に知るべ

【二一】 anavatapta 無熱と譯す。弘道廣顯三昧經に轉法輪品あり。これに相當するが如し。

【二二】 三本「首」に作る。原語 mukha は孰れにも通ず。

【二三】 法輪の三轉十二行。

一切諸過を離る。　　第一寂靜輪、
不毀第一と說く。　　是の故に我れ今轉ず。

何の義を以ての故に世尊と名くとは、供養を受くるに堪ふるが故に世尊と名く。更に餘義有り。菩提心憂波提舍の如し。彼の中に示現す。

如來何が故に王舍城耆闍崛山に在るや。二種の住持、法輪を轉ず。餘處ならざるとは、難相應せず。隨つて何れの處に在るも此の難窮り無し。世尊若し餘處に在りて遊行せば、亦此の難有らむ。是れ則ち無窮なり。更に餘義有り。[7]菩提心憂波提舍の如し。彼の處に示現す。[8]何の義を以ての故に如來と名くとは、彼の義今說かむ。如實にして來るが故に如來と名く。何の法をか如と名く。涅槃を如と名く。衆生と法と彼の二如ならず。世尊の說の如し。諸比丘、第一聖諦不虛妄の法、名けて涅槃と爲す。知の故に來と名く。異の聲論界・知字論界・世人の說の如し。此の人來生、此れ何の義を明す。此れ明智慧具足す。來の義是の如し。涅槃を如と名く。知解を來と名く。正しく涅槃を覺る。故に如來と名く。又空無相無願を如と名く。彼の一切の行の如し。故に如來と名く。又四聖諦、此を名けて如と爲す。餘人彼の一切行を見るに非ず。故に如來と名く。又復一切是の如きの佛法、此を名けて如と爲す。彼れ此の人に來る。故に如來と名く。又復如とは六波羅蜜に名く。布施・持戒・忍辱・精進・禪定・般若・正覺彼より來る。故に如來と名く。實捨・寂慧・安住は是れ如、如より彼の無上正遍知來る。故に如來と名く。一切是の如き菩薩の諸地・歡喜・離垢・明焰・難勝・現前・遠行・不動・善慧・法雲等の十、此を如と名く。彼の如く無上正遍知來る。故に如來と名く。八道の如く來る。故に如來と名く。般若波羅蜜足有るを以て、方便足來る。故に如來と名く。[9]或は如去と名く。如去と言ふは或は如を以て說く。故に如去と名く。又如去とは去りて復來らざるが故に如去と名く。何の義を以ての故に[10]法輪と名くとならば、彼の義今說かむ。法の體是れ輪、故に法輪と名く。譬

【七】發菩提心經論か。現行本にはこの條見えず。
【八】如來の義を釋す。
【九】如去の義を釋す。
【一〇】法輪の義を釋す。

佛初め法輪を轉じ、　能く斷常の倒を除く。
淨輪を轉ずる能はず。　彼は一切智に非ず。

廣勝果を求むる無上福田の饒益、不可思議の果報を示現して能く與ふ。若し能く無上の法輪を轉ずる有らんに、彼に布施せば大果報を得む。偈に言く、

若し人有りて能く、　無上の正法輪を轉ぜんに、
少しく是の如きの人に施すも、　無比の果報を得む。

又菩薩行の得果饒益、此の義を示現す。世尊說いて言く、我が此の法輪、能く大に饒益す。已に無量億那由他百千の苦行を行じ、能く捨て難きを捨てぬ。譬へば海を抒みて心休息せざるが如し。又言く、本生[六]摩那婆と作り、身及び妻子我れ皆捨施しぬ。又言く、本生、梵得王と作り、所愛の二子、我れ捨して布施し、心悔を生ぜず。又言く、本生、善牙王と作り、最も端正にして女人中勝妙、孫陀利と名くるを婆羅門に施す。又言く、本生、德藏王と作り、陀羅尼を得たり。我れ七千年來、未だ一たびも脇臥せず。又言く、本生、不思議功德寶德王の太子と作り、童子の身にして一切の論議我れ皆已に得、衆生の爲に說く。又言く、本生、身汁仙と作り、身手足を割きて瞋恨を生ぜず。爲に忍法を說く。又言く、本生、月光王と作り、頭を捨てゝ布施し、瞋恨を生ぜず。又言く、本、一切衆生所喜見童子の身と作り、我れ十二年、香を食して身を燒き、佛法を供養し、心に悔を生ぜず。又言く、本、療病王の身と作り、已に一切閻浮提の人の一切の病苦を療す。是の如く種種無量の苦惱、皆悉く已に作して大饒益有り。我れ已に是の如きの菩薩の種種の苦行の得果示現を證得して、饒益を示現し、世尊已に此の修多羅を說く。偈に言く、

若し是の如きの初因　　苦行廣く身を捨つ
貧窮乞匃者には　　所應に隨つて施與す。

【六】mānava 儒童と譯す。一般に婆羅門のことを指して云ふ。此に擧ぐる本生說話本據未だ勘へず。

金珠眞珠等、　　妻子、國城を施す。
頭分・眼・骨髓、　　手足等の施勝る。
種種の苦持戒　　希有にして佛身を得。
功德不可稱、　　疑怯者の爲に示す。

佛增上意もて衆生の心を觀じ、無量の功德もて而も法輪を轉ず。又復未だ菩提心を發さゞる人、聲聞緣覺乘もて、涅槃の舍に入らんと欲せんに、大乘住持して此の義を示現す。又復、勝意もて、若し聲聞緣覺等の乘もて涅槃の舍に入る有れば、則ち復無上法輪を轉ぜず。偈に言く、

小心にして悲等を離れ、　　二涅槃に入らんと欲せんに、
牟尼此の經を說いて　　第一乘に住せしむ。

又此の福人を歡喜し饒益して此の義を示現す。一切世間に最勝無比なる轉法輪師、我が師に如くは無し。偈に言く、

若し已に佛に歸依し、　　今歸し、當に復歸せむ。
牟尼彼の人を喜び　　此の修多羅を說く。

若し餘の外道に依止するの人を將に引いて饒益せんとして、此の義を示現す。無垢功德莊嚴妙身にして法輪を轉ず。汝の師は比に非ず。汝の師は汝をして無漏の善法を獲得せしむる能はず。偈に言く、

惡智識に依止せむ。　　如來世間を見て、
彼の人を引かんが爲の故に、　　爲に此の經寶を說く。

一切智慢を寂靜饒益して、此の義を示現す。我れは一切智、今者、新に無上の法輪を轉ず。云何が汝は是れ一切智人ならむ。偈に言く、

此の義今釋せむ。世尊、彼の會中に天・阿修羅・人・龍、及び夜叉・鳩槃荼等有り、轉法輪を開いて心に疑惑を生じ、世尊の幾種住持して法輪を轉じたまふかを知らざるを恐る。世尊衆生の疑心を觀察し、彼の疑を斷ぜんが爲に、是の故に二種の住持を說きて法輪を轉ず。此の義云何。偈に言く、

世間の人及び天、　疑心もて法主を觀る。
疑義を斷ぜんが爲の故に、　此の修多羅を說く。

又復世尊大悲力有りて衆生を饒益するが故に此の經を說く。云何が世尊の大悲力此の義を說く。今說く、世尊、是の如く、諸の衆生に於て衆生無く、諸法皆乾闥婆城の如しと知り、是の如く知り已りて衆生住持及法住持し已りて法輪を轉ず。此の義云何。偈に言く、

世間無我にして、　幻、乾闥婆の如しと知り、
衆生と法を住持し、　如來大悲もて說く。

自力を示現するが故に能く義を說く。世間更に能く住持する者無し。唯佛能く二種の住持を作す。更に人の能く法輪を轉ずる有ること無し。我が轉ずるが如きは又復義有り。偈に言く、

是れ天の宮殿に非ず、　阿修羅の舍に非ず。
人處龍宮に非ず、　是の如きの衆生有り。
第一、不可稱にして　過を離れ、三苦を滅し、
天人恭敬して禮し　善く第一輪を轉ず。

又無量の苦、無量具足して然る後に乃ち阿耨多羅三藐三菩提を得るが故に。始行の菩薩若し是を聞き已らんに、心怯弱を生ぜむ。如來彼の怯弱を除かんと欲するが爲に、此の義を示現す。無垢淨覺、若し無量の苦、無量具足し、阿耨多羅三藐三菩提を得ば、無量の功德もて此の法輪を示す。偈に言く、

子、諸仙人等の讃歎する所、此の因緣の故に、我れ今解釋す。云何が解釋する。無量功德の大牟尼王、何が故に此の不可思議・不可稱量・第一寂靜・善無垢輪を轉じたまふ。一に何の義を以ての故に勝修多羅と名くる。二に何の義を以ての故に名けて世尊と爲す。[二]（本元第三法を少(か)く）四に如來何が故に王舍城耆闍崛山に住し、二種住持して、此の法輪を轉じて、餘處に在らざる。五に何の義を以ての故に名けて如來と爲す。六に何の義を以ての故に、名けて法輪と爲す。七に又復世尊、幾轉、幾行にして法輪を轉ずる。八に又復世尊此の中に轉を說く。何が故に如來不生の法門に一切法不轉不迴と說きたまふ。是の如く知らば畢竟して起らず。若し此に轉ぜば云何が彼の修多羅を避くるを得む。彼の修多羅則ち須らく避けざるべからず。九に又若し此に衆生住持法を說かば、住持とは云何。[三]般若波羅蜜の中、如來彼の須菩提に告げて言く、「如來設し復劫を經て說いて衆生、衆生と言ふ。頗る衆生の生滅有りや不(いな)や。須菩提の言く、不(いな)なり、世尊、一切衆生無始より來(このかた)淨なり」。如來復[四]無垢名稱修多羅(しょうしゅたら)に於て說く。「若し法想に住せば、此れ則ち大病なり」。若し衆生法皆不可得ならば、然らば則ち世尊何の所にか住持して法輪を轉ずる。此れ須らく解釋すべし。十に又復世尊、何の義を以ての故に彼の寬博種種勝妙の華樹莊嚴、無量勝人の多衆の集處を捨てて、波羅奈人衆少き處に於て、波吒離樹影蔭の下、鹿苑の中にして法輪を轉ずる。此の因緣亦須らく解釋すべし。十一に又復世尊、何れの處に初坐して法輪を轉ぜし。十二に又復世尊、法輪を轉ずる時、幾許の衆生惡を捨てゝ善を行ぜし。十三に要を以て之を言はゞ、云何の衆生住持、及び法住持を示現する。[五]十四に、此れは皆是れ難なり。

自下解釋せむ。彼の法今說かむ。何の義を以ての故に、彼の最第一・無垢・廣博・不可稱量・不可思議・不可破壞・甚深・不動・正覺世尊、已に此の經を說き、又復今、勝無垢・廣博・不可稱譽にして、三界の衆生に讃ぜらるゝ世尊、何が故に此の不可稱量にして、一切過を離るゝ勝修多羅を說きたまふ。

【二】三本にこの註記無し。

【三】本據未だ勘へず。

【四】維摩詰所說經問疾品に「此の法想は亦是れ顚倒、顚倒は是れ即ち大患」とあり。

【五】此に「十四」と牒するも問無し。恐らくは脫せしものか。

轉法輪經憂波提舍飜譯の記

轉法輪經は如來の初說、憂波提舍は義門の名、天親菩薩の開示する所。佛誰が爲に說く。憍陳如等なり。義此の方に行はれ、必ず其の人を主とす。魏の驃騎大將軍・開府・儀同三司・御史中尉・勃海の高仲密、善く義方を求め、眞を選び、僞を簡び、故らに法師毘目智仙、幷びに其の弟子瞿曇流支を請ひ、鄴城の內に於て、金華寺に在りて、此の義門憂波提舍を出だす。[一]興和三年、歲次、大梁・建酉の月、朔次、庚子十一日譯す。三千九百四十二言。沙門曇林對譯し、錄記す。

轉法輪經憂波提舍　釋論有りて經本無し

天親菩薩造

元魏天竺三藏　毘目智仙譯す

是の如く我れ聞けり、一時婆伽婆、王舍城耆闍崛山中に住し、大比丘僧、大菩薩衆と俱なりき。爾時世尊智員大海樂說辯才菩薩に告げて言く、智員大海樂說辯才よ、二種の住持如來の轉法輪有り。何等をか二と爲る。一には衆生住持、二には法住持なり。智員大海樂說辯才よ、此の二種の住持如來の轉法輪、乃至此の修多羅の說を盡す。

此の正法輪勝修多羅、何の義を以ての故に、彼の牟尼王・不可思議・不可稱・不可說・不可量・不可喩にして虛空の如く、不斷、不常にして因緣に順入し、寂靜・勝寂靜・最勝寂靜・第一寂靜・如實諦にして虛妄ならざる如來、無上の法輪を轉じて此の修多羅を說く。如來の弟子、聲聞の人、聲聞の弟

[一] 西紀五四一年。

轉法輪經憂波提舍解題

轉法輪經卽ち釋尊の最初の說法を記述した經典は藏經中各處に散在する。之を上世にしては安世高譯の轉法輪經（大正二、五〇三）あり、之を後にしては義淨の手によつて三轉法輪經（大正二、五〇四）として譯せられてゐる。其の他雜阿含第十五卷の第十七經（大正二、一〇三）、四分律三二（大正二二、七八八）五分律一五（大正二二、一〇四）、隨つて Saṃyutta-nikāya 56, 11-12. Mahāvastu I. 6. 及び Lalitavistara (Lefmann 416-418, Mitra 540)を擧げることが出來る。尙ほ梵文の轉法輪經が一八七〇年に Feer によりて西域地方から得られた。（詳細は赤沼智善氏著漢巴四部四阿含互照錄參看）。

本論はこの轉法輪に就ての大綱義門を示したもので、天親（Vasubandhu）の造る所、寶髻經四法憂波提舍と三具足經憂波提舍とを合して恰も三部作なるかの觀がある。蓋しその解釋の體裁、用語の樣式極めて相類似し、且つ同じく毘目智仙によりて譯せられた點から見ても流傳の時處を同じくせることが知られる。

譯者に關しての若干の問題は三具足經憂波提舍の解題に於て言及して置いたから今はそれに讓り、こゝにはこれを略する。

本論中に廣普經を引用すること三回、般若經、無垢稱經各二回、阿那婆達多龍王經、龍王問經各一回を引用する。これらを今十分に現存藏經中に的示する暇を有しないのは遺憾であるが、その幾分を註記して置くから、後賢の補綴を希ふ。

昭和七年九月十日

譯者　泉　芳璟　識

るを見る」。我れ今此の修多羅の量を以ての故に清淨と說く。

要を以て之を言はゞ、滿足衆生發起精進は一切衆生に等心に示現す。滿足佛法發起精進は自證示現す。究竟相好發起精進は此れ則ち普賢の依止を示現す。清淨世界發起精進は一切衆生に富樂を示現す。

又復義有り。初は病を厭ふが如く、二は藥を聞くが如く、三は藥を悕ふが如く、四は病人所居の舍宅の如し。又復示現するに、初は大悲力、二は示智力、三は身心力、四は直心深心修力、是の如く示現す。

又復義有り。初は一切衆生を捨てざるを說く。二には力、四無所畏、不共法等、一切の佛法を得。三には身著嫌ふべからざるを得。四には佛無上法王相應世界を得。

又復義有り。滿足衆生發起精進は檀波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、示現を爲すが故に。滿足佛法發起精進は般若波羅蜜、智波羅蜜の故に。究竟相好發起精進は羼提波羅蜜、方便波羅蜜の故に。淨佛世界發起精進は尸波羅蜜、禪波羅蜜、是の如く示現す。

寶髻經四法憂波提舍　終

て佛の世界不淨なること此の如きや。

「爾時に世尊、慧命舍利弗の念を知るを以て而も之に問うて言く、『舍利弗、意に於て云何。汝舍利弗、是の念を作す勿れ。日月豈不淨ならんや。而も盲者は見ず』。慧命舍利弗の言く、『不なり世尊、是れ盲者の過にして日月の咎に非ず』。佛の言く、『舍利弗、衆生も是の如し。無智の罪の故に如來の世界の清淨を見ざるは、如來の咎に非ず。舍利弗、我が此の世界は常に自から清淨なるも、而も汝は見ず』。爾〔二〕時螺髻梵王慧命舍利弗に語つて言く、『大德舍利弗、仁の意、此の佛の世界を謂つて清淨ならずと爲す莫れ。今此の世尊釋迦牟尼の世界は清淨なり』。慧命舍利弗梵王に問うて言く、『此の佛の世界云何が清淨ならむ』。螺髻梵王の言く、『大德舍利弗、譬へば他化自在天宮の莊嚴の殊妙なるが如く、我が世尊釋迦牟尼の世界の清淨功德莊嚴を見ること亦復是の如し』。慧命舍利弗、復梵王に言ふ、『我れ今唯此の佛の世界丘陵・坑坎・蕀刺・沙礫・土石・諸山・穢惡充滿せり』。螺髻梵〔三〕の言く、『大德舍利弗、仁者是の如く心に丘陵坑坎等の穢有り。信清淨ならざるが故に、此の佛の世界の不淨を見る。復次に大德舍利弗、若し能く一切衆生に於て心皆平等にして深心清淨なる有らば、則ち此の佛の世界の清淨なるを見む』。爾時に世尊、足指地を按ずるに卽時に三千大千世界、無量百千不可計數の功德珍寶、具足し莊嚴せること、譬へば寶莊嚴佛の無量功德勝妙珍寶莊嚴世界の如く、時に此の三千大千世界も亦復是の如し。大衆皆見て未曾有なりと歎ず。而も皆自から寶蓮華に坐するを見る。爾時世尊慧命舍利弗に告げて言く、『舍利弗、汝今我が佛世界無量の功德勝莊嚴を見ると爲んや不や』。慧命舍利弗の言く、『我れ見る、世尊、本見ざる所、本聞かざる所。今世尊の不可思議莊嚴世界清淨悉く現じたまふを見る』。佛の言く、『我が佛世界の清淨なること是の如し。下劣の衆生は不淨を見るのみ。舍利弗、譬へば諸天の寶器を共にして食せんに、其の業力に隨つて飯則ち同じからざるが如く、是の如く、舍利弗、衆生共に一佛の世界に生じ、若し心淨ければ則ち世尊の世界清淨な

〔二〕原典「者」に作る。今改めて「時」となす。

〔三〕宮本に梵の下に王を加ふ。

生相、二には行相、衆生相とは、謂く、衆生の過、行相と言ふは、所謂行過、彼の衆生の過惡の行なり。衆生種種の虚妄の諸見に依止す。彼の行過とは、坑坎・堆阜・蕀刺等の過なり。是の如きの地・食飲・衣服・寶等の受用、皆具足せざる多し。是の如く衆生功德、行功德を相對するが故に、世界清淨なり。彼の、復、菩薩の無量種種願力自在、應に是の如く知るべし。諸佛世界の功德無邊なり。菩薩の願力自在無邊なり。發起精進是れ亦無邊なり。是の如き種種盡く說くべからず。又此の諸佛世界の清淨唯少分を說く。餘は應に知るべし。世尊の說の如し。十二種の諸功德場有り。和合衆集して彼の清淨覺、佛の世界を得。何等か十二なる。一には劫場和集の故に得。功德場、皆究竟するを以ての故に。二には時場和集の故に得。法行等時を過ぎざるを以ての故に。三には衆生場和集の故に得。法智を以ての故に。四には世界場和集の故に得。善淨を以ての故に。五には調御衆生場和集の故に得。無[一八]穢なるを以ての故に。六には乘場和集の故に得。一行を以ての故に。七には陀羅尼場和集の故に得。餘物無きを以ての故に。八には佛法場和集の故に得。一切外道法無きを以ての故に。九には功德場和集の故に得。不諂を以ての故に。十には直心深心場和集の故に得。本性淨、生淨、衆生處淨を以ての故に。十一には聖場和集の故に得。福田を離れざるを以ての故に。十二には道場和集の故に得。前佛の所乘に乘じて來るを以ての故に。又此の世尊釋迦牟尼佛の世界は、是れ清淨とや爲ん。清淨ならずとや爲ん。今清淨なりと說く。何を以てか之を知る。世尊の心善清淨なるを以ての故に。若し人有ることを得む。心清淨ならざるを以ての故に、此の佛の世界の不淨なるを見る。彼の意に依るが故に、[一九]世尊說いて言く、「我れ今五濁惡世に出でて阿耨多羅三藐三菩提を覺る」と。[二〇]無垢稱修多羅に說くが如し。「菩薩佛の世界を淨むるを得んと欲せば、當に其の心を淨むべし。其の心淨きに隨つて佛の世界淨し」。爾時慧命舍利弗、佛の威神を承けて是の疑念を作さく。若し菩薩の心淨からんに佛の世界淨からば、今我が世尊釋迦牟尼、菩薩を行ぜし時、意豈不淨にし

【一八】三本並に宮本「[illegible]」に作る。

【一九】前に引く所の阿彌陀經なり。

【二〇】維摩經佛國品なり。

して軟く少なり。白象王の舌あり。雷吼雲の聲、善美の音聲、文殊の響の如し。滿足衆好、兩臂平等、身體淨潔、衣裳亦爾り。普身柔軟にして衆分皆等し。次第善密、身の分分善し、分分寛博、善坐圓滿。舌正しく美言。語論次第す。齊舌皆深し。行密仙王、普ねく皆憙ぶべし。第一淸淨。離闇の電光、普遍の光明、師子・牛王・龍王・鵝步、右旋して轉行す。舌長短ならず。舌則ち圓美。腹脇卓ならず。惡欲を離る。身に黑靨無く、垢惡有ること無し。外圓にして利。又前却ならず。高隆にして淨く、垢穢有ること無し。笑微にして緩。目靑葉の如く、婆羅耶に居す。笑へば則ち法の如く、眉面處所、次第相應す。眉正しくして邪ならず。少からず多からず。皆悉く過を離れ、毀呰すべからず。皆厭ふべからず。諸根善勝。額中善く滿ち、第一にして喜ぶ可し。面額相類し、上身平滿、白からず、黑からず。種種の香有り。堅ならず濁ならず。次第に善く緊む、勝妙の文章、難陀旋跋陀摩那有り。應量身形、髮順にして亂れず。

佛何を以ての故に、此の中相好究竟尸波羅蜜を教示する。彼の中便はち此の義を遮す。今初業の菩薩の憶念相好を說く。悕望して得んと欲す。彼を饒益するが故に方便教示す。彼れ未だ久しく行ぜざるが故に。相好を愛して饒益を捨離す。悲心布施すれば相應饒益すること是の如し。故に遮す。又復若し人妙色究竟の相好に貪著し、悕望憶念せば、彼の人の爲に遮す。若し衆生有りて饒益を成熟すれば、彼須らく教示すべし。此に衆生有りて、如來の身相莊嚴を見、菩提心を發すが故に、是の如く說く。轉女身修多羅[17]に說くが如し。又復未だ菩提心を發さゞる者には饒益し教示す。又復久しく菩提心を發す者は空等と相應し饒益するが故に遮す。又福德を具し滿足饒益す。是の故に智具を教示す。滿足饒益の故に遮す。又世尊の相、隨形好を求め、滿足究竟す。取著の故に遮す。又復貪著喜樂等の過、寂靜饒益、彼の爲の故に遮す。是の如きの因緣、此の經遮せず。諸佛世界、幾種の淸淨、幾種の不淨、彼の義說かず。彼の不淸淨、要するに二種有り。何者をか二と爲す。一には衆

【一七】轉女身經、無垢賢女經、腹中女經を指すか。

波羅蜜と爲す。若し他に布施せば我れ何の用ふる所ぞ。是の如きの心無く、是の如きの力有り。是の如きを名けて毘梨耶波羅蜜と爲す。若し來り乞ふ有り、若くは施を施し已りて不熱不悔、自心喜樂して善意心を生ず。是の如きを名けて禪波羅蜜と爲す。若し布施し已りて一切法に於て心所得無く、果報を望まず。彼の黠慧の如き、少法の貪著喜樂有ること無し。是の如く著せず、唯阿耨多羅三藐三菩提を願ふ。是の如きを名けて般若波羅蜜と爲す。是の如く六波羅蜜を滿足す。要を以て之を言はゞ一切を具足す。又世尊の大乘經に無量の具足を說くが如し。是の如く一切皆此の中に攝せらる。又大地に住する諸の菩薩等に是の如きの意有り。彼の大地に住する諸の菩薩の意、布施は一切の佛法を滿足す。又復諸の衆生を對治するが故に、世尊說法するに、或は衆生有り。布施門を以て爲に說き、一切佛法を滿足す。或は衆生有り。乃至慧門。

又復爲に菩薩の願を示すが故に。菩薩乞求者の意を滿足して是の如きの願を作す。「我が如き彼の求者の意を滿足せしめむ。此の善根を以て願はくは一切佛法を滿足せしめむ」。是の如く說かば、則ち過有ること無し。

何者か相好なる。彼の義今說かむ。[一五]三十二相とは所謂、手足皆輪文有り。善安平住。手に網縵指あり。手足柔軟。七處平滿。指長く、身寛なり。正直大身、項則ち貝の如し。身毛上に靡く。因尼鹿の踹あり。髀平かなり。臂平かなり。陰馬王藏。皮妙金色。一孔一毛。眉間則ち白毫有りて面に顯はる。師子上身。肩の前後圓かなり。其の背平正なり。味中の上味。身體圓滿、尼拘陀の如し。頂上高圓。脩高長舌。妙梵音聲。師子頤頰。齒則ち鮮白。齊平にして密。四十齒有り。目睫紺青。牛王の眼。

[一六]八十種好、隆赤膩甲。圓指錦文。脈深くして見はれず。手足の踝平かなり。骨節堅密。一足趺平。足下文長し。手足平正。文深くして膩潤。舌次第語、脣色赤好、頻婆果の如し。不高不下。舌赤く

【一五】三十二相は佛典諸處に見えたり。されどこれを比較するに出沒あり。大乘百福相經の解題に若干の文獻を比較し置きたり。見るべし。今此處に出づるものは若干の不足あり。今強ゐてこれを改めず。

【一六】八十種好も三十二相に同じく經典諸處に出づ。その具略の比較は大乘百福相經の解題に讓る。此に出づるものは若干の不足あるが如し。讀者比較して知れ。

れ常に一切の衆生を滿足せしめむ」。是の故に菩薩作願し布施すれば、一切の生處大富樂を得、彼の願力、布施力の熏を以て、生生處處・種種布施・無量の衆生皆悉く滿足し、殺生等種種の不善を離る。是れ無畏施なり。一切の衆生皆悉く滿足す。世尊の說の如し。「殺生を止むるが故に、是れ則ち布施、一切の衆生畏れず、憎まず」。是の如き等の故に、如し爲に畢竟涅槃を示現せば、無量の衆生涅槃の樂に住す。諸の菩薩の爲に佛の授記を授け已りて然る後に菩薩自から涅槃を取る。是の如きの因緣、苦を捨て、樂を得。是の如く一切衆生を滿足せしむ。

何者か佛法なる。彼の義今說かむ。法身は十力・無畏・不共法等に依止する、此は是れ佛法なり。彼の一切法皆是れ佛知、故に佛法と名く。彼の聖者文殊師利所說の偈に言ふが如し。

不思議の正覺、　不可量の如來、
緣覺聲聞等、　測量する能はざる所、
況んや一切の衆生　能く彼の如來を知らんをや。
凡夫は戲論を行ず。　如來は戲論無し。
唯佛能く佛を知り、　佛法行に依止す。
自然の身心智　佛を除きて能く解する無し。

又復云何が菩薩の布施是の如く一切佛法を滿足する。何を須てか六と說く。彼の義今說かむ。實には六種有り。何の意を以ての故に唯布施を說く。此の義今說かむ。此は是れ菩薩善方便の意なり。善方便の菩薩の布施の如きは則ち能く六波羅蜜を滿足す。[一三]善方便修多羅の說、[一四]郁伽羅問修多羅の說の如し。在家の菩薩の布施、六波羅蜜を滿足す。云何が滿足する。所謂菩薩異異種の物を、彼彼求むる者に皆悉く施與し、心分別せず、是の如きを名けて檀波羅蜜と爲す。菩提心に依つて布施を修行する、是の如きを名けて尸波羅蜜と爲す。乞求者に於て瞋らず、動ぜず、是の如きを名けて羼提

【一三】前註に準ず。
【一四】郁伽羅越問菩薩經、大寶積經郁伽長者會。

て珠寶髻を得たり、十三千大千世界の滿中の七寶に直ず。是の故に彼の聖を名けて寶髻と爲す。譬へば手を以て金剛を執るが故に金剛手と名くるが如し。是の如く髻中に寶珠有るが故に、名けて寶髻と爲す。[一]三善具足憂波提舍、彼に說く。應に知るべし。

何が故に四種精進を發起して、多からず、少からざる。彼の義今說かむ。思念は此の發起精進に因るを以て、思念の饒益具足し究竟す。彼に何物の思念饒益有る。此に我れ今自他の利益を說かむ。彼れ多かる須らず。亦少きを得ず。又復思念の饒益究竟、少と說くを得ず。是の如きの四種、世尊已に說く。譬へば丈夫の兩脚行くことを得て更に多きを用ひず。一もて行くことを得ざるが如し。此れ亦是の如し。

何者か布施なる。幾種の布施ある。此の二種の難、三善具足、憂波提舍、彼の說應に知るべし。何者か衆生なる。有とや爲む。無とや爲む。菩提心憂[二]波提舍の如し。彼の說應に知るべし。菩薩の布施、當に一切衆生を滿足すべしとや爲む。滿足せずとや爲む。彼の義今說かむ。菩薩滿足。云何が滿足する。菩薩普ねく一切衆生に於て心皆平等なり。一切の物を捨て、普ねく衆生に施す。一切衆生の願を滿足するが故に。菩薩云何が一切の物、所有一切內外の物を捨する。願はくは一切衆生をして解脫せしめんと、清淨心もて捨す。乞求の人來らむに、自己の物の如く、自物を想取せしむ。一切衆生平等心の故に。若し菩薩の施は、彼我の過を離れて衣食等を捨てゝ布施し、一切衆生を滿足せしむ。若し取らずんば菩薩の過に非ず。菩薩の心一切の乞者に施す。猶し龍王の如し。譬へば龍王の大密雲を起して虛空を覆ひ、平等に雨を降さんに、藥草叢林、樹木生長し、陂池悉く滿つるも、高處の受けざるは龍王の咎に非ざるが如し。是の如く菩薩平等に普ねく一切の乞者に施す。若し受けざる有るも菩薩の過に非ず。一切衆生の願を滿足するが故に。菩薩布施せんに、是の如きの願を作す。「我れ一切衆生の無上樂を滿足せしめんが爲の故に、種種の物を一切の生處に施し、我

【一】三具足經憂波提舍を指すか。若し爾らば現行の論本にこのこと見えず。

【二】麗本「婆」に作る。今三本並に宮本に依る。菩提心經論、天親造、鳩摩羅什譯、發心品第二に「見諸衆生」の一段あり。是れを指すか。

得んと欲せむ。何の方便を以てせむ。彼の不學の人には、一切智人、善方便して彼の不學の人を學ばしむ。彼を饒益するが故に、爲に此の經を説く。一切智人に四種の示現あり。此の方便を以て少しく布施を行じて多く果報を得。善方便修多羅[九]に説くが如し。「善方便の菩薩、少しく施して廣を作す。廣作無量、是の如く饒益せらる」。

又復更に何の饒益する所か有る。此の義今説かむ。若し菩薩有り。願智を離れむに、彼の菩薩をして願智と和合せしめむ。是の如く饒益するは一切智の示なり。菩薩無願なれば則ち布施せず。又是の如く願ぜむ。我れ今食等の布施を滿足す。願はくは未來世、無上法を以て布施し、力・無所畏・不共法等を滿足せむ。是の如く、佛法相隨形好皆悉く證得し、我れ善淨佛の世界を得む。是の如く饒益せらる。

又復更に何の饒益する所か有る。此の義今説かむ。菩薩四種の具足を求めて其の因を學ばず。因を學んで饒益するは一切智の示なり。若し汝四種の具足を求めんと欲せば、應に四種の發起精進を行じて布施を行ずべし。何等をか四と爲す。一には衆僧具足、二には智具足、三には身具足、四には佛世界具足、一切智の示なり。若し汝四種の具足を求めんと欲せば、應に四種發起精進を行じて布施を行ずべし。若し一切衆生を滿足するを説かば、發起精進、僧具足するを得む。若し一切佛法を滿足するを説かば、發起精進、智具足するを得む。若し究竟相隨形好を説かば、發起精進、身具足するを得む。若し清淨佛の世界を説かば、發起精進、佛世界具足するを得む。是の如く饒益して自他利益するが故に、此の經を説く。

又復何の義ありてか、名けて世尊と爲す。何の饒益する所ありてか王舍城に在る。此の二難[一〇]、菩提心憂波提舍の如し。彼の説應に知るべし。

何が故に菩薩を寶髻と名くとは、彼の義今説かむ。是の如く無量無數百千阿僧祇劫に善根究竟し

【九】善方便經、又は善法方便陀羅尼經か。

【一〇】現行の菩提心經論に見えず。

又復如來何の饒益する所(ありてか)而も是の如きの檀波羅蜜、施行淸淨を說く。人有り、憶念すらく、佛の檀波羅蜜施行淸淨を說くを聞かんと欲し、聞き已りて饒益せらる。何人か此を聞かんと欲する。我れ今說く。所謂、寶髻諸菩薩等、是の如きの大聖菩薩衆と俱に、善應世界より而も來りて此に至り、種種勝妙もて世尊を供養す。供養し已訖りて問ふて言く、「世尊、未だ知らず、菩薩幾種の淨行(かある)。願はくは世尊說きたまへ。我れ今聞かんと欲す」。世尊說いて言く、「善男子、菩薩、四種の淨行を具有す。何等をか四と爲す。一には波羅蜜の淨行、二には菩提分法の淨行、三には通智究竟の淨行、四には衆生淳熟の淨行なり。何者か布施波羅蜜の淨行なる。彼れ云何が說く。彼の世尊、菩薩四種發起精進、布施を離れず。是の如き等、是の如く饒益せらる。

又復此の義何の利益する所ぞ。此に我れ今說かむ。爲自利益、爲他利益、自他利益の因を知らざるが故に。如來彼の自他利の因を示す。是の故に爲に此の修多羅を說く。一切智人何を以ての故に示す。人有り、菩提心を起發し已りて、四種發起精進布施し、彼の人自他利益具足す。唯憶念に非ず。

究竟相好發起精進、滿足佛法發起精進、是の故に布施自利益滿足することを得。衆生發起精進、淨佛世界發起精進、是の故に布施他利益を得、是の如く饒益せらる。

又復更に何の饒益する所か有る。此の義今說かむ。若し菩薩有り。施智を學ばざらむ。彼の菩薩をして施智を學ばしめんが故に、是の如く饒益するは一切智の示なり。若し菩薩有り。施智を學ばずして而も亦施を行ぜむ。施と名くるを得るも、波羅蜜に非ず。世尊の檀波羅蜜を說くが如し。彼の中に說いて言く、「若し人恒河沙等劫に布施を修行するも、施智を學ばずんば、是の如きの菩薩、名けて施と爲すを得むも、波羅蜜に非ず」。

又復更に何の饒益する所か有る。此の義今說かむ。若し菩薩有り。少しく施を行じ、多く果報を

【八】恐らくは「施波羅蜜」とあるべし。

皆清淨ならば、阿彌陀莊嚴經[六]の說に遂す。彼の經の中に於て如來說いて言く、「我れ今五濁惡世に出で、阿耨多羅三藐三菩提を覺る」と。若し清淨ならざれば、何が故に此に菩薩の四種發起精進、布施を離れずと說く。此の義須らく說くべし。要を以て之を言はゞ、何者か一切衆生の發起精進を滿足する。是の如く乃至、何者か清淨佛世界發起精進なる。世尊已に說けり。此れは皆是れ難なり。

是の如く第一無垢清淨勝修多羅、問難する所の如く、彼の義今說かむ。此の所說の法其の義云何。何の義を以ての故に。彼の無障礙・不可稱量・離垢・勝慧・不可思議、勝身口意、第一、天人阿修羅衆に供養せらるゝ寂靜勝行・不可思議・無等等光、已に此の經を說く。偈に言く、

無礙にして廣きこと無量、　勝慧三界の上たり。
身思議すべからず　口意亦是の如し。
天人阿修羅、　衆等の供養する所、
何の義の故に此の　無上離垢行を說く。
正教佛已に說く、　寂靜第一の行、
不可思議、　無等等の光明有り。

此の義今說いて、疑有る者の爲に疑を斷じて饒益せむ。大會中に於て天有り、人有り、阿修羅有り。若くは龍・夜叉・鳩槃茶[七]等佛世尊菩薩の爲に說くを聞かむ。「飲食・車乘・衣服・莊嚴・種種珍寶、若くは馬、若くは象、修道の處、園林戲處・城邑聚落・多人住處、或は洲埏・妻子・頭目・手足・心皮・肉血・骨髓・上身等分を以て、以用て布施す」と、此の說を聞き已りて疑心を生ぜむ。菩薩幾許の發起精進、是の如きの種種難行布施なる。如來彼の疑心を生ずるを觀知し、彼の疑を斷ずるの故に、爲に此の經を說いて言く、「善男子、菩薩の四種發起精進、布施を離れず」。一切智人已に此の法を說く。菩薩懈怠の布施を謂ふに非ず。是の故に四種の發起精進、是の如く饒益す。

【六】阿彌陀經「能於娑婆國土、劫濁見濁煩惱濁衆生濁命濁中、得阿耨多羅三藐三菩提」とあり。

【七】麗本並に三本「茶」に作る。今宮本に依る。

世尊牟尼王、　　不可量の精進、
無垢・勤・不動、　　最勝の精進力、
此の修多羅を說く。　　何の饒益する所とや爲む。

又復何の義名けて世尊と爲す。何の饒益する所(ありてか)王舍城に在る。何の義を以ての故に世尊彼の寶髻菩薩に告ぐ。何が故に菩薩を名けて寶髻と爲す。「彼の善男子菩薩四種の發起、布施を離れず」とは是の如きの菩薩是れ何の種姓なる。此の義須らく釋すべし。何が故に四種の精進を發起して多からず、少なからざる。何者か布施なる。幾種の布施、衆生の發起精進を滿足する。此れ應に解釋すべし。何者か衆生なる。有とや爲む。無とや爲む。衆生若し有ならば、一切の諸法衆生を離るゝの說、云何が避くべき。衆生若し無ならば、而も一切衆生を滿足すと言ふに則ち相應せず。菩薩の布施、當に滿足すべしとや爲む。一切の衆生、滿足せずとや爲む。若し皆滿足せば、何の因緣の故に、一切衆生覺せず、知らざる。世尊の說いて彼に言ふが如し。「龍王、若し我が四法已に衆生を取らば、彼の諸の衆生、一切皆應に我が說法を知るべし。若し滿足せずんば、自から所說の修多羅の言に違す」。

若し究竟相隨形好發起精進を說かば、相隨形好、此の義須らく說くべし。何者か相好なる。又復此の義世尊已に說けり。若し世尊、究竟相好發起精進尸波羅蜜を說かば、佛是の如く說く。「若し菩薩有りて悕望して相隨形好を得て布施せんと欲せば、當に知るべし、彼は是れ取著の菩薩なり」。何の義を以ての故に。此の中隨つて尸羅波羅蜜を說く。彼の處則ち是の如きの因緣を遮す。此の義須らく說くべし。

若し清淨佛世界發起精進を說かば、諸佛の世界は幾種か清淨にして、幾種か不淨なる。此の義須らく說くべし。又此の世尊釋迦牟尼佛の世界、是れ清淨なりとや爲む。清淨ならずとや爲む。若し

寶髻經四法憂波提舍飜譯の記

寶髻經は是れ[一]大集中の一集なり。其の宗の四法は玄深奥密、天親菩薩略して其の門を開く。是の故に名けて憂波提舍と爲す。聖自在力めて之を彼の古に行はしめ、時人慮會此を今に出だす。[二]興和三年、歳次、辛酉、九月朔旦、庚午の日、烏萇國の人刹利王種、三藏法師、毘目智仙、中天竺國、婆羅門人、瞿曇流支、護法大士、魏の驃騎大將軍、開府儀同三司、御史中尉、勃海高仲密、愛法の人、沙門曇林、道俗相假り、鄴城内、金華寺に於て譯す。四千九百九十九字なり。

寶髻經四法憂波提舍 一卷

天親菩薩造

元魏烏萇國三藏[三]毘目智仙譯す。

[四]是の如く我れ聞けり。一時、婆伽婆、王舍城耆闍崛山中に住し、大比丘僧大菩薩の衆と俱なりき。爾時、世尊、寶髻菩薩に告げて言く、善男子、菩薩の四種發起精進、布施を離れず。何等をか四と爲す。一には滿足一切衆生發起精進、二には滿足一切佛法發起精進、三には究竟相隨形好發起精進、四には清淨佛世界發起精進。是の如き四種發起精進、乃至此の修多羅の說を盡す。

是の如き菩薩の四種の正法は大乘經の攝にして、諸の菩薩の行、[五]證明の說なり。此に今解釋せむ。何の義を以ての故に、彼の不可量・無垢・精勤・不動・最勝・堅固・精進・大力具足すること是の如きの世尊、而も此の經を說く。偈に言く、

【一】 大方等大集經卷二十五より二十六に至る寶髻菩薩品あり。又大寶積經卷百十七寶髻菩薩會あり。此の兩經は蓋し同種のものゝ異譯ならむ。
【二】 西紀五四一年。
【三】 小傳は三具足經憂波提舍の解題を見よ。
【四】 大集經中の寶髻菩薩品は欲色二界の中間大寶坊中の說と見ゆ。但し四精進に就ては「是の如く施する時、四精進を具す。一には滿衆生の故に精進を具足す。二には護佛法の故に精進を具足す。三には三十二相八十種好を具せんが爲の故に精進を具足す。四には淨佛土の故に精進を具足す」と見えたり。大寶積經中の寶髻菩薩會は王舍城の說なり。これに相當する文は「復四施有り。專ら惟だ精進す。何をか謂て四と爲す。一には曰く飽滿衆生、二には曰く諸佛の法を具足す。三には曰く備さに悉く相好嚴容を成就す。四には曰く淨治佛土。是れを四事と爲す」とあり。
【五】 宮本「燈」に作る。

寶髻經四法憂波提舍解題

本論は佛の寶髻菩薩に語れりと云ふ四種精進、卽ち滿足一切衆生、滿足一切佛法、究竟相好、淨佛國土の四項に就いて詳釋を加へたるものである。寶髻經とは大寶積經の卷第百十七寶髻菩薩會、若くは大方等大集經卷第二十五の寶髻菩薩品を指すもので、此の菩薩の梵名は寶積經に羅陀隣那朱とあるより ratna-cūḍa なるべしと推知される。

本論は轉法輪經憂波提舍と三具足經憂波提舍と合して恰かも三部作なるかの觀がある。作者は天親、譯者も三部共に毘目智仙である。譯者の小傳等は三具足經憂波提舍の解題に附載するから、今はそれに讓つて此には略する。

本論中の引用經典は善方便經、菩提心憂波提舍各二回、阿彌陀莊嚴經、三善具足憂波提舍、文殊師利の偈、郁伽羅問經、轉女身經、無垢稱經各一回である。今遺憾ながらこれらを十分に現存藏經中に的示する餘裕を有しない。その幾分を註記に加へ置くに止める。偏へに後賢の指示を俟つものである。

昭和七年九月十日　譯者　泉芳璟　識

虚假の名言等、　彼の法若し分別せば、
聲義の二、合に非ず、　彼れ自性の意に非ず。
般若波羅蜜　佛菩薩も亦然り。
此の所說唯名、　實義分別を離る。
所有聲義止む。　此れ事の止遣に非ず。
是の如く餘も亦知る。　語中の義決定す。
此の無所得正し。　一切の名實に知る。
如義の性是の如し。　彼の聲を止遣せず。
須菩提二を離れよ。　聲と聲義是の如し。
菩薩、名有ること無し。　我れ此を見て說有り。
般若波羅蜜、　語の無、決定して生ず。
伺察するは唯智者、　此の義、微妙の慧。
相續の義除遣す。　若し別義分別せば。
般若波羅蜜　彼の言說響の如し。
總略是の如きの義、　般若等に依止す。
是の如きの義循環して　復別義に依止す。
般若波羅蜜、　正に八千頌を攝す。
彼の得る所の福蘊、　皆般若より生ず。

佛母般若波羅蜜多圓集要義論　終

自性を自色覆ふ
幻の如く別異に現ず。
無二に別異說、
毀謗、諸分別、
色空和合に非ず。
色も無く、空の名も無く、
此の一性分別、
空は彼の色に異らず。
此の無實の所現、
此の無實能く表す。
此れ是の如く色を說くは
無二の二是の如きの
如理の言淨性、
性無性の違等、
此の色を唯名と說く。
彼の自性を分別し、
色及び色の自性、
彼の自性の倶相
不生不滅等、
佛の言なり。若し散異せば
彼の無明因の作なり。
果を夢の如く棄捨す。
果等定んで毀謗。
彼の毀謗此の說。
彼れ互に相違して礙す。
色相自から和合す。
種種性を對治す。
彼の空何の有る所ぞ。
彼の無明の所起、
彼れ無明を說くが故に。
般若波羅蜜なり。
二分別を對治す。
亦然り、得べからず。
種種性定んで見はる。
眞實自性無し。
容受して卽ち當に止すべし。
空なること先の所說の如し。
分別此に止遣す。
所有諸法を觀ずる
彼は差別分別なり。

此等の說句を無すれば　一切の遍計止む。
幻喩等の見邊、　此れを依他性と說く。
四種の淸淨有り、　圓成實性と說く。
般若波羅蜜も　佛に別異の說無し。
十分別散亂、　對治次の如く說く。
此の三種を知り已れば　若くは卽、若くは離說す。
初語の如き圓成、　依他及び遍計、
無相分別色　彼の散亂止遣す。
彼の佛亦菩提、　說者等を見ず。
了畢に至るまで此れを　遍計性を止遣すと知る。
自性彼の色を空ず。　俱相何の有る所ぞ。
此の別異の語中、　了知し已れば彼れ止む。
此の不空故空、　是の如きの語の所說、
諸の毀謗分別、　一切の說皆止む。
幻の如く亦然り、佛、　彼れ、夢の如く亦然り。
是の如く、次の如く知らば、　智の語邊決定す。
諸の同等の所作、　此に佛を幻の如しと說く。
幻喩等の言等、　此を依他性と說く。
若し諸の異生智、　彼の自性淸淨、
故に彼の佛言を說く。　菩薩も亦佛の如し。

諸善空性の中、　彼の出づる亦無盡、
此れ遍計分別、　彼れ普ねく攝して空爲り。
十種心散亂、　心散亂、異處、
愚、相應を得ず。　無二の智成ぜず。
彼の止息互相に　能所對治と爲る。
般若教中に於て、　彼れ圓集の所說。
若し菩薩有りて此の　無相分別を有せむ。
散亂止息師　彼の世俗の蘊を說く。
此の八千頌等、　初語より次第して
了畢に至るまで皆止　無相分別を說く。
因の言は如是ならず　此れ唯だ事相を說く。
梵網等の經中、　一切理の如きを知る。
菩薩我を見ず。　而も此等廣大なり。
世尊此に有相　分別の亂を止遣す。
若し彼の名を見ざれば　境界行亦然り。
彼の蘊一切處に　皆菩薩を見ず。
此は遍計を止遣す　普ねく此の所說を攝す。
一切智因に乘じ　慧諸相を分別す。
般若波羅蜜　三種の依止を說く。
謂く、遍計、依他、　及び圓成實性なり。

菩薩の我見られず。
能く內の諸事を受く。
色及び色の自性、
此等外の諸處、
色等の相は彼の身
向の義を若し彼れ見ば、
彼の諸の內空の性、
所有識相の種、
不生亦不滅、
有情生死欲
佛法見るべからず。
此等所說の如く、
別別所有の法、
彼の勝義有に非ず。
彼の我等の見斷じ、
而も彼の人無我、
一切法不生なる
法無我を宣說し
有罪及び無罪、
諸の有爲、無爲、

此の說實にして寂默。
彼れ說いて卽ち空と爲す。
此の說亦復空。
所受の分皆止む。
安住及び相離。
彼の內卽ち實無けむ。
自性亦復空なり。
卽ち我が悲智を起す。
有情此等明かなり。
彼れ說いて卽ち空と爲す。
菩薩の法も亦然り。
彼の十力等を空ず。
此を遍計の性と說く。
諸法是の如く說く。
大士畢竟じて作る。
佛一切處に說く。
此の所說亦然り。
一切處に實に說く。
不增亦不滅、
所有諸善止む。

佛母般若波羅蜜多圓集要義論

大域龍菩薩造
西天譯經三藏朝奉大夫試光祿卿
傳法大師賜紫臣施護等詔を奉じて譯す

妙吉祥童眞菩薩摩訶薩等に歸命す。

般若等を成就せる、　無二智の如來、
彼の中、義相應す。　彼の聲に教道の二あり。
依止及び作用、　事業同じく修を起し、
相及び罪を分別し、　稱讃次の如く說かむ。
具信以て體と爲し、　師資互に證說す。
說時說處等、　自量成就するを得。
說法者當に知るべし、　世間は時處の二。
說者同證有り、　然る後量の如きを得。
一切の如是集、　我聞等の所說、
如是義を和合して、　最上三十二。
十六相を分別し、　卒其の次第の如し。
八千頌中に說き、　異の方便說を了す。
今此の八千頌、　如說の義滅無し。
所樂に隨つて頌略す。　如是義、說の如し。

佛母般若波羅蜜多圓集要義論解題

　これは佛母般若とも稱せらるゝ八千頌般若を解釋せんがために、大域龍の造る所、明本に龍樹造とせるは誤である。一篇五十六頌より成り、十六空、十分別散亂の止遣、遍計、依他、圓性の三性の意に達すれば般若空性の本義に稱順する所以を說く。由來本頌の如き教理教說を內容に盛れるものは句の制限の爲に往往難解のものとなり、一讀してその何の意たるやを知るに苦しむのである。かゝる種類の偈頌は必ずや當初から釋論の製作を豫想するものである。釋論と併せ讀んで始めてその義趣を知るべきもので、然らずんば本頌のみではその意旨を知ることは不可能である。本頌には三寶尊所造の釋論四卷がある。これには勿論本頌もそのまゝ牒擧されてゐるから、この釋論だにあらば則ち足るといふものだ。或は本頌は何人かゞ何等かの必要から便宜上釋論の中から抽出して獨立別行したものではないかとも思はれる。

　本頌の梵名藏傳によれば Prajñāpāramitā-saṃgraha kārikā である。大域龍の梵名は mahādiṅnāga であり、この梵名から見ると陳那 diṅnāga と同一人の如くでもある。域龍は因明正理門論の作者であるが、これを基の入正理論疏には陳那菩薩因明正理門論を作ると云へば、これ同一人とするものである。然し玄奘、義淨の譯例から見るに、域龍、陳那を區別してゐるから、同一人とするには聊か躊躇される。陳那は西紀第六世紀の初、護法同時の出であつて、南印度の人、商羯羅主の師、西藏所傳では世親の弟子である。

　本頌は宋の雍熙二年(西紀九八五)施護の譯する所、施護 dānapāla は烏塡曩 udyāna の人太平興國五年(西紀九八五)天息災と支那に至り、多くの經論を譯出してゐる。

昭和七年九月一日

譯者　泉　芳　璟　識

般若波羅蜜、　　正に八千頌を攝す。
彼の得る所の福蘊　　皆般若より生ず。

此に般若波羅蜜正に八千頌を攝すと言ふは、謂く、此の八千頌般若波羅蜜多中、所説の自性。「八千」とは此の數量普ねく攝す。是の如きの數量中の義、總聚して已に釋せり。頌に「正」と言ふは、不顚倒の義、彼の正教の中、何の生ずる所ぞ邪。頌自から答へて言く、「彼の得る所の福蘊。」「得」とは獲の義、是の如く清淨所成の福聚、皆般若波羅蜜多より出生す。般若波羅蜜多より出生するを以ての故に、所得の福聚、甚深廣大なり。是の所得の深廣の福聚を以て、普ねく用つて一切世間に迴向し、悉く般若波羅蜜多畢竟勝妙清淨の智を獲得せしめ。是の無虚妄、勝第一義、諸の正句の中に於て、理の如く伺察せしめむ。我が此の所造の解釋の文、生ずる所の福聚、今此に意を説くもの、普ねく一切世間をして悉く清淨ならしめむ。頌に曰く、

釋迦師子諸苾芻　　所有是の如き福高勝なり。
此の所説の意、世間を利し　　勝福に由るが故に眞實に住せむ。

佛母般若波羅蜜多圓集要義釋論終

般若波羅蜜、　　彼の言說響の如し。

此に「相續義」と言ふは、謂く、若くは往、若くは現、相續造作の義、「除遣」とは棄捨の義、謂く、是の如きの義に於て執著を棄捨す。何を以ての故に。般若波羅蜜多、若くは見、若くは聞、彼の所說有る、皆響聲の如く、又金光の色相に對現するが如くなるを以て、是の義を以ての故に、若くは往、若くは現、相續造作して、分別する所有り、執著する所有り。皆當に棄捨すべし。此れに由て、般若波羅蜜多の中、一切の所說皆響聲の如し。是の義の總略、復次に斯の義を顯明せんと欲せんが爲の故に、有る頌に云ふが如し。

所有諸教脈捨する勿れ。　亦復應に毀謗を生ぜざるべし。
如實を見已りて眞實に住す。　彼の眞實を以て而も表說す。

今此の義の中、總略の所成を表示す。頌に言く、

總略是の如きの義　　般若等に依止す。
是の如きの義循環して　　復別義に依止す。

此に「總略是の如き」等と言ふは、所有十萬頌般若波羅蜜多、總略一切是の如きの義、皆此の般若波羅蜜多に依止す。相續三十二品總略攝の故に。是の如く當に知るべし、後に增廣無し。頌に「是の如きの義循環」と言ふは、謂く、是の如きの義に於て、一向重復、循環研覈す。問ふ。何等の義をか研覈する邪。頌自から答へて言く、「別義に依止す。」此の中所說の別義の言、即ち別義を問難す。「問」とは謂く、分別差別して問ふ。「難」は依據する所有り。謂く、菩提分法、佛功德蘊、此の法の中に於て、是の如く重復、循環、研覈す。若し是の如くんば總略の所說、所成の別義、依據有るが故に、即ち三十二品各別の自性收攝し循環す。今此の釋する所の八千頌般若波羅蜜多、一切の文義、普盡の所釋、所生の編聚、畢竟廣大、悉く用つて廻向す。故に頌に說いて言く、

一切唯名此れ當に知るべし。　一切想中假に安立す。
彼の所聚の名差別の性、　當に知るべし彼の名所有無し。

尊者須菩提所問般若波羅蜜多中の如くんば、決定止遣の聲、義二なるか。故に頌釋して言く、

須菩提二を離れよ。　聲と聲義是の如し。
菩薩、名有ること無し。　我れ此を見て說有り。

此に「須菩提」等と言ふは、謂く須菩提了知せよ。聲義二種、其れを離れて安立す。此の中の意は聲とは謂く說者の聲、聲義とは、謂く、所說の義、云何が「菩薩、名有ること無き」。菩薩の名は所有見るべからざるを以ての故に。須菩提、般若波羅蜜多中に於て乃ち所說有り。此の中の意は、決定二種分別性最勝の意樂中、虛假聲別異の性を遠離す。此の中決定の語言、向の義を表示す。是の故に頌に言く、

般若波羅蜜、　語の無決定して生ず。
伺察するは唯智者、　此の義、微妙の慧。

此に「般若波羅蜜」等と言ふは、無とは謂く無所有。卽ち般若波羅蜜多中、彼の和合の語決定して所有無し。所說無し。戲論無し。是の如く應に知るべし、一切語言の中、所說向の義を決定す。云何が是れ向の義、謂く、卽ち前に說く所の如きの義の如し。彼の解釋門。頌に「伺察することは唯智者のみ、此の義微妙の慧」と言ふは、「伺察」とは謂く、細伺審察。此の義とは卽ち三十二品諸有の聲中、總じて決定を說く。頌に智者と言ふは卽ち智者の智、能く語義を知る。「微妙慧」とは卽ち畢竟微妙清淨の智。行相云何。謂く、卽ち此の智一切の境界中に於て無著無礙なり。而も般若波羅蜜多は、響聲中に於て所聞有るが故に。此の義を表示せんが爲に、所以に頌に言く、

若し別義分別せば　相續の義除遣す。

此に「所有」等と言ふは、謂く卽ち所有聲義に二種、此に止遣を說く。頌に「此れ事の止遣に非ず」と言ふは、謂く、無二智は此の中の事相の作用を止せず。然も彼の無言の性、說くべからざるが故に。問ふ。今說く所の義、是を正理と爲さば、餘處云何。頌自から答へて言く、「是の如く餘も亦知る」。是の如くとは、謂く、卽ち是の如く、初より所說の是の義決定す。「餘」とは謂く、所餘の種類の語中、亦然りと了知す。所謂此義決定を了知す。此の中の意は、謂く、般若波羅蜜多の中に於て、實の如く宣說して不顚倒の義成就す。眞實に一切の名性正に得べからずと了知す。此の語義を以て施設し表示す。復次に頌に言く、

此の無所得正し。　一切の名實に知る。
如義の性是の如し。　彼の聲を止遣せず。

此に「此の無所得」等と言ふは、謂く、如義の性、彼れ無所有不可得の故に、此の說を正しと爲す。此れ何所の說ぞ邪。頌自から指して言ふ、「一切の名」。問ふ。何人か能く「實に知る」。答ふ。卽ち一切智。實とは不顚倒の義、知とは謂く了知、卽ち眞實に知るが故に。頌に「彼の聲を止遣せず」と言ふは、謂く、若し聲の義二種ならば、彼の實義の性、說き得べからず。是の因を以ての故に、彼の聲を止せず。謂く、聞智所取の聲を以て、止すべからざるが故に。是の如く當に知るべし、決定最勝意樂、悲愍の所行、悉く障礙無し。是の如く、義の如く、名に於て分別散亂を止遣す。是の如き等の義、眞實意樂を說き已ること順の如し。有る論の頌に言く、

所有所有一切の名、　彼彼の諸法所說有り。
而も彼の所說實有に非ず。　卽ち一切法法性に同じ。
所有彼の名の名性空なり。　能名の名所有無し。
而も一切法本と名無し。　立つるに强名を以てして而も表示す。

別の說、後の般若波羅蜜多本母の敎中、和會別別なり。是の如きの法、此れ分別の聲、所有語言法句の義等、彼の分別の俱相。是の故に聲義の二種、自性和合に非ず。而して世尊最勝の意樂に非ず。亦他の意樂に非ず。若し分別工巧に於て造作せば、彼れ復外義に執著す。即ち諸の愚者動亂に安立す。是の如きの所行、而も此の中少義の得可き有るに非ず。外義執著、語義安立に非ざるを以て、諸の愚者動亂の門を開く。此の中、是の相を止遣し、所行隨轉す。即ち聲義に於て少しも得可き無し。彼れ是の如きを以て、名の如く分別して實有ならざるが故に。若し所說の事相に於て、名の如く分別せば、即ち意樂に非ず。彼の因に由るが故に。此の中一切、名の如く、想の如く、分別和合して實ならず。彼の所說の事相有るが故に。世尊最勝の意樂に非ず。何を以ての故に。若し名の如く義に於て分別せば、即ち名義に於て增廣する所有り。外の事中に於て實の能說所說の性無きが故に。是の如く名の如く義に於て分別散亂を止遣す。問ふ。何等か分別なり邪。答ふ。謂く、名分別。彼の名亦復說者有ること無し。是の故に頌に言く、

般若波羅蜜、　佛菩薩も亦然り。
此の所說唯名、　實義分別を離る

此に「般若波羅蜜」等と言ふは、謂く、名義を離る。是の如く、名の實義、自性分別、世尊說いて故に此に止遣すと言へり。何所の說なる邪。是の故に頌に言く、「般若波羅蜜、佛菩薩亦然り。」此れ既に唯だ名。般若波羅蜜多の中、何の處にか實の自性有りと說くべき。謂く、如來の是の如き言に由るが故に。名の聲を說くも亦自性無し。此の中所有各別に佛菩薩の名を表示す。當に知るべし、無二智中に於て、此れ止遣に非ず。此れ復何の因ぞ。是の故に頌に言く、

所有聲義止む。　此れ事の止遣に非ず。
是の如く餘も亦知る。　語中の義決定す。

色及び色の自性、　空なること先の所說の如し。
彼の自性の倶相　分別此に止遣す。

此に「先に先に說けるが如し」等と言ふは、說とは謂く言說、謂く、卽ち先に先に有る所の如き、彼の說何の說く所ぞや。故に上の頌に言く、「色及び色の自性、此の中空」なるが故に。彼の是の如きの說、彼の自性の倶相分別を遣る。上に「色」と言ふは、卽ち是れ色の自共二相、此の自共相及び色の自性、是等皆空なり。大種等の倶相の中に於て、分別增相を起す。彼の自性の倶相分別の對治。問ふ。此れと前の第三の止遣と倶相分別の行相云何。答ふ。前の所說の倶相分別散亂は、彼の中、色及び色の自性、二倶有の故に。此の中、止遣の倶相は、但だ其の自共相を止むるが故に。行相云何。所謂、此の中に堅强性等の相の差別而も有り。是を此の中の倶相と謂ふ。故に此に止遣す。是の如き分別と餘の諸の分別散亂亦復止遣す。復次に頌に言く、

不生不滅等、　所有諸法を觀ずる
佛の言なり。若し散異せば、　彼は差別分別なり。

此に「不生」等と言ふは、謂く卽ち是の如し。世尊、般若波羅蜜多中に於て、是の如きの說を作す。「諸法を觀ずるに、」不生不滅なり。是の故に是の如く言ふ。若し「散異」安處有らば、此れ卽ち「差別分別なり」。若し色等差別生滅の相を見れば、卽ち此れ是の如き色の自性差別分別なり。此の中當に離るべし。是れ卽ち差別分別散亂を止遣す。此れ是の如く說く。亦復後の諸の散亂を止遣す。所以に頌に言く、

虛假の名言等　彼の法若し分別せば
聲義の二、合に非ず、　彼れ自性の意に非ず。

此に「虛假」等と言ふは、卽ち般若波羅蜜多本母の敎中、和合表示す。謂く虛假の名、卽ち想分

ち二相有り。智實に二無し。問ふ。若し前に言ふが如く、智卽ち是れ明、世俗卽ち無明ならば、是の如き所說、豈此の中に自語相違に非ずや。明の自性世俗の有性と異るを以ての故に。答ふ。明の無二相は卽ち是れ勝義性、此れ是の如く說かば、正理成就す。若し世俗の所欲の領受は、古師仙人、此の語の中に於て亦異義有り。餘處の說の如し。此に復引かず。此の中後の如きは正理なり。頌に言く、「性無性の違等」。言ふ所の等とは卽ち攝集の義、唯前所說の如きには非ず。正理は分別智を離れ、散亂を對治す。此の有性無性の相違、當に知るべし、彼れ亦決定して對治す。謂く、所有種種性等の如し。無性の自性は分別智を離る。卽ち是れ對治なり。當に知るべし此の中、若くは性、若くは相、智力に由つて能く正義を顯示す。彼れ復云何。勝義諦中、諸色有ること無し。一性等生ず。若し復所有無ければ、卽ち種種性定んで見はる。言ふ所の「定んで」とは是れ決定の義、卽ち一性決定。明力を以ての故に是の如きの說を作す。云何が此の中、是の如きの說を作す。所以に頌に言く、

此の色を唯名と說く。　眞實自性無し。
彼の自性を分別し、　容受して卽ち當に止すべし。

此に「唯名」等と言ふは、謂く卽ち此の般若波羅蜜多中に、世尊の說きたまふ所の此の色は唯名なり。唯名とは此れ卽ち唯想、是の故に眞實勝義諦の中に、安立する所有り。然るに色蘊の相、無自性にして空、謂く、是の如きの因に由つて、卽ち「自性を分別し」、此に於て「容受す」。分別する所は、謂く、堅强性等の境の果の自性、是の故に此の分別の增相有り。乃はち是の如きの自性分別を起す。是の如き所有自性分別多種を容受するが故に、此れ皆止む。止とは謂く止遣。是の如き等の說皆自性分別の散亂を止む。此の般若波羅蜜多本母の中、復前義の爲に過失を遣除す。故に頌を說いて言く、

の性眞實に表示し、理の如く和合す。是の故に此に彼の一切識を説く。若し比量智而も此の中の和合の所成に非ずんば、何を以ての故に、彼の無二の相を以て、非有の二相所行を領受せむ。若し二相有つて彼の量成ぜずんば、彼の二相を以て而も對礙を爲す。兎角に執するが如し。豈に過失に非ずや。何を以ての故に能取の聲中に智相有りと説く。彼れ決定して性有ること無きを以ての故に。然るに彼の識、外の青等の諸相に於て而も對礙有るを以て、彼の一多の伺察、堪任性有り。眞實の意に非ず。而も亦識は勝義諦を離れて所取有るに非ざるが故に。彼の性等の樂取所有の智相體性を決定すること無し。此を能取と爲し、此を所取と爲す。此の説彼の能取の相無し。體及び業互に相樂取して決定性なるを以ての故に。智相に非ず。自受中能取の聲を説く。亦智相無し。互に相樂取して自理を決定す。是の如く所生の性の如きが故に、彼の是の如きの智相、自受の中に而も正しく安立す。其の所説の如く、能取所取の相を離る。此を説いて無二と爲す。卽ち智相。自受現量成就す。一一切眞實顯示和合に非ず。若し復彼の決定無分位性を執すれば、卽ち無二智相の中動亂する所有り。種子隨つて生じ、智相に隨はず。無二所生を對現す。若し決定無二の相を執せば、此の中還た執著分別を成ず。此れ智相に非ず。同法の中、而も成就を得。是の故に所有一切の義中、而も毀謗を成ず。當に知るべし、世俗及び勝義性、是の如き無所有の義を決定す。此の中義を顯明せば、佛所説の智の如き卽ち是れ明。世俗卽ち無明、若くは明、若くは無明智、如實に別異の種類を知らば、亦所生無し。是の故に彼等如實不顚倒の相、卽ち智明の相、而も對治と爲る。當に決定を知るべし。若し彼の勝義諦の中、決定して自性無くんば、虛空雲の如く、彼れ對治に非ず。彼の所有理の如く對治するを以て、眞實の所行相應を得るが故に。熱の自性は冷物を對治とするが如く、此の不實の義、無明を表示すること亦然り。如實の義を以て説かば、此の無二智の自性、因中に其の多種有り。若し此の中決定して彼の世俗相、有性を計する者は、此れ説くべからず所行の中に於て卽

卷の第四

復次に此の中、世尊所說の正理を顯示す。彼の頌に言ふが如し。

如理の言淨性、　亦然り、得べからず。
性無性の違等、　種種性定んで見はる。

此に「如理の言」等と云ふは、謂く隨染分別、智を以て諸有の散亂を對治す。是の故に如理の言、世尊般若波羅蜜多中に於て正說す。頌に淨性と言ふは、謂く即ち如理の自性、清淨光明、而も能く彼の不淸淨諸有の散亂を對治す。頌に亦然りと言ふは、即ち聚集の義、此の一性等の性所有の聚集の量得べからず。「如理の言」は即ち如量の義、體即ち無二の智、彼れ能く對治す。此を決定と爲す。問ふ。此れ復何等の量不可得なる。答ふ。此れ比量不可得を說くが故に。所有自受、他相の所增に非ず。樂等の自受の如し。若し論の安立を言はゞ、即ち如實の智、自性の所得相違す。他相增有らば、自受成ぜず。對治量の故に。此の中彼の所知の靑等の相に非ず。一多性異り、分別有るが故に。是の故に決定觀察す。自受成就の行ずる所の悲愍、即ち外門所照の現性に非ず。他相の爲に有增動亂せられず。何を以ての故に。所有靑等の諸相、勝義諦の中、實性無きが故に。此れ唯智有るもの如實に了知す。此れ過失無し。若し外事に於て其の自受の如くならば、是の如きの義を以て、安立する所有る、即ち義の如くならず。此れ過失有り。而も決定して見邊成就に非ず。何を以ての故に。樂等の受、外の諸處に於て性有ること無きが故に。亦異處に非ず。伺察する所有り。此の中樂等の受は即ち樂等の自性受、樂等の相受に非ず。此等の所說、即ち能取所取二相の智を離る。此れ別異の所有に非ず。問ふ。若し今彼の能取所取の識無くんば、云何が後に於て彼の識性有らむ。答ふ。此の中但だ能取所取の相を離る。彼の後識の相有りと雖も、而も語言の表示に非ず。彼の有

來最上の眞實了知の故に。般若波羅蜜多本母中に於て、實の如くにして說く。復次に當に知るべし、此の般若波羅蜜多中に說く所の十種の分別散亂、皆無分別智を以て而も對治を爲す。問ふ。若し是の如くんば何が故に總攝して但だ二種分別對治を說く。豈に過失に非ずや。答ふ。此れ亦過無し。謂く、卽ち是の如き此の二の中に於て、而も能く隱攝し、亦能く餘の諸の分別を止遣す。是の故に此の意二種を總攝す。又問ふ。若し此の二種已に能く餘の分別を隱攝せば、何が故に世尊復多種分別散亂を說くや。答ふ。此の中の意は、但だ衆生の意の差別の爲の故に。義自から和合す。且らく斯の論を止めむ。

佛母般若波羅蜜多圓集要義釋論卷第三

れ空と說く。空を離れて少色の得べき有ること無し。無所有を以ての故に。是の如きの所說悉く種種性分別散亂を止遣せんが爲なり。問ふ、此れ復何に因つて空を離れて色無き。所以に頌に言く、

此の無實の所現、　彼の無明の所起、
此の無實能く表す。　彼れ無明を說くが故に。

言ふ所の「此の無實の所現」等とは、無實とは、謂く所有無し。此の出現する所、而も對礙と爲る。頌に「彼の無明の所起」と言ふは、謂く、所有の色、彼の色の自性、執著する所有る、無明の起す所、執著とは蓋障の義、若し是の如きの不實所現の中に於て、有性に取著するは、是れを蓋障と爲す。是の故に此の中「增上の意、空色の異らず」と說く。問ふ、所有諸の異生の自性清淨智、云何が彼の中無明の言を說く。是の故に頌文此の疑を破して言く、「此の無實能く表す、彼れ無明を說くが故に」。無實とは謂く、不實の句義、表は卽ち表了、能とは謂く力能、無實爲るが故に。能く表する所に非ず。此の中の總意、無明を說くが故に勝義諦に非ず。復次に頌に言く、

此れ是の如く色を說くは　般若波羅蜜なり。
無二の二是の如きの　二分別を對治す。

言ふ所の「此れ是の如く色を說くは般若波羅蜜」等とは、謂く、此の般若波羅蜜多所說の色の義。卽ち自性清淨智、而も能く能取所取隱覆性を遣除するが故に。般若中說く所の者、卽ち慧力の故に。問ふ、若し無明相分別起現せんに、彼何を以てか對治せむ。頌自から答へて言く、「無二の二是の如きの二分別を對治す」。此の中の意は、若し彼の是の如き二有の所現、卽ち勝義相中の無二の自性清淨の智を以て而も對治を爲す。卽ち彼の有性無性の二分別相を對治す。復聞思修の慧和合に由つて對治す。是の如く、彼の二相を對治し已つて、此の是の如きの義、是れ卽ち眞實に理の如く對治す。曠野中、其の陽焰を見て妄りに水想を生ずるが如し。其の義應に知るべし。此の中是の如き如

蜜多本母中の說。若し色空ならば卽ち色に非ず。此の是の如き和合の所說を作すは、止遣せしめんが爲なり。一性分別、決定の語義なり。所以に頌に言く、

色空和合に非ず。　彼れ互に相違して礙す。
色も無く空の名も無く、　色相自から和合す。

此に「色空和合に非ず」と言ふは、謂く色と空と和合せざるが故に。不和合とは不相應の義、問ふ、何が故に不和合なる。頌自から答へて言く、「彼互に相違して礙す。」謂く、色空の二互に相害するが故に。相違の行相、此の中云何。頌に言く、「色も無く空の名も無し」。謂く、若し色無くんば卽ち空無し。自性無きを以ての故に。譬へば虛空の蓮華の如し。其の義應に知るべし。頌に「名」と言ふは、卽ち印可の義、此に自性無しと說くを印可するが故に。頌に「色相自から和合す」と言ふは、謂く、靑黃赤白衆色の相、而も自から和合す。此の中總意は、彼の有自性及び無自性、應に知るべし、二種の決定相違す。復次に頌に言く、

此の一性分別、　種種性を對治す。
空は彼の色に異らず。　彼の空何の有る所ぞ。

言ふ所の「此の一性分別」等とは「此の」とは因の義、是の因に由るが故に。謂く、卽ち對治止遣一性分別を表示す。是の故に此の般若波羅蜜多敎中の所說、若くは色空卽ち色に非ず。此の中是の如く一性分別を止遣せしめんが爲の故に。所以に頌に「空は彼の色に異らず、彼の空何の有る所ぞ」と言へり。上の頌に種種性を對治すと言ふが如きは、謂く、卽ち種種性中に分別する所有るを止遣す。是の故に此の般若波羅蜜多本母中、是の如きの說を作す。所謂、空は色に異らず。此の是の如きの語云何が作す所。空礙の色を以ての故に。問ふ、何の所止ぞや。答ふ、種種種性分別を止遣す。此れ復何の因ぞ。所謂、彼の空は色蘊の相に異らず。色何の所有ぞ。是の故に此に色卽ち是

彼の無明を因と爲して所作するに由つて、我、我所を起す。我とは謂く自性、我所とは謂く自色。自色覆ふを以ての故に、別異所現あり。故に二相を起す。是の相二無く、亦實有ること無し。此れ亦何以。頌に幻の如しと言ふ。是の如幻無自性の中に於て、實物の性を取る。而も彼の所取と無二智と、而も對礙を爲す。問ふ、若し此の無二智の自性と異生智の自性と平等なりと說かば、何が故に異生の識中出現する所無き。答ふ、能取所取顚倒の性に隱覆せらるゝを以ての故に。然るに如來の識中、一切時に於て、常に出現する所、清淨性なるを以ての故に。問ふ、若し諸の異生清淨性中に而も果有ること無く、眞實出現せば、卽ち一切の時、無明堅著、其れ復云何。是の故に頌文、此の疑を破して言く、「果を夢の如く棄捨す」。棄捨とは卽ち取著せざるの義。此の中の意は、所有自性清淨智の中、果性無きに非ず。但だ無明に隱覆せらるゝが爲の故に、聞思等の慧の如く、和合して所作す。其の所得の果、而も實義無し。此の中亦然り。夢中の果の覺むれば實義無く、相の表すべき無きが如し。和合して作り所得有るに似たるも、得已れば棄捨す。此の說決定、是を正理と爲す。復次に頌に言く、

　無二に別異說、　　果等定んで毀謗。
　毀謗、諸分別、　　彼の毀謗、此の說。

此に「無二に別異說」等と言ふは、謂く、諸の愚夫無二智の中に於て別異の所現、顚倒の見を起し、二種境界の相に著す。頌に「果等定んで毀謗」と言ふは、果等とは、謂く、果等の境界、眞如の相中に於て、決定して毀謗す。今此に止遣す。頌に「毀謗諸分別」と言ふは、謂く、毀謗の故に諸の分別を起す。而も彼の毀謗、諸分別等、今悉く止遣す。頌に「此の說」と言ふは、止遣の爲の故に。今此に說いて不空故空と言ふは、彼の虛假の說を棄捨せしめんが爲なり。應に知るべし、此の中色は卽ち是れ空なり。復次に此の中一性分別、起現する所有り。此れ復云何。謂く、般若波羅

如しと說く」。頌に「幻喩等の言等は此れ依他性を說く」と言ふは、上に等と言ふは夢等を等攝す。復等と言ふは、卽ち是れ因の義、說とは謂く、言說、若し幻喩等の言を說くは卽ち是れ彼の依他起性を說く。此の依他性、佛の所說なるが故に。依他とは謂く、他に依屬するが故に。依他と名く。此に依他とは、卽ち無明の自體、此等の分位依止する所有り。卽ち此の如幻の說、佛も亦然り。是の故に應に知るべし、一切種、一切無性に非ず。自性清淨なるを以ての故に。彼等の幻喩、佛等の所說、一切皆然り。是の如き等の說、若し毀謗分別有らば、彼れ如來藏に非ず。一切衆生無二智に非ず。何を以ての故に。一切有中に於て、毀謗分別するが故に。是の如きに由るが故に、所成の義に於て、而も悉く成ぜず。亦和合せず。問ふ、若し勝義諦中、無二の智、卽ち是れ如來ならば、云何が此の中異生智を說くや。此の義を破せんが爲に、所以に頌に言く、

若し諸の異生智、　彼の自性清淨、
故に彼の佛言を說く。　菩薩も亦佛の如し。

此に「諸の異生智彼の自性清淨」と言ふは、卽ち諸の異生、本性清淨、體は卽ち自性清淨の智。云ふ所の「彼の佛言を說く」とは、謂く、彼の佛の如實無二の智を說くが故に。此の異生智を說く。亦復同等。問ふ、若し所行相中、是の如く說くを以て、其れ復如何。頌自から答へて言く、「菩薩亦佛の如し」。無二智所生の是の如きの義を以ての故に、是の故に菩薩亦卽ち佛の如し。此の因に由るが故に、佛及び菩薩、說に別異無し。問ふ、若くは異生、若くは諸佛、如實智中に於て所生有らば、云何が前に無所得と言ふ邪。頌自から通じて言く、

自性を自色覆ふ　彼の無明因の作なり。
幻の如く別異に現ず。　果を夢の如く棄捨す。

此に「自性を自色覆ふ彼の無明因の作」と言ふは、謂く、諸の異生の和合の自識、自性二無し。

說云何。所謂不空故空とは空性離の故に。言ふ所の「諸の毀謗分別」とは若し此の不空故空中に於て、空の自性を取らば、是れ卽ち毀謗分別、今悉く止遣す。言ふ所の「一切の說皆止む」とは、「一切」とは謂く、一切處、一切種類、說いて言說と謂ふ。謂く佛世尊但だ此中に遍計分別を止遣するのみならず。一切處に於て空の言を執するもの、皆悉く止遣す。復次に頌に言く、

幻の如く亦然り、佛、　彼れ、夢の如く亦然り。
是の如く次の如く知らば　智の語邊決定す。

此に「幻の如く亦然り、佛彼夢の如く亦然り」等とは當に知るべし此の說亦是れ毀謗分別を止遣す。「幻の如し」とは幻喩の法を以ての故に。幻の如しと名く。何者か幻の如くなる。謂く卽ち「佛」なるが故に。「亦然り」とは相續して義を說く。「夢の如く亦然り」とは、謂く卽ち彼の佛亦復夢の如し。此の中若し佛の言を說く有らば、當に知るべし、皆是れ無二智を說く。而も彼の自性異生等と相續して有の故に。但だ無明幻等の覆ふ所と爲るが故に。而も諸の愚者乃ち自相に於て隱れて現ぜず。頌に「是の如く次の如く知らば智の語邊決定す」とは、謂く、是の如きの所說、其の次第の如く、理の如く而も知る。知とは謂く了知、問ふ、何人か能く知る。頌答へて言く、「智」。智とは卽ち智者。問ふ、何等か是れ語邊決定なる。答ふ、所謂一切法幻の如きなり。問ふ、此の中、毀謗分別を止遣するに、是の如く知り已りて後復何の開示する所か有る。所以に頌に言く、

諸の同等の所作　此に佛を幻の如しと說く。
幻喩等の言等　此を依他性と說く。

此に「諸の同等の所作此に佛を幻の如しと說く」と言ふは「同所作」とは、謂く、其の幻に同じ。此の中の意は、若し一切處無二智中、所生無しとは彼の諸の同等の所作の說と相應せず。何の所以ぞや。諸の幻等皆性有るを以ての故に。此の中是の如く佛亦性有り。是の故に頌に言く、「佛を幻の

問ふ、而も彼の所說、何等か是れ其の分限なる。頌自から答へて言く、「了畢に至るまで」と。謂く此の般若波羅蜜多教の中、初より末に至るまで、而も悉く周畢す。是を分限と爲す。頌に「遍計性を止遣す」と言ふは、謂く此の所說の佛及び菩提不見等の義。皆是れ止遣す。有相分別遍計性の故に。問ふて云く、云何が此の中、但だ遍計性を止め、圓成を止めざる邪。頌自から通じて言く、

自性彼の色を空ず。　倶相何の有る所ぞ。
此の別異の語中、　了知し已れば彼れ止む。

此れ「自性」等と言ふは、「自性」とは卽ち本性の義、「彼の色を空ず」とは、謂く色自性空。若し彼の智相、色有りと見るが故に、卽ち所取有り。是の如く、一切色を有實と計せば、彼れ對礙爲り。倶相の中に於て而も增相有り。還つて分別所分別の相を成ず。其れ云何が有る。所以に頌に言く、「倶相何の有る所ぞ。」「倶相」とは卽ち二倶の相、謂く、色の自性、勝義諦の中に於て、所取分位無し。譬へば人の角の如し。其の義應に知るべし。是の故に但だ遍計を止め、圓成を止めず。何を以ての故に。勝義諦の中、非有性の故に。頌に言く、「此の別異の語中、了知し已れば彼止む」とは「此の」とは因の義、「了知」とは解了の義、謂く、彼の別異の語中に於て、善く了知し已れば卽ち能く遠離す。言ふ所の「彼止む」とは、「止」とは謂く止遣、謂く、卽ち彼の所有の遍計を止む。此れ是の如き等當に知るべし。皆是れ倶相分別散亂を止遣す。後當に毀謗分別散亂を止遣すべし。彼の頌に言ふが如し。

此の不空故空、　是の如きの語の所說、
諸の毀謗分別　一切の說皆止む。

言ふ所の「此の不空故空」等とは、謂く佛世尊、般若波羅蜜多本母中に於て、是の如き不空故空を宣說す。言ふ所の「是の如きの語の所說」とは、謂く、卽ち此の是の如きの語を說くが故に。所

彼の語、今此の中に於て略して其の義を指さむ。彼の經に云ふが如し。「菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多出生等の如し」。出とは卽ち出離の義、又出生の義、或は無上道を得るの義、要を以て之を言はば、或は種種の義の界爲り。此れ是の如きの說、此に由つて一切義を出生するが故に。此の中復能く稱讃等の事を出生す。謂く、佛菩薩等、所有稱讃。彼の稱讃の相、前に已に說くが如し。又經に言ふが如し。「須菩提、汝の樂說に隨ひ、諸の菩薩の般若波羅蜜多、應に當に諸の境界の事を發起すべし」。言ふ所の樂說とは、謂く、樂說の慧を得、及び樂說の光明を得、故に樂說と名く。此の是の如きの一段の經文、卽ち依他起性の所說の事相。若し彼の經の如き、須菩提より乃至出生等の全段の經文、其の中若し彼の實義を說く有らば、卽ち是れ彼の遍計性に依つて說く。又經に言ふが如し。「菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多出生等の如し」。此の一段の經文、卽ち圓成實性所說の事相。此の中の總意、此の因に由るが故に、三種の義に依つて般若波羅蜜多を宣說す。是の故に說く所、卽有り、離有り。復次に頌に言く、

彼の佛亦菩提、　說者等を見ず。
了畢に至るまで此れを　遍計性を止遣すと知る。

此に「彼」とは謂く、卽ち彼の因、此の中云何。謂く、諸の愚者、般若波羅蜜多の教中に於て、句義に取著して實と執す。能知所知、諸の遍計を起す。故に、此を止遣す。問ふ、何の法か能く止むる邪。答ふ、止法應に知るべし。問ふ何人か是れ說者なる。頌自から答へて言く、彼の佛亦菩提、「說者等を見ず」。此の中云何、謂く、所應の如く句義を安立す。能く覺了する者は卽ち是れ「佛」なるが故に。「菩提」とは、謂く、煩惱所知二障の智を離る。等とは卽ち菩薩聲聞を等攝す。言ふ所の「說者」は卽ち是れ佛等、謂く、若し蘊等の自性中に於て顚倒遍計有らば、佛爲に彼の止遣の法を說くが故に。此の中是の如く卽ち彼の說者有り。頌に「見ず」と言ふは、理の如く應に知るべし。

し。復次に此の中若し止門所有の行相を說かば、卽ち是れ彼の遍計の性を說く。而も別異無し。若し遍計性を說かば、卽ち是れ所說の止門。何を以ての故に。此の法無の故に。問ふ、圓成實性の中、云何が彼の言說門有るべき。彼の法中性有ること無きを以ての故に。是の如く、其の所生の分位に隨つて、卽ち彼の是の如きの所說の分位、而も亦實無し。所以に頌に言く、

十分別散亂、　對治次の如く說く。
此の三種を知り已れば　若くは卽、若くは離說す。

此に「十分別散亂、對治次の如く說く」等と言ふは、謂く、卽ち所有の十種分別散亂、今此に次第して彼の對治を說く。卽ち相違對治及び能所對治。言ふ所の「三種」とは、謂く、遍計、依他、圓成實性、是の如きの三種、其の次第の如し。「知り已れば」とは謂く了知し已る。言ふ所の「若くは卽若くは離說す」とは、謂く、般若波羅蜜多の教中、卽有り、離有るが故に。此の中總意は若し是の如く了知し已れば、彼の遍計依他等の所有の諸の事相、或は卽、或は離、彼の一一の相、其の所說の如く顯明開示す。問ふ、此の中云何が若くは卽、若くは離、遍計等を說く。所以に頌に言く、

初語の如き圓成、　依他、及び遍計、
無相分別色　彼の散亂止遣す。

此に「初語の如き」等と言ふは、「如き」とは法を指す。謂く、此の是の如き八千頌般若教中の最初の語言。彼の經に云ふが如し。「須菩提、汝の樂說に隨つて諸の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多、應に當に發起すべし。菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多出生の如し等」、此の是の如きの語、卽ち最初の語なり。此の語彼の圓成依他遍計三性に依て說く。所說の相の如く、卽ち圓成の性等、自の色相無に非ず。若し是の如きの自の色相中に於て、色無相分別散亂を起す者、世尊此に於て皆悉く止遣す。問ふ、復次に此の義云何が了知せむ。答ふ、彼の最初の語中の如き、三種の義に依つて說く。所有

巻の第三

言ふ所の*四種清淨とは一には自性清淨、二には離垢清淨、三には所緣清淨、四には平等清淨なり。初に(一)自性清淨とは卽ち是れ無差別無二の智。行相云何自性とは謂く本性虚假ならず。卽ち眞我の性。自性中に於て是の如きの相有り。摩尼寶の映現和合するが如し。佛の言ふ所の如し。一切衆生、卽ち如來藏、彼の一切法、善逝等と而も自性無し。此の是の如く說くは卽ち自性清淨なり。二に(二)離垢清淨とは、離垢とは卽ち諸の垢染を離る。清淨の義は已に前に釋するが如し。行相云何。謂く所行は諸有を對治し、觀力隨つて相應無二の智を生ず。此の所作已に世尊の增上の意樂事等を所有す。卽ち彼の實際眞如法界此れ是の如く說くは卽ち離垢清淨なり。三に(三)所緣清淨とは所緣とは謂く、卽ち所有普盡般若波羅蜜多等の義、一切所緣境界の作用なり。又彼の所得の性、或は所成の性、亦是れ所緣、此の所緣中に於て清淨を得。清淨の義、已に前に釋するが如し。此れ是の如く說くは卽ち所緣清淨なり。四に(四)平等清淨とは、平等とは齊等無差の義、卽ち是れ平等微妙、清淨法界、大法光明、彼の平等性を乃はち平等と名く。是の平等中に於て而も清淨を得。清淨の義、已に前に釋するが如し。此れ是の如く說くは卽ち平等清淨なり。是の如く總じて四種清淨を說く。卽ち圓成自性なり。是の故に此の般若波羅蜜多諸有の行相、是の如きの言義、此の是の如き等の和合を作し已りて虚假法を離る。所以に頌に、「般若波羅蜜」と言ふ。此の中云何。謂く、卽ち所有の般若波羅蜜多、諸有の所說言義、自性とは謂く、佛世尊、一切是の如く、當に知るべし、皆三種の相に依つて說く。依他等の自性を離れて、別に所成の義有るに非ず。此の中所說の行相云何。謂く、若し幻喩等の見邊を說き已れば、卽ち是れ彼の依他起性を說く。而も別異無し。若し依他起性を說かば、卽ち是れ幻喩等の見邊。何を以ての故に。復法有ること無きが故に。是の如く餘處亦然り應に知るべ

* 四種清淨別說。

(一) 自性清淨。

(二) 離垢清淨。

(三) 所緣清淨。

(四) 平等清淨。

はち清淨と名く。

佛母般若波羅蜜多圓集要義釋論卷第二

爲す。圓成實性とは、謂く、即ち無二の智。即ち是れ圓成實性。問ふ。云何が說いて三種の依止と爲す。所以に頌に言く。

此等の說句を無すれば　　一切の遍計止む。
幻喩等の見邊、　　此れを依他性と說く。

此に「此等の說句を無すれば一切遍計止む」等と言ふは、無とは謂く無所有、此の句とは、謂く、是の如き等の諸の所說の句、等とは謂く其の說法者を等す。彼の止とは無を言ふ。問ふ。此の中の行相、其れ復云何。故に頌答へて言ふ。「一切遍計止む。」「一切」とは即ち普盡の義。「遍計」とは、謂く、虛妄、巧異、執著、造作なり。止とは謂く止遣、此れ是の如き等の所說の意は、謂く、若し一切說を聞く者有らば、止遣の言を說く。智者應に當に畢竟して了知すべし。一切皆是れ止遣す。遍計は有相執著。頌に「幻喩等見邊此れを依他性と說く等」と云ふは、幻とは謂く帝網、「等」とは乾闥婆城等の諸の幻法を等攝す。「幻」は他に由るの假法、所成有るが故に。今彼の幻を取つて此の法を喩ふるが故に。乃ち幻喩と名く。「見邊」とは、謂く、彼の喩に由つて是の如きの法を曉すが故に、見邊と名く。此の中の意は、謂く、若し幻喩等の諸の見邊の義を說くを聞くもの有らんに、智者當に知るべし、此れ即ち是れ依他起性を說く。此の中當に知るべし、彼の幻等に由つて已に邊を見るが故に。是の故に世尊宣說する所有り。問ふ彼の依他の自性云何が了知せむ。圓成の自性云何が事を說く。所以に頌に言く、

四種の清淨有り、　　圓成實性と說く。
般若波羅蜜も　　佛に別異の說無し。

此に「四種の清淨有り圓成實性と說く」等と言ふは、謂く、四種の清淨を以て所有圓成自性を表示す。四種とは即ち四種類有り。清淨とは無染の義、謂く、彼の四種の淨を得るに由るが故に、乃

所說を攝す」とは、「此の」とは是の如きの義、「普ねく說を攝す」とは卽ち作者、普攝して說く。此の普攝說は是れ勝意樂、當に知るべし此等の般若波羅蜜多の義、是の如く普攝して說く。是を決定と爲す。卽ち彼れ是の如く究竟を獲得す。問ふ、何の義を以ての故に此の說を作す。頌自から答へて言く、「一切智因に乘じ」と。此の是の如きの義を理の如く顯示す。「乘」とは謂く乘馭、一切は普盡の義、「智因」とは了別智を以て因と爲すが故に。問ふ何人か乘馭するや。頌答へて言く、「慧」。「慧」とは大慧、卽ち是れ佛なるが故に。問ふ、何の說く所ぞや。頌自から答へて言く、「諸相を分別す」。「相」とは所謂普集の作用、故に名けて相と爲す。是の相對礙無し。問ふ是れ何等の相、頌に「分別」と言ふ。卽ち諸の行相を分別顯示するが故に。實性を說くに非ず。此の是の如き等の所說の義、實の如く觀察するに、乃至極微塵量の外義有ること無し。自性成立するを得べし。是の故に世尊彼の智聚に乘じ、所有一切の作用行相を開示分別す。問ふ。何の義を得るが故に乃ち能く是の如き。所以(ゆゑ)に頌に言く、

般若波羅蜜　　三種の依止を說く。
謂く遍計、依他、　　及び圓成實性なり。

此に「般若波羅蜜」等と言ふは、當に知るべし。般若波羅蜜多に二種の法有り。一には勝上、二には所行。勝上とは煩惱所知の二障を離るるの智、所行とは謂く、名句文言說の相。彼の勝上とは卽ち般若波羅蜜多自性の所說。彼の所行とは卽ち說法言義、是れ自性の作用なり。問ふ。其の作用する所此の中云何。頌自から答へて言く、「三種の依止を說く」。「三種の依止」とは此れ復云何。頌に言ふ所の如し。「謂く、遍計、依他、及び圓成實性」。遍計とは謂く、諸の愚夫無二の清淨智の中に於て、諸相を遍計し、執著對礙す。此を說いて名けて遍計と爲す。依他性とは、謂く、無二智、自性安住す。無明種子の二は對礙有り。而も彼の無明は依他起の故に、此を卽ち說いて依他起性と

や。頌自から答へて言く、世尊此に止遣す。問ふ何の止する所ぞや。所以に頌に言く、

若し彼の名を見ざれば　　境界行亦然り。
彼の蘊一切處に　　皆菩薩を見ず。

此に「若し彼の名を見ざれば等」と言ふは、「若」とは謂く若有、「見ざれば」とは即ち不可得。問ふ。何法を見ざるや。答ふ。此の菩薩の名、而も見るべからず。若し是の如きの名を說かば彼の說得べからず。且らく此の說を止む。頌に「境界」と言ふは、實の如く當に知るべし。唯菩薩の名の得べからざるのみに非ず。諸境界等も亦得べからず。「境界」とは、謂く、所行の境界、是れ諸菩薩所行の般若波羅蜜多、是の如きの道相。「行亦然り」とは、「行」とは謂く普遍の諸行。即ち所修の所行。而も此の諸行亦得べからず。言ふ所の「彼の蘊一切處に」とは蘊とは謂く色受等、「一切處」とは一切處及び一切種に遍するを謂ふ。此の中の意は實の如く當に知るべし。清淨の妙慧を以て是に於て一切處に菩薩の相を求むるに、了し得べからず。是の因を以ての故に、菩薩見るべからず。是の故に頌に言く、「皆菩薩を見ず。」此の中、是の如き所說の意は、但だ愚者を遣る。佛世尊の無染智の中に於て、實名、及び境界等有りと執すれば、彼れ得べからず。正了知に非ず。而も菩薩の相、圓成實性中に於て亦捨離すべからず。若し捨離の相を取らば、彼の無相分別還つて復生起せむ。此の義略して說くが故に。有が問ふて言く、若し今是の如く實性中に於て菩薩無くんば、豈前言相違有るに非ずや。頌自ら通じて言く、

此は遍計を止遣す　　普ねく此の所說を攝す。
一切智因に乘じ　　慧諸相を分別す。

此に「遍計を止遣す」等と言ふは、謂く諸の有情所起の顚倒の見。行相云何、謂く、蘊處界中に於て實性有りと執す。今彼を止むるが故に。清淨妙智の中に於て而も所止有らず。頌に「普ねく此の

此に「因の言は如是ならず」等と云ふは、「因」とは道理の義、「如是ならず」とは此の道理の言成就の言に非ず。何の所以なりや。頌に自から釋して言く、「此れ唯だ事相を說く」。「事」とは謂く、所作事有り。所修事有り。說いて言說と謂ふ。此の中是の如きの義、唯だ事相を說くが故に。若し爾らば、卽ち今道理に和合するに、義成就せず。云何が能く諸の有智者をして中に於て觀察して歡喜を生ずるや。故に頌に通じて言く、「梵網等の經中、一切理の如きを知る」。此の中如何。卽ち梵網等の所有の諸經。且らく「等」と言ふは、雲輪等の經を等攝す。彼の諸經中、皆理の如く說く。何人の所說ぞ。謂く佛世尊。一切處に於て、如實の理に依つて、自から是の如く說く。是の如く說くとは、自義成就す。言ふ所の「知」とは、知は謂く了知、此の說理の如く、量の如しと了知す。若し是の如く眞實語義を說かば、是れ決定の義。此れ復云何。若し前に言ふが如き道理の說は、能く無相分別を除遣すと雖も、彼の有相分別、旋つて卽ち生ず。是の故に今當に應の如く彼の相違門を開示すべし。其の頌に言ふが如し。

菩薩我を見ず。　而も此等廣大なり。
世尊此に　有相分別の亂を止遣す。

此に「菩薩我を見ず、而も此等廣大なり」とは、謂く、最初遍計性を起すに由つて、菩薩の相に於て而も取著を生ず。彼の所取の相、實性の中に於て、我見るべからず、亦得べからず。「我」とは己の義、「此等廣大」とは、「廣大」は卽ち包廣の義、此の菩薩は其の義廣大、是の故に菩薩、我見るべからず、亦得べからず。般若波羅蜜多亦見るべからず。得べからず。是の如き等の所說、有相分別の散亂を止遣せしめんが爲なり。頌に「有相分別の亂」と言ふは、「相」とは謂く色等の相、「亂」とは卽ち動亂、「分別」とは謂く、色等の相中に於て分別する所有り。不如義の中に於て如義性を取著す。此の是の如き等の疑惑動亂、勝義諦中に於て實性有ること無し。問ふ何人か止遣する

に世俗の諸蘊を說いて了知使令む。斷見を除かんが爲に、彼の無相分別を止む。實性を說くに非ず。此の八千頌般若波羅蜜多の敎中、是の如きの義を說く。卽ち諸の般若波羅蜜多本母の義理相應す。

復次に頌に言く、

此の八千頌等　　初語より次第して
了畢に至るまで皆止、　　無相分別を說く。

此に「八千頌等」と言ふは、「此の」とは是の如くの義、是の如きの八千頌本母の所說の故に。「等」とは十萬頌を等攝す。言ふ所の「初語より次第して」とは、卽ち初語の所成、謂く、經の初所起の語言より、行相云何。經に言ふが如し。「須菩提、汝の樂說に隨つて、諸の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多、應に當に發起すべし。菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多出生等の如し」。頌に「了畢に至るまで皆止」と言ふは、謂く、經の初より乃至經の末まで、中に於て所說悉く周竟するが故に。頌に「皆止」と言ふは、「止」は謂く止遣、卽ち其中に於て彼の無相分別、毀謗の言を止む。頌に「無相分別を說く」と言ふは、謂く色無相分別、彼れ色の無相を分別するを以ての故に。而も空に墮す。有色を斷ずるを以ての故に。言ふ所の「說」とは、其の義云何。「說」とは謂く、法に依つて說く。此に法に依つて說くとは、事相を說くが故に。行相云何。謂く、初の語言に由つて發起を爲す。乃至了畢まで、其の中說く所の多種の語言、彼の言中に於て別異の發起の行相を成立す。謂く諸の菩薩及び帝釋天主上首等、此の是の如き等、當に知るべし皆是れ其の斷見を止む。問ふ。若し此等所說の語言の分位、發起する所有らば、復何等の道理有りてか法に依つて說いて無相分別、毀謗の言を遣除する。故に頌に破して言く、

因の言は如是ならず。　　此れ唯だ事相を說く。
梵網等の經中に　　一切理の如きを知る。

般若教中に於て　　　彼れ圓集の所說。

此に「彼の止息」等と言ふは、「彼」とは卽ち彼の十種分別散亂、止息とは謂く、止遣。問ふ、何の處の止なるや。頌自から答へて言く、般若教中。謂く十萬般若波羅蜜多等の教中、一切皆是の如くの止の言を說く。問ふ、彼の何法を止む。頌自から答へて言く、「互相に能所對治と爲る」。「互相に」とは此彼更互の義、「能所對治」とは、謂く、有相無相互に能所對治の行相と爲る。云何。謂く、所有有相の如きは能對治爲り。卽ち無相を所對治と爲す。若し無相能對治爲れば、卽ち有相を所對治と爲す。此れ是の如き等是を行相と爲す。問ふ、彼の般若教中、當に如何が說く。頌自から答へて言く、「彼の圓集の所說」。謂く、此の佛母般若波羅蜜多教中、是の如き圓集總聚の要略、此の十種分別散亂を攝するを說いて言說と謂ふ。此れ是の如く說く、是れ卽ち如來。是の如き最上眞實の了知、圓集、普ねく佛母般若波羅蜜多中に攝す、是の如く宣說す。問ふ、所說云何。是の故に頌に言く、

若し菩薩有りて此の　　無相分別を有せむ。
散亂止息師　　　彼の世俗の蘊を說く。

此に「菩薩有りて此の無相分別を有せむ」等とは菩提及び薩埵、是れ卽ち菩提薩埵、「有」とは謂く無ならず。此れ是の如く說いて卽ち此の「無相分別を有す」と謂ふ。「無相分別」とは、謂く色無相分別。彼れ是の如く散亂、卽ち擬の所作性。問ふ、此の散亂有る、其れ復云何。頌答へて言く、「止息」。問ふ、何人か能く止むるや。頌答へて「師」と言ふ。「師」とは謂く、如來大師、善能く諸の煩惱の寃を調伏す。又能く惡趣等の怖を救度す。故に名けて「師」と爲す。頌に「彼の世俗蘊を說く」とは、「世俗」とは謂く世間、其の「世俗蘊」とは謂く色受等。彼の蘊を說くとは了知せしむるを謂ふ。此の蘊有るが故に、無相分別散亂を除遣す。世尊新發意の菩薩等を悲愍す。是の故に爲

清淨諸佛の法、　　菩薩亦成就す。
人及び一切法　　此の中性空無し。
無性中性有り　　彼の性亦復空なり。

復次に此の中今の說は十種分別散亂法を除遣す。當に知るべし、此れ即ち起修の行相なり。問ふ、何等か是れ彼の十種分別散亂なる。復云何が止む。所以に頌に言く、

十種心散亂、　　心散亂、異處、
愚相應を得ず。　　無二の智成ぜず。

此に「十種の心散亂」等と言ふは、謂く、新發意の菩薩等、*十種の分別散亂有り。所謂、無相分別散亂、有相分別散亂、俱相分別散亂、毀謗分別散亂、一性分別散亂、種種性分別散亂、自性分別散亂、差別分別散亂、如名於義分別散亂、如義於名分別散亂、此の是の如き等の十種の分別、心をして散亂せしむ。此に心心所異處に散亂す。散亂とは、謂く、散異動亂の故に散亂と名く。言ふ所の「異處」とは、謂く別異處、分位等有り。動亂に引かる。是の故に彼の「心相應を得ず」。問ふ。何人か相應を得ざるや。頌自から答へて言く、「愚相應するを得ず」と。「愚」とは即ち愚夫異生、「愚」とは、謂く、若くは損、若くは益、及び眞實法、悉く知らざるが故に。問ふ、何法の相應を得ざる。頌自から答へて言く、「無二智」。無二とは二相有ること無きを名けて無二と爲す。二に著せざるの智を無二智と名く。成就とは所謂、成辦、即ち決定して成辦す。此の中是の如き所有の理義は、頌に言ふ所の如し。「成ぜず」とは謂く、諸の愚夫異生、心に散亂有り。彼の色聲香味觸等の諸境の中に於て、心に取著を生ず。是の故に彼の清淨の妙智に於て成就を得ず。即ち相應せず。問ふ、若し無二智相應せずんば、此の中復何の義をか說く。所以に頌に言く、

彼の止息互相に　　能所對治と爲る。

※十種分別散亂。

無性に非ず。何を以ての故に。頌に言く、「彼の出づる亦無盡。」「彼」とは謂く、彼の聲中に於て諸の善法を含むが故に。「出」とは謂く出生、「亦」とは相續して說くの義。此の中の總意は、諸の善法に由つて理の如く出生して性無盡の故に。彼れ卽ち滅無し。諸の菩薩事亦間斷せず。頌に「此れ遍計分別」と言ふは、謂く、智者應に當に如實に了知すべし。是の如きの所說、遍計性を遣る。頌に「彼れ普ねく攝して空爲り」とは、「普」とは謂く普盡、「攝」とは謂く總攝、謂く、此の八千頌般若經中、分別して廣く諸空の種類を說く。此の中是の如き相續の所說、普遍圓集して總攝するが故に。故に普攝と名く。是の如く、此の中空を總攝するが故に。問ふ、是の如き空の行相、此れ云何が和合する。答ふ、此の所說の空但だ遍計所執の法相を遣る。此れ是の如きを卽ち畢竟の義と言ふ。是の言中に於て理自から和合總集す。是の如き所說の空已りて後に復空の語義の說くべき無し。復次に當に知るべし、此の中是の如き所說の諸空は、但だ有情の取著を止遣せんが爲なり。分別して實性を說くに非ず。何を以ての故に。而も彼の實性の中、二種の空を說くが故に。所謂人空と一切法空なり。是の如き等、無散空を說き竟る。問ふ、何をか無散と名くる。答ふ、散とは謂く離散、此れ散不散の故に無散と名く。無散體とは、謂く、諸菩薩所有の善法乃至無餘依涅槃界中、彼れ亦散ぜず、彼れ亦盡きず。故に無散と名く。是の如く十六空を總說し竟る。

辯中邊論の如き慈氏菩薩是の如きの義を說きて顯明開示するが故に。彼の頌に言く、

內外彼身を受く、　安住物皆空なり。
彼等の智は見の如く、　所有の義彼れ空なり
二種の善を獲得し、　當に有情を利益す。
生死に處して利を作し、　彼の善法無盡、
種性等淸淨、　諸の相好を獲得す。

ふ若し爾らば何を將てか表示せむ。頌自から答へて言く、「一切處に實に說く」と。一切處とは即ち一切種に遍ず。「實」とは謂く、眞實、即ち法無我、眞如たり。「說」とは謂く了知、了知とは遮防を義と爲す。此の說眞如にして餘法を遮するが故に。又問ふ、何人か實說するや。答へて謂く、佛世尊、是の如き等の說、外道所說の空に同じからざるが故に。是の如き等、無性自性空を說き竟る。

復次に後に二種空の義を說く。彼の頌に言ふが如し。

有罪及び無罪　　不增亦不減、
諸の有爲、無爲、　　所有諸善止む。

此に「有罪及び無罪」等と言ふは、「罪」とは謂く過失、過は罪に隨つて轉ず。故に有罪と名く。罪及び過を離るれば即ち「無罪」と名く。若くは罪、無罪、所有の諸法は「不增にして亦不減」。此に「不增」と言ふは、所得有りと雖も、而も增長無し。「亦不減」とは謂く、無盡の法出生するを得て滅無し。是の故に菩薩實の如く彼の無盡法を知るが故に。言ふ所の「有爲」とは、謂く、所作有るが故に有爲と名く。行相云何。謂く即ち因緣所生の諸行、「無爲」とは有爲の行相に非ざるを簡ぶ。云何が擇滅等と謂ふ。頌に「所有諸善」と言ふは、問ふ、而も彼の有爲無爲の所有諸善、復云何が說く。答ふ。此の中當に知るべし、有爲の諸善、無爲の諸善、若くは次の如く修し、若くは次の如く修せざるも、悉く增減無きを得。此の中の意は、但だ勝義諦中に於て、實取の法無し。言ふ所の「止」とは、止は謂く止遣、彼の所有無相の言を止む。是の如き等有爲空、無爲空を說き竟る。

復後空を說く。彼の頌に言ふが如し。

諸善空性の中、　　彼の出づる亦無盡。
此れ遍計分別、　　彼れ普ねく攝して空爲り。

此に「諸善空性」と言ふは、「諸善」とは即ち諸の善法、謂く、空性の中、諸の善法有り、而して

(14) 有爲空。saṃskṛta-śūnyatā
(15) 無爲空。asaṃskṛta-śūnyatā
(16) 無散空。anavakāra-śūnyatā

卷の第二

復後空を說く。彼の頌に言ふが如し。

彼の我等の見斷じ、　大士畢竟して作る。
而も彼の人無我、　佛一切處に說く。

此に「我等見」と言ふは卽ち我等の見斷ずるを說く。我とは謂く遍計所執、所有蘊等。等とは人及び衆生壽者を等攝す。此の中の行相、等とは、謂く等ずる所是れなり。我の所有等、釋義應に知るべし。見とは謂く取著の見、此の中總意、我等の境界中に於て、彼の我等の見斷ず。斷とは壞の義。作とは謂く畢竟作の故に。問ふ。何人か作る邪。答へて言く。菩薩。又問ふ。若し菩薩ならば、何が故に大士と言ふや。答ふ。「大士」とは卽ち大有情、普遍輪迴相續して此を作る。卽ち是れ菩薩若し此の中是の如くんば復何の說く所ぞ。所以に頌に言ふ、「而も彼の人無我、佛一切處に說く」と。謂く、佛一切處に於て是の如く決定して人無我を說く。是の如き等、無性空を說き竟る。

復後空を說く。彼の頌に言ふが如し。

一切法不生なる　此の所說亦然り。
法無我を宣說し、　一切處に實に說く。

此に「一切法不生」等と言ふは、「一切」とは普盡の義、法とは卽ち是れ色等の法、一切卽ち法、釋義應に知るべし。彼の一切法悉く不生の故に。此に不生と言ふは、卽ち其の生を止む。此中の意は、卽ち本來不生の性、彼の相の聚集するが如きには非ず。得る所其の實性有り。頌に「此の所說亦然り」と言ふは、「此の」とは謂く是の如きなり。「說」とは表示の義、「亦然り」とは亦復說くが故に。頌に「法無我を宣說す」と言ふは、「法」とは謂く色等の諸法、「無我」とは卽ち無自性。問

(12) 無性空。abhāva-śūnyatā

(13) 無性自性空 abhāva-svabhāva-śūnyatā

此に「別別所有の法、此を遍計の性と說く」等と言ふは、此れ遍計の性を破す。「別別」とは卽ち各各の義。謂く此の所有の遍計の性なるが故に。遍計とは取著の義。何法を取著する。卽ち色等の法、此とは是の如きの義、說いて言說と謂ふ。此の中總意、謂く、各別の諸法の勝義諦の中、彼れ有に非ざるが故に。是の故に頌に言く、「彼の勝義有に非ず。諸法是の如く說く」。「勝義有に非ず」とは、卽ち勝義諦の中、自性無きが故に。問ふ。何法か自性無き。答ふ。謂く、色等の諸法。「是の如く說く」とは、問ふ、何人か是の如く說く。答ふ。佛是の如きの說を作す。彼の所有勝義の相空なるを觀ずるに、彼の相卽ち是れ遍計の性、空は唯能取の相に非ず。勝義諦の中に於て彼の空を說くが故に。是の如き等、勝義空を說き竟る。

此の如是說の義、自明顯然たり。造釋者、別に頌を說いて曰く、

彼彼遍計の性、　處處皆執著す。
此の是の如きの遍計　自性所有無し。

佛母般若波羅蜜多圓集要義釋論卷第一

ち彼の如來の眞實の說なるが故に。彼れ何の所に說ける。所謂「空」を說く。卽ち有情生死二種空の故に。然るに彼の無性、此の中亦離る。如し彼を無性と執ぜば、此れ亦然らず。若し爾らば何が故に頌に「欲」と言ふ邪。「欲」とは樂欲の義、謂く、卽ち有情生死の二欲、若し是の如くならば所欲畢竟して、彼れ是の如く眞實ならむ。是の如く等の言は二種の空義を說く。謂く、畢竟空、無際空。問ふ、何をか無際と名く。無際とは謂く初際有ること無く及び初分無し。此の無際に空を說くが故に無際空と名く。佛の言ふ所の如し。「生死の先際、表示すべからざるが故に。」復後空を說く。彼の頌に言ふが如し。

佛法見るべからず。　菩薩の法も亦然り。
此等所說の如く、　彼の十力等を空ず。

此に「佛法見るべからず」等と言ふは、佛法とは卽ち諸佛の法、所謂十八不共、十力等の法なり。是の如きの法、淸淨妙慧を以て觀れども見るべからず。亦得可からず。彼れ是の如きの故に、分別する所有れば、而も對礙と爲る。言ふ所の「菩薩の法亦然り」とは卽ち諸の菩薩の法、所謂布施等の諸波羅蜜多、種種の行相なり。眞實智に入りて理の如くに觀ずれば亦所見無し。言ふ所の「此等所說の如く、彼の十力等を空ず」とは、「此等」とは此の是の如きの敎を謂ふ。「所說の如く」とは、卽ち其の說く所の如きなり。問ふ。此れ何等の法をか說く。頌自から答へて言く、「彼の十力等。」上に明す所の十力等の法を指す。言ふ所の等とは、十八不共法を等攝す。又問ふ。此の法何の說く所ぞ邪。答ふ。所謂空を說く。空とは自相離るゝが故に。此の中是の如き等一切法空[10]を說き竟る。復後空を說く。彼の頌に言ふが如し。

別別所有の法、　此を遍計の性と說く。
彼の勝義有に非ず。　諸法是の如く說く。

(10) 一切法空。sarvadharma-śūnyatā

(11) 勝義空。paramārtha-śūnyatā

を知り、境空を了し已るを謂ふ。卽ち此の空智內に於て實無く而も所有無し。何に況んや餘法の依止性有るをや。此の句是の如く空空を說き竟る。此の中復自性空を說く。彼の頌に言ふが如し。

彼の諸の內空の性　自性亦復空なり。
所有識相の種　卽ち我が悲智を起す。

此に彼の「諸の內空の性」等とは、謂く、卽ち所有內の諸處の空性此に相續して說く。言ふ所の「自性亦復空」とは、自性とは種性の義、彼れに由つて是の如く識相を顯明する等。言ふ所の所有識相種とは「所有」とは謂く若所有の義、此の中、若くは識相、若くは識性、彼等の種性、卽ち我が悲智より生ず。悲とは他の苦をして離散するを得しめんと欲するが故に。智とは卽ち擇法の相、若くは悲等、若くは智等、是を悲智と謂ふ。「我」とは自相の義、卽ち自の所有の悲智の二種。此の意總じて內識處等の自性空を說くが故に。復次に後に二種空の義を說く。彼の頌に言ふが如し。

不生亦不滅、　有情此等明かなり。
有情生死欲　彼れ說いて卽ち空と爲す。

此に言ふ「不生亦不滅」等の四句の頌文、此の中二種の空義を合釋す。言ふ所の「不生」とは、彼の八千頌般若經中に不生を說いて此の止其の生と言ふ。此の中の意は、謂く本來不生の性。生若し無性ならば、滅亦無性。彼れ前性不生ならば後性亦不滅なり。問ふ此等云何。故に頌に答へて「有情」と言ふ。「有情」とは、卽ち五蘊の身命、「有」とは謂く、彼の物性を有す。「情」とは謂く自の所作性、和合して言ふ。故に有情と曰ふ。「明」とは謂く顯明、此の中の意說かく、若くは有情若くは生死、彼の二皆空、是の義顯明なり。而も諸の有情、邊際有ること無し。此に死して彼に生れ、六趣循環、窮盡有ること無し。輪迴生死す。此の生死とは卽ち是れ輪迴、是の如きの行相、有情卽ち生死、釋義應に知るべし。問ふ、此れ何人の說なる邪。頌答へて「彼」と言ふ。「彼」とは卽

(7) 自性空。svalakṣaṇa-śūnyatā
(8) 畢竟空。atyanta-śūnyatā
(9) 無際空。anavarāgra-śūnyatā

色及び色の自性、　　此の說亦復空。
此等外の諸處、　　所受の分皆止む。

此に「色及び色の自性」等と言ふは謂く、色聲等の外の六境處、又色とは卽ち是れ色處、言ふ所の「色の自性」とは、色は謂く、自色、如し相有る所、彼の相不生、不生を以ての故に、卽ち自性空。然るに彼の自性亦壞すべからず。譬へば人の角の如し。其の義應に知るべし。言ふ所の此の說とは、謂く、此の是の如きの說、如是等の言。復次に此の中、世尊皆止す。止とは不作の義。問ふ。何の法を止する邪。頌自から答へて言く、「此等外の諸處。」此れ復云何。「外の諸處」とは、謂く、色等の境、外の諸の分位、皆悉く實無し。而も彼の異生、是の如きの實の所受性有りと執す。是の故に此の中此の語義を止む。是の如き等の言外空を說き竟る。復後空を說く。彼の頌に言ふが如し。

色等の相は彼の身　　安住及び相離。
向の義を若し彼れ見ば　　彼の內卽ち實無けむ。

此に「色等の相は彼の身」と言ふは、此の中云何が是れ彼の身なる。所謂內外の二色處、是れ卽ち彼の身。言ふ所の「安住」とは卽ち是れ器世間、各別に依止し安住するが故に、安住と名く。言ふ所の「相」とは謂く三十二大士の表相。言ふ所の「離」とは彼の上の如きの說、皆悉く離の故に。「離」とは卽ち空の義、言ふ所の「向の義」とは、「向」とは謂く已往、已往の義を名けて向の義と爲す。何等の法か是れ向の義なる。上の頌に言ふが如き色等の相。此れ復云何。謂く、若し是の如き內外の色處、皆悉く無相ならば、卽ち彼れ是の如く空の義を了知せむ。是の如き聲義、是の故に應に知るべし。今此の頌中、先づ三種の空を說く。所謂、內、外空、大空、相空なり。次に空空を說く。頌に言ふ所の如し、「若し彼れ見ば彼の內卽ち實無けむ」。若とは卽ち若所有の義、謂く、空智を所有するなり。「彼」とは卽ち彼の身等、「見」とは知の義、「知」は卽ち了知。此の中意は空智

(2) 外空。bahirdhā-śūnyatā
(3) 內外空。adhyātmabahirdhā-śūnyatā
(4) 大空。mahā-śūnyatā
(5) 相空。lakṣaṇa-śūnyatā
(6) 空空。śūnyatā-śūnyatā

等か減無き。謂く「如說の義」。即ち其の所說の如く、義自から圓滿す。或は問ふもの有りて云く、此の中所說、何が故に頌略する。頌自から答へて言く、「所樂に隨つて頌略す。」今此に但だ八千頌を說くは、彼の聽者の最勝意樂の宜しく聞くべき所なるが爲の故に、是の故に頌略す。略とは謂く少略。言ふ所の「如是義、說の如し」とは、謂く、即ち是の如き說く所の義。彼れ復云何。頌に「說の如し」と言ふ。「說の如し」とは、謂く、其の言說の如し。是の如きの所說、理の如く成就す。般若波羅蜜多の法の中に義差別有るに非ず。但だ軟中上品、所有根性、欲に隨つて攝受せんが爲に、是の故に世尊、此の因に由るが故に、少略して此の般若波羅蜜多を說き、其の次第の如く、異の方便を以て十六空*を說く。是の如く說く所を顯明開示す。復次の頌に言ふ。

菩薩の我、見られず。　此の說實にして寂默。
能く內の諸事を受く。　彼れ說いて即ち空と爲す。

此に「菩提薩埵」等と言ふは、菩提及び薩埵、此即ち是れ菩提薩埵、菩提とは謂く、無二智、薩埵は即ち菩提を求むる者、而して此の薩埵を菩提薩埵と名く。即ち彼の菩提薩埵の我は見るべからず。亦得べからず。我とは已の義。言ふ所の「此の說實に寂默」とは、「此」とは是の如きの義、「說」とは謂く言說、「實」とは眞實、即ち勝義諦。寂默とは即ち是れ世尊、謂く、佛世尊の身語意業、皆寂默に相應するが故に。是の如き等の說、佛威神の加持する所に由るが故に、須菩提をして能く此の中に於て是の語義を說かしむ。言ふ所の「彼の說を即ち空と爲す」とは、彼とは即ち彼の世尊、說とは謂く說示、謂く、佛世尊、此を說いて空と爲す。何の法を說いて空と爲す。所以に頌に能く「內の諸事を受く」等と言ふ。「內の諸事」とは所謂眼等の內の六根處を內の諸事と名く。彼れを愚夫は實と執ずるを以て、能く世尊の彼の內事皆空と說くを受く。又新發意の菩薩中に於て實の自性有りと分別す。是の如き等の言內空を說き竟る。彼の頌に言ふが如し。

*十六空
(1) 內空。adhyātma-śūnyatā

く。言ふ所の「如是義を和合して」とは、謂く、彼の說者、若くは作、若くは非作、彼等の和合を初より次第に宣說す。如是最上の義の故に。「最上」とは最極勝上、彼の言說の體は謂く言詮の故に。問ふ、此れ何の所說ぞ。頌自から答へて言く、「最上三十二」。三十二とは數量の決定、謂く如是を說く數中の義の故に。是の故に當に知るべし、此の中の所說、亦減少無し。問ふ、十萬頌般若波羅蜜多經中多種空を說く。此の八千頌般若波羅蜜多經中十六空を說く。彼の所說と如何が齊等なる。此の疑有るが爲に、故に頌に止めて言く、

十六相を分別し、　　空其の次第の如し。
八千頌中に說き、　　異の方便說を了す。

此に「分別」等と言ふは、重重に類を分ち區別せらるゝが故に、名づけて分別と爲す。又「分別」とは卽ち種類の義、彼の種類とは種種性の義。此の中何の分別する所ぞ。謂く空を分別す。何等の空を分別する。卽ち十六空。十六とは數の分限。此に說く十六空と彼の十萬頌般若經中の所說の義と自から齊等なり。頌に「八千頌中に說く」と云ふは、是れ卽ち八千頌般若經中の所說。彼れ如何が說く。是の故に頌に、「其の次第の如し」と言ふ。「次の如く」とは過越せざるの義、何法か過越せざる。謂く空の聲を說く。故に下頌に「異の方便說を了す」と言ふ。其の義云何。「異」とは謂く別異の法、彼の別異の法の中に於て、其の方便を取る。是の故に「說」とは異の方便說、「了」とは了知、應に當に是の如く分別了知すべしとなり。所謂、此の異方便を了知して、分別して空を說く。

復次に頌に言く、

今此の八千頌、　　如說の義減無し。
所樂に隨つて頌略す。　　如是義、說の如し。

此に「今此の八千頌」と言ふは、法を指す、應に知るべし。「減無し」とは謂く缺減無きなり。何

を修作するが如し。信の義亦然り。言ふ所の「師資互に證說す」とは、謂く、世尊大師、此の法を宣說す。菩薩等の資、亦各宣說す。是の如く說き已りて、應の如く表示す。言ふ所の「說時說處等」とは、時とは所謂和合の所作、說示を表示し、各別に決定して所得の處の義を印持す。應に知るべし、問ふ、彼の說法者當に何の義を得べき。頌自から答へて言く、「自量成就するを得」と。其の義如何。「自」とは己の義、「量」とは謂く、自量、自所得の量、相違無きが故に。「成就」とは成辦の義、謂く、說法とは、諸の所說の事悉く成辦するが故に。彼の頌に言ふが如し。

說法者當に知るべし、　世間は時處の二。
說者同證有り、　然る後量の如きを得。

此の中云何。言ふ所の「說法者」とは、謂く、說法の人、「世間は時處の二」とは、謂く、世間の相中に於て先づ當に說時說處を了知すべし。然る後、智に依つて理の如くにして說く。問ふ、此れ何等の說ぞ。頌自から答へて言く、「說者同證有り。」謂く、同證和合の說有るが故に。問ふ、云何が量の如きを得る。答ふ、所謂此の眞實の言量を得。今說く所の時處等の義に非ず。此の中復何の義を以て三十二品を印可する。故に頌に言ふ有り。

一切の如是集、　我聞等の所說、
如是義を和合して、　最上三十二。

此に「一切如是」等と言ふは、「一切」とは普盡の義、何等か普盡なる。謂く、如是聚集、我聞等聚集、如是とは、謂く、如是所作、如是の此の法。言ふ所の我聞等とは、我とは自相の所成、聞は謂く、聽聞、即ち此の法を聽聞す。此の中の總意は、若くは如是、若くは我、若くは聞等、總聚して成ず。故に「如是我聞等」と云ふ。問ふ、云ふ所の「等」とは何の義をか等取する。答ふ、「等」とは時處を等攝す。言ふ所の「說」とは、「說」は謂く說示、是の故に此の中に彼の如是我聞等を說

是の如く般若波羅蜜多を宣說して而も障礙無し。此の中是の如き說く所の諸義、彼の經中第一品に說くが故に。

言ふ所の「作用」とは、即ち增上の作用、謂く、佛智を說いて增上と爲すが故に。此の法を說かんが爲に說を起すの作用、即ち菩薩等の衆の作用次第、是の如きに由るが故に、乃はち能く此の法を發起し宣說す。

言ふ所の「事業」とは即ち所作の事業を謂ふ。是の如きを發起し、此の般若波羅蜜多の敎に由りて是の如く安住す。是の故に勤勇修を起し、十種分別散亂法を除遣し、及び次第に十六種空を分別すること、是の如く應に知るべし。言ふ所の「相」とは、標表を義と爲す。又「相」は即ち形相、此の中如何。謂く、若し菩薩、此の般若波羅蜜多の法門に於て、若くは書する時、若くは讀む時、或は人等疑心を起す者有らむ。當に知るべし、皆是れ魔事等の相。若し不退轉ならば是れ菩薩の相。

言ふ所の「罪」とは、謂く、此の法に於て障難の事、及び謗正法等を作さむ。或は般若波羅蜜多に於て而も毒想を生ぜむ。此等皆罪報を感招せむ。

言ふ所の「稱讃」とは、謂く、稱讃果、經に云ふが如し、若し人有りて滿三千大千世界の七寶を以て持用て布施せむ。若し人此の般若波羅蜜多に於て受持等せんには、其の福彼に勝る。此の中復何の義を說いて而も依止と爲す。故に頌に言ふ有り。

具信以て體と爲し、　師資互に證說す。
說時說處等、　自量成就するを得。

此の中云何、言ふ所の「具信」等とは、「信」とは謂く、信心清淨、謂く、諸の菩薩、彼の信に由るが故に、甚深の敎に於て能く勝解を生ず。彼れ信有るが故に、名けて具信と爲す。彼れ信を具するが故に、而も能く體と爲る。體とは謂く身體、譬へば有身を因と爲し、乃はち能く相續して諸行

諸分別等依止する所有らむ。此に應に問うて云ふべし。若し般若波羅蜜多、無二智を成就せば、何が故ぞ頌に教、道二と說く邪。頌自から答へて言く、「彼の中、義相應す。彼の聲、教、道の二」と。「彼の中」とは彼の聲の中に於て教、道の二を含む。「義相應」とは、次第今說かむ。謂く、彼の有する所の教、道の二種、般若波羅蜜多の義と和合相應す。「彼の聲教、道の二」とは、「彼の聲」の言は、前に已に釋するが如し。「教、道の二」とは、即ち是れ般若波羅蜜多の方便、彼の聲の中に於て含藏する所なるが故に。猶し種子の如し。含藏の位に在つて其の義亦然り。是の如く當に知るべし。般若波羅蜜多の聲二種の義を說く。一には勝上、二には種類、彼の勝上とは謂く、無二智の相、其の種類とは、二種類有り。即ち教道と自性、是の二種の和合施設に由つて、當に知るべし、乃はち宣說表示有り。復是の如き等に依止するに由るが故に、此の般若波羅蜜多中の所有の語義、三十二品を開演して增無く減無し。此の中の所說、十種の分別散亂を遣り、又復十六種空を顯示せんが爲に、復次に頌して曰く、

依止及び作用　事業同じく修を起し、
相及び罪を分別し、　稱讚次の如く說かむ。

彼の頌の中の如き、其の六種有り。所謂依止、作用、事業、相、罪、稱讚等。此中云何が次第する。今說かむ。

言ふ所の「依止」とは、謂く、佛世尊、最初智を說き、彼れ是の如く所依止なるに由るが故に。所有甚深の法門、而も能く相續し、演說す。須菩提等彼の能說者に非ず。能く是の如く和合依止爲り。問ふ、佛所說の智、其の相云何。答ふ、佛、八千頌般若經の初に是の如きの言を作すが如し。「須菩提、汝の樂說に隨ひ諸の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多、應に當に發起すべし。菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多の如き、出生等、是の如く佛威神力の建立する所に由ると爲すが故に」。彼の須菩提乃はち能く

とは往いて到ることを得るなり。謂く、清淨の妙慧に由つて能く彼岸に到る。此の中應に問ふべし。何人か能く到る。答ふ、謂く、諸の菩薩。彼何の成就する所ぞ邪。即ち般若波羅蜜多の成就。成就とは成辦の義。是の如き、果性は增上意樂の成辦する所なるが故に。八千頌般若等に開示演說するが如し。是を般若波羅蜜多成就と謂ふ。般若波羅蜜多の聲中、所成有るに非ざるが故に。若し爾らば當に何の義を以て彼の成就を說くべき。所以に頌に「無二智」と言ふ。「無二」とは二相有ること無きを名づけて無二と爲す。是の智無二なるを無二智と名く。是の如きの所說、此の中の意は般若波羅蜜多、能取、所取を離る。即ち無二智なり。菩薩是の如きの智を成就するが故に。若し或は彼の色等の境中に於て、所取の相に著せば、彼の能取の心、無二智に於て即ち對礙有り。問ふ、若し諸の菩薩、是の如きの般若波羅蜜多を成就せば、何が故に今此に如來と言はざる。謂く、如來は一切處に於て諸行を勤修して佛と成ることを得たるを以ての故に。論自ら答へて「如來」と言ふ。如來とは彼の如來を謂ふ。彼とは即ち是れ般若波羅蜜多、如來とは如實にして而も說く。故に如來と名く。彼は是の如く普ねく一切分別網を離るゝを以ての故に。般若波羅蜜多即ち是れ如來なり。此の中、無二にして亦無分別、無二とは、如來は般若波羅蜜多を離れず。亦般若波羅蜜多に即せず。何をか無分別と名く。謂く、燈光の如き、此の是の如きの義なり。是の故に應に當に實の如く了知すべし。諸の智者の說く所の頌に言へるが如し。

智、空を離れて　少法も得べき有るに非ず。
此の意、離と言ふは　性離にして遠離に非ず。
彼の二空、識に異り、　少法も著すべき無し。
二無、實に轉ずべし、　二我性立たず。

此に由つて證知するに、如實の相中に於て世尊是の如く說く。是の故に能知、所知、若し性有らば、

佛母般若波羅蜜多圓集要義釋論

三寶尊菩薩の造

大域龍菩薩本論を造る

西天譯經三藏朝奉大夫試光祿卿傳法大師

賜紫沙門臣施護等詔を奉じて譯す。

卷の第一

般若波羅蜜、　一切諸佛を出生するの母に歸命す。

而して彼の般若の勝所依なる、　畢竟無著にして諸垢を滌ぎ、

諸佛の趣と爲りて自性を離れ、　衆生をして喜と勝に相應せしむる、

能取所取の二俱に亡じて、　此の中常性立つべからざる、

彼の二取の解脫に由るが故に　斷見常見悉く遣除せる、

一切智より出生する所の、　智能く彼岸に到れる*ものに稽首す。

我れ今彼の大域龍菩薩造る所の佛母般若波羅蜜多圓集要義の中に於て、略して行相を釋することは、諸の小智の者をして是の義を思念せしめんが爲なり。略して知る可きが故に。彼の頌に言ふが如し。

勝慧等を成就せる、　無二智の如來、

彼の中義相應す。　彼の聲に教道の二あり。

此に「勝慧等」と言ふは、卽ち慧彼岸に到るの勝慧、謂く、聞、思等の慧なり。岸とは邊岸、到

* 卽ちこれ佛陀なり。

佛母般若波羅蜜多圓集要義釋論解題

本頌は大域龍所造の佛母般若波羅蜜多圓集要義論を釋したものである。頌を擧げて一文一句、一一の語に就いて細釋する。その釋し方の丁寧なること、例せば「無二」とは二相有ること無きを名けて無二と爲す、「自」とは己の義、「此の」とは是の如きの義、といふやうに、解釋としては殆んど餘蘊なきものである。

最初に十六種空、次に十分別散の止遣、次に遍計、依他、圓成の三性の詳釋、これらによりて般若空性の妙諦眞義を闡明するものである。

本論は藏傳によるに梵名 ārya-prajñā-pāramitā-saṅgraha-kārikā-vivaraṇa 等なるもの丶如く、作者の三寶尊の梵名は triratnadāsa であつたやうである。この人の傳記詳かならず。本頌の作者大域龍及び譯者施護に就いては本頌の解題を參照せよ。

昭和七年八月三十日

譯者　泉　芳　璟　識

理の如く此の實性を思惟せよ。　彼の一切の性所依無し。
所有菩提の勝願心、　大智莊嚴當に獲得すべし。

聖佛母般若波羅蜜多九頌精義論　終

金剛、彼の相應有るが故に、「相應者」と名く。

彼の相應者所有の智に由つて、一切法に於て所取無し。無二相中、慧方便を以て如來身を生ず。前に說くが如き蘊處界等の戲論の自性に非ず。此の義終竟す。

然るに如來身は不動にして法界自性の成ずる所、本來不生なり。何を以ての故に。如來等、自性を離るゝを以ての故に。此れ即ち無性にして止だ不可說のみ。

無性とは謂く、本來不生の故に無性と名く。是の故に頌に「虛空の相の如し」と言ふ。

此れ復云何。謂く、一切戲論の性を離る。故に虛空の如し。彼の虛空は是の如きの相なるを以ての故に、而も虛空の相、應に當に是の如くなるべし。理の如く伺察せよ。「相」とは標表の義、復次に當に知るべし、一切法に於て障礙無き自性の中、作用する所の者有り。謂く、智三界に入るに由つて、心心所の相虛空の相の如し。所知の無明を顯示し、隨つて有情及び器の二世間の相、蘊處界等の戲論自性を現ず。是れ即ち所知を智境界と爲し所作性有り。此の所知の境、隨つて繫屬有り、所知遍計の諸境を覺了す。是の故に此を說いて名けて所知と爲す。所以に一切智、一切智智、此の二種皆虛空の如し。應に是の如く觀ずべし。此の義を總攝せんが爲の故に。頌に皆と言ふ。皆とは餘の義無きなり。餘の少分無きが故に。

此の中、彼の聲聞人中、樂欲して有餘依涅槃を取證する者を除く。彼は人無我の理を證得すと雖も、蘊事を謂ひて取つて有と爲すが故に。餘の無餘依涅槃解脫の相を證する者は今此に攝せらる。佛の言ふ所の如し。一切種一切、一切の有皆空。此の中又一分外道所說の空を除く。是の義を以ての故に、此の中應に知るべし、世間復少法の有るべき無し。一切彼の虛空の相の如し。

言ふ所の「虛空の相」とは、當に知るべし、即ち是れ、虛空の自性、是の如きの眞實、此の九頌、所說の如く已る。復諸菩薩等の種智の果を顯示せんが爲の故に、總じて頌を說いて曰く、

觀ずべし。智月中より菩提心を生ず。復是より金剛智月を生ず。當に知るべし、月とは卽ち金剛智、世間に普遍して、智光一切の色相を照耀す。是の故に頌に若し智月出現せばと言ふ。

彼の智金剛成就して慧及び方便を成就す。無喩涅槃の相、復慧より生ず。金剛界中、[五]摩摩枳菩薩の相觀想、甚深最上、微密[六]三摩鉢底の密雲彌布し、普ねく光明を現ず。其の菩薩とは、身相青色、八臂三面あり。正面青色、右面黃色、左面白色、右の第一手に劍を執り、第二手に箭を執り、第三手に鉤を執り、第四手に金剛杵を執り、左の第一手に輪を執り、第二手に弓を執り、第三手に羂索を執り、第四手に鈴を執る。而るに彼の菩薩、理智相合し、諸の施作する所、皆方便に順ひ、衆相莊嚴し、阿閦佛の冠を頂戴し、熙怡可愛の相を現じ、加趺して而も坐す。[七]阿多西清淨の華の如く、日輪最勝の圓光を具有す。復大樂自性金剛薩埵の相の如く、諸の甘露を灑ぎて、一切に遍ねし。此の菩薩の身、卽ち如來の身、慧方便より出生する所、是の故に頌に水中の月と言ふ。頌に「若し」と言ふは、卽ち是れ如の義、水月の如きが故に。此れ卽ち空、是の空法の中より、諸法を出生す。其の出生する所は卽ち本來不生の性なり。所以に喩へて水中の月の如しと言ふ。

此の中是の如し。若し法界自性中に於て有性を取著せば、而も實に無性なり。頌に「現前に所有無し」と言ふが故に。

彼れ是の如く一切法に於て所得無きに由って、眞如の中所作所證有るも、而も實に不能、若し作有り、證有らば、皆是れ方便して諸法を建立するなり。虛空と等し。此の義を證成せんが爲の故に、

第九頌に言く、

　　若し相應者の智は　彼れ卽ち虛空の相。
　　是の故に智の所知　皆虛空の相の如し。

言ふ所の「相應」とは、當に知るべし、卽ち是れ智と定との二法の相應なり。彼の相應は卽ち是れ

【五】mamaki
【六】samāpatti
【七】atasi か。若し爾らば亞麻の類。

ぐ能緣の識心を引生す。是の故に有相なり。

凡そ「相」と言ふは、攝集を義と爲す。唯一法のみに非ず。彼に出るの所取、是の如く有相にして、能取も亦然り。此の中の意は、所取無性、能取不實。頌に互相と言ふ。互相とは卽ち和合の義、互相に和合して皆影像の如し。影像の如きが故に、能取所取、彼の二互相に相離れざる性あり。卽ち彼の二法、無所得中に於て互に相從ひ、彼の心法有所得の相を出現す。

此の總意は、彼の心の自性本來明亮、能取所取二種の相無し。本と貪等無明の垢染を離れ、清淨潔白にして、諸の取著を離る。故に下の頌に水中の月の如しと云ふ。此の義を釋せんが爲の故に、

第八頌に言く、

觀の自淨種中、　智月の若く出現す。

彼れ水中の月の如く、　現前所有無し。

「觀」とは定の義。「定」とは謂く、心一境の性相、彼の定中に於て觀想する所有り。心自在の故に。頌に「自」と言ふは、謂く自の種子、「淨」とは卽ち淸淨、「淸淨」とは離濁の義、自の身語心の種子より成ずる所の等無間緣出生の想なり。

[一]紇哩字變じて普遍熾焰光明と成る。是の光中に於て、心の種子より、甘露光廣大照耀を出す。其の光復極大火輪と成る。彼の火輪に乘じて慧方便を出す。復是より彼を生ず。

[二]訶字門、其の字大聲を振發す。中に於て八葉の蓮華を出現す。訶字處中の內外の想、十六分位を布く。復

[三]迦字を想ふに、星宿衆、周匝圍遶せるを成す。復相應の方位に於て、佛の蓮華を想ふ。彼の十六分皆月輪と成る。是の如く觀じ已りて、復其の上に於て、自の淨種の中に

[四]吽字を現じて熾盛光を具せるを想へ。其の光中に於て、大火の熾盛光焰を出現す。當に自身を

【一】hri
【二】ha
【三】ka
【四】hūṃ

此の中應に問ふべし、彼の勝義諦中、云何が自性なる。答ふ。頌自から喩へて「陽焰等と」と言ふ。

其の「陽焰と」は、謂く、地、塵、日光三事假合す。陽焰の聚、前に見はれて後に壞するが如し。是の故に頌に「見れて即はち壞す、相無し」と言ふ。

諸有所得の別別の境界、其の義亦然り。各表了すと雖も、皆自性無し。何を以ての故に。彼等の自性前後和合せざるが故に。性不等の故に。愚者は一性に取著して轉ず。是の故に此等皆世俗有情趣に墮するが故に。

復次に此の中、若し能取所取對礙の性空ならば、取ち自性明亮、本來不生の心法發現すること、猶し影像の如し。此の義を釋せんが爲の故に。

第七頌に言く、

所取影像の如し、　無始、心より生ず。
即ち彼の相及び識、　互相に影と像の如し。

此に「所取影像の如し」と言ふは、謂く、此と彼と而も相似たるが故に。所似云何。鏡等の中に、面等の像を見るが如し。此れ復云何。謂く、心より生ず。彼れ唯だ心のみ所生有るを以ての故に。心即ち繋屬す。其の所取有る外の境相等、捨を性と爲さず。此の義終竟す。

復次に外の所取、鏡中の面像の如き、即ち彼の諸法、慣習の種子を以て心に領納し、無二の中に於て、其の有二對礙の相を取る。無始より來、心より生ずる所、彼の影像の如くなるに由つて、或は同時異時、所緣伺察する、彼皆無性なり。唯だ心法のみに非ず。亦所緣の相に由つて、而も能

所生有るが故に。彼彼の諸法、極刹那よりの所生は悉く是れ無常。此の義終竟す。

聖佛母般若波羅蜜多九頌精義論卷上

「一切」とは此れ即ち無差別の意なり。

然るに眼等の內處の色等、外處も亦有ならざるに非ず。若し爾らずんば云何が作者の所行を發起せむ。此の疑を破せんが爲の故に、

第五頌に言く、

幻輪の人と成るが如く、　諸の行作實無し。
此の彼の行作の如く、　身輪亦我無し。

譬へば幻輪の法の用つて人身の相を成すが如し。彼の幻所成の人、種種の行作、皆悉く具有す。亦復人の如く假に作者及び所作用有り。又復亦所行、作事、去來等の相有り。頌に「諸」と言ふは、種種に所作を分類するの義。何の作す所ぞ邪。謂く幻所成の身。若し是の如きの身は、幻法成の故に、即ち彼の幻身、而も實に我無し。「無」とは離の義、「我」とは謂く主宰、此に無我と言ふは、謂く離我の故に。所以に此の中共の作者無し。勝義諦中に於て都べて所有無し。是の故に頌に「諸の行作實無し」と言ふ。「實無し」とは、謂く、力能無きの義、今此に是の如く其の力能無し。謂く此の作者主宰無きが故に。若し幻所成の人は、其の主宰無し。顯示する所(あり)と雖も、而も其の實無し。諸法亦然り。畢竟して實無し。此の中應に知るべし。無差別の意の故に。下の頌に「陽焰」等と言ふ。此の義を證成せんが爲の故に、

第六頌に言く、

若し種種の所得は、　彼れ極刹那に生ず。
此れと陽焰等とは　見はれて即ち壞す、相無し。

「種種」とは謂く多種類、「所得」とは、謂く、差別遍計所取の境相、彼の所取の境は極刹那に生ず。刹那刹那を「極刹那」と名く。「生」とは起の義、謂く、極刹那に生起する所有り。若し極刹那は

猶ほ幻法所化の城邑の如し。後の能觀者も亦卽ち是れ化なり。彼の二有に非ず。何を以ての故に。不實生の性なるが故に。然るに能見所見彼の二の色相、外の對礙有る、皆是れ業化、世間三界の所見、此れ猶ほ彼のごときが故に、其の義亦然り。此の是の如きの化と彼の所化と、無差別性の故に、下の頌に聲の響に對するが如しと言ふ。此の義を證成せんが爲の故に、

第三頌に言く、

諸有說法の聲は　卽ち是れ聞の境界
一切響に對するが如し。　能所聞を緣成す

言ふ所の「說法」とは、卽ち能說者の增上の所生、彼の所對の聲は「是れ聞の境界」。若くは聞の境界は此れ是の如くなるが故に自餘の諸法皆是の如く生ず。是の故に喩を取る。「聲の響に對するが如し」。此の聲の響に對する、餘法と同じ。此の中是の如き無差別の言、乃はち「一切」と云ふ。言ふ所の「緣成」とは、謂く、卽ち聞等緣成の故に聞。若くは彼の所有、皆所作性、是の故に能聞所聞、有所得の中、悉く是れ緣成。所以に聲有れば皆響に對するが如し。是の如き所說、此の義畢竟す。故に下の頌に「一切夢の如し」と云ふ。此の義を證成せんが爲の故に、

第四頌に言く、

嗅香及び了味　觸等の境に愛著す。
此の一切夢の如し。　得と雖も所有無し。

「嗅香」と言ふは、謂く鼻識の境界、諸の所作性、所嗅の香等。「了味」とは謂く舌識の境界、諸味等を了す。「觸」とは謂く身識の境界、諸の觸等を覺す。是の如きの諸境界中に於て、所求所樂、而も愛著を生ず。彼彼の境に於て、各各繫屬し繫屬する所に隨ひ、香味觸等、別別に受くる所、若し彼等の境中に於て有所得の相を起せば、卽ち得べからず。是の故に頌に「一切夢の如し」と言ふ。

ち義門、「思擇」とは、謂く、思惟、決擇、何の思ふ所ぞ邪。頌に言く、「總略」。「總略」とは、謂く、包總含略なり。

此の中、應に問ふべし。何が故に總略して說く邪。答ふ。鈍根の者をして能く其の義を解せしめんが爲の故に。

前に標する九頌、次第に今釋せむ。

第一頌に言く、

業增上より生ず。　　所謂六處の相。
卽ち此れ復生ずと說く。　所因影の現ずるが如し。

「業」とは謂く、善不善の業。「增上」とは謂く業增上、彼の諸業の增上力に由るが故に、彼卽ち生有り。何の所生ぞ邪。頌に言く、「六處の相。」「處」とは謂く、識の所依、所生の處、故に名けて處と爲す。此れ復云何。謂く、眼等の内の六處。頌に「相」と言ふは、標表を義と爲す。若し此の六處の相、所生有るが故に、卽ち彼れ是の如く復諸法を生ず。此れ是の如きの說、是の義終竟し、決定し、成就す。

問ふ。勝義諦中に於て、云何が自性なる。頌自から釋して言ふ。「所因影の現ずるが如し。」影の現ずるを取りて而も喩と爲すに由るが故に。影現中に於て、諸有の作者、作業、及び所作事、悉く性を離れて空なり。此の義終竟す。

復次に外の色等の六處、自性の所生、今當に一一次第に顯示すべし。

第二頌に言く、

幻所化の城の如し。　能觀者も亦化なり。
彼の所見の色は　業化なり。世も亦然り。

諸有說法の聲は、　卽ち是れ聞の境界、
一切響に對するが如し。　能所聞を緣成す」。
嗅香及び了味　觸等の境に愛著す
此の一切夢の如し。　得と雖も所有無し」。
幻輪の人と成るが如く、　諸の行作實無し。
此の彼の行作の如く、　身輪亦我無し」。
若し種種の所得は　彼れ極刹那に生ず。
此れと陽焰等とは　見はれて卽ち壞す、相無し」。
所取影像の如し。　無始、心より生ず。
卽ち彼の相及び識、　互相に影と像の如し」。
觀の自淨種中、　智月の若く出現す。
彼れ水中の月の如く、　現前所有無し」。
若し相應者の智は　彼れ卽ち虛空の相。
是の故に智の所知　皆虛空の相の如し」。

前頌に言ふが如し。

所有勝慧彼岸に到る。　若し人樂欲して正觀せば、
應に當に彼の九頌の義に於て、　總略理の如く而も思擇すべし。

言ふ所の「勝慧」とは謂く、聞思修等の相、「彼岸」とは邊際の義、「到」とは往到、謂く、畢竟邊際に到り、諸の分別處所を離る。是の如く乃至、此の義終竟す。「正觀」とは、謂く、不顚倒の相、樂欲とは、所謂、作意希望を性と爲す。「彼の義」とは、謂く、彼の九頌の說時所有の義、「義」とは卽

聖佛母般若波羅蜜多九頌精義論

勝德赤衣菩薩造
西天譯經三藏朝散大夫試鴻臚卿傳梵大師
賜紫沙門臣法護等詔を奉じて譯す。

卷の上

般若波羅蜜多の智、　體善寶功德の聚を積む。
所有一切の波羅蜜、　而も彼の本來の性常住にして、
諸の戲論を離れて對礙無く、　諸の分別を離れて安隱を得たり。
最上微妙にして自性無く、　諸の所有の名相等を離る。
方便して三乘法を宣說す。　而も彼の三乘所得の相、
皆是れ一切智智の因たり。　般若波羅蜜に稽首す。
所有勝慧彼岸に到る。　若し人樂欲して正觀せば、
應に常に彼の九頌の義に於て、　總略理の如く而も思擇すべし。

其の九頌に曰く、

業增上より生ず。　所謂六處の相。
卽ち此れ復生ずと說く。　所因影の現ずるが如し」。
幻所化の城の如し。　能觀者も亦化なり。
彼の所見の色は　業化なり。世も亦然り」。

聖佛母般若波羅蜜多九頌精義論解題

本論は佛母般若、即ち八千頌般若に就て造られたる九頌を文に隨つて解釋したるもの。般若の無所得を說いて、能取、所取の空を明かにすると同時に、その空に於て顯現する妙境界を種字門を以て說明し、金剛薩埵の相をなせる菩薩の出現を述ぶ。蓋しこれ密教の立場を取れる般若の解釋と謂ふべきである。梵名は藏傳によるに bhagavatī-prajñāpāramitā-nava-śloka-piṇḍārtha-ṭīkā なるが如くである。

作者勝德赤衣に就ては傳記詳かならず。又他に製作の現存するものも無い。譯者法護は中天竺の人、景德元年（西紀一〇〇四）梵篋を齎して支那に來り、普明慈覺傳梵大師の號を授けられ、除蓋障菩薩所問經二十卷、大乘集菩薩學論二十五卷等八部の經論を譯し、嘉祐二年（西紀一〇八五）九十六歲の高齡を以て歿してゐる。

昭和七年八月三十日

譯者　泉芳璟　識

是の二事我れに勝るを以ての故に禮を作すのみ」。是の因緣を以て釋王比丘豪族第一たることを知る也。

分別功德論終

*按ずるに、此の論丹藏に三卷と爲す。開元錄に四卷と云ふ。而して註して或は三卷、或は五卷と云ふものは但だ分卷異有るのみ。文に增減無し。錄に注有り叙して云く、右此の一論增一阿含經の義を釋す。初め序品より弟子品の過半釋王比丘に至りて卽ち止む。法上錄に竺法護の譯と云ふは然らず。此の中經を牒し、文句を解釋すること並びに本經と同じ。增一阿含と同一人の譯なるに似たり。而も餘錄並びに失譯と云ふ。且らく此の定に依る。僧祐錄に迦葉阿難の撰と云ふも、此れ亦然らず。論の第一卷中の如き外國師及び薩婆多の說を引く。故に是れ二尊の所撰に非ざるを知る。

※此の記宋元明宮の四本俱に缺く。

眞淨王三弟有り。最小弟を誤淨と名く、小兒年四歳なる有り。時に眞淨王正殿の上に在りて坐し、諸群臣を會す。王自から惟うて曰く、「我が兒出家せずんば我れ應に當に聖王と爲るべし。然るに復出家し去る。我れ何ぞ此の天冠を用ひ爲さむ」。卽ち天冠を脫して地に著け、應に作すべき者あらば便ち作す。諸臣愁悒、各歡心無し。時に釋王の小兒前に在りて遊行す。地の天冠を見、卽ち擧げて頭上に著け地に坐す。左手を以て肩を拄へ、右手鬚髯を摩捋す。王諸臣と所以を驚き怪む。王の曰く、「此の小兒天使たること其れ然り。或は能く聖王と作らむ。我兒の聖王の相盡く此の兒の許に在り。故に其をして然らしめんのみ」。衆臣僉な然りとして曰く、「或は能く王の言ふ所の如くならむ」。王念じて曰く、「悉達旣に出家して又小兒の相を見はす」と。卽ち自から王位を廢して、乃はち八年を經たり。[六四] 聞く、悉達以に成佛し、三迦葉師徒を度し、千の比丘を得たり。並びに[六五]優波提舍[六六]拘律陀、師徒二百五十人、合して千二百五十の比丘、摩竭國より還りて釋翅の舍に至らんと欲すと。先づ優陀夷を遣はして還りて消息を白さしむ。眞淨之を聞いて歡喜踊躍し、卽ち還つて天冠を著け、道路を平治し、掃灑燒香して以て如來を待つ。如來旣に至る。王諸比丘を見、復心精なりと雖も、容貌に表はるゝ無し。當に諸釋五百人姿容可なる者を選び、出でて沙門と爲り、世尊に侍從せしむ。釋王比丘最も其の先に在り、時に佛、精舍大衆の中に在り。諸比丘に告げ、普ねく種姓豪貴なる所以の意を論ず。時に眞淨王、衆中に來至し、釋王、比丘に向つて禮す。諸衆皆所以を怪む。佛此の意を知り、衆の疑を解かんと欲し、故らに王に問うて曰く、「何を以て此の比丘を禮するや。」答へて曰く、「禮する所以は、此の比丘二事有りて我れに勝る。[六七] 夫れ天に三有り。一に曰く、擧天、二に曰く、生天、三に曰く清淨天なり。我れ正に擧天を有す。此の比丘生天を有し、清淨天を有す。生天と言ふ所以は年四歳の時を以て吾が天冠を擧げ已れが頭上に著く。自然に意を生じ、與ふる者有ること無し。故に生天と曰ふ。清淨天とは今已に漏盡結解け、復塵垢無し。故に清淨天と曰ふ也。

【六四】此の說話已に優波離比丘の下に出でたり。
【六五】舍利弗のこと。
【六六】目犍連のこと。
【六七】三天のこと已に前の念天の下に出づ。

正に此の化有り。更に復餘りや。曰く婆羅門有り。名けて梵天と曰ふ。亦世典と名く。世典と名くる所以は、博く群籍、圖書、祕讖を覽、天文地理關練せざるは無し。故に世典と名くるなり。自から德を以て高しとし、敵を命じて行く。「誰か能く我れと論ずる者ぞ」。聞く、釋種の比丘中最下の者に祝利般咃有り。[六一]優婆塞中最下の者に瞿蜜多羅有り。[六二]吾れ當に此の二人と共に論ぜむ」。即ち來りて般咃と共に論ず。般咃に謂て曰く、「能く我れと共に論ぜんや」。般咃の曰く、「我れ尚ほ能く汝の祖父梵天と共に論ず。何況んや汝盲無目の人をや」。梵志言を尋ね即ち詰つて曰く、「盲と無目と何等の異有りや」。般咃默然として對へず。心に念じて曰く、「以て相訓ふ無けむ。當に神足を以て相答へんのみ」。即ち神足を以て虛空に飛騰し、地を去ること四丈九尺にして結跏趺坐す。梵志仰いで其の神變るを瞻見し、敬情內に發し、其の淸訓を冀ふ。時に舍利弗祇洹に在りて經行し、天耳を以て梵志と般咃と論ずるを聞き、其の辭匱て變を現じて相答へ、我れ若し往かずんば比丘屈を受け梵志度せられずと知る。即ち神足を以て般咃の形と作し、般咃の本形をして現ぜざらしめ、化形もて梵志に問うて曰く「汝は是れ天か、是れ人か」。答へて曰く、「是れ人」。又問ふ、「人ならば是れ男子と爲んや不や」。曰く、「是れ男子」。又問ふ、「男子と人と何等の異有りや」。答へて曰く、「異らず」。又問ふ、「人とは統名、男子とは形に據つて之を言ふ。何ぞ異らざるを得んや。向に盲者と言ふは謂く、今世後世善惡の報を見ず。無目とは智慧の眼以て結使を斷ずる無き也」。梵志心解して即ち法眼淨を得たり。是の因緣を以て祝利般咃變形第一たるを知る也。

[六三]釋王比丘豪族富貴天姓柔和と稱する所以は、凡そ姓に四有り。刹帝利、婆羅門、長者、居士なり。貴と言ふ所以は、以て沙門と作らば同一の釋姓、是を以て貴と稱するのみ。喩へば四恒水の如し。牛口、師子口、馬口、象口、各五百支あるも、合して大海に入れば共に一水と爲る。若干味無し。故に海大と稱して貴を百川に致すを得る也。釋姓亦是の如し。故に稱して豪貴第一と爲す也。

【六一】麗本「愛」に作る。
【六二】gomitra 傳說詳かならず。
【六三】sakyarāja か。

の苗稼を滅ぼさんことを誓ふ。「若し五穀を種うる者有らば、苗稼好と成らむに[五四]大雹もて摧殺せむ。根莖をして立たしめず。何に況んや葉有らんをや」。誓ひ已りて命終し、即ち龍中に生ず。號して[五五]無葉と名く。時に摩竭國の人民、苗稼を種作して適生ずれば、龍即ち雹殺す。是の如く數年を經、人民飢困し、死亡する者衆し。佛之を愍傷し、此の龍を化せんと欲す。即ち密迹、阿難、般咃を將て[五六]倶持國に至り、龍の止まる所に詣る。時に龍佛の來るを見て惡心を生じて曰く、「今當に雹を放つて此の沙門を殺さむ」。即ち山石を雨らす。佛[五七]右密迹を回視す。密迹佛の意を知り、即ち金剛杵を以て之を擬し、大石山を墮して、其の龍淵を塞ぐ。龍大に瞋怒し、眼中より火出づ。佛右般咃比丘を迴視すれば、般咃比丘即ち佛の意を知り、龍を降らしめんと欲す。般咃即ち神足を以て形を隱し、水を以て龍の眼火を滅す。龍復耳鼻口より火を出す。亦水を以て此を滅す。比丘復神力を以て龍の眼耳鼻口中に於て反覆出入すれども而も龍見ず。形を隱して內に在り。手を外に現ず。龍此の變を覩て即便心伏す。佛復三人と等しく前に於て往反し經行す。石上四人の跡有り。而も三人現ず。龍即ち佛に一人の所在を問ふ。答へて曰く、「是れ汝の師の跡なり」。又曰く、「師の名を誰とか爲す。今何ぞ現ぜざる」。答へて曰く、「名けて般咃と曰ふ。佛遠く現ぜしめんと欲す。即ち佛の意を知り、[五八]百步にして形を現ず。龍遙かに之を見て歡喜して禮を爲す。佛即ち之に[五九]八關齋法を授く。是より以往、風雨和調して、五穀豐熟、人民安寧なり。是の因緣を以て般咃の隱形第一なるを知る也。

[六〇]祝利般咃能く形體を化して若干變るを作すと稱する所以は、祝利とは極闇なり。此の比丘精神疎鈍、佛教へて掃箒を誦せしむ。箒を得れば掃を忘れ、掃を得れば箒を忘る。六年の中專心に此の意を誦し、遂に解悟す。而して自から惟うて曰く、「箒とは譬、箒とは除、譬は即ち八正道に喩ふ。糞は三毒の垢なり。八正の譬を以て三毒の垢を掃ふ。所謂掃箒の義とは正に此を謂ふか。深く此の理を思ひ心即ち開解し、阿羅漢道を得たり。所謂形體を化すとは四諦の妙慧を以て五陰の形を化する也。

【五四】麗本「大震雹殺」に作る。今三本並に宮本に依る。

【五五】apalāla か。阿鉢邏龍王、無苗、無稻芋等の譯あるもの。無葉は恐らく apattra と見做したるものならむ。

【五六】koti か。

【五七】三本並に宮本「左」に作る。

【五八】三本並に宮本「自出」に作る。

【五九】不殺生、不偸盜、不邪婬、不妄語、不飮酒、不坐高廣大床、不著華鬘瓔珞、不習歌舞戯樂。

【六〇】culla-panthaka

「已に見る」。佛の言く、「犯戒都て盡く、喩へば空鉢の如し」。復鉢を以て地に覆ひ、示して曰く、「汝見るや不や」。答へて曰く、「見る」。佛の言く、「已に犯戒盡く、當に地獄に墮すべし。故に第一持戒と稱する也。鉢口地に向ふに喩ふる也」。羅云約勅を被りて以後、未だ曾て復毫釐の如きをも犯さず。故に第一持戒と稱する也。或は曰く、復更に事有り。身子、羅云を將て舍衞城に入つて乞食す。時に婆羅門有り。羅云後へに在りて行くを見、卽ち惡意を興して羅云の頭を打つ。血流れて面を汚す。羅云卽ち惡念を生ず。「要ず當に方便して此の怨家に報ゆべきのみ」。但だ言ふ、「婆羅門なる者皆當に破滅すべし。終に置かじ」。身子已に羅云心中の所念を知り、其れが爲に血を拭ひ、羅云に謂て曰く、當に汝が父を憶ふべし。昔[四八]須念王たりし時、人來りて眼を索む。卽ち眼を挑りて與ふ。亦悔恨せず。園中に在りて坐禪せし時、王手足を截り、亦悔[四九]恨せず。若くは象と爲りし時、牙を以て人に與へ、亦厭惓せず。汝今云何が此の惡念を起すや」。羅云師の所說を聞き、卽ち自から剋責す。「我れ今云何が惡心もて彼に向はむ」。卽ち忍ぶこと地の如し。害心の毛髮許りの如きをも起さず。時に羅云の首を打てる者、[五〇]無擇地獄の中に墮せり。是の因緣を以て羅云の持戒第一なることを知る也。

[五一]般咃比丘能く形を隱して現ぜずと稱する所以は、般咃とは道なり。孿生兒有り。之を路に棄つ。人有り收め取つて養ひ長じて大ならしむ。各出家して道を學ぶ。人の與に字を作る無し。卽ち字づけて道生と爲す。[五二]胡に般咃と言ふ。時に摩竭國激天雷し暴雨す。五穀登らず。王の名は頻頭嗏羅、是れ阿闍世王の祖、四遠に募つて曰く、「能く暴雨を却くる者有らば、大に財寶を與へむ」。時に婆羅門有り。名けて[五三]梵天と曰ふ。善く呪術を知る。來りて募に應じて曰く、「我れ能く雨を却けむ」。王卽ち聽して術を現じ雨を止む。時に陰陽和調し、五穀大に熟す。梵志王に白して止雨の功報を索む。王口に許すと雖も、竟に惠に報ぜず。諸臣人民王の與へざるを見、各復之を許す。梵志家儉、每に從つて之を索む。其の與へざるに於て遍ねく索めて得ず。梵志大に恚り、毒龍と作りて人

【四八】sudāna か。
【四九】麗本「悗」に作る。今三本並に宮本に依る。
【五〇】avīci
【五一】panthaka
【五二】三本並に宮本「梵」に作る。
【五三】麗本並に三本「梵志」に作る。今宮本に依る。

世尊の所に至りて道を爲さんことを欲求す。世尊の曰く、「善來比丘」と。卽ち沙門と成る。佛制比丘に三衣有り。此の面王比丘直に此の白氎を更染して以て袈裟と爲し、都べて餘衣を用ひず。佛に白さく、「弟子正に終身此の一衣を被らんと欲す。願はくは世尊之を聽したまへ」。佛卽ち默然として之を可るす。是より已往、常に此の一衣を被る。故に世尊の曰く、「我が弟子の中弊惡衣を著るもの面王比丘に過ぐるは無き也」。此れ八大人念中に於て少欲知足最も第一と爲す。

[四六]羅云持戒毀せずと稱する所以は、或は曰く、「羅云妄語を憙ぶ。云何が持戒と言ふや」。或は曰く、「羅云妄語せず。直だ自から佛を瞋るのみ。何を以て佛を瞋るや。佛轉輪聖王と作らざるをての故に。若し聖王と作らば、當に八萬四千の大臣、八萬四千の玉女有るべし。象馬車乘事事八萬四千有り。此の如きの位を捨てゝ沙門と作り、東西に行乞するは羞づべからずや」。聖王の利を計り、如來を嫌ふが故に妄語を作すのみ。人羅云に如來の所在を問ふ。如來實に祇樹精舍に在り。而るに答へて耆闍園に在りと云ふ。實に耆闍園に在るに而も詐はりて祇園に在りと言ふ。反覆妄語して來人を誑むく。阿難佛に白さく、「羅云妄語す」。と佛羅云を喚び來らしむ。「卿實に妄語せりや」。對へて曰く、「實に爾り」。「羅云、汝何を以て妄語を作すや。我れ聖王の位を捨つる所以は、聖王の位恃怙すべからず。皆無常に歸す。長く存する者無きを以てなり。正に帝釋梵王たらしむるも、皆保つべからず。況んや復聖王にして恃賴すべきや。羅云、我れ前後此を捨つること稱計すべからず。而も汝方に恨むや」。佛羅云に語りたまはく、「汝水を取り來れ」。羅云卽ち鉢に水を盛滿して如來に授く。如來鉢水を執り、羅云に謂て曰く、「汝此の水を見るや不や」。對へて曰く、「已に見る」。佛の言く、「此の水鉢に滿ちて缺減する所無きは、持戒完具、損落する所無きに喩ふ。復半を[四七]寫して棄て、羅云に謂て言く、「汝此の水を見るや不や」。對へて曰く、「之を見る」。佛の言く、「此の水半を失ふを以て、戒の具足せざるに喩ふ」。復水を寫して盡さしめ、羅云に示して曰く、「此の空鉢を見るや不や」。答へて曰く、

【四六】 rāhula

【四七】 三本並に宮本「寫」に作る。

[44]面王比丘弊惡衣を著て羞恥する所無き所以の者は、十一頭陀を作すと名く可きや。或は曰く、「非なり」。「何を以て謂つて第一と爲すや」。比丘は一種衣を著して終身改めず。何を以て其の然るを知る。此の比丘本と是れ釋種子、初生の時、異神德有り。母始めて懷妊の時、梵志を請うて占相せしむ。梵志策して曰く、「此の兒の頭上に天冠の相有り」。其の母之を聞いて歡喜し、佯はつて樂まず。念じて曰く、「夫れ天冠は王者の相、一國の中、兩王有るべからず。恐らくは王之を害せむ」。是を以て樂まず。內に喜ぶ所以の者は、若し實に是れ王たらば、自然に當に護有るべし。何を憂へてか濟さざるや。日月遂に滿ち、一男兒を產む。頭上に天冠の影有り。復梵志を請うて[45]作字を爲す。梵志の曰く、「頭上に王相有り。復此の相を離るべからず。當に名けて面王と爲すべし」。卽ち字づけて面王と爲す。眞淨王之を聞いて、心に愁憂を懷く。「此の兒王者の相有り。後必ず我が位を奪はむ。當に之を如何せむ。」正に輒はち殺さんと欲するも、罪死に應ぜず。正に之を置かんと欲すれば、必ず我が己を奪はんを懼る。俯仰憂悒、自から寧きこと能はず。佛、國に來還する時、王諸釋に宣令して曰く、「若し兄弟二人有らば、一人を遣はして出家して道を爲し、世尊に侍從せしめよ」と。此の兒復一のみ。出家して五百人の例に在らしむるを得ず。是を以て益愁悴を懷く。時に面王年十歲、心に自から念じて曰く、「正に轉輪聖王ならしめんも、亦復無常なり、又復諸釋の出家に及ばず。人身得難し。佛世値ひ難し。佛世に値うに憂んでは宜しく當に出家すべし」。卽ち其の母に白す、「我れ出家して道を學ばんと欲す」。母の曰く、「我れ正に汝一人有り。我を捨てなば我れ便はち當に死すべし」。面王卽ち眞淨に啓して曰く、「我れ出家せんと欲す。王當に聽すべきや不や」。眞淨歡喜して曰く、「大に可なるのみ」。面王の曰く、「自から惟一のみ。母付囑する所無し。此を以て恨と爲すのみ」。王の曰く、「卿若し能く出家せば、我れ便はち當に卿の母を以て姊と爲し、半國を分ちて相給せむ」。面王歡喜し、卽ち家に還りて狀を以て母に白す。母卽ち之を聽す。出家の時に當り、一張の白氎を被り、

【四四】 mogha-rāja 恐らくは mukharāja か。

【四五】 命名の意なり。

し。無辜を扼殺す。我れ若し良からずんば自から保試すべし。扼せらるゝ是の如し」と。王卽ち撿程するに女の言ふ所の如し。他の增減無し。王卽ち其の父母に語る、「我れ之を取らんと欲す」。父母對へて曰く、「隨意に之を取れ。此の死女を用ひ爲さん」。王卽ち之を宮裏に內れ。隨時に瞻養す。日月遂に滿ち、一男を產み得たり。端正姝妙なり。年遂に長大にして出家して道を學ぶ。聰明博達、精進して久しからずして羅漢道を得、還つて父母を度す。時に國王有り。名けて[四二]波絺と曰ふ。邪を信じ倒見にして今世後世善を作して福を得、惡を爲して殃を受くるを知らず。死して神滅して復受生せずと謂ひ、佛有るを信ぜず。涅槃を識らず。鐵を以て腹を鍱し、智の溢出するを畏る。王に誇りて獨步して自から無比と謂ふ。時に童迦葉往いて其の門に至る。王迦葉の被服異常にして、行步庠序、威儀整齊なるを見、王卽ち與に論議す。王道人に問ふ。道人言ふ、「善を作せば福有り、惡を爲せば殃を受けむ」。王の言く、「今我が宗家一人有り。善を爲して純に至る。死せんと欲するの時に臨み、我れ諸人と共に其の邊に至る。其の人に語つて言く、君の所行の如くんば死して應に天に生ずべし。若し天に上らば、來り還りて我れに語れと。死し來りて久し。來りて我れに告げず。我れ是を以て善を作すも福無きを知るのみ」。道人王に答へて曰く、「夫れ智者は譬喩を以て自から解せむ。譬へば一人有り。百斛の圊廁中に墮つ。人有りて挽き出し、洗浴訖りて好衣服を著し、香を以て身に熏じ、高床に坐す。人有りて此の人に語つて曰く、還廁中に入り去れと。此の人肯んじて入るや不や」。王の曰く、「肯んぜじ」。道人の曰く、「天に生ずる者其の喩是の如し。天上の快樂五欲自から恣にし、甘露を以て食と爲す。食自から消化して便利の患無し。五體香潔、口氣苾芬、下世間を觀ずるに猶し猪處溷のごとし。正に來らんと欲せしめんも、臭を聞いて卽ち還らむ。是を以て之を言ふ。何に由て相告ぐるを得んや」。是の如く譬喩數十條事、王の意開解して[四三]三尊に信向せり。是の因緣を以ての故に童迦葉雜種論を能くすること第一と爲す也。

【四二】詳かならず。恐らくは paśupati か。

【四三】佛法僧を云ふ。

十の比丘を將ゐて」[37]釋翅を過ぐ。如來心に念じたまはく、「今父王必ず當に來り迎ふべし。尊重して體を屈せしむべからず。當に神足を現じて虛に昇つて行き、人頭を齊しからしむべし。王の手をして如來の足に接せしめんと欲するのみ。爾る所以は、佛德尊しと雖も、父母をして體を屈せしめんと欲せざるが故なり」。時に優頭槃比丘如來の右に在り。密迹力士如來の左に在り。如來の身正に此の比丘の肩に至る。王問うて曰く、佛の左右の者は是れ何等の人ぞ、乃し爾く廣大なるや」。答へて曰く「右なるは是れ優頭槃比丘、左なるは是れ[38]閱叉鬼金剛力士なり」。又曰く、「是れ何等の國の人にして乃し爾く殊異なるや」。答へて曰く、「是れ摩竭國の人」。又問うて曰く、「是れ神足身なりと爲む。是れ遺體なりとや爲む」。答へて曰く、「是れ父母の遺體身にして神足に非ざる也」。諸釋念じて曰く、「如來の神德思議すべからず。乃し羅刹惡鬼、高大の人をして其の左右に在らしむ」。是の因緣を以て是の比丘の身延短を爲すを知る。此の[39]比丘佛の左右に侍するや、恒に如來を障蔽せんと欲す。諸天世人是を以て患と爲す。如來に二種の身有り。一に法身、二に肉身、此の比丘但だ金色の肉身を愛し、無漏法身を愛せず。親近の弟子法當に囑累すべきも、遺法身將來に闕くるを懼る。是の二事を以ての故に、如來之を發して以て阿難に及ぶのみ。

[40]拘摩羅迦葉能く雜種論すと稱する所以は、此の比丘常に人の爲に四諦を敷演し、時に兼ねて讃頌譬況を引く有り。一諦を喩ふるに一偈讃一喩を引く。乃至四諦亦皆是の如し。故に雜論第一と稱する也。拘摩羅は童也。迦葉とは姓也。拘摩羅迦葉は卽ち是れ童女子なり。何を以て其の然るを知る。昔長者有り。名けて[41]善施と曰ふ。居富無量なり。家に未だ門を出でざるの女有り。家に在りて火に向ひ、暖氣身に入り、遂に便はち軀有り。父母驚き怪み、其の由狀を詰る。其女實に爾る所以を知らずと對ふ。父母重ねて問ふ。諸に杖楚を加ふるも、其の辭改まらず。遂に王に上聞す。王復詰責す。辭亦異らず。之に許すに死を以てす。女卽ち怨と稱して曰く、「天下乃ち當に無道の王有るべ

【三七】 cātumā か

【三八】 yakṣa

【三九】 mahāparinibbāna-sutta V—7-10 に此の記事あり。世尊はウパーヴナに對して去れ比丘よ吾が前に立つなかれと宣へり。林中毛端ばかりの場處と雖も諸天充滿せざるなし。咸な如來を見んとす。然るにこの比丘は世尊を覆ひて立てり。諸天これを恨みて私語せり云々。隨て長阿含遊行經相當の箇處比較。

【四〇】 kumārakassapa

【四一】 sudatta か。

中路に止まりて敢へて復前まず。時に毘舍離の人、其の軍を興して來りて攻伐せんと欲するを聞きて、自から寧きこと能はず。卽ち往いて佛に問ふ。「如何が之を禳ふべき」。佛の言く、「苦とする無れ。吾れ自から之を化せむ」。其の夜世尊卽ち往いて變を現じ、虛空の中に於て結加趺坐す。晃として金山の大衆に曜やくが若し。頭を擧げて視て曰く、「是れ何等の人ぞ」。答へて曰く、「我は是れ賈客の道ふ所の者なり」。卽ち曰く、「賈客我を誑むくや。向には能く飛ぶと道はず。而るに今現に飛ぶ」。心中惶怖し、其れ害せられんことを懼れ、叉手して問うて曰く、「不審、此に至ること、何の約勅する所ぞ」。世尊答へて曰く、「恐懼を懷く勿れ。吾れ汝を害せじ。我れ名けて佛と爲す。一切を濟度す。甘露の妙法、汝聞かんと欲するや不や」。答へて曰く、「願はくは聞かんことを欲す」と。佛其根の應に安般に從つて得度すべきを觀じ、卽ち爲に出入の息を守り、息の長短及び冷暖を知ることを說く。佛の所說を聞いて心卽ち開解し、須陀洹道を得たり。便はち軍衆を捨てゝ道人爲らんことを求む。佛卽ち之を受く。善來比丘(と稱して)便はち沙門と爲る。重ねて安般を思ひ、四大三十六物の惡露不淨を分別し、尋いで至妙に達し、無漏果に至る。故に諸比丘中安般第一と稱する也。

[三四]優頭槃比丘を稱して計我無常第一と爲す所以は、此の比丘宿行恭恪にして、若し長老を見れば、師父として之に事へ、若し中年を見れば、之を敬すること兄の如く、己より小なる者は、之を愛すること弟の如し。謙恪の至、故に姝大の報を受け、比丘と爲りて、佛の左右に侍することを得たり。高大の形有りと雖も、常に自から恃まず。恒に非我身の常主無きを計し、解は明慧に達し、心是非を亡ず。故に能く形を遺れ、喪憍謙遜を首と爲す。何を以てか形體の姝大なるを知らむ。佛始め成道して迦葉兄弟三人を度す。千の比丘有り。摩竭國に遊び、[三五]洴沙王を度して將に本國に還らんとす。先に[三六]優陀夷を遣はして眞淨王に告ぐ、「却後七日、當に來入して化すべし」。時に王之を聞きて喜踊無量、卽ち嚴駕を勅し、道路を平治し、掃灑して香を燒き、以て如來に侍す。如來千二百五

【三四】upāvana 長阿含遊行經「梵摩那」佛般泥洹經「優和洹」、大般涅槃經「優波摩那」に作る。

【三五】bimbisāra

【三六】udāyi

久しく停るを得ず」。雜云四非常を思ひ、意猶ほ未だ寤らず。佛安般を行じて意を守らしむ。安般とは入出息なり。息長きも亦知り、息短きも亦知る。短息は心より還り、長息は謂く足跟中より來る。復冷暖を知る。入息を冷と爲し、出息を暖と爲す。長短冷暖を知る所以のものは、五陰の所趣深淺を分別せんと欲す。出入より息の本末を尋ね、病の源由を知る。若し息入る時は從來する所を知らず。若し息出づる時は去つて何れの所に至るかを知らず。來往無しと解す。病亦復然り。是の如く思惟して遂に羅漢を得たり。摩訶迦旃延那の安般を行ずるは雜云に同じからざる也。息に於て自在に、若し眼より耳よりせんと欲するも、意に隨つて出入す。復眼耳鼻口を閉づれば、便はち九十萬の毛孔より出づ。何を以て其の毛孔より出づることを知る。[三二]此の比丘本是れ王種、弟兄二人、其の弟端政姝妙なり。時に王崩亡し、兄應に紹繼すべきに、弟自以て勝れたりと爲し。密かに人の擧げんことを望む。然るに國俗の法次を越ゆるを得ず。卽ち兄を擧げて王と爲す。弟心伏せず。背へて臣と稱せず。自ら國を出でんことを求む。王卽ち之を聽す。兵衆を求索す。王恣に之を與ふ。卽ち八萬の牙象を選び、鉀を被らしめ、劍を鼻にして、嚴辦すること已に訖る。念じて曰く、「何の國か最も善き。吾れ攻め取らんと欲す。毘舍離國の諸國最も勝る。當に往いて攻取し、以て己れが用と爲さむ」。卽ち兵を引いて趣く。王半道に至る時、五百の賈客有り。寶を採つて還り、摩竭に詣らんと欲し、中路にして相逢ふ。賈人に問うて曰く、「天下の人中形容姿貌頗る我れに勝る者有りや不や」。賈人便はち笑ふ。王問ふ。「何を以て笑ふや」。答へて曰く、「我れ自から笑を爲すのみ」。復重ねて問うて曰く、「笑ふこと要ず當に意有るべし。何を以て說かざる」。答へて曰く、「王若し瞋らずんば便はち當に之を說くべし」。王の曰く、「但だ說け。終に汝を瞋らじ」。賈人の曰く、「我れ聞く白淨王[三三]の子有り。名けて悉達と曰ふ。巨身丈六、紫磨金色にして、三十二相八十種好有り。時に迦延那賈人の語を聞いて、心恐懼を懷く。「悉達若し我が來るを知らば、必ず當に軍を興して逆へ來り伐たれなむ」。頓に

【三二】摩訶迦旃延の出家の話。

【三三】本書概ね眞淨王と云ふ。此に白淨王と云ふ。Suddhod-ana なるべきことは一也。

中に推著せんと欲するも、是れ比丘なるを以ての故に、且らく當に佛に問ふべし」。卽ち行いて佛に問ふ。「比丘有り。江水を渡るに小しく深し。便はち罵詈して弊婢姪種と言へり。比丘の法應に罵るべきや」。佛卽ち一比丘を遣はして此の罵比丘を呼び來らしむ。比丘卽ち來る。佛比丘に告ぐ、「汝沙門と爲り、何を以て罵るや」。比丘對へて曰く、「弟子罵らず。直だ婢姪種と言へるのみ」。江の神女曰く、「看よ、此の比丘已に復罵れる（にあらざる）歟。願くは世尊、此の本末を說きたまへ。羅漢にして故瞋恚在る有りや。何を以て罵るや」。佛の言く、「羅漢復瞋恚無し。直だ口串を以ての故のみ。此の比丘曾て婆羅門爲り。婆羅門の法、喜べば罵詈して[28]「胎中の奴」と曰ふ。必ずしも瞋罵ならず。直だ自の口の慣習のみ。又復前の五百世に汝の夫爲りし時、常に汝を罵りて婢と爲す。是を以て宿識除らざるが故に復罵るのみ」。江女の曰く、「復羅漢と雖も、故口過有り。我れ羅漢を用ひず。願はくは我れ後に無上正眞道を求めて、一切を度脫すること佛の如くにして異なる無からむ」。佛比丘に語りたまはく、「汝此の女人に向つて懺悔せよ」。比丘卽ち悔す。女も亦比丘に向つて懺悔し、禮を作して各別れ去りき。復漏盡くと雖も、猶ほ麁言有り。況んや凡夫に於て而も言を愼まざるをや。是の因緣を以て是の比丘口を護ること第一なるを知る也。

[29]摩訶迦旃延那比丘安般第一と稱する所以は、千二百の弟子中、唯此の比丘と[30]羅云と有りて、能く安般を行ずること第一なり。何を以て之を知る。昔、羅云佛に從つて行く。佛善權を以ての故に、脚[31]跡を現はし、羅云をして見せしむ。羅云見已りて心に念じて曰く、「此の老公此の如きの形貌を持し、轉輪王の位を捨て、道に著いて行乞するや。何を以て羞ぢざる。我れ復行く能はず。乞ふ且らく歸り去らむ。我が祖父眞淨王故在り。何ぞ能く是の勤苦を作すと爲む」。佛卽ち羅云の心中の所念を知り、羅云に告げて曰く、「汝知るや不や、天地尙ほ無常、況んや汝が轉輪聖王をや。豈久しきを得べけんや。當に解すべし、常に非ず。形有れば皆苦、身は我が有に非ず。皆當に磨滅すべし。

tta 等の如き、蓋し輕き罵詈の語なり。邦俗に「畜生奴」と云ふが如し。「姪種」とは娼婦の兒 vesī-putta といふ義にして、印度にては現今にてもこの種の罵詈の語極めて多し。

【二七】三本並に宮本「慣」に作る。

【二八】garbhadāsa「生れながらの奴」といふ義。罵詈の語なれども、原意を失ひて、一種の驚嘆の辭として用ひらる。

【二九】mahākaccāyana

【三〇】rāhula

【三一】三本並に宮本「蹈」に作る。

田良美なり。故に大施と曰ふ也」。長者復念へらく、「天必ず眞實ならむ。重ねて來りて我に告ぐ」。即ち百千兩金を以て尸婆羅に與ふ。尸婆羅の曰く、「我が比丘の法、應に金を取るべからず」。尋で佛に詣り、其の所以を問ふ。答へて曰く、「取りて隨意に轉施せよ」。即ち此の金を受けて諸の同學に施し、叔父の爲に法を說き、卽ち道迹を得しめぬ。能く臭惡を變じて甘露と成爲す。故に福德第一と稱する也。生じてより涅槃に至るまで、未だ曾て乏しきこと有らず。般涅槃の時、身上種種の甘饍飮食を雨らす。爾ることを得る所以は、已身足り、復潤を衆生に及ぼさんと欲する故也。是を以ての故に復稱して第一と爲す。

[22]優波先比丘衆行を具足する第一と稱する所以は、此の比丘德行內に充足し、形容外に端嚴にして、表裏相應し、適く所皆悅ぶ。難陀三十相、阿難二十相、表相多しと雖も、沙門の威儀に於て悉く備ふる能はず。此の比丘の相十一なりと雖も、禮儀備さに擧り、備さに適に造るを以て、往くところとして應ぜざるは無し。長中幼年視て歡ばざるは莫し。所謂內に充つる者とは謂く、四諦の如、八正を有して眞妙に、充實の靈府未だ曾て虛耗せず。故に稱して衆行道品の法を具足すること最も第一と爲す。

[23]婆陀先比丘所說和悅にして人意を傷けずと稱する所以は、此の比丘常に口を愼み、[24]四過を犯さず。夫れ士の世に處する、斧口中に在り。身を斬ること其の惡言に由る。此の比丘是の麁獷の言に於て永く已に除盡す。常に言を擇び徐ろに語り、思ふて後に露はす。言を發し意を投ずれば、必ず歡喜せしむ。若し長老中年幼稚に在れば、其の好む所に隨ひ皆能く可悅せしむ。此の比丘を稱して能く善言すと稱する所以は、[25]比丘有り。已に羅漢を得、復漏盡すと雖も、口過有るに由る。行に因つて江水を渡り、漸く深からんと欲す。便はち惡言を發して曰く、「[26]弊婢婬種の物よ」と。時に江の神女此の惡言を聞いて心に念じて曰く、「此の比丘乃はち惡聲を發すること是の如し。正に水

【二二】upasena

【二三】bhaddasena

【二四】詳かならず。

【二五】畢陵陀婆蹉 pilindavaccha なり。智度論第二十六、摩訶僧祇律第三十比較。

【二六】vasali, vesi-pu-

福德第一と稱する也。年二十に至り出家して道を學ぶ。世尊の所に至るに、佛[一六]善來を命じ、即ち沙門と成る。四諦を思惟し、便はち羅漢を得たり。時に五百の童子有り。亦出家して道を爲し、常に尸婆羅に侍從す。尸婆羅此の五百人に衣食を給し、所在處に適ひて供養乏しきこと無し。周旋する所處、輒はち悉く供養す。[一七]羅悅祇に至るに、城南に大深山有り。山中に諸の毒蟲虎狼羅刹饒し。即ち自ら心に念へらく、「山中に於て一時避隱せんと欲す」。時に天帝釋以て所念を知り、即ち山中に於て五百の房及び僧伽藍を作り、種種供養して復一時を經たり。夏坐已に訖りて心に念へらく、「違[一八]遠すること[一九]已に久し。當に還つて禮覲すべし」。天時に大に熱し、涼を得んと欲するを念ふ。天帝之を知りて即ち雲雨を降す。少しく漿飲を思ふ。即ち甘露を降す。欲念する所のものは意に應じて即ち至る。故に福德第一と曰ふ也。尸婆羅叔父有り。外道梵志に事へ、人と爲り素より慳にして布施を好まず。時に親友有り。勸めて後世の資を作さしむ。即ち梵志數千を請じ、百千兩を施す。尸婆羅念へらく、「叔慳貪にして福を造らず。設ひ復施[二〇]惠するも良田に値せず。我れ度せずんば、永く棄捐せられむ」。便はち其の家に往き、鉢を持して乞食す。叔の曰く、「卿來ること何ぞ晩き。我れ昨日大施す。昨日來らば[二一]僧竭支を得べし」。曰く、「我れ自から竭支有り。亦之を須ひざれ」。「卿來る何の爲ぞ。」曰く、「我れ食を乞はんと欲す」。時に叔與へず。便はち身を虛空の中に現じて十八變を作す。身より水火を出す。長者心に念へらく、「此れ必ず瞋恚せり。儻くは我が家を燒かむ」。即ち呼んで下り來りて與に座せしむ。坐して曰く、「我れ食を得んと欲す」と。即ち臭穢の惡食を與ふ。即便ち之を受けて呪願して食す。食鉢中に入るに、福德の感ずる所、變じて甘露と成る。天有り上に於て歎じて曰く、「善き哉長者、乃ち此の大施を作すや。福德の施は能く過ぐる者無し」。長者心に念へらく、「我れ先に梵志に百千兩金を施すも、而も我を歎ずる者無し。今此の少し(ばかり)の惡食を施すに、乃ち歎じて善と爲す。將に妄語なる無からんや」。天復告げて曰く、「所施少しと雖も、福

【一六】「善來」は「善來比丘」ehi bhikkhū といふ佛の語にして歡迎を表す。
【一七】rājagaha—rājagṛha
【一八】三本並に宮本「違遠世尊」に作る。
【一九】「已」を麗本「以」に作る。今三本並に宮本に依る。
【二〇】麗本「慧」に作る。今三本並に宮本に依る。
【二一】saṃkakṣikā 衣の一種。

沙門豈能く知るを得んや」。卽ち家に還らんと欲す。天虛空に於て長者に告げて曰く、「但だ當に前進すべし。何を以て復還るや。如來大聖達せざる所無し。往かば必ず疑の是非を決せむ。速に往け」と。卽ち前んで佛所に至る。禮拜し問訊し訖つて便はち向の所說の如く吉凶を審かにせざるを啓白す。佛長者に告げたまはく、「吉にして不利無し。乃し此の福德の子を生ぜり。此の兒年二十、當に出でて道を爲すべし。常に五百の童子有りて共に俱に當に羅漢を得て還た父母を度すべし」。長者佛の所說を聞いて歡喜し踊躍自から勝ふる能はず。卽ち還家に歸り、餚膳を辦具し、佛を請うて舍に至り、世尊に小兒の字を賜はらんことを願ふ。佛長者に告ぐ、「正しく字を爲らんと欲するに天と爲さば人の解せざる所。正しく字して賢聖と爲さんと欲せば、凡夫の解せざる所。迦葉佛の時鬼を名づけて尸婆羅と爲す。今正に當に字して尸婆羅と爲すべし」。尸婆羅は鬼神の言語音聲に開通す。是の故に尸婆羅と字く。〔一二〕阿難般涅槃に臨む時、二弟子を度す。一を摩禪提と名け、二を摩呻提利と名く。摩呻提利とは地王也。若し道人と作らずんば當に此の閻浮提及び三天下に王たるべし。故に摩呻提利と名く。阿難此の弟子に敎ふらく、「汝〔一三〕師子渚國に至り佛法を興顯せよ。彼の國人羅刹と通す。文字を要須し、然る後に交接す。市易六十種の書あり。書中に鬼書有り。阿浮と名く。人の書音を阿羅と名く。摩呻敎を承けて彼に至り、佛法を顯揚す。是より敎迹今日現に存す。尸婆羅の鬼神を開通すること其れ亦是の如し。故に尸婆羅と名く。尸婆羅福德と稱する所以は生時兩手中自然に摩尼珠を把りて出づ。乃昔〔一四〕毘婆尸如來の時、此の比丘賈客爲り。海に入りて寶を採る。五難を經過して乃はち寶所に至り、一寶珠を得て還り持ちて佛に上つり、所生の處報を獲ること自然ならんと願ふ。是の因緣を以て生じて卽ち奇異あり。〔一五〕價二十億、初生の時、自然の寶珠耳に著いて生ず。父賈人を集めて其の價直を訪ふ。衆賈銓して曰く、「直二十億」と。尸婆羅の手珠限量有ること無し。故に無價計と曰ふ。其の寶の潤ほす所、乃はち七世に及ぶ。七世の中渴乏する所無し。故に

【一二】このこと第二卷の終に出づ。
【一三】simha-dvipa 三本並に宮本「諸」に作る。
【一四】vipassi—vipaśyin
【一五】「價二十億」の四字はむしろ「初生の時」の下にあるべきを至當とす。

王に告げて曰く、「乃昔毘婆尸如來出世の時、此の比丘長者の子爲り。時に歳節會、共に琴を彈じて倡戲を作し訖つて、便はち佛所に至る。此の長者佛の喜悦を見て、即ち耳上の華を以て佛の耳上に擧著す。佛即ち神足を以て此の花を化して虚空の中に於て變じて四柱臺と爲し。耳上故の如し。長者變を見て即ち誓願を發す。願くは將來世世佛に値ひ、所生端政にして耳上花を生ぜしめよ」と。昔の福願を以て今其の報を獲たり。王所說を聞きて心即ち開解し、前んで佛足を禮して辭退して宮に還る。善く比丘尼を誨ふる所以は、比丘尼等本と是れ多情、人比丘を見るに端政にして兼ねて耳上に花有り。心猶ほ愛樂す。此の愛情に緣つて約切の教を誨ふ。是の苦言に由つて愛著即ち解く。是の故に善く禁誡を比丘尼僧に誨ふること最も第一と言ふ也。

尸婆羅比丘福德第一と稱する所以は、尸婆羅初生の時、手に無價の摩尼珠を把つて出づ。地に墮ちて便はち言く、「世間頗る金銀七寶有り。持つて布施すべきや不や。我れ今大布施せんと欲す」。是の言を作し已るに、父母諸家皆大に驚懼し、棄捨して走る。或は是れ羅刹鬼なりと呼び、或は天神なりと謂へり。夫れ小兒生ずるや要須日月を滿足して乃ち當に言ふべし。今地に墮して便はち言ふ。是れ大に怪むべし。母情は然らず。復還つて之を看る。母に語つて言く、「懼るゝ莫れ。我れは鬼に非ず。我れは正に是れ母兒のみ」。其の父月光の曰く、「今當に兒を抱いて尼揵子の所に至り、其の吉凶を問はむ」。即ち婦と與に兒を抱いて尼揵の所に至り、狀を以て師に白す。師の曰く、「此の兒福無し。後に當に禍を致すべし」。長者の曰く、「兒の手中摩尼珠有り。何を以て無福と言ふや」。尼揵の曰く、「年八歳に至らん時、汝の家財寶盡きむ。當に此の兒の手中に在つて消滅し儩む。是に由つて皆當に餓死すべし」。長者懼怖し、深く疑惑を惟ふ。「聞く世に大沙門有り。儻し能く吉凶を知らば、當に往きて其の所に至つて此の可否を問はむ」。即ち世尊の所に往く。中路復念ずらく、「大沙門は是れ王者の種、生じて深宮に長じ、又學問せず。婆羅門等は少小より博學、尙ほ吉凶を知る能はず。

【二】 Sivali

ち定を得、四諦を思惟し、後夜に至つて卽ち羅漢を得たり。便はち虛空に飛騰す。阿難心に念すらく、「此の比丘儲屋を捨てゝ去らんに、借る所の王物恐らくは人持ち去らむ」と。便はち往いて之を看るに屋內に見えず。仰いで空中を視るに飛んで上に在るを見る。阿難佛に白さく、「天須菩提已に羅漢を得たり。今飛んで虛空に在り」。佛阿難に語りたまはく、「夫れ衣に二種有り。親近すべき有り。親近すべからざる有り。何者か親近すべき。好衣を著する時、道心を益す。此れ親近すべし。好衣を著する時道心を損するもの、此れ親近すべからず」。是の故に阿難、或は好衣に從つて道を得、或は五納弊惡に從つて道を得るものあり。竊る所心に在り。形服に拘らず。是を以て之を言ふ。天須菩提好衣を著すること第一也。

[八]難陀迦比丘教授第一と稱する所以は、舍利弗も亦教授す。普ねく四部の弟子を教授して旦より中に至り、要ず一人をして道迹に至らしむ。此の比丘は專ら比丘を教授し、羅漢を得しむ。譬へば射を善くするの人一發の箭を以て彼の賊を射、卽ち要處に中てゝ便はち起たざらしむ。此の比丘の善く要慧を誨へ、聞く者結除こり、徑無爲に至るに喩ふ。射を善くせざる者は、多箭を用ふと雖も、正に一發なるべし。身子に喩ふ。廣く慧を演ずと雖も終に一階を成す。優劣の殊格然として見易し。故に後學を教授すること最も第一と爲す也。

[九]須摩那比丘善く比丘尼を誨ふとは、此の比丘常に苦切の言を以て諸の尼僧を誡勅す。「夫れ女人は諸の情態多く、姿媚綺飾、世人を幻惑す。身形穢漏、九孔不淨にして三十六物一として貪るべき無し」。須摩那と名くる所以は、卽ち華の名也。其の生時耳上に自然に此の華有り。卽ち華を以て稱と爲す。時に頻婆娑羅王佛所に來至し、此の比丘の耳の上華有るを見て怪みて佛に問ふ。比丘の法、華を著くることを得るや。佛王に告げて曰く、「王自から[一〇]拋却せよ」。王卽ち手を以て捻じ去る。續生すること故の如し。是の如く止めず。遂に華聚を成す。王怪むこと益甚し。其の所由を問ふ。佛

【八】 nandaka 原文此の處節を分たず。

【九】 sumana

【一〇】 拋は恐らくは拋か。音交の切攪なり。

億に報ゆ。其の變是の如し。略說して行を統ぶ。其の喩亦爾り。此の比丘專ら略說を以て主と爲す。故に第一と稱する也。

[五]斯尼比丘能く廣く說法すと稱する所以は、此の比丘三十年凡夫地中に在り、廣く人の爲めに說法して義理を分別す。云何が廣說なる。或は一行に因りて而も衆行を長じ、支流繁衍、乃至無數、猶し病の相因有りて生ずるが如し。是を以て藥を設けて相從へて成ず。此の比丘は專ら剖判を以て主と爲し、漏を斷ずるを以て先と爲ず。是を以て乃ち三十年を經、方に道證を取る。寂默言を忘れ、乃ち前蹤を遺す。其の本績を錄するが故に、廣說第一と稱する也。

[六]天須菩提好衣を著する第一と稱する所以は、五百の弟子中、兩須菩提有り。一は王者種、一は長者種。天須菩提は王者種より出づ。天と言ふ所以は五百世中上化應聲天に生じ、下王者の家に生ず。食福自然にして未だ曾て匱乏せず。佛本國に還る時、眞淨王五百の釋種子に勸めて出家學道して世尊に侍從せしむ。此の比丘其の例に在りて出家す。時に佛諸比丘に約勅すらく、「夫れ道を爲す者は皆當に身を約にし、節を守り、麁衣惡食草蓐を床と爲し、大小便を以て藥と爲せ」。此の比丘佛の切敎を聞き、心に自から思惟すらく、「吾れ豪貴に生れて、衣食自然に、宮殿屋舍、彫文刻鏤、金銀の床榻、七寶の食器あり。身に金縷織成の服飾を著け、足に金薄の妙屣を履む。然も則ち猶ほ吾が意を盡さず。況んや當に[七]五納服を著くるをや。且らく當に家に還り、我が本意に適はしむべし」。念じ已りて還らんと欲す。時に佛舍衞の精舍に在り。波斯匿王の請を受く。卽ち佛所に詣り、辭退して還る。時に阿難語りて曰く、「君且らく住まりて一宿せよ」。須菩提の曰く、「道人の屋舍、床榻座席如何が止まるべき。且らく白衣の家に至り、寄止し、一宿して、明當に還歸すべし」。阿難曰く、「但だ住まれ。今當に嚴かに供具を辦ずべし」。卽ち往いて王の所に至り、種種の坐具、幡蓋、華、香、及び四燈油、事事嚴飾、皆備さに具足す。此の比丘便はち中に於て止宿す。以て本心に適し、意便は

【五】 seniya 原文此處節を分たず。

【六】 deva-subhūti

【七】 五納衣に同じ。上の尼婆比丘の下、五納の註に準ず。

卷の第五

[一]難陀比丘端政第一と稱する所以は、諸比丘各各相有り。身子に七有り。目連に五有り。阿難に二十有り。獨り難陀に三十相有り。難陀は金色、阿難は銀色、衣服光曜、金鑢履屣、琉璃の鉢を執りて城に入りて乞食す。其れを見る者有れば欣悦せざるは無し、自ら如來を捨てゝ、餘の諸の弟子能く及ぶもの無し。故に端政第一と稱す。亦「諸根寂靜」と云ふは佛諸弟子を將ゐて毘舍離柰女の精舍に至る。時に難陀外に在りて經行す。[二]柰女佛の來るを聞きて心中欣悦し、微供を設け、即ち行いて佛を請ぜんと欲し、外に於て難陀の經行するを見る。愛樂情深く、接足禮を作し、手を以て足を摩す。美姿を見ると雖も、寂として情想無し。形形相感じ、便はち不淨を失す。甘味體を潤ほし、體滿ちて則ち盈つ。不淨の溢るゝ豈心に由らんや。柰女達せず。欲想有るかを疑ふ。佛其の意を知り、柰女に告げて曰く、「疑心を生ずる勿れ。難陀却後七日當に羅漢を得べし」。是を以て之を言ふ。心變易せざるを知る也。

[三]婆陀比丘人の疑滯を解くと稱する所以は、三世諸佛皆共に八萬四千を以て行法と爲す。衆生の得道必ずしも遍行せず。衆行其の[四]所悟の處に隨つて以て宗と爲す。何となれば衆生結使同じからず。病に多少有り。垢に厚薄有り。是故に如來教を設くること若干なり。或は一藥の衆病を治する有り。或は衆藥の一病を治する有り。猶し五度相統ぶるがごとし。一行を主と爲し、衆行悉く從ふ。一行とは常名を專らにせず。病の起る所に隨つて、對藥之に應ず。若し常起を計せば、無常を以て之に對す。若し有心起を計せば、空心を以て之に對す。其の無常行を領するに當つては、萬行皆無常也。猶ほ施の八萬を造るがごとし。八萬皆施爲り。所謂略說なる者なり。猶し如來八音の中、一音八響を統べ、一響百教を統べ、一教百義を統ぶるがごとし。一一の相領すること千萬億に至る。一音萬

【一】nandika—nandiya

【二】ambapālī

【三】bhadda
原文此處分節せず。

【四】麗本「所寤」に作る。今三本並に宮本に依る。

刀を以て自から刎ぬ。正に咽の半に至るに已に漏盡を得たり。頭斷ずるに至る比、以に涅槃を取る。時に大地震動し、乃ち波旬を感ぜしむ。波旬念じて曰く、「此れ何の瑞應ぞ。乃し爾く震動するや」と。卽ち天眼を以て觀ずるに、比丘の自殘せるを見る。其の形神・所趣の爲に、遍ねく諸天を觀ずるに、其の神を見ず。復人中を觀ずるに、亦之を見ず。復三惡道の中を觀ずるに、亦復見ず。時に佛諸の比丘を將ゐて之を[二〇]耶旬せんと欲す。佛此の比丘を信解脫を得と歎ず。或は曰く、「夫れ信に至る者は命の自然に委す。尙ほ杖を執らず。何を以て自から防がむ。況んや復自から害せんや」。答へて曰く、「信じて刀を執る所以の者は刀を以て慧劍と爲し、諸結を斷ずるに擬せんと欲す。身は卽ち結の本なり。根[二一]辟すれば則ち支從ふ。身斷ずれば則ち結除こる。是を以て刀を執るは妨閡と爲らざる也。信刀を執つて疑樹を斷ずるが故に。」下の句に、「意猶豫無く、信解脫より無疑解脫に至る」と云ふもの、卽ち鈍を轉じて利と爲す也。是の義を以ての故に信解脫を第一と爲すと稱する也。

分別功德論卷第四

【二〇】「闍維」又は「荼毘」に同じ。原音は jhāpeti 又は其の類語なり。「耶旬」の「旬」は古音 pin なるが如し。「魔破旬」の māra-pāpiyā を寫せるが如き、亦準知すべし。

【二一】三本並に宮本「躃」に作る。

地大に動き、諸天上に於て讃じて曰く、「善き哉、善き哉、今日諸釋貢高を降伏せることや。此の意勝ち難し。故に地動を爲すのみ。五百の釋、道を爲す時、亦九萬九千人有りて出家して道を爲す。優波離佛に從つて戒を受けて以來、未だ曾て毫釐の如きを犯さず。是の因緣を以ての故に第一と稱す。但し是を以て更に餘事有りや。[一〇七]祇園精舍の北に一比丘有り。病を得て六年を經るも差えず。時に優波離往いて比丘に問ふ、「何の患苦する所ぞ。若し所須あらば便はち道へ」。曰く、「我が所須は說くべからず」。又問ふて曰く、「汝何物をか須ひんと欲する。若し此に無くんば當に四方より之を求むべし。若し世間に無くんば、上天に之を求めむ」。曰く、「我が所須は舍衞城中に有り。佛の敎に違ふを以ての故に說くべからざるのみ」。曰く、「但だ說け。苦無けむ」。曰く、「我れ唯酒を思ふのみ。五升の酒を得ば病便はち愈えむ」。優波離の曰く、「且らく住めよ、我れ汝の爲に佛に問はむ」。還つて卽ち佛に問ふ。「比丘の病は酒を須て藥と爲す。不審、飮むを得べきや不や」。世尊の曰く、「我が所制の法[一〇八]病者を除く」。優波離卽ち還りて酒を索めて與ふるに病卽ち愈ゆ。重ねて爲に說法して羅漢道を得たり。佛優波離を讃ず。「汝乃ち如來に此の事を問ひ、病比丘をして除差を蒙むるを得しめ、又道を得しむ。此の比丘若し度を得ずんば、後當に三塗に墮して出づる期有ること無し。汝乃はち將來の比丘の爲に禁法を說き、輕重を知らしめ、危厄を濟ふを得たり。汝眞に能く律を持す。律藏を以て汝に付す。漏失せしむる勿れ。此の藏諸藏の中最も其の內に在り。沙彌及び白衣に示すべからず」。是の緣を以ての故に復稱して第一と爲す也。

[一〇九]婆迦利比丘信解脫を得と稱する所以は、此の比丘久しく病み床に著き、乃ち、六年を經たり。諸の瞻視する者皆悉く捨てゝ去る。比丘自から念ずらく、「疾病久しきを經て、瞻視疲倦、甚だ患厭すべし。又復如來も垂愍せられず。且らく當に自ら害して以て患苦を除くべし」と。卽便ち刀を索め、刀に向つて說いて曰く、「但だ當に我を殺すべし。我れ亦當に結を斷ずべし」と。說き訖りて

【一〇七】優波離比丘に酒を與ふる話。

【一〇八】三本並に宮本「病愛」に作る。

【一〇九】vakkali

歡喜して、僉然として傾仰せしむ。次に苦楚の言を以て其の心を責切し、內愧をして肅悚として難遵の想を興さしむ。終りに明慧空無の教を以て聞く者結解し、悟智をして交養はしむ。世尊法を演ぶる、初中竟善し。滿願子亦然り。三事倶に善し。自ら如來を捨てゝ能く先んずる者無し。身子自から誓ふ、旦より中に至り、要ず一人を度して道迹に至らしめむと。目連比丘亦誓つて人を度す。四向の中に於て課一階を進ましめて然る後に乃ち食す。其の餘の比丘皆人を度す。滿願子に比すれば百の一に當らず。滿願子成道より涅槃に至るまで、九萬九千人を度す。聲聞の中に於て人を度すること最も多し。故に說法第一と稱する也。

[一〇五]優波離を持律第一と稱する所以は、昔佛本國に還り父王の請を受く。從ふ所の比丘復心精なりと雖も、容貌に表はるゝ無し。時に王釋種の豪族の子弟に出家を勸め、比丘と爲し、世尊に侍從せしめんと欲し、卽ち諸釋に宣令すらく、「其れ兄弟二人有る者は皆當に一人出家して道を爲すべし。若し令に從はずんば當に重く之を罰すべし」。時に一釋種の子有り。名けて[一〇六]面王と曰ふ。釋中の最長なり。次で應に先づ髮を下すべし。時に佛優波離に命じて其れが爲に頭を剃らしむ。重ねて告げて曰く、「此の諸釋種樂に憍り、體軟なり。汝好く徐徐に輕手もて與に剃れ。」優波離卽ち輕手復太だ輕くして著かず。時に優波離復刀刄を反して脊を以て之に用ふ。佛の言く、「復刀腹を用ふべからず」。亦曰く、「卽ち刀を以て頂上より剃り、泯然として除き盡すべからず。五百の釋子皆悉く是の如し」。佛優波離に命じて曰く、「善來比丘よ」と。卽ち沙門と成る。佛卽ち戒を授け、阿羅漢を得たり。次に五百の釋子に戒を授け、優波離を上座と爲し、手を以て五百人の頭を摩し、弟子と爲す。戒を受け訖る。次に「當に優波離を禮すべし」と。諸釋先に素より憍豪、下屈する能はず。加ふるに復是れ己の子弟、各言く、「此は是れ我が家僕、何に緣てか之を禮せむ」。佛の言く、「爾らず。法に貴賤無し。先達を兄と爲し、後者を弟と爲す。俛仰已まざれ」と。意を制して禮を爲す。卽時天

る。

【一〇五】upāli

【一〇六】mogharāja 謨賀囉惹。面王とは蓋し之をmukharājaと見たるものゝ如し。

婦白して曰く、「君先に嚴に供具を辦ぜよと約勅す。而るに今默然たり。[一〇一]何を以てか爾ることを得るや」。と。長者驚いて曰く、「我れ向に何の言說する所ぞや」。婦の曰く、「君未だ眠らざる時、所說無きや。」曰く、「我れ所說有りしを省はず」。婦の曰く、「君先に言く、我れ已に佛及び諸弟子を請ひ、九十日の所須の短乏を供へむ」。と、是の語を作さずや。長者思惟して曰く、「酒の人を誤ること乃ち斯に至るのみ。慚愧便はち當に卽請すべし。」と。明日淸旦舍に於て香を燒き遙かに世尊を請ず。一比丘有り來りて藥を索む。長者問うて曰く、「何の患苦する所ぞ」。答へて曰く、「頭痛を患ふ」。長者の曰く、「此れ必ず膈上に水有り。仰いで其の頭を攻むるなり。是を以て頭痛するのみ」。と。卽ち一呵梨勒果を施す。「但だ此の藥を服せば此の患を消すに足らむ」。比丘藥を服して病卽ち除こり愈えぬ。是の福報に緣りて、九十一劫未だ曾て病患せず。長者の家に生ず。年八十に至りて出家して道を學び、八十年を經たり。道俗の紀合して百六十。在家の時曾て[一〇二]捔力し、斯須頭痛せり。爾より常に疾患無し。是を以ての故に婆拘羅長壽第一なり」。百年の壽中に於て而も六十を加ふるものは、此の人五濁の壽命に最も奇特と爲す。其を臭穢の中に於て蓮花を生ずるに喩ふる也。阿難婆拘羅に問ふ。「何を以て人の爲に說法せざるや。四辯無しとや爲む。智慧乏しとや爲む。而して說法せざるか」。答へて曰く、「我れ四辯捷疾の智に於て不足爲るに非ず。直自から靜を樂みて憒閙を喜ばず。故に說法せざるのみ」。難じて曰く、「婆拘羅長壽者何を以て三方に生ぜざるや」。答へて曰く、「諸佛生ぜざる所以は、其の土人難化なるを以ての故なり。此の土の衆生利根捷疾、極惡勇猛にして道を取る難からず。是の故に往古の諸佛皆此の中に生ず。婆拘羅應に此に在りて成道すべし。故に三方に生ぜざるのみ」。

[一〇三]滿願子說法第一と稱する所以は、三事有りて第一と稱するを得。餘の比丘亦說法するも三事の記すべき無し。故に第一と言はず。滿願子法を說く時、先づ辯才を以て妙音を唱發し、[一〇四]衆座をして

【一〇一】原文「所以」に作る。

【一〇二】麗本「捔牛」に作る。今三本並に宮本に依る。

【一〇三】puṇṇa-mantāni-putta- pūrṇa-maitrāyaṇī-putra

【一〇四】三本並に宮本「生」に作

るに大魚の骨有り。皮肉已に盡く。便はち脇骨の上に行きて思惟して言く、「此れは是れ我が故屍なり。」即ち華を以て故屍の上に散じ、尋いで既往を惟ふに、忽然として道成る。是の因縁を以て遠遊第一と稱する也。

[九七]迦渠比丘衆を集めて說法すること第一と稱する所以は、此の比丘音辭朗達にして、聲遐邇に震ふ。其の音聲を聞いて集まる衆無數、卽ち爲に法の奥美の義を演說す、「諸人當に知るべし、如來の出世は値遇すべきこと難し。四諦甘露亦聞き得難し。諸人時に及んで當に眞諦を思惟し、十二牽連の縛を除去して涅槃を得べし」。此の比丘恒に佛を助けて化を揚げ、常に此の教を以て未だ地に墜ちしめず。是の因緣を以て衆を集めて說法する音聲第一と稱する也。

[九八]婆拘羅壽命極長と稱する所以は、曩昔曾て六萬の佛を供養し、諸佛の所に於て常に慈心を行じ、蜎飛蠕動、形命を有する類に恒に慈愍を加へ、毫釐も殺害の想有ること無し。是の慈福に由つて今其の報を獲たり。佛阿難に告ぐ、「我が如き今日皮身清淨にして我に過無く、猶し蓮華の泥水に著せざるが如し。正壽八十なり。(然も)婆拘羅の壽百六十なるに如かず。如來世に隨つて衆生に適せんと欲す。其の異を現ぜず。故に壽八十なり。婆拘羅前宿世の慈心の福を受く。故に年壽加倍の報を得たり」。或ひと問ふ、「但だ慈心を以て便はち此の如きの壽を得るや。復更に餘有るや」。曰く、[九九]「有り。昔[一〇〇]毘婆尸如來世に出づ。時に十六萬八千の比丘有り。遊行し教化す。時に長者有り。明に居して貞修し、稟性良謙、飲酒を好まず。時歲節會、少しく相勸勉し、薄飲すること少多なり。輒はち酒勢を以て世尊に行詣し、禮拜問訊すること訖りて、便はち佛及び諸弟子を請ふ。「願はくは我が九十日の請を受けたまへ。比丘疾病の者は皆我が家に詣りて醫藥を取らしめよ。所須の物皆來りて之を取らしめよ」と。語り訖りて家に還り家内に約勅して曰く、「我れ已に佛及び諸弟子を請へり。四事の供養皆當に辦具すべし」と。約勅し竟りて便はち睡眠す。眠ること久しく還覺む。其の

【九七】 kaṅgā か
【九八】 bakkula
【九九】 婆拘羅過去生の物語。
【一〇〇】 vipassī—vipaśyin

[九一]曇摩留支遠遊を好むこと第一と稱する所以は、其の事由有り。佛在世の時一の長者有り。曇摩留支と字す。佛所に來至し、禮し訖りて問訊す佛の言く、「曇摩留支別れて來大に久し。乃能く相見えぬ」。人有り。佛に問ふ、「不審、何を以てか別れて來大に久しと言ふや」。世尊答へて曰く、「汝之を知らんと欲するや」。答へて曰く、「知らんと欲す」。佛の言く、『我れ昔阿僧祇劫の時に世に一佛有り名けて[九二]錠光と曰ふ。我れ時に梵志爲り。字けて超[九三]述と曰ふ。時に錠光佛方に城に入らんと欲す。我れ卽ち中路にして相逢ふ。佛光の相暉布するを見、卽ち歎じて曰く、世尊の光相明かなること日月に踰ゆ。世尊の德は乃ち二よりも隆し。世尊の心は仁慈母より過ぎたり。顧みて惟ふに形影以て之に供ふる無し。今正に是れ時なり。福田良美以て根を植うべしと。地少しく泥なるを見、佛足を汚さんことを恐れ、卽ち髮を解いて泥上に布き、佛をして蹈んで過ぎらしむ。佛卽ち記して曰く、汝勇猛なること乃ち爾り。却後阿僧祇劫、汝當に佛と作り、釋迦文と字けむ。時に邊に一梵志有り。[九四]却つて恚心を起して曰く、「此の人畜生と異ること無し。乃ち他の頭髮の上を蹈みて過ぎ去る」と。是より以來阿僧祇劫、常に畜生中に墮す。復大海中に在りて[九五]摩竭魚と爲る。身長七千由延、時に五百の賈客有り。船に乘り、海に入りて寶を採る。此の大魚の船を噏すに値ふ。口に入らんと欲するに垂として、五百人惶怖して各所事を稱す。時に賈客の主衆人に語つて言く、今世に佛有り。釋迦文と名く。人の危厄を濟ふこと復是れに過ぎたるは無し。我等名を稱して冀ふらくは得脱を蒙らむと。卽ち聲を齊しうして稱へ喚ぶ。魚佛名を聞きて本識由存し、卽ち自から惟うて曰く、「釋迦文佛已に世間に出づ。我が身云何の故に魚中に在るや」。と。卽ち還水に沒す。五百の賈客安隱にして歸る。時に魚卽ち半身を[九六]沙潬上に出して、飲まず、食はず、二七日を經たり。命終つて長者の家に生じて子と作り、曇摩留支と字く。今方に來つて吾れと相見ることを得たり。是を以て之を久遠と稱するのみ』。留支此の本末を聞いて卽ち海邊に向つて故屍を求む。海邊を見

【九一】dhammaruci

【九二】dīpaṃkara

【九三】三本並に宮本「術」に作る。梵志の名普通 sumedha として傳へらる。今超述と云ふは、超は越、述は術ならむ。而して vāseṭṭha—vāsiṭṭha と見るべきが如し。

【九四】三本並に宮本「卽」に作る。

【九五】makara

【九六】麗本「壇」に作る。今三本並に宮本に依る。

之に居る。塚間に樂む所、唯鬼有るのみ。兼ねて狐狼烏鵄の屬有り。今當に慈三昧に入つて以て彼の類を濟はむ。是を以ての故に復塚間に居す。是の因縁を以て常に塚間を樂み、人中に處せず。故に第一と稱す。

[八四]盧醯羇比丘恒に草蓐に坐する第一と稱する所以は、此の比丘常に草蓐に坐して愛心を除去す。云何が愛を除く。復金床玉[八五]枕と雖も都て愛着無し。或は復說て曰く、「若し人の妙座を施す者有るも、亦草座を施すが如きと異無し。愛心既に盡き、諸結亦盡く。便はち手から草を執つて草に向つて禮を作す」。人有り。問うて曰く、「何を以てか草に向つて禮を作すや」。答へて曰く、「我れ此の草に因りて榮飾の心盡く。道を得ること之に由る。卽ち是れ我が師なり。故に向つて禮を作すのみ。五百の獼猴天上に生ずるを得、亦天の文陀羅花を故屍に散じ、(曰く)屍に由つて天に生ず。故に來つて散華す」。夫れ貴は必ず賤を以て本と爲す。是の因縁を以て草蓐に坐する第一と爲すと稱す。

[八六]優鉗摩比丘人と語らず地を視て行く第一と稱する所以は、此の比丘常に口過を患ひ、將に之を改めんと欲す。自から思惟して曰く、「正に此の口に坐して天人中に生じ、三塗地獄に啾吟喚呼し、五道に困憊して苦を更ふること無量なり。我れ今當に[八七]慕魄太子の如く、誓を結して言はず。[八八]四過三殃何に由てか生ぜむ」。既にして便はち言はず。端視して行く。佛其の能を奇とし、爾して每に諸比丘に向つて其の德を稱美す。阿難に語つて曰く、「此の如きの比丘宜しく識錄に存し、以て率ゐ來りて薄すべし」。是の因縁を以て之を第一と稱す。

[八九]一心比丘を三昧第一と稱する所以は、此の比丘昔曾て定を習ひ、麁を硏めて精に至る。今定功既に立ち、行遊塵の若し。坐して想を忘れ、想を忘れて理足る。其れ如何が喩へむ。猶し人有り。百味食を食ひ、意飽滿するを以て更に食想無きが如し。復行步進止すと雖も詎ぞ感ぜむ。而る後[九〇]白に應じて而る後動くのみ。定に依つて字を立つ。故に坐起行步三昧に入ること第一と曰ふ也。

【八二】 uttara
【八三】 麗本「幻危」に作る。今三本並に宮本に依る。
【八四】 rohiṇi
【八五】 麗本「机」に作る。今三本並に宮本に依る。
【八六】 ukkamaṇika
【八七】 安世高譯佛說太子慕魄經、竺法護譯佛說太子沐魄經。
【八八】 四過、三殃詳かならず。後勘を俟つ。
【八九】 ekavihārika か。
【九〇】 「白に應じて」とは人の傍より助言する、その言葉に隨つての意なり。

の一たび聞いて自ら思を專らにする能はざるを以てなり。此の比丘一たび佛敎を聞いて卽ち能く履行し、意を專らにして捨てず。六年にして結を盡せり。前の離越は禪定に樂遊し、行止異らざるも、樂習事殊なるが故に、各第一と稱す。

[七八]陀多索比丘空を樂むと稱する所以は此の比丘屋に入つて內空を解し、屋を出でて外空を解す。內空は識に喩ふ。外空は身に喩ふ。屋に入つては識空に達し、屋を出でては身空を解す。已に內外空を了す、諸法亦是の如し。此の比丘空敎を說くを聞いて戢めて心懷に在り。屋に入つて空を見、卽ち身識に達す。餘の比丘は結盡きて然る後空に達す。空心獲難し。其の先に得るを貴ぶが故に第一と稱す。

[七九]尼婆比丘[八〇]五納を上と爲すと稱する所以は、此の比丘身の穢漏三十六物貪貴すべき無きを觀じ、此の身を厭賤するが故に、賤物を以て自から障ゆ。或は說て曰く、夫れ衣に親近すべき者有り。親近すべからざる者有り。何者か親近すべき。惡衣を著し、人をして羞慚自から愧ぢしむ。是れ親近すべし。好衣を著し人をして自大[八一]綺雅ならしむ。是れ親近すべからず。弊衣行を助く。是を以て五納に著す。此の比丘、善能(よ)く內外相況(たと)ふ。故に第一と稱す。

[八二]優多維比丘常に塚間を樂むと稱する所以は、此の比丘は阿難の弟子なり。先師道を得、心に自から念じて曰く、「此の身流轉、處として更へざる無し。天上に在る時、服御自然なり。今以て捨棄す。若し人中に在りて轉輪王と爲り、七寶導從せんも、亦復過去す。或は畜生に在りて恒に草棘を食ふも、此亦過去す。若し餓鬼に在りて融銅を食と爲し、或は地獄に在りて刀劍を對と爲さんも、諸の此の罪形皆以て過去す。今人身を得て此の分を齊しくし畢る。古今の貴ぶ所、皆是れ棄物なり。幻[八三]色の形一として貪るべき無し。俱に當に棄捐すべし」。と便はち塚間に止まりて復念じて曰く、「正に樹下山澤に在らんと欲するも、皆生民の貪ぼる所、唯塚間有り、人の樂まざる所、是を以て

【七七】三本並に宮本「粲」に作る。

【七八】dāsaka か。

【七九】nimbha

【八〇】五納衣とは出家に許されたる五種の衣、釋氏要覽上に十誦律を引いて云く、一、有施主衣、二、無施主衣、三、往還衣、四、死人衣、五、糞掃衣。此に自から五種有り。一、道路棄衣、二、糞掃處衣、三、河邊棄衣、四、蟻穿破衣、五、破碎衣、又五種有り。一、火燒衣、二、水漬衣、三、鼠咬衣、四、牛嚼衣、五、嬭母棄衣。以上の衣は天竺の人諱忌の故に之を棄つ。以て用に任へず。義糞掃に同じきが故に、共に納(つゞ)りて衣と成す。糞掃衣と名くる也。

【八一】麗本「奇」に作る。今三本並に宮本に依る。

[七二]金毘羅比丘を言ふ所以は、常に七家に食を乞ふ。七を過ぐるを得ず。然る所以は誓を立てゝ七を限るが故也。乞食の時、福をもて衆生を度せんと欲し、專心道を念じて貪想有ること無し。若し好惡を得るも、以て增減せず。次に隨つて乞食し、貧富を擇ばず。若くは一家二家食を得る時、更に更に布施する者有りて、足らば則ち止む。足らずんば便ち受く。若し七家に至りて食を得ずんば便はち所止に還りて思惟し道を行ふ。明日當に某家に至り、某家に至らずと念はず。都て分別の想無し。故に七家沙門と名くる也。還れば則ち靜坐し、心を斂めて道に在り。故に金毘羅七家に於て乞食第一と爲す也。

[七三]堅牢比丘は常に山澤閑靜の處に居するを行と爲し、難提比丘は常に乞食を以て耐辱を行と爲し、金毘羅比丘は七家乞食を行と爲し、施維は一處食を以て行と爲し、十二頭陀各一行に居し、[七四]浮彌比丘は三衣を守持して食息を離れず。或は曰く、三衣を造るは三轉法輪を以ての故に。或は云く、三世と爲す。或は云く、三時の爲の故に、故に三衣を設く。冬は則ち重きものを著、夏は則ち輕きものを著、春秋は中なるものを著る。是の三時の爲の故に、便はち三衣を具す。重きは五條、中なるは七條と爲し、薄きものは十五條、若し大寒の時は三衣を重ね著て以て之を障ゆべし。或は曰く、亦蚊虻蠓子の爲の故に三衣を設く。是の緣を以ての故に常に持して忘れず。故に第一と云ふ。[七五]婆差比丘を稱する所以は、本と家に在りし時、常に家を以て患と爲す。出家して道を求め常に露坐に在り。若し房室に入れば常に氣閉に苦しむ。口を掩はるゝに如似たり。是を以て常に露坐を求めて思惟し道を行ず。然る後身體調和し、氣息通暢し、道を行ずるに閡無し。是の因緣を以て婆差を露坐第一と稱す。

狐疑[七六]離越を常に樹下に處すと稱する所以は、凡夫地に在りて禪定を求めんと欲し、樹下に處在し、依倚し[七七]計意し、以て縛結を除く。餘の比丘亦樹下に在りて坐禪するも、稱せざる所以は、其

【七二】kimbila 原文此處節を分たず。

【七三】daḷha か。

【七四】bhūmija

【七五】vasabha-vṛṣabha

【七六】revata 前の離越と異るが故に狐疑なる特稱を附せり。

是の因緣を以て[六六]朋耆奢能く偈頌を造り、如來の德を讃ずること最第一と爲す。
[六七]拘絺羅を稱して四辯第一と爲す所以は、凡そ聲聞には四辯必ずしも具足せず。或は法辯有りて義辯無し。或は義辯有りて法辯無し。或は應辯有りて辭辯無し。或は辭辯有りて應辯無し。拘絺羅盡く此の四辯を具す。舍利弗、迦旃延にも亦四辯有り。稱して最と爲さざる所以のものは身子は自から智慧を以て主と爲す。迦旃延は自から撰集を以て主と爲す。故に各四辯を稱せざるのみ。復四辯ありと雖も、亦拘絺羅に及ばず。拘絺羅は但だ一句の義を辯じて七日盡きず。況んや復四辯をや。豈計量すべけんや。此の事を以ての故に四辯第一と爲す。
[六八]難提比丘を乞食第一と稱する所以は、餘比丘復乞食すと雖も、或は戒を具せず。或は貪心有り。或は左右を顧視し、心專一ならず。或は寒暑を避く。然るに此の比丘乞食の時に當りて都て此の事無し。乞食既に精、施者に福多し。今故に喩を引き、以て大小を況ふ。人有り射法を問ふ、「一人は百歩にして[六九]玄毛を射ると、一人は地を射て塵の出づると、何れの者か難しと爲ん」。答へて曰く、「玄毛難しと爲す。射ると雖も地に著かず。此れ言ふに足らざる也」。若くは乞食に施し、若くは衆僧に施す。何れの者か大なりと爲む。眞の[七〇]阿練に施すは玄毛に中るに喩ふ。眞を得ざるに施すは其の空を射るに喩ふ。其の事難しと雖も、得有り、失有り。箭地に著く者は衆僧に施すに喩ふ。毛を射るは精なりと雖も、失ふもの多し。地を射るは易しと雖も、未だ曾て地を失はず。福田の地厚きが故に增減無し。阿練精麁の故に得失有り。難提精を得るが故に第一と稱する也。
[七一]施羅一坐一食と稱する所以は、此は頭陀一行を謂ふ也。夫れ阿練の法、或は食を乞ひ、或は樹下に坐し、或は獨處に閑居す。今此の一坐一食とは早起より日中に至り、若し檀越食を施さば、多少を問はず、其れ一處に於て坐食するのみ。若し食未だ飽かず、坐未だ移さずんば、更に食し得べし。若し已に起たば、復食するを得ず。常に一處に食して而も捨離せず。故に施羅を稱して第一と爲す。

【六六】aggaṃ paṭibhānavantānaṃ
【六七】koṭṭhita, kauṣṭhila
【六八】nandika-nandiya
【六九】三本並に宮本「髦」に作る。
【七〇】araṇya 前註に準ず。
【七一】sela

に投ず。王女を失はんを懼れ、詐作りて視ず。人皆妙と言ふ。王の言く、「見ず。若し審かに妙ならば更に復之を爲せ」。朋耆念じて曰く、「若し王の教に順はずんば必ず此の女を失はむ」。一に情を果さんと規す。朋耆死を冐して復緣る。既にして幢頭に至り、顧みて女の面を視、心自から惟うて曰く、「何ぞ此の人に坐して乃ち斯の困に至るや」と。心懼れ形慄ひ、自から全からざるを恐る。女人虛妄何の用か此れ爲さむ。佛此の人の必ず濟度すべく、若し救はずんば當に三塗に墮すべきを知り、目連に告げて曰く、「汝神足を以て彼の危厄を救へ」。目連、教を奉じて即ち往いて變を現ず。虛空の中に於て結加趺坐し、復幢下に於て七寶の階を現ず。餘人見ず。朋耆獨り視る。徐ろに梯閒に於て七匝して下る。神足の接する所、內安くして外危し。王衆人と甚だ奇異なりと爲す。王手づから自ら女を牽いて以て朋耆に付す。朋耆の曰く、「此の虛詐の物を用ひず。世人を誑惑し、淸[六五]直を迷誤し、國を亡ぼし、家を破ること之に由らざるは莫し」。即ち目連に尋いで世尊に往詣す。世尊告げて曰く、「善來比丘」。便はち沙門と爲る。爲に四諦を說くに即ち應眞を得たり。喜情中に發して言に形はる。便はち頌偈を作つて世尊を讚ずらく、

清淨十五日　五百の比丘集る。
已に諸の結使を斷じ　仙人習を受けず
猶し轉輪王の如し　群臣普ねく圍遶し
四海と及び地と　典る所表有ること無し。
人を降伏すること是の如し。　導師上有ること無し。
諸の聲聞を將護し　三明結の性を懷る。
一切世尊子　塵垢の穢有ること無し。
已に愛欲の網を破る。　今星中の月を禮したてまつる。

【六五】三本並に宮本「眞」に作る、

得たり。佛諸比丘に告ぐ、「自今以後、若し病者有らば、當に相瞻視すべし。」時に世尊顧みて諸比丘に謂く、「誰か能く常に病者を瞻視する者ぞ。唯識比丘有るのみ。識比丘常に[六一]五事を以て病者を瞻視す。云何が五と爲す。良藥を分別すると、亦懈怠せず、先に起き後に臥すと、恒に憙言もて談じ、睡眠を少くすると、法供養を以て飲食を貪らしめざると、堪任して病人の與に法を說くと、是を識比丘此の五法を以て病人を瞻視すと謂ふ。未だ曾て差えざるもの有らず。所以は何。此の比丘乃ち前世の時、曾て五百世、醫と爲り、善く方藥を解し、聲を聽き色を察し、病の根原を知り、兼ねて四事を以て病者を瞻養す。是の因緣を以て識比丘瞻病第一と稱する也。

[六二]朋耆奢比丘能く偈頌を造ると稱する所以は、此の比丘前に長者爲りし時、人と爲り天才聰[六三]明、物に觸れて讚頌す。時に出でて行遊し、一技家の女に遇ふ。形容端正にして世に之れ希有なり。之を視て情欣び、便はち之を納れんと欲す。歸りて父母に白す。啓するに[六四]前見を以てし、父母に願ふ、「我が爲に娉索せられんや不や」と。父母悅びず。「卿の族姓子如何が趣を改めて先人の風を毀らんや」。其子の意猛にして重ねて復啓して曰く、「若し我が爲に納れずんば世に存する能はず」。父母子を見て言く、「重ねて呵制するに忍びず。汝に隨へ。我が知る所に非ず」。即ち自から人を遣はし、女の家と相聞す。女の家は是れ技、種種の技を先と爲す。便ち來使に答へて曰く、「君が財を貪らず。唯能く衆技兼ね備ふる者便はち持して相與へむ」。朋耆之を聞き、即ち技工に詣り、諸技を學ぶ。數旬を經ずして衆技兼ね備はる。復重ねて信を遣はす、「所學已に備はる。便はち相惠むべし」。主人答へて曰く、「若し伎倆らば當に王に詣りて試むべし」。時正節に在り。王衆技を集めて普ねく藝術を試む。若し最も勝れたる者は金千兩を賜ふ。王亦此の女の妙なるを聞き、之を宮裏に納れんと欲す。之に技法を試む。緣幢を最と爲す。幢を竪つること高さ四丈九尺、下に刀劍を置く。刃皆上向し、間趣に足を容る。時に朋耆幢に緣り、上空に於て旋ること七匝し、便はち下り、之を空地

【六一】瞻病の五事又は五法。
【六二】原文此處分節せず。朋耆奢又は鵬耆奢 vaṅgīsa
【六三】麗本「朗」に作る。今三本並に宮本に依る。
【六四】三本並に宮本「所見」に作る。

の人身（の間）なり。若し精誠を以て受くれば、卽ち漏盡の證を得べし。此の上座を以て明證と爲すべし。復上座爲る所以の者は、善能く法を說くを以て、衆人に適可し、衆に推擧せらる。故に上座爲り。是の因緣を以ての故に上座籌を受くること第一と稱す。

[五六]賓頭盧能く外道を降伏すと稱する所以は、[五七]毘舍離城中に質多長者有り。每に六師の貢高にして自から大言するを患ふ。「瞿曇沙門自から稱して尊と爲す。當に其れと與に技を捔すべし。若し彼れ一を現ぜば、我れ當に二を現ずべし」。是の如く轉倍して三十二に至る。時に長者普ねく內外の僧を請ひ、供養し訖りて大幢を立つ。高さ四丈九尺、栴檀の鉢を上に置き、唱へて言く、「其れ能く手を引て此の鉢を取る者は便はち第一たるを得む」と。時に賓頭盧心に自から念じて曰く、「今當に神足を現じ、六師等をして默然降伏せしむべし」。又念じて曰く、「世尊常に諸弟子を誡めて神足を現ずるを得ざらしむ。（されど）若し今現ぜずんば、懼らくは彼永く以て罪を得む。若し現ぜば、懼らくは尊敬に違せむ」。俛仰已まず。便はち神足を現ず。手を伸べて此の[五八]旃檀の鉢を取る。虛空に昇在して城を遶ること七匝、還つて座上に在り。諸の梵志に謂て曰く、「卿等復其の二を現ぜよ」。時に大鬼將軍名けて[五九]半師と曰ふ。六師に謂て曰く、「促かに其の二を現ぜよ」。時に六師の徒衆湊む所を知る莫し。是を以て之を言ふ。賓頭盧外道を降伏すること最も第一爲るを知る也。

[六〇]識比丘を稱して瞻病第一と爲す所以は、時に祇陀精舍に一比丘有り。病疾困篤、久しく床褥に寢ね、脊下に蟲出で、呻號すること終日なり。佛諸比丘と房舍を按行し、此の比丘の困篤此の如くなるを見て問ふて曰く、「人有りて汝を瞻視するや不や」。曰く、「無き也」。又問うて曰く、「汝先の時頗る他の病を瞻視せしや不や」。答へて曰く、「不也」。佛の言く、「汝他の病を視ず。云何が人の看んことを欲望するや」。是に於て如來僧伽梨を襞みて、自手もて摩捫し、其れが爲に澣浣す。時に天帝釋亦來りて佐助す。世尊病人を瞻視したまふに、是に於てか病比丘世尊の恩を蒙り、卽ち除愈を

これに依る。

【五六】 piṇḍola-bharadvāja

【五七】 鼻奈耶第六に同類の說話あり。

【五八】 「栴檀」又「旃檀」に作るも亦得たり。

【五九】 又は「半師迦」「般闍迦」pañcika 藥叉の名。雜寶藏第九。孔雀王經上。有部藥事一〇。

【六〇】 khema

即ち爲に解說す。「比丘當に知るべし、眼は色を緣じて痛を起し、痛を緣じて想を起し、想を緣じて來往し、識を生じ、分別して染著心を起す。此の染著に於て永く已に捨離す」。諸比丘此の語を說くを聞いて意猶ほ[四七]快然たるがごとし。迦旃延諸比丘の意了せざるを觀、即ち喩を引いて曰く、「此に人有り。牢固の物を求めんと欲せば、反つて根本を捨てゝ枝葉を取り、牢固を得と爲んや不や」。曰く、「得ざるなり」。君等亦是の如し。佛近く此に住す。而も反つて問はる。豈本を捨てゝ其の末を取るに非ずや」。諸比丘即ち往いて佛に問ひ、迦旃延の解する所を稱す。「是の如く不審、理應に爾るべきや不や」。佛答へて曰く、「迦旃延の所說の如し。等しくして異有ること無し」。是の因緣を以て復第一と稱す。

[四八]君頭波數行籌第一と稱する所以は、凡そ籌とは人數を記錄し、誠實爲るや不やを知る。[四九]若し誠實に籌を受くれば則ち其の福を得、虛妄にして受くれば罪積むこと彌大なり。漢に言つて籌と曰ふ。天竺に[五〇]舍羅と爲す。舍羅とは亦壞盡と名く。福なれば則ち罪盡き、罪なれば則ち福盡くる也。何を以て其の然るを知るや。昔[五一]阿難邠坻の女外[五二]尼揵國に適く。佛に爾るべきや不やを問ふ。佛の言く、「宜しく知れ、是れ時なり。往くに必ず益有らむ」。女既に到り、遙かに世尊を請ふ。佛其の意を知りて即ち默然として請を受く。[五三]阿難に勅して曰く、「明當に釋[五四]摩男の請を受くべし」。と。揵を鳴らして衆を集め、神通を行じて舍羅す。時に上座君頭未だ神通を得ず。行籌を聞きて請ふ。「自ら鄙しうして未だ神通を得ず。顧みて惟ふに、形影衆の座首に在り。由老野狐の紫金山に在るがごとし。進退惟ひ慮るに、正に籌を受けんと欲すれば通例に在らず。正に受けざらんと欲すれば居、上座爲り。八歲の沙彌も倘ほ神通を得たり。積年の功獲る所無し。計り惟ふこと此の如し。何の用か[五五]存せん」。感結して籌を受く。還つて之を授くるの間に、霍然として漏盡く。若し虛妄を以て籌を受くれば、人の身九十萬の毛孔有り。此を以て數と爲し、受くるを得ざること、此の如くの數

【四七】麗本「快」に作る。今宋元宮本に依る。
【四八】kuṇḍadhāna 原文此處節を分たず。
【四九】麗本「答」に作る。今宮本に依る。
【五〇】śala-śala
【五一】anāthapiṇḍika 給孤獨長者の女。
【五二】sumāgadhā と名く。
nigaṇṭha
【五三】增一阿含第三十經に出づる同樣の說話と比較せよ。
【五四】mahānāman
【五五】麗本「存爲」に作る。三本並に宮本「存焉」に作る。今

で迎へ、入れて爲に餚饍を設く、曰く、「日時已に過ぐ。法として食すべからず」。父母の曰く、「今日已に爾らば、明日早く來れ」。即ち所止に還る。還り去るの後、父母諸婦に約勅すらく、「兒明當に來るべし。汝等好く自から汝の容服飾を莊嚴し、各妙技を盡して、能く我が兒をして還つて白衣と爲らしめば、汝に於て大に佳し」。復藏吏に勅し、諸の珍寶を出さしめ、金銀七寶各各別聚し、兒の意動いて還つて俗に染せんことを冀へり。明日食時鉢を執りて還る。座に就て坐し訖る。諸婦綵女各姿態を設け、或は華香を散じ、或は衣を拂ひ[四三]華を捻ず。婆羅の曰く、「諸妹何ぞ煩勞するに足らんや」。諸婦忿じて曰く、「我等を持つて妹と作す。將に還る理無からんとす」。父母に語つて曰く、「此の寶物を用て（何か）爲む。此れ但だ人を誤るのみ。是に由て災禍を致す。何ぞ之を山澤に棄てざるや」。父母諫めて曰く、「道德心に在らば何ぞ必ずしも出家せむ。[四四]質多長者亦家に在りて得道せり」。曰く、「未だ家に在りて漏盡せるものを聞かず。質多の得る所、由一生の分在る有るがごとし。何ぞ貴と爲すに足らんや」。復豪珍美玉と雖も之を棄つること遣すが若し。故に出家第一と稱する也。

[四五]迦旃延善く義を分別すと稱する所以は、將に法を撰ばんと欲し、心中に惟うて曰く、「人間憒閙にして精思專ならず。故に地中に隱るゝこと七日、大法を撰集して已に訖りて佛に呈す。稱して曰く、「善き哉、聖の印可する所、以て一藏と爲す。此の義微妙にして外道を降伏するが故に第一と稱す。

又復第一と稱すとは、世尊[四六]釋翅國に至り、一樹の下に坐して一杖を執る。釋種咸な來りて佛を觀る。「往棄てたる我が女、相好前に勝る。今意復云何」。答へて曰く、「意世間に著せず。俗に染まず」。梵志曰く、「善き哉。」解を受けて還り去る。後に諸比丘此の語を解せず。迦旃延に問ふ。「佛仁者を辯才析理解義第一と稱す。世尊の梵志に答ふる所不染不著とは其の義云何」。時に迦旃延、

【四三】麗本「草」宋本「革」今元明本に依る。

【四四】質多 citta 質多羅 citra 雜阿含第二十一等。

【四五】mahā-kaccāyana

【四六】cātumā

ならんと欲す。便はち牛屎を和して飲んで以て齋に當つ。六群の語を聞き、以て自明する無く、即ち佛前に於て此の糞藥を吐く。六群慚愧し、二人は感結して漏盡き、二人は還つて白衣と爲り、二人は面孔沸血を出し、命終して阿鼻に墮す。齋講とは部衆を齋集し、所宜を綜習す。善能く勸成するが故に第一と稱する也。

[三八]小陀羅婆は主として房室を立て招提僧を興し、共に其の功を成る。復別に稱せざる也。

[三九]賴吒婆羅比丘豪貴と稱する所以は、是れ王者の種、人と爲り聰明博達にして少にして好んで學を追ふ。佛出世して愚蒙を開化すと聞き、即ち祇洹精舍に詣り、法言を聽採し、教を聞て神に入り、出家を思欲す。歸つて父母に白す。父母聽さず。心に自から惟ふて曰く、「一切衆生盡く是れ父母なり。豈獨り二人のみ是ならんや」。と。念じ已りて便はち佛所に至り、沙門と爲らんことを求む。佛問ふ「父母聽せしや不や」。曰く、「聽さゞる也」。兒國王爲り。復王に白して道を爲んことを求む。王亦聽さず。心中思惟すらく、「要めて方便を作し出家して道を爲さん。父母正に一子有るのみ。目前斯須の間をすら離るゝを欲せず。一獨榻を求めて父母の前に坐す。不飲不食六日を經たり。父母惶怖し、懼らくは其子を殺さむ。若し此の兒を殺さば此の死兒を用て（何とか）爲む。聽して當に之を放つて道を爲さしめむと。兒と[四〇]要して曰く、「今汝を放ちて道を爲さしむ。當に數還歸すべし」。父母已に許す。便はち佛所に至る。問ふて曰く、「汝を聽せりや」。曰く、「已に聽さる」。佛便はち命じて曰く、[四一]「善來比丘。」手から其の頭を摩す。鬚髮自から落ち、剃髮七日なる者の如し。袈裟身に著き、便はち沙門と成る。爲に四諦を說くに、便はち羅漢と成る。本の要を以ての故に、尋いで家に還歸す。衣を著し、鉢を持して門に在りて立つ。時に婢米を淘ぐ。將に[四二]泔を棄てんと欲するに鉢を舒べて飲まんことを索む。婢頭を擧げて是れ大家なるを知り、便はち入つて白して曰く、「郎君外に在り。」父母欣悅し（曰く、）「是れ兒なるを審れる者、汝を放つて良人と爲む」。即ち出

【三八】 darbha

【三九】 raṭṭhapāla

【四〇】 「要」は「約」と同じ。約束なり。

【四一】 ehi bhikkhu

【四二】 米のかしみづ。

動くを見て、皆是れ蟲なりと謂へり。優劣の殊る自から來る有り。是を以て之を言ふ。天眼第一なり。

[三〇]離越比丘坐禪入定第一と稱する所以は、昔[三一]波斯匿王請ふて坐禪せしめて一樹の下に在り。時に王宮に入りて食せんことを請ふ。六年を經歷して他に周旋せず。正しく移して他樹に在らしめんと欲するも、樹神聽さず。何を以て驗と爲す。將に移らんと欲する時樹神便はち散華して供養す。是を以て驗と爲し、其の聽さゞるを知る。何を以て其の意他念無きを知る。時に[三二]拘絺羅來りて離越の所に至りて曰く、「何ぞ好樹の下に坐せずして、此の枯樹に坐すると爲むや」。答へて曰く、「仁を四辯第一と名くるは、能く法義を分別し及び辭に應ずればなり。不審、枯樹を分別す。是れ何ぞ中を辯ぜんや。我れ此に坐せしより已向六年、生と枯とを分たず。仁者方に至りて而して便ち分別せり。王宮に入らんことを請ひ、日日に供養し、諸の夫人をして各自當直せしめ、六年[三三]以滿、布施發遣す。[三四]達嚫の時に當り、主人の字を識らず。王の曰く、「六年請を受けて人の名を識らず。何の定か乃ち爾る」。答へて曰く、「我れ樹下に坐して尙ほ樹の枯生を知らず。況んや人の字をや」。禪福を供養して其の德至淳、王の所願に隨つて涅槃に至るべし。福田の良なり。故に樂禪第一と稱する也。

[三五]他羅婆摩比丘勸率して齋講を施立すとは佛僧事を委ぬるに、部を所宜に分つ。契經と契經と一處、毘尼と毘尼と一處、大法と大法と一處、坐禪と坐禪と一處、高座と高座と一處、乞食と乞食と一處、敎化と敎化と一處、事に隨つて部分各相從はしむ。若し[三六]檀越來り請ふもの有れば次を以て差遣し、高下を問はず。若し私請有れば、此の例在るを聽さず。時に檀越請ひ盡して六群の比丘次で貧家に値して恨を懷いて還る。佛に向て怨んで言く、[三七]「摩羅に欺かる。自ら好處を受け、貧家に遣はさる。豈是れ平等ならんや」。佛摩羅に命ず、「卿實に爾るや」。答へて曰く、「不なり」。時に食無く日差中

【三〇】 revata
【三一】 pasenaji
【三二】 mahākoṭṭhita—mahākauṣṭhila
【三三】 「以滿」は「已滿」に同じ。
【三四】 dakṣiṇā 布施の義。
【三五】 darbha-malla-putra—dabba-mallaputta 陀羅驃摩羅子とするものあり。
【三六】 dānapati 施主の義。
【三七】 malla

ならば、復成ずるを得るや不や」。答へて曰く、「成らず」。「若し緩ならず、急ならず、絃柱相應ぜば妙音を成ずるを得るや不や」。答へて曰く、「成ずるを得」。佛の言く、「行も亦是の如し。急ならず、緩ならず、其の中適に處し、和調所を得ば、乃ち道を成ずべきのみ」。佛語を思惟し、心豁けて開解し、便ち羅漢と成る。是の因縁を以ての故に苦行第一と稱する也。

二八　阿那律天眼第一と稱する所以は、時に佛大會の爲に法を說く。阿那律坐上に在りて睡眠す。佛其の眠るを見て謂て曰く、「今如來法を說く。汝何を以て眠るや。夫れ眠は心意閉塞す。死と何ぞ異ならむ」。那律慚愧し刻心し、自から誓ふらく、「今より以後敢て復眠らず」。と。眠らざること遂に久しく、眼便はち明を失す。然る所以は、凡そ六食有り。眼に二食有り。一は色を視る。二に睡眠。五情亦各二食有り。食を得れば六根乃はち全し。眼眠食を失ふを以ての故に、眼根を喪ふ。佛耆[二九]域に命じて之を治せしむ。曰く、「不眠治すべからず。已に肉眼を失ふ。復覩る所無し」。五百の弟子各棄てゝ馳散す。人を傭ひて針を貫く。捫摸して衣を補ふ。線盡く重貫す。人の傭ふべき無ければ、左右に唱へて曰く、「誰か福を求めんと欲する者、我が與に針を貫け」。と。世尊忽然として前に到り取め來る。「我れ汝の與に貫かむ。」問ふて曰く、「是れ誰ぞや。」曰く、「我は是れ佛なり。」「佛は已に福足る。復福を求めんと欲するや」。曰く、「福德は厭ふべきや」。那律思惟すらく、「佛も尙ほ福を求む。況んや凡人に於てをや」。心中感結し、馳せて佛に向つて視る。至心を以ての故に忽ち天眼を得たり。復重ねて思惟して、便はち羅漢を得たり。凡そ羅漢に皆三眼有り。肉眼、慧眼、天眼なり。那律正に二眼を有す。慧眼天眼なり。三眼視る者は亂る。肉と天と功を爭ひ、精麁雜觀するが故に亂と曰ふ也。那律專ら天眼を用ひ、大千世界を觀て、精麁悉く覩る。形質を別つ中に、有識、無識、皆悉く別知す。天人の所見、淨不淨有り。極淨觀の者世界中の諸の有形類を見るに、有識、無識、皆動搖せるを見る。疑つて是れ蟲なりと謂ふ。而も蟲に非ざる也。不淨觀の者飯粒の

【二八】 aniruddha-anuruddha

【二九】 jīvaka

取りて、以て民の命に供へんと欲す」。念じ已りて佛に白す。「今四神足を以て地を反し、下の地肥を取りて、以て民の命を濟はんと欲す。不審爾るべきや不や。」佛の言く、「止みね、止みね、目連、汝の神足能く此を反して難無しと雖も、那中の衆生[一四]何ぞ一手を以て蟲を執り、一手地を反さんや」。佛の言く、「不可なり。然る所以は後世の比丘多くは神足無し。設後に飢有らん時、國王、臣民沙門に命じて地を反さしめむ。若し能はずんば沙門に非ずと謂はむ」。是の神足を以て證とす。故に目連を第一と爲す。

[二五]二十億耳比丘苦行第一と稱する所以は、昔[二六]占波國に大長者有り。一子を生ず。端正姝妙なり。足下に毛を生ず。長さ四寸。未だ曾て地を蹋まず。足下毛を生ずる所以のものは、昔迦葉佛の時、大長者爲り。財寶極り無し。衆僧の爲に精舍講堂を起し訖り、白氎を以て地に布き、衆僧をして上を蹈ましむ。是の因縁に由るが故に、足下毛を生ずることを得たり。二十億耳と字くる所以は、生るゝ時自然に耳の中に寶珠を生ず。價直二十億、即ち以て稱と爲す。時に[二七]瓶沙王其の奇異を聞き、與に相見えんと欲す。故に命令し來道里を計り、十五日乘車を行りて來る。將に車を下らんと欲するに、輒ち布氎地に在り。然る後行上し、既に王所に到る。王命令して坐せしめ、勞問し訖り、能く琴を彈ずと聞き、即ち命じて之を彈ぜしむ。相娛樂し訖りて、共に佛所に至る。時に佛大衆の與に廣く妙法を說く。佛を見て歡喜し頭面に足を禮す。佛命令して坐せしめ、法を聞きて欣悅し、即ち出家を求む。佛其の出家の志を然りとし、即ち沙門と爲る。勇猛精進にして經行して懈らず。肌肉細軟にして足下傷き破る。經行の處、血流れて泥を成す。行を積むこと遂に久しく、漏猶ほ未だ除かず。疲懈心を生じて白衣に還らんと欲す。「我が家錢財自から恣なり。廣く福德を爲さば且らく三惡を免がれむ」。佛其の念を知り、忽然として前に於て地より踊出し、比丘に問ふて曰く、「汝本と琴を彈ぜし時、衆絃を急緩せば妙曲を成すや不や。」答へて曰く、「成らず。」「若し衆絃盡く緩

【一四】麗本「可」に作る。今三本並に宮本に依る。
【二五】soṇa-koḷivisa
【二六】campā
【二七】bimbisāra

[17]江迦葉第一と稱する所以は佛爲に法を説くに、一心に聽受し、[18]精義神に入り、諸結消盡し、德實内に充ち、乃ち骨髓に徹す。故に脂髓外に流れ、狀汗の出づるに似たり。是を以て之を言ふ。心意寂然、能く諸結を降す。故に第一と稱す。

[19]馬師比丘は佛に從て受學す。方に七日を經、便ち威儀を備へて將に毘舍離に入りて乞食す。城門外に於て[20]優波坻舍に遇ふ。遙かに馬師を見るに、威儀庠序、法服整齊なり。中心欣悅して、問ふて曰く、「君は是れ何等の人ぞ。」曰く、「吾は是れ沙門」。曰く、「君自知なりと爲んや。師宗有りと爲んや」。曰く、「師有り。」「師の名を誰とか爲し、云何が說法する」。答へて曰く、「吾が師の名は釋迦文、天中の天、三界の極尊、其の教誨する所空無爲を以て主と爲す。心を息めて本に達す。故に沙門と號す。」優波坻舍此の妙語を聞きて即ち道迹に逹す。坻舍の同學本と要誓有り。先に[21]甘露を得る者、當に相告示すべしと。即ち馬師を辭して[22]拘律陀の所に至る。拘律陀顏色の常に異れるを見來りて甘露を獲しを疑ふ。尋で問ふ、「甘露を得しや」。曰く、「得たり。」「甘露云何。」「甘露とは諸法空無に逹する也」。拘律尋思して復道迹を得たり。馬師の威儀第一なる所以は宿五百世獼猴爲るを以て、今人と爲るを得て、性猶ほ躁擾なり。出家して七日即ち本轍を改む。學初淺と雖も、善く尊教を宣ぶ。前視者をして顏を悅ばしめて教に逹せしむ。威儀感悟を以ての故に第一と稱す。

[23]身子を智慧第一と稱する所以は世尊又云く、「身子の智慧の多少を知らんと欲せば、須彌を以て硯子と爲し、四大海水を書水と爲し、四天下の竹木を筆と爲し、滿中の人を書師と爲し、身子の智慧を寫さんと欲するも、猶し尙ほ盡す能はず。況んや凡夫の五通にして能く測量せんをや」。故に智慧を第一爲りと稱す。

目連を神足第一と稱する所以は、世尊亦證有るを説く。昔日三災流行し、人民大に飢う。目連心に念ずらく、「此の地下故曩日の地肥中に在る有り。今人民大に飢う。意に此の地を反し下の地肥を

【一七】nadīkassapa
【一八】麗本「誼」に作る。今三本並に宮本に依る。
【一九】assaji—aśvajit
【二〇】upatissa—upatiṣya 舍利弗のこと。
【二一】妙法の意なり。amata—amṛta
【二二】kolita 目連のこと。
【二三】原文此の處節を改めず。身子の譯語につきては前註あり。

〔一二〕牛脚比丘は二事を以て世間に居するを得ず。何となれば此の比丘の脚牛甲に似たり。食飽けば則ち呞む。是の二事を以て世に居するを得ず。若し外道梵志其の呞を見ば沙門は食ふに時節無しと謂ひ、誹謗の心を生ぜむ。是を以て佛上天に遣はし、善法講堂に在りて坐禪定意せしむ。〔一三〕善覺比丘常に衆僧の爲に使して天上に至る。佛涅槃の後、迦葉揵椎を鳴らし、大に衆僧を集む。〔一四〕阿那律に命じ、世界誰か來らざる者なるやを遍觀せしむ。阿那律卽ち世界を觀るに盡く來る。唯橋亘比丘今天上に在り。卽ち善覺を遣はし命じて召使し來らしむ。善覺三十三天に到るに、善法講堂に在りて滅盡定に入れるを見る。彈指して之を覺して曰く、「世尊涅槃して已に十四日。迦葉衆を集む。我を遣して相命ず。世間に下りて衆の集所に至るべし。」橋亘答へて曰く、「世間已に空なり。我れ去りて何をか爲さむ。世に還るに忍びず。涅槃を取らんと欲す。卽ち衣鉢を以て善覺に付し、衆僧に還歸せしめ、便ち涅槃を取る。是の因縁を以て善く天上に處す。故に第一と稱す。

〔一五〕善勝比丘は本と是れ貴族の子、初生の時自然の金屣有り。足に著いて生ず。父母之を珍とす。爲に三時殿を起し、妓女娛樂左右を去らず。時に婦睡眠す。其の白齒を視、「身形妙と雖も但だ是れ骨のみ」と、具さに惡露を觀じて森然として毛竪つ。顧みて宮宅を視る、猶し塚墓に似たり。驚き走りて戸を出づ。二神迎へ接す。二神に問ふて曰く、「今厄に委す。誰か能く救を爲さむ」。二神答へて曰く、「唯世尊有り。善能く厄を救はむ」。曰く、「今所在とや爲む」。答へて曰く「近く祇亘に在り。從つて啓請すべし。」光を尋ねて佛に至り、頭面禮足す。佛本心に因りて爲に妙法を演ぶ。卽時心開け、漏盡き結解く。是の因縁を以て善勝比丘惡露觀第一なり。

〔一六〕優留毘迦葉第一と稱する所以は乃ち宿世以來弟兄三人常に千弟子有りて相隨ふ。今釋迦文佛の世に遇ひ、佛十八變を以て迦葉千人を度す。佛衆成ずることを得て、四事供養、猶ほ此にして興るがごとし。是を以て之を言ふ、優留毘迦葉能く聖衆を將護して供養すること第一也。

【一二】gavāmpati 或は「憍梵波提」、後段「橋亘」と云ふ。

【一三】suppabuddha-suprabuddha

【一四】anuruddha-aniruddha

【一五】Bhaddiya

【一六】uruvelakassapa

卷の第四

*「如來廣く四部の爲に各各第一を說く」とは乃ち將來末世の爲なり。遺法の中或は四姓外學の梵志、及び四部の弟子有り。共に相是非して自から稱して尊と爲し、餘人を卑しと爲す。是の如きの輩稱計すべからず。故に未然に豫防し、故に自足の路を開くのみ。今[一]拘隣を稱して第一と爲すものは、其の釋種の豪族なるを以て、王侍從を簡遣し、勞苦に功報す。應に是第一に叙すべし。又復初化受法能く先だつ者無し。亦是れ第一なり。善能く勸導して、聖衆を將養す。先に[二]善來の稱を受け復是れ第一なり。人中の歸仰する所は[三]遮迦越を最と爲し、光明の中日を最と爲し。星宿の中月を最と爲し。萬川の中海を最と爲し。四天王中[四]提頭頼を最と爲し、三十三天中[五]釋提桓を最と爲し、欲界六天中[六]波旬を以て最と爲し、色界十八天淨居を以て最と爲し、九十六部の僧釋を以て最と爲し、九十六種道佛道を上最と爲す。拘隣を比丘等五人中の最と爲す。是を以て之を言ふ。拘隣を第一と爲す。

優陀夷比丘勸導を以て最と爲す。比丘皆勸導す。最と稱する所以は、佛將に還つて本國を度せんとす。先づ遣はして神變を現ぜしめ、王と相酬酢し、一一解釋し、人度する所計るべからず。故に勸導最と稱する也。

[七]摩訶曇比丘、利根捷疾、餘の比丘皆漏盡き神通を成す。此の比丘漏未だ盡きずして[八]以て神通を成す。故に第一と稱す。凡そ虛に乘ずる者は皆神足を以てす。此の比丘能く空を行くこと地を履むが如し。是れ[九]善肘比丘の能ふ所なり。故に第一と稱する也。

[一〇]目連神足默して異利に往き、[一一]婆破比丘神足虛を陵ぎて槃遲迦に振ひ、能く外道を攝伏す故に第一と稱す。

＊ 諸弟子に就いて第一の德六列ぬ。

【一】 koṇḍañña-kauṇḍinya

【二】 「善來比丘」ehi bhikkhū

【三】 cakravartin 轉輪聖王のことなり。麗本「加」に作る。今三本並に宮本に依る。

【四】 dhṛtarāṣṭra 持國天。

【五】 śakradeva

【六】 pāpiyas

【七】 mahādhamma か。原文此の處分節せず。

【八】 麗本「以」に作る。三本並に宮本「已」に作る。下之に準ぜよ。

【九】 subāhu

【一〇】 mahāmoggallāna

【一一】 vappa

當に復何の益あるべき。」須臾の頃、復一天有り。天の[二六]文陀羅花を以て死屍に散ず。道人復問ふて曰く、「何を以てか此の臭屍に散ずと爲んや。」答へて曰く、「我れ此の屍に由りて天上に生ずるを得たり。此の屍卽ち是れ我の善友なり。故に來りて散華し、往昔の恩を報ずるのみ」。道人の曰く、「何を以て汝が心中に散華せずして、乃ち此の臭屍に花を散ずと爲んや。夫れ善惡の本皆心の爲す所、汝等乃ち復本を捨てゝ其の末を取るや」。時に修伽姑路自から念ずらく、「我れ死より活を得、是の因緣に由りて當に解脫を得べし」。是に於て身を觀じ死を念ず。思惟分別して無常、苦、空、非身を解了し卽ち羅漢を得たり。是を以て之を言ふ。念死も亦涅槃に至る。

分別功德論卷第三

【二六】 māndārava

み」。即ち諸臣に命じ收撿して桎梏す。密かに信を遣はして道人に白す、「善く此の意を念じ、當に來りて救請すべし。」(王曰ふ)「正に汝を殺さんと欲す。念ふに汝王と作り、日淺く、未だ恣意を得ず。今且らく假りに汝をして七日王と作らしめ、我が王法の如く群臣を侍從せしめ、宮人伎女飲食を進御し、意を恣にすること七日當に極法に就くべし」。即ち敎の如く施行す。七日を滿ずと雖も、心自から歡ぶこと無し。道人來り請ふ。鉢を持し、錫を執り、王宮の門に詣る。王問ふて曰く、道人何の欲する所ぞや。曰く、「死人を乞はんと欲す」。王曰く、「此の罪人應に死すべし。乞ふことを得ざれ道人よ」。道人重ねて曰く、「但だ乞ふ。道人當に道を學ばしむべし。」王曰く、「問ふ、此の人能く道を學ぶや不や。」道人即ち(弟に)問ふ、「今汝を乞ふて沙彌と作さん。能ふや不や」。答へて曰く、「正に奴と作らしむるも猶ほ當に却ぞけず。況んや復沙彌をや」。王の曰く、「道人と作るは難し。審らかに能ふと爲んや不や。道人の法、當に麁衣惡食して趣かに形命を支へて道を行ずるのみ。汝優樂に[二三]串れたり。何ぞ能く此の苦行に堪へんや」。答へて曰く、「尙ほ當に死すべきに、豈苦行に堪へざらんや」。王の曰く、「若し堪へば聽して七日乞食せしめむ」。王宮內に令して修伽姤路來り乞ふ時、極惡の食、餘殘穢臭なる者を與へよと。即ち弊衣を著せしめ諸房に造りて、食を乞ふ。處處皆惡食を得、死を免るゝの情重きを以て甘心に惡食を食す。七日を滿じ已りて、王其の悔恨無きを見て、即ち聽して道を爲さしむ。「汝常に言ふ。道人閑樂、多情信じ難しと。汝の乞食する所、故我が宮內に在り。猶ほ倘ほ精細なり。道人の乞食又此より甚し。食ふ所是の如し。豈情欲有るべけんや。」即ち[二四]善念に付して沙門爲らしむ。王使を遣はして石室城に至り、彼の城中に於て諸禪觀を行ぜしむ。或は塚間に在り。或は樹下に在り。[二五]時に塚間に在りて死屍を觀る。夜餓鬼の一死屍を打つ有るを見る。問ふて曰く、「何を以て此の死屍を打つや。」曰く、「此の屍の因に坐して我れ是の如し。是を以て之を打つのみ。」道人の曰く、「何を以て汝が心を打たざる。此の死屍を打つも、

【二三】三本並に宮本「慣」に作る。

【二四】三本並に宮本「善覺」に作る。

【二五】塚間の死屍或は打たれ或は散華供養せらるゝ話。

四事乏しきこと無からしむ。兼ねて外に五百の乞食を給し、[一八]阿練若復五百人の餉を送り、就て之を供養す。復四城門中に於て諸の窮乏に給し、供養遂に久しく、財寶轉た減ず。時に弟[一九]修伽姤路と名くるもの、三尊を信ぜず。大臣[二〇]耶舍、夫人[二一]善容亦同じく信ぜず。三人心を同じくして王を患ひ、數數諫めて曰く、「道士を供養して空しく國財を竭す。何をか是を用て爲ん」。王の曰く、「汝好く口を護れ。夫れ士の世に處して身を斬る所以は其の惡言に由る也」。修伽姤路王に白して曰く、「此の諸の道士並びに是れ年少なり。餚膳口に恣にし、情欲熾盛にして深宮婦女の間に處す。豈信ずべけんや」。王答へて曰く、「道士[二二]形を制し、法を以て自から防ぎ、身を節して禁を守る。色慾の屈する所とならざる也。」修伽姤路後に出でゝ行獵す。鹿群有るを見る。中に一人有り。圍を張く。之を捕へて人を得たり。問ふて曰く、「汝は是れ何人ぞ」。曰く、「我れ年八歳の時父母を失ひ、逬りて山中に在り。鹿に乳せられ、遂に今に至る。」復問ふて曰く、「鹿乳無き時何所にか食を噉ふ」。曰く、「我れ鹿に隨ひて草葉を噉ひ、以て自から命を濟ふ」。又問ふて曰く、「頗る欲意有りや不や」。曰く、「有り。」遂に便ち將ゐ歸る。狀を以て王に白して曰く、「此の噉草人、身形羸瘦尙ほ慾情有り。況んや諸の道士飲食口に恣にし、身體肥盛にして豈欲情無からんや」。王心に念じて曰く、「當に何の方便此の弟を化せんや」。即ち權謀を設け、詐りて出遊せんと欲す。大に人兵を集め、政を嚴にして外に出づ。王盜かに還り入り隱れて現せず。王先づ諸臣と議る、「若し我れ出でゝ後、便はち擧げて王と爲せ」。諸臣卽ち勸めて試みに王服を著せしむ。詐佯なりとして肯んぜず。諸臣の曰く、「但だ作せ。我等當に著せしめんとす。」卽ち天冠王服を著す。咸な萬歳と稱し、左右に侍立し、聖王の法の如くす。阿育王其の已に定まるを見て便はち外より來り、曰く、「何如が大王」。弟王を見て慚披し、如く所を知る莫し。阿育王の曰く、「我れ暫らく出遊す。卿等云何が便ち此の事を作す。我が鐵輪在らざるや。何ぞ乃ち此の如く横を縦にするや。我れ汝を殺す。斯須の間の

を得る話。
【一八】 araṇya 林野の義。轉じて精舍を意味するに至る。
【一九】 sugātra か。他傳には違陀輸 vītāsoka とす。
【二〇】 yaśas
【二一】 surūpā か。
【二二】 麗本「刑」に作る。今三本並に宮本に依る。

の城に入る者は貴賤を問はず、便はち治罪せらるゝを得む。」王の曰く、「正に我をして中に入らしむるも亦聽し出でしむる莫れ。」と。時に老比丘有り。名けて[一七]善覺と曰ふ。常に乞食を行ず。此の城門に至る。外に好華香を見る。內に人有りと謂ひ、即便ち城に入る。但だ罪人を治するを見る。驚怖して還り出でんと欲す。時に獄卒聽し出でしめず。將に鑊湯に至らんと欲す。道人求めて曰く、「小らく我を寛かにせよ。」日中に至り、又語らふ頃に、男女二人有り。犯婬に坐して將に來りて治罪せられんと欲す。碓臼中に置きて之を擣く。斯須變成して沫と爲るべし。道人之を見て始めて佛語を念ず、「人身聚沫の如し。誠なる哉や斯の言」と。又頃ありて復變じて白色と爲る。復念ずらく、「人身は白灰聚の如し。變易一ならず。幻の如く、化の如し。諦らむるに計は眞に非ず」。即時意悟り、漏盡き結解く。獄卒復催して鑊湯に入らしむ。時に比丘笑ふ。獄卒瞋恚し、四人をして兩腋を挾みて倒に鑊中に著く。即時湯冷ゆ。比丘即ち千葉の蓮華を化作し、蓮華の中に於て結跏趺坐す。獄卒驚き怪み、阿育王に白して曰く、「今獄中に奇怪の事有り。願くは王暫らく屈して臨視せよ。」王の曰く、「我れ先に要有り、正に我をして中に入れしめんも亦聽し出でしめざれと。我れ今那ぞ入るを得んや。」吏王に白して言く、「但だ入れ苦無けむ」。王即ち隨ひ入る。道人の蓮華の上に在りて坐せるを見る。問ふて曰く、「汝は是れ何人ぞや」。曰く、「我れは是れ道人なり」。道人王に語る。「汝は是れ癡人なり」。王の曰く、「何を以て我れを名けて癡人と爲すや」。道人の曰く、「汝本と童子と作りし時、一把の土を以て佛に上まつれり。佛受けて呪願して言く、「汝後當に閻浮提に王として鐵輪王と作り、阿育と名くべし。一日の中當に八萬四千の佛圖を起すべしと。此の獄是れ佛圖なりや」。王意に即ち悟り、便ち前過を悔し、善覺を以て師と爲し、是に於て獄を罷めて福を興し、八萬四千の圖廟を起す。是を以て之を言ふ。念身は涅槃を得とは此れ其の義也。

云何が念死涅槃に至るを得む。*昔阿育王法を奉じて精進し、常に五百の衆僧を宮內に供養し、

【一七】 suppabuddha 他の傳には或は samudda 海比丘となす。

* 阿育王の弟死を念じて道

熱遲疾を知り、麁より細に至り、漸く亂想を御して遂に微妙に至る。或は息に因りて以て悟り、或は分別解了し、或は頭陀節を守り、或は多聞疆記、或は神足識微、或は揩、或は訓悟す。所謂途を殊にして同歸する也。念身とは、謂く、四天を分別する也。五陰を解了して一に之を幻夢に同じうす。何を以て之を知りて、念身は涅槃に至るを得るや。*昔佛世を去つて後百歳の時、阿育王有り。閻浮提を典主す。群臣、夫人、象馬、各八萬四千有り。時に王國界を巡行して閻羅王を見る。十八地獄有り。皆臣吏有りて罪囚を僻問す。王左右に問ふて曰く、「此れ何等の人ぞ。」答へて曰く、「此れ死人の王なり。主として善惡を分別す。」王の曰く、「死人の王尙ほ能く地獄を作りて罪人を治す。我れは是れ生人の王なり。地獄を作る能はざらんや」。諸の群臣に問ふ、「誰か能く地獄を作る。」諸臣對へて曰く、「唯極惡人有りて能く地獄を作るのみ」。王諸臣に勅して訪うて惡人を覓む。臣即ち行き覓む。一人有り地に坐して罽を織るを見る。旁に弓箭有り。兼て釣魚の鉤有り。復毒飯を以て雀に食ましむ。並に織罽、並に釣魚、射鳥、捕雀、臣還りて狀を以て王に白す。「惡人是の如し。」王の曰く、「此の人極惡、必ず能く地獄の事を辦ぜむ」。王、人を遣はして喚んで曰く、「王汝を見んと欲す」。惡人の曰く、「我れは是れ小人、識知有ること無し。王我を用て（何とか）爲ん。」曰く、「王正に汝を得て地獄の事を治せんと欲す」。其の人即ち歸る。家に老母有り。母に語つて曰く、「王我を喚ぶ」。母兒に語つて曰く、「王汝を喚んで（何とか）爲ん」。兒の曰く、「王我をして地獄の事を治せしめんと欲す。」母の曰く、「汝去らんに我れ云何が活きむ」。母即ち兒の脚を抱きて放たず。兒の意去らんと欲す。即ち刀を拔いて母を斫る。殺して去つて王の所に至る。王問ふて曰く、「母汝を放たず、何に由て來るを得たる」。曰く、「母を殺して來る」。王の曰く、「眞に惡人なり。必ず能く地獄の事を辦ぜむ」。即ち此人に委ねて地獄城を作る。鑊湯劍樹を設け、即ち此の人を拜して地獄王と爲す。爲めに臣佐を立つ。各典どる所有り。閻羅王の如し。王約勅して曰く、「若し人有りて此

* 阿育王（asoka）地獄を作る說話。Divyāvadāna p. 374 隨て阿育王經、阿育王傳、雜阿含經第二十三等比較。

心意轉た明かに四諦を思惟し、是の如く久しからずして遂に羅漢を得たり。所謂念天に因て涅槃に至ることを得る者なり。念休息とは定を得るを謂ふ也。休息に二有り。俗休息有り、道休息有り。俗休息とは猶し行作疲極、小らく懈息に住するがごとし。故に名けて俗休息と爲す。道休息とは定の人を謂ふ。何を以て其の然るを知る。*昔比丘有り。名けて等會と曰ふ。時に大道の邊に近く坐禪して意を定む。時に五百乘の車有りて過ぐ。聲甚だ凶凶たるも、寂然として聞かず。時に復天雷霹靂たり。又頃復地大に動く。都て聞く所無し。行き過ぐる者衆く、塵土衣を坌して、都て所覺無し。比丘節有り。一人有りて來り、此の比丘の端坐不動なるを見る。塵土衣を坌し、積むこと時定より覺めて、塵土を抖擻す。又問ふて曰く、「向者眠れりや。」曰く、「不なり。」又問ふ、「若し眠らずんば、向に車の過ぐる有り。及び天雷地動するに寂然として驚かず。何に由て此の如き。答へて曰く、「我れ時に休息三昧に入る。是を以て都て所聞無きのみ。」是を以て之を言ふ。休息定を得る者は復天地覆墜すと雖も、其の志を革めず。故に休息定と名くる也。[一一]念安般とは、謂く、諸の坐馳を息むる也。趣道の徑は唯一途に非ず。所悟の方各所在有り。何を以て其の然るを知るや。[一二]身子昔曾て十四億の佛を供養し、佛に從て法を聞く。未だ曾て安般を綜習せず。釋迦文の世に至りて[一三]馬師比丘に從つて始めて空法に達し、即ち道迹を見る。佛具さに慧を演べて漏盡き結解く。今智慧第一爲り。安般に由らずして涅槃に至る也。[一四]目揵連昔三十劫中諸佛を供養し、大乘行を修して終訖する能はず。世尊に遭遇して退いて盡漏を取る。昔より今に曁ぶまで未だ曾て安般を習はず。迦葉比丘昔亦三萬の如來を供養す。亦未だ曾て安般を習はず。應に辟支佛を得べし。今退して羅漢と爲る。馬師比丘昔日亦七佛を供養す。亦安般を習はず。今亦漏を盡す。阿難昔曾て二萬の如來を供養し、諸佛より法教を諮受して、亦安般を習はず。唯[一五]羅云、[一六]摩訶劫匹羅有り。曩昔以來、常に安般を習ふ。今亦道に至る。是を以て之を言ふ。趣道の徑唯一途に非ず。安般とは息の長短、冷

※ 比丘の禪定雷聲をも聞かざる話。mahāparinibbānasutta 4—33 プックサに對する世尊の禪定の話、隨つて長阿含遊行經相當箇處比較。

【一一】 ānāpāna(āna-apāna)
【一二】 sāriputta-śāri-putra 身子と譯せるは sarira と混同せるものか。śāri は鳥の名、鶖鷺子の譯寧ろ適切。
【一三】 assaji-aśva-jit 馬勝比丘。
【一四】 mahāmoggallāna — mahāmaudgalyāyana
【一五】 rāhula
【一六】 mahākapphiṇa

[一〇]或は說くもの有り曰く、聖王は佛に勝る。何を以て之を言ふ。聖王世人を治むるに、三惡道に墮する者無し。佛出世の時、三惡斷えず。是を以て勝れたりと爲す也。或は復說いて曰く、佛は勝王に勝る。勝ると言ふ所以は、聖王は十善を以て世を敎ふるも人天に過ぎず。佛出でゝ世を敎へ、涅槃に至ることを得しむ。是を以て勝ると爲す。云何が生天、四天王より二十八天に至り、諸の福を受くる者盡く是れ生天なり。生天と言ふ所以は流轉息まず、生死を離れず。故に生天と曰ふ也。云何が淸淨天、謂く、佛と緣覺と聲聞の三人、皆結使を盡して三界を出で、淸淨にして欲無し。故に淸淨天と曰ふ也。八淨居天は生、學に過ぎ、淸淨處に及ばず。其の中間にして、念天者の慕ふ所なり。生、學を念ずるに由て、亦涅槃の理に至る。何となれば ＊舍衞城中、淸信士夫婦二人有り。子姪有ること無し。二人精進にして心三寶に存す。時に婦早く亡し、卽ち三十三天に生じて天女と爲る。端政雙無く、天中比少なり。女自から念言すらく、誰か我が夫に任へむと。天眼を以て世間を觀ずるに本夫已に出家して道を學べるを見る。年高く闇短にして信を專らにするのみ。常に塔廟を掃除するを以て行と爲す。其の精勤を見るに理應に天に生ずべし。必ず還我が夫と爲らむ。時に靜室に處し、夜坐し思惟するに、霍然として明を見る。其の異有るを怪み、頭を擧げて仰ぎ視るに、天女有るを見る。其の所由を問ふ。何に從て來れる。天女答へて曰く、我は三十三天の上より來れり。本と是れ君の婦、今天女と爲る。天上我が夫たるに任るもの無し。君が精進を觀るに、應に還た我が夫と爲るべし。是を以ての故に來りて意を白す。語訖りて忽然として見えず。還天上に歸る。時に老比丘是より以後倍精進を加へ、兼て更に故廟を補繕し、晨夕に懈らず。功を積むこと遂に多く、福德轉た勝れ、乃ち應に第四兜率天に生ずべし。天女復天眼を以て之を觀じ、其の乃ち第四天に生ずべきを見、復來り語つて言く、精進を積むこと已に我が界に過ぎたり。我れ復君を夫と爲すを得ずと。語り訖りて還り去る。比丘倍更に精進して前時に勝る。晝は則ち經行し、夜は則ち禪思す。

【一〇】 轉輪王と佛との勝劣。

＊ 念天によりて涅槃を得し物語。

海に入りて以て等一味なるが若し。衆亦是の如し。或は刹帝利種有り。或は婆羅門種、或は長者種、或は居士種、四姓の中出家の學者有り。皆釋種に同じく一姓爲り。若干別名有ること無し。是を以て包む所彌遠くして其の義彌深し。衆僧とは乃ち三乘を含受し、羅漢僧亦中に出づ。緣一覺亦其の中に在り。大乘僧亦其の中に在り。是の故に名けて良祐福田と爲す。三界の中衆生を濟益すること此の良美の地に過ぐるは無し。如來復正覺を成ずと雖も、常に還つて衆僧に向つて懺悔するものは僧地厚重なるを以てなり。三世の諸佛、緣覺の弟子、僧に由らずして滅度を得るもの無し。猶し[八]梵摩達比丘の聖衆に賴りて以て濟を全くするがごとし。念戒とは、淨戒を行じて諸の律儀を具するを謂ふ。猶し陶家の埴泥を調繕し、諸を俟つて器を求め、大小方圓、各所欲に適ふが若し。戒も亦是の如し。若くは生天して三界福を受くるを願ひ、若くは斷結、求道を欲し、願ふ所意に應ずること、猶し吉祥瓶の人の所欲に隨つて取れば卽ち之を得るが如し。戒を以て本と爲し、兼ねて三十七品及び諸の三昧定を行じ、七使、九結を斷じ、進んで涅槃を成ず。喩へば埴の器と成りて復壞すべからざるがごとし。

念施とは謂く施に二事有り。或は有主施、或は無主施、復二施有り。一を與と名け、二を捨と名く。復二施有り。一に財、二に法、與とは卽ち有主施なり。捨とは卽ち無主施なり。捨とは則ち捨結なり。與とは則ち前人財法を受く。施の涅槃に至る所以は、若し人に財法を與ふる時、心報を望まず。彼と己を計せず。三事無礙なるを以て卽ち無爲に同じ。若し能く捨結せば亦是れ涅槃なり。捨與倶に涅槃に至るとは、[九]猶ほ象の健兒を逐ふて進むと退くとのごとし。其の肉を得るに於て、進めば則ち軍を破り、退けば則ち自から食肉を喪ふこと必せり。念天とは三種の天有り。擧天有り。生天有り。淸淨天有り。云何が擧天、謂く轉輪聖王は衆人に擧げらる。名けて天と爲す所以は、聖王十善有りて世を敎ふるを以て、人をして皆天に生ぜしむ。人の上に在るが故に稱して天と爲す。

【八】前出。

【九】此の譬喩意義明かならず。進退倶に肉を得るといふにあるが如し。

に至る。毘舍離阿難の來るを承けて亦五百の童子を遣はして迎へしむ。二國の意に適せんと欲するが故に、神力を以て船を制して中流に住まらしむ。時に弟子を度す。一を[四五]摩禪提と名け、二を[四六]摩呻提と名く。摩禪提に告ぐ、「汝罽賓に至りて佛法を興顯せよ。彼の土未だ佛法有らず。好く流布せしめよ。摩呻提に告げて曰く、汝師子渚國に至りて佛法を興隆せよ」と。囑累し訖りて十八變を作し、火を出して身を燒き、舍利を中分して二家をして各供養することを得しめぬ。此れ念佛の力に由るが故に自在を得る也。

分別功德論卷第二

し。

【四五】majjhantika-madhyantika,

【四六】mahinda-mahendra

が向に起す所の想は但だ欲身を貪ぼるの愛欲、故に斯の念を生ずるのみ。彼の身是の如し。我れ復何ぞ異らむ。諦らかに我身を計するに四大合成す。福盡き緣離るれば自然に解散す」と。變を覩て心悟り卽ち道迹に逮せり。是を以て之を言ふ。念身は沙門果を得る也。念死とは行人念ずらく、命逝いて停まらず。諸根散壞して腐敗木の如く、命根斷絕す。當に非常を念じて以て自から覺悟すべし。*昔比丘有り。婆吉梨と名く。坐禪行道年歲を經歷す。而して有漏除かず。自から己身を患ひて以て大累と爲し、每に自害を思へり。「人至道を得ざる所以は正に此の身に纏綿するに坐す。流轉何れの時か息むべき」と。卽ち手を以て刀を執り、將に自から刎ねんとす。復重ねて思惟すらく、「世尊教誡有り。諸弟子自から殘するを得ざれ」と。爾りと雖も我れ今涅槃を求めんと欲す。涅槃中身無し。是の故に先づ身を除きて無爲を取ること正に爾り」と。便ち刀を擧げて自ら刎ぬ。頭亦墮ち、心亦徹す。卽ち阿羅漢を得たり。佛已に得道せるを知りて諸の比丘に勅して其の屍を闍維せしむ。是の故に念死も亦涅槃を得るなり。前の[四一]十念は佛總じて說いて利根の衆生の爲めにす。後更に說くものは鈍根の衆生の爲に其の義を析解する也。「名譽」とは後に轉輪聖王を得。「大果報を得」とは後に天帝釋を得。「諸善普ねく至る」とは後に梵天の報を得。「甘露味を得」とは後に辟支佛を得。「無爲處に至る」とは後に阿羅漢果を得、上に十念を說くに此の五句無し。今諸報を益す所以は念佛の義、其の理深妙の佛說なるを明さんと欲す。諸弟子般涅槃するに、皆宿緣を以て償對して因りて涅槃を取る。[四二]目連は打たれ、[四三]身子下陽す。是の如く五百の弟子各宿緣を以て滅度を取る。*唯阿難有りて、涅槃を取ること最も善し。阿難將に涅槃せんと欲する時、先づ光瑞を現ず。梵志有り。阿難に從つて算術を學び阿難の顏色明を發するを見、阿闍世王に告げて曰く、「阿難の顏色常に異る。將に涅槃を取らんと欲するか」と。王卽ち人を遣はして阿難を追尋せしむ。阿難已に五百の弟子を將て中路恒水の岸上に至り、船に上りて度らんと欲し、適水半に至るに、[四四]王已に岸

※婆吉梨 vakkali 比丘自殺して道を得し話。

【四一】 十念と云ふも念安般の一を缺く。

【四二】 mahāmoggallāna. 增一阿含二六の九經目連舍利弗の入滅を記す。

【四三】 sāriputta を身子とすること適當にあらざれども、本書の他にもこの例あり。

※阿難涅槃に入る物語。

【四四】 恐らくは王の使なるべ

體中何如ぞや」。梵志良久しくして、徐ろに頭を擧げて答へて曰く、「貧儉以て相遺る無し如何」。比丘又曰く、「我れ今當に君に一物を遺るべし」と。卽ち一の鷄を化作す。「君此の鷄を殺して噉ふべし」。梵志驚いて曰く、「我れ尙ほ蟣虱をすら殺さず。況んや當に鷄を殺すべきや」。比丘の曰く、「汝の本心乃ち無數の人を殺さんと欲す。今此の鷄を殺すも何ぞ言ふに足らむ」。梵志復曰く、「我れ云何ぞ無數の人を殺さんや」。比丘の曰く、「汝本此に在りて坐禪する時、乃ち此の國王と作らんと欲求せり。王者の治化日に幾人を殺すべし。而も殺さずと言ふや。此の鷄は卽ち是れ汝の心中の識なり。鷄乃ち無爲の大道を得べし。何ぞ國王たるを用ひむ」。(梵志)卽便ち思惟すらく、「此の比丘乃ち我が心中の所念を知る。必ず是れ聖人ならんか。當に其の敎に從ふべし」と。重ねて爲に法を說くに、卽ち道迹を得たり。此の梵志自形靜かなりと雖も心休息せざるなり。自ら識鷄を殺すを得已りて、乃ち名けて休息と爲すべきのみ。故に後に解して「心意想息む」と曰ふ也。[三九]「念身」とは身の三十六物の惡露不淨を觀じ、諦念亂れず、亦涅槃を得。何を以て之を知る。*昔比丘有り。阿練若を作り、常に乞食を行ず。江水の邊に於て食し、食し訖りて鉢を澡ぐ。時に上流の岸邊、塚間に新死の女人有り。風頭髮を吹いて忽然として鉢中に墮つ。比丘手から此の髮を執りて之を諦視するに甚だ妙好なり。心口に獨語すらく、「若し是れ馬尾ならば、此れ復太だ細し。若し是れ男子ならば復太だ軟細なり。若し繫びて解けずんば必ず是れ女人の髮ならむ」と。卽便ち之を繫ぶに解けず。便ち想念を生ず。此の髮是の如きの人必ず妙好ならむ。面は桃色の色の如く、眼は明珠の如く、鼻は截筒の如く、口は丹を含むが如く、眉は[四〇]蚰蜒の如くならむ。是の分別を作し已りて便ち欲心を起し、水に順つて尋求し、顏色を想見して追求して已まず。一女人を見る。狐狼已に其の半を噉ひ、身形臭爛、其の髮猶存す。髮を執りて之を比するに長短相似たり。向者の欲想釋然として自から解く。復重ねて之を觀、分別惟察す、「此の人生時形容嚴好、今者壞敗して人をして見るを得しむ。我

【三九】この間に念安般の釋あるべきが如し。然らずんば十念方に其の一を缺く。
*比丘死女の毛髮によりて悟る話。

【四〇】げぢげぢ蟲のこと。

戒は喩へば膝上の花の動けば則ち解散するが若し。大士の戒は喩へば頭挿の花の行止動かざるが若し。何となれば小乘は形を撿して動けば則ち儀を越ゆるも、大士は心を領して外軌に拘らざる也。大小範異るが故に。形心を以て殊と爲す。內外殊ると雖も倶に泥槃に至る。故に念戒と曰ふ也。念施泥槃に至ることを得る所以は施に財施、法施有るを以てなり。檀度無極を成ずるが故に泥槃に至ることを得る也。念天とは欲界色界より無色界天に至る也。天に二種有り。受福天有り。道德天有り。欲界の諸の須陀洹天は永く三惡趣を離れ、進んで道堂に昇る。色界は空界の八淨居天、止觀を增修して、進んで無漏を成ず。卽ち彼の泥槃は世間に還らず。凡夫天は十善、四禪、四空、彼に於て福を受け、福盡くれば還墮し、流轉して已まず。所謂念天とは彼の諸の得道の者を念じ、專心に彼に效ひて其の所行を慕ひ、意馳散せず、亦泥槃に至る。故に念天と曰ふ也。

念休息とは謂く、心意想息み、五欲起らず。寂然永定の故に息と云ふ也。凡そ息に亦二種有り。外道梵志形を斂め福を求むるも亦息と云ふ。沙門四果衆結永く消する、乃ち是れ眞の息なり。何を以て其の然るを知る。*昔比丘有り。名けて須羅陀と曰ふ。舍衞城に至りて周行し敎化す。時に舍衞城の西、鴦掘魔可殺人の處あり。其の地平博にして諸の樹木多し。時に一梵志有り。樹下に在りて坐禪し、五穀を食はず、但だ果蓏を食ふ。若し果なければ便はち草菜を噉ひ、以て精氣を續く、身に樹葉の衣を著け、形體羸瘦し、裁に自からを支柱とす。時に須羅陀行き過ぎて〔三八〕逢ひ見る。謂く、「是の道士の坐禪せる、試みに其の心を觀む。知る定なりと爲んや不や」と。其の心の本を見るに乃ち此の國王と作らんを求む。念じて曰く、「此は乃ち是れ大賊ならずや。正に捨てゝ去らんと欲するも、後に罪に墮せんを恐る。正に敎化せんと欲するも、必ずや我が語に隨はざらむ。當に方便を設けて此の人を度せんのみ」と。卽便ち一樹下に就いて坐禪す。相去ること遠からず。乃ち七日を經て動ぜず、搖がず。七日を過ぎて後、起つて梵志の前に至り、彈指して覺めしめて曰く、「同伴よ、

*須羅陀 Suradha 比丘梵志を敎化する話。

〔三八〕 三本並に宮本「逢」に作る。

以て鳥獸の侵害する能はざる所なり。是の證を用ての故に、衆僧の良福田爲るを知る。已に旣に自から度し、復能く人を度し、三乘道に至る。念衆の法其の義此の如し。

次に念戒とは其の義云何。五戒、十戒、二百五十より五百戒に至る。皆以て身口を禁制し、諸の邪非を撿し、六情を斂御し、諸の欲念を斷つ。中表淸淨にして、乃ち戒性に應ず。*昔二比丘有り。共に佛所に至る。路廣澤を經て頓に漿水に乏し。時に小池有り。[三五]潢水衆蟲中に滿つ。一比丘深く禁律を思ひ、無犯を以て首と爲す。若し此の水を飮まば生を殺すこと甚だ多し。我寧ろ戒を全うして命を殞さむ。命沒して以て恨み無けむと。是に於て命終して天上に生ず。一比丘自から念ず、宜しく當に水を飮み命を全うして佛所に至るべし。焉んぞ死後當に何の趣に生ずべきを知らむと。卽ち蟲水を飮む。害蟲大に多し。佛を見得と雖も、敎を去ること甚だ遠し、啼泣して佛に向ひ自ら云ふ、「同伴命終る」。佛上天を指して曰く、「汝此の天を識るや不や。此は是れ汝の伴なり。全戒の功を以て卽ち天上に生じ、今來りて此に在り。卿我を見ると雖も、我を去ること大に遠し。彼は命を喪ふと雖も常に我が所に在り。卿今來りて我を見るは正に我が肉形を覩るべきのみ。豈至眞の妙戒を識らんや。」是を以て之を言ふ。持戒犯さざれば願ふ所の者を得む。十念の中、戒前に在り。六度(に於て)之を言はゞ、施前に在り。[三六]前却不等なる所以のものは、十念戒は聲聞家の戒なり。弟子の法撿身を以て先と爲す。是を以て前に在り。大士の法惠施を以て重しと爲す。何となれば、夫れ大士は天人中に生じて心濟益に存す。濟益の要は施に非ざれば救はれず、夫れ衆生命を存するもの衣食を以て先と爲す。故に財施を以て先づ其の形を救ひ、然して後法を以て其の神を攝御す。故に大士は施を以て先と爲す。夫れ戒に二有り、俗戒有り、道戒有り。五戒十善を俗戒と爲し、三三昧を道戒と爲す。二百五十戒より五百戒に至る、亦是れ俗戒なり。四諦の妙慧を道戒と爲す。但だ行戒に安んじては三界を出でず。慧を以て戒を御し、無漏を成ぜしめば、乃ち眞戒に合す。[三七]聲聞家の

反(さく)。說文、糲一斛舂いて九升を取るを糳と曰ふ。三蒼注して云く糳は精米也。今江南亦胏米を謂つて糳と爲す。糲は普刺(し)。論文に粋るは體に非ず。

※戒を全うせし比丘の話。

【三五】麗本「汪水」に作る。今三本並に宮本による。

【三六】前後不同と云ふに同じ。

【三七】大乘戒と小乘戒を花に喩ふ。

是を以て之を言はゞ法を先に在りと爲す」。又曰く、「若し然らば何を以て念法を先とせずして而も念佛を先とするや」。答へて曰く、「法は微妙なりと雖も、能く知るもの無し。猶し地中の伏藏珍寶處として有らざる無し。而も人貧困にして資用に乏し。神通の人有り、處所を指示して以て自から供し窮乏を濟ふが若し」。或が問うて曰く、「寶勝るとや爲む、人勝るとや爲む」。曰く、「人勝る。何を以て勝ると言ふ。伏藏多しと雖も、神通に非ざれば覩ず。人に由て資生を得。豈寶藏地中に自貴しとせんや。法亦是の如し。理玄妙なりと雖も、如來に非ざれば辯ぜず。世尊に非ざれば暢べず。是を以て念佛先に在り。法を以て次と爲す」。云何が念僧、僧とは謂く四雙八輩十二賢士、世の貪諍を捨て、福を開くの導首、天人路通ずる之に由らざるは莫し。則ち是れ衆生の良祐福田なり。何を以てか衆僧の良福田爲るを明さむ。*昔薄福の比丘有り。梵摩達と名く。千二百五十の衆中に在りて、衆僧をして食を得ざらしむ。誰の咎なるを知る莫し。佛便ち分ちて二部と爲し、一部の中に在らしむ。復一部をして食を得ざらしむ。復此の一部を分ちて半と爲し、其の半に從はしむ。復此の半をして食を得ざらしむ。是の如く展轉分半して乃ち二人に至る。亦食を得ず。遂に獨身なるに至る。乃ち無福なるを知る。所在行食し、次で鉢在るに至れば、自然に消化す。佛其の厄を愍れみ、自手食を授けて鉢中に在らしむるに、神力の制する所、復化去せず。佛現身に福を得しめんと欲するが故に二の滅盡の比丘をして左右に在らしめ、食を以て此の二滅盡比丘に施す。凡そ滅盡三昧は皆即時に福を得。次に復入慈三昧の比丘をして左右に在らしむ。次に二悲を以てし、次に二喜を以てし、次に二護を以てし、各各遞代して四等を終らしむ。時に波斯匿王此の比丘薄福にして佛愍れみて食を與ふるを聞き、「我れ今亦當に其が爲に福を設くべし」と。即ち使人を遣はして[三四]粋米せしむ。時に一鳥有り。飛來りて一粒の米を銜み去る。使人呵して曰く、「王梵摩達の爲に福を設く。汝何を以て持ち去るや」。鳥即ち本處に持ち還る。爾る所以は此の比丘衆僧の福力を蒙るを以て、是を

*薄福の比丘梵摩達。brahmadatta の話。

【三四】米を精白にすること。一切經音義卷第七十三に粋字を解して云く、「字宜しく䊫に作るべし。二形同じく子各の

房舍有り。其の中平正にして果木豐茂し、流泉浴池あり、寒溫調適、四望清綺にして、冬夏改めず、嚴に都を治し訖りて共に世尊を請ふ。世尊卽ち千二百五十の比丘と共の中に遊止す。檀越供養し、[三二]四事乏しきこと無し。[三三]阿難邠坻是れ國臣たるを以ての故に高讓して先に在らしむ。是の故に諸經每に祇を稱して首と爲す。功德相連るを以ての故に名も亦相離るゝを得ず。故に常に合して以て稱と爲すのみ。

「佛諸比丘に告ぐ」とは何を以て淸信士女に告げざる。但だ比丘に告ぐるは四部衆に於て比丘元首爲り。又復是れ破惡の主なり。無漏法を以て諸の有漏を斷ず。是を以ての故に先づ比丘に告ぐ。亦沙門と名く。沙門とは心休息を得、息して有欲を移し、寂然として著無し。亦除饉と名く。世人色欲に飢饉す。比丘は此の愛饉の飢想を除く。世尊說法比丘能く受け、生死を斷除して涅槃門に至る。是故に比丘に告ぐるのみ。「當に一法を修行すべし」とは念佛を謂ふ也。念佛は何等の事ぞ。佛身金剛にして諸漏有ること無し。若し行きたまふ時、足地を離るゝこと四寸、千輻相の文跡地に現じ、足下の蟲蟻七日安隱なり。若し其の命終れば皆天上に生ずるを得。*昔一惡比丘有り。本と是れ外道なり。服を假りて誹謗せんと欲し、如來の行を逐ひて多く飛蟲を殺して佛跡處に著き、蟲を蹈み殺せりと言ふ。然も蟲死すと雖も、佛跡處に遇ふて尋いで還活くるを得たり。若し城邑に入りて足門閫を蹈まば、天地大に動き、百種の音樂鼓せざるに自から鳴る。諸の聾盲瘖瘂・癃殘百疾・自然に除愈し、三十二相八十種好、其を覩るもの有れば、行に隨つて得度し、功德の濟す所稱計すべからず。慧明の照す所豈營るべけんや。佛は諸法の主、總じて萬行を會し、載運を以て先と爲す。所謂念佛なり。其の義此の如し。念法云何。法とは謂く無漏法・無欲法・道法・無爲法なり。欲より無欲に至る。佛は諸法の主、法は結使の主なり。[三三]或が問うて曰く、「法先に在りと爲んや。佛先に在りと爲んや」。答ふ、「法先に在り。何を以て之を知る。經に曰く、法諸佛を出だし、法佛道を生ずと。

【三二】衣服、飲食、臥具、湯藥なり。
【三三】anāthapiṇḍada にして給孤獨のことなり。

*惡比丘佛を陷れんとする話。

【三三】法と佛との前後のこと。

便はち當に身を以て彼の子の命を救ふべし」。二人肯かず。方に市に詣りて肉を買ひ、用て子の命に代へんと欲す。一人思惟して曰く、「若し此に往返せば子の命全からじ。且らく當に身を山下に投じて其の子の命を濟はんのみ」。卽ち山上より身を投じて來下して彼の虎の口に趣く。身は則ち安隱にして虎は敢へて食はず。爾る所以は夫れ慈三昧に入る者は物能く害する莫き也。故に竹を以て自から刺し、虎をして食ふことを得しむ。[二九]曰く、是の勇猛卽ち九劫を超えて、今彌勒の前に在り。是を以て之を言ふ。道に前後無し。意決を先と爲す。是の故に我れ今成佛し、故らに遺典を以て阿難に委付す。汝當來に於て聞如是と稱せよ」。何を以て復[三〇]一時と言ふや。是れ日月の數と爲んや。是れ人名と爲んや。答ふ。亦是れ時節の數、亦是れ人名に在り。或は曰く、復二名有り。或は刹帝利、或は婆羅門。復二名有り。或は長者種、或は居士種、或は天上に在り、或は人間に在り。是の如きの諸の或是れ一處に非ず。故に一時と曰ふ也。婆伽婆とは世尊の稱なり。結使都て盡き、能く過ぐる者無し。故に稱して尊と爲す。三界の諸天皆來りて師仰し、八部の鬼神亦宗敬する所、故に世尊と稱す。能く魔を降伏す。卽ち復是れ尊。是の如く稱する所、計量すべからず。故に世尊と號す。

*祇樹給孤獨園、祇陀太子は波斯匿王の嫡子なり。園田八十頃有り。地平にして木茂り、諸禽獸多し。日に來り相集まる。祇の心佛に存し、常に佛に上まつりて精舍を作らんと欲せり。未だ周からざるの頃に、須達長者來りて買はんことを請ふ。祇少より長者と親しく善し。每に調戲を喜ぶ。戲れて許可すと言ふ。須達決意を得て甚だ欣悅す。顧みて侍者に謂ふ、「速かに象を嚴駕して金を載せて地に布け」。卽ち金を負はしめて出で、隨つて集めて地に布く。須臾にして四十頃に滿つ。祇云く、「止めよ、止めよ、我れ戲言して相可す」。須らく復布くべからず。須達卽ち太子と共に王所に至り、此の意を啓白す。王の曰く、「法に二言無し。許決已に定まらば理悔を容るゝ無けむ」。祇曰く、「吾れ樹の分を取らむ。卿便はち地を取れ、二人會して共に精舍を立つべし」。七十二講堂、千二百五十の

訶薩埵以身施虎品第二、及び佛說菩薩投身飴餓虎起塔因緣經等。

【二九】「日」の一字恐らくは衍文なるべし。

【三〇】「一時」と云ふは必ずしも時間を意味せず。「或る處に於て」といふ空間の意味ありて云ふものゝ如し。

*祇園精舍の建立の話。

五慾自から恣にし、戀著して捨てず。病に應じて藥を投じ、便はち[二六]無相三昧を說く。卿の[二七]想ふ所は皆滅盡に歸す。故に爲に心を馳せて所樂を放在せよ。所想卽ち解して二復道迹を得たり。餘の二人心常に梵天に生じて梵に於て王たらんことを願ふ。所滯釋けず、復以て累と爲す。如來心の所在を見て、復爲めに無願を說く。汝の願求する所の梵天王は出要する能はず。皆磨滅に歸す。常に存する者無し。所求を捨つべし。出要を先と爲す。卽ち復解を得て道迹を成ぜり。五人の滯る所各異なり、所解同じからず。所謂三たび四諦を轉ずとは空、無相(無)願の中、皆四諦有り。諦は卽ち觀なり。定は則ち止なり。止觀雙び行じ、共に[二八]陰持入中の癡愛の病を治す。「十二」とは十二因緣を破する也。昔佛在世の時、四部の爲に說法す。或は四諦を說き、或は六度を說き、前の衆生の所應に隨ふ。聞くもの各敷演を爲して常量有ること無し。或は國王・長者・梵志・居士有り、或は請して供養し、或は來りて請問す。「諸の所說を可とす」とは、阿難問ふて曰く、「云何が之を名けむ。當に聞と言ふべきや。當に見と言ふべきや」。佛阿難に告げたまはく「後將來に在りて四部說法の時、當に聞と言ふべし。見と言ふを得ざれ。若し見と言はゞ、則ち虛妄と爲る。何を以ての故に。聞は已に過去す。見は現在なり。過去七佛の如き正に聞と言ふべし。見と言ふを得ざる也。汝將來に於て亦復是の如し故に『聞くこと是の如し』と曰ふ也。我れ慇懃に阿難に囑累する所以は、過去の諸佛侍者有りと雖も、阿難の如く佛の意趣を知ること無し。曩昔已に曾て二十億の佛を供養して、常に侍者爲り。盡漏を求めず。常に等智を得て、佛の意趣を知らんと願へり、是を以ての故に今其の報を獲て、親目遠意宜則を失はず」。諸佛の中勇猛精進なるは釋迦文に過ぐる者無し。兄弟の中彌勒應に前に在るべし。今反て後に在るは何とならば、*昔三十劫前に時に三菩薩有り。共に山上に在りて遊行せり。時に餓虎有り、其の子を食はんと欲するを見、一人念じて曰く、「此の虎既に畜生爲り。復其の子を食はむ。死に痛苦有り。母復慈ならず。我が今の身は四大合成して會ず當に死に歸すべし。

【二六】麗本「想」に作る。今三本並に宮本による。
【二七】三本並に宮本「想著する所」に作る。
【二八】陰界入に同じ。

※捨身餓虎の說話。金光明經捨身品、本生鬘論、投身飼虎緣起第一、隨って Jātakamālā 相當の個處、賢愚經第一、摩

復云ふ、「一偈の中乃ち三藏の諸法を具すべし。況んや復增一にして而も諸法を具せざらんや」。復此の一段の偈說有る所以は、諸天子の心中念を生ず、「阿難偈說法を作す能はざるや。何を以て復此の謾說を作すや」。阿難諸天子の心中の所念を知り、諸天子に語る。正に〔二二〕八萬四千象の所載の經をして皆偈頌と作さしめんも、我れ盡く能く偈頌と作さむ。況んや復阿難、此の少法、而も能く作らざるや」。諸天の意に適はしめんと欲するが故に復偈を以て諸法を頌し、諸天及び利根の衆生を勸喩す。「應に偈を聞きて解を得べし」とは、法は卽ち上章の「諸惡莫作・諸善奉行・自淨其意・是諸佛敎」の法也　言く、此の法能く三乘を成じ、三惡趣を斷じ、諸の果實を具し、二世報を受く。才に優劣有るを以ての故に、設けて之を誘進す。頌に云く、「上は〔二三〕三藏を持し、其の次は四阿鋡、或は能く律藏を受く、卽ち是れ如來の寶なり」。寶と云ふ所以は喩へば王に寶藏有り、外人をして知らしめざるが若し。唯內臣の王と同心なる者有りて、乃ち典掌せしむるのみ。戒律も亦是の如し。若し能く二百五十及び五百事を持せば乃ち其の人に授く。外部の淸信士女をして瞻覩すべき所たらしむべからず。故に王の寶に喩ふる也。設し力三藏に及ばず、但だ阿毘曇を持するものは、便はち外道を降伏すべし。九十六逕、宗に歸せざるは無し。何となれば此の無比の妙慧、能く上の微滯を決し、豁爾として齊直ならしむ。復〔二四〕五通仙劫と雖も、未だ〔二五〕四駛の制する所を免れず。是の故に外學敢へて闚闟する莫し。阿難此の十偈の妙勸を唱ふるもの、正に此の三萬の天人の爲なり。昔佛始めて成道して波羅奈鹿野苑中に在り。阿若拘隣等五人の爲に四諦法輪を轉ずとは、佛の言く、「拘隣當に知るべし、苦諦・苦習諦・苦盡諦・苦出要諦あり」。直に此の四諦を說くに、拘隣有に滯り來ること久し。智慧を說くを聞きて意猶ほ悟らず。便はち爲に空を說く。「拘隣當に知るべし。四慧の滯る所、一切皆空なり。亦復無常なり。喩へば幻化の若し。眞に非ず、有に非ず、拘隣卽ち解して見道迹を得たり。四人未だ解せず。如來復心の本を觀ずるに、二人の病は想更樂に著するに在り。在家を思憶し、

に於て當に念すべきが故に。」卽ち「敬」を「故」に作る。

【二二】先に第一卷々初の香象の譬喩と比較。

【二三】現行の增一阿含の文少異あり。云く、「三藏法を受持し、（中略）當に四阿含を誦すべし（中略）戒律失せしむる勿れ。此は是れ如來の寶なり。」

【二四】五通とは、天眼通、天耳通、宿命通、他心通、神足通の稱。

【二五】四駛とは、四相卽ち生、住、異、滅の意か。

り。優多羅便ち般涅槃す。外國今現に三藏は盡く善覺の所傳なり。師徒相授けて今に替らず。迦葉毎に阿難を謂つて小兒と爲す所以は、故らに累世已來の父意を以て相加ふるが故なり。時に※阿難の妹比丘尼爲り。迦葉の語を聞きて大に用て嫌恨す。「阿難は聰明博達、衆人の瞻望する所、而も尊は謂て小兒と爲すや」。迦葉比丘尼に謂て曰く、「大妹よ、阿難に二事の耻づべき有り。何の恨と爲す所ぞや。正坐阿難佛に勸めて母人を度せり。佛法をして千年を減ぜしむ。是れ一なり。阿難に六十の弟子有り。近日三十の比丘還つて白衣と爲る。佛教弟子を度するの法、若し在家信有りて來りて道を求むるものは、當に之を試むること七日、若し外學の來りて道を求むるものは、當に之を試むること四月なり。何を以てか不等なるや。外道の家、或は惡心を以て長短を求めんと欲するを以て、是を以て先づ試みて至誠爲るを知る。然らずして阿難來りて便ち之を度す。是れ耻づべきの二なり。此の三十の比丘還る所以のものは、阿難九十六種の道中に於て等智第一なり。阿難に從つて度を求むるもの、等智を請はんと欲す。然るに阿難は與に等智を說かず。是を以て本心に合せず。是に於て還る。還らば必ず阿難を誹謗して等智無しと謂はむ。弟子を度するは、喩へば魚の子を生ずる千億萬なるが若し。若し心念ぜば便ち生ず。念ぜざれば卽ち爛壞せむ。弟子亦是の如し。若し心に留めて教詔せば便ち成就せむ。心に留めざれば卽ち退還せむ。此れ豈耻づべきに非ずや」。此の比丘尼、恚心を以て迦葉に向ふが故に、卽ち現身に地獄に入る。阿難此の闕有るを以ての故に、迦葉謂て小兒と爲すのみ。[二〇]阿難往昔轉輪聖王爲りしを自引す。名けて長壽と曰ふ。父大王の遺教を受けて、位に登りて治化す。將に出家せんと欲し、復太子善觀に囑して、委ぬるに國政を以てす。展轉相授け、未だ會て暫らくも替へず。昔父子相承くるを以て、今師徒を以て相紹ぐ。昔すら尙ほ有漏の教を失せず。況んや今當に至眞の妙法を失ふべきや。故に引いて自から證明す。其れ必ず遺典を受るに堪ふる也。[二一]法に於て當に念徹すべし」とは、上の偈の中に已に三藏、四阿鋡を判じ、長行の中

※阿難の妹迦葉を恨む。

【二〇】阿難の本生。

【二一】增一阿含の偈には「法

十八七に至りて乃ち其の形を成す。若し天上に生ずるには、天樂來り迎へ、喜悅に勝へず。即ち小便を失す。此の五道の瑞各所見有り。此の死行者に應じて已に明戒と爲し。深く無常を惟ふ。命の速かなる電の若く、雲の庭を過ぐるが若し。老病死來らば逝喪せざるは無し。常に此の變を念じて以て自から覺悟す。故に死念と曰ふ也。前の十念は佛自から說く。未だ問者あらざるが故に解せず。後の十念比丘佛に問ひ、更に爲に演說し、一一析解す。「尊弟子」とは謂く五百羅漢各便する所有り。或は智慧第一、或は神足、或は辯才、或は福德、或は守戒、或は知足、或は說法、各第一に據る。先兄にして後弟なるを論ぜんと欲せば、[一四]阿若拘隣を以て最長とし、[一五]須跋を以て最小と爲す。此れ佛法階次の大要なり。若し聰哲博達を以て元首と爲さば此れ乃ち婆羅門の法なり。千二百五十と云ふは其の常侍從者を舉ぐ。或は云ふ、五百人とは佛[一六]阿耨達の請を受けし時、五百人の可なる者を簡び、尋で從へて龍王宮に至る。何となれば此の阿耨達泉は有漏儌形の周旋すべき所に非ざれば也。阿　經を出す時、八萬四千の羅漢を集む。是を以て之を言はゞ數は計るべからず。此の經今正に百人を出だす。第一四部の衆に通じて二百二十、各第一なり。其の餘は豈復計るべけんや。[一七]其人云く、「此の經本と百事有り。阿難[一八]優多羅に囑して[一九]增一阿鋡出づ。後十二年を經て阿難便ち涅槃せんとする時、諸の比丘各坐禪を習ひ、復誦習せず。云く、佛に三業有り。坐禪第一なり。遂に各經を諷誦するを廢すること十二年なり。優多羅比丘復般涅槃す。是に由て此の經九十事を失す。外國法師の徒相傳へ、口授を以て相付し、文を載するを聽さず。時に傳ふる所の者十一事を盡すのみ。爾より相承して正に今の現文有るのみ。然りと雖も薩婆多家序及び後の十一事無し。流浪を經、久しきを經て遺轉する所多し。偏に此の弟子に增一を囑累する所以は、其の人乃ち七佛より以來偏へに增一阿鋡を綜習し、前聖亦皆囑して此の經に及ぶを以てなり。是を以て能仁の時、轉じて復勤めて此の比丘に及ぶ。時に優多羅の弟子を善覺と名く。師より增一を受誦して正しく十一事を得た

【一四】 aññākoṇḍañña, ajñāta kauṇḍinya

【一五】 subadda

【一六】 龍王 anavatapta なり。

【一七】 「其」は「某」なるか。前註を見よ。

【一八】 uttara

【一九】 ekottarāgama

同じくするのみ。都べて結二十一、演じて三十六と爲す。數忽縮と雖も倶に是れ結と爲す。凡そ事に百一舒有り。復八萬四千と爲す。是を以て一法と千萬と、同じく是れ至道の徑のみ。猶ほ師子の象を殺すと兎を殺すと同じく是れ一死のみ。其の理趣異らざるが故に。便はち一法より始む。「放逸無し」とは一法の宗也　或は問ふて曰く、「戒應に前に在るべし。先づ當に戒を持し然る後に三尊を念ずべし」。或は曰く、「此れ新學者爲り。先づ三尊を念ず。即ち三自歸なり。意を運んで佛、法、衆に在らしめ、次を以て戒を受く。是を以て之を言はゞ、戒は應に第四息念の後なるべし」。解して云く、自苦を閑靜にして念ずとは、謂く、身の三十六物の不淨惡露を觀じ、以て自から覺悟し、以て道を成ずべし。何を以て之を明す。*昔比丘有り。阿練若行乞食を作す。一長者女の從つて乞食するに逢ふ。比丘女人倶に端正なり。女比丘を見て便ち欲想を起し、比丘女を見て亦欲意を起す。意動き手掉ふ。飯を鉢に投じ、錯まつて地に注ぐ。女自から怪み笑ふ。比丘女の齒白きを見、即ち自から覺悟して曰く、「女人の口中[一二]鈍に是れ骨のみ。佛の說りたまふ如し。人の身中三百二十の骨有り。六百の節、七十萬の脈、九十萬の毛孔有り。一孔九孔に入りて出で、不淨を泄漏す。一として貪るべき無し。女身三十六物を諦觀するに、慘然として毛竪つ」。專ら自ら惟察して、即ち身空を解し、須陀洹道を得たり。復自から念じて曰く、「我れ女に因りて法を見る。則ち是れ我が善知識なり。今當に恩を報ずべし」。即ち復女の爲に向に解する所の觀身の法を說く。女即ち心開け、亦須陀洹道を得たり。是を以て之を言ふ。身念を勝と爲す也。死念とは人の福盡き命終る時を念ず。地獄の瑞を見て驚恐して糞を失す。若くは餓鬼を見、若くは畜生を見、行に隨つて墮する所見て皆恐怖す。意捨て去らんと欲し、反て對の爲に牽かる。若し當に人に生ずべきは、父母の會に緣る。若し男胎を受くるには彼の女人を愛し。若し女胎を受くるには彼の男子を愛す。其の疾難を除き、三事差はず、便ち胎に入ることを得。既に受けて又認めて己れが有と爲す。七日に一變し、巧風刻割し、[一三]三

※比丘身念によりて得道せし話。

【一二】「鈍」は「頓」に通ず。されど寧ろ「純」(もつぱら)の寫誤と見るを可とせむ。

【一三】三十八個の七日といふ義なり。

卷の第二

[1]「彌勒善と稱し」とは其れを以て此の六度の大法を集めて一分と爲す。此れ卽ち菩薩藏なり。[2]「結を斷ず」とは諸の[3]妄見結使を斷ずるなり。[4]「道果を成ずる」は大乘の[5]菩薩事を然りとするを云ふ也。[6]阿難但聞と云ひて見と云はざるは、豈如來の說法を見ざるべきや。見を言ひて非と爲す所以は、將來の四部の爲の故に見と言ふを得ざる也　設見ると言はゞ後の四部の衆復阿難を承けて見ると言はば則ち虛妄と爲す。是を以ての故に但聞と稱して見と言はざるのみ。「初の說法」阿若拘隣等の五人を度し、「摩竭國三迦葉を降す」。「釋翅」は卽ち迦毘羅衞なり。[7]「若し說經の處を得ず、但稱して舍衞に在り」とは、佛舍衞に在りて二十五年を經るを以て、諸國に在るに比して最も久し。久しき所以は、其の國最も妙にして諸の珍奇多く、人民熾盛にして最も義理有るを以てなり。[8]祇樹精舍異の神驗有り。衆僧講集に在る時に當り、諸の獼猴數千有りて來る。左右に在りて觀聽す。寂寞として聲無し。及び諸の飛鳥普ねく皆來集す。衆僧正に罷めば各所止に還る。撻搥適鳴り已れば復來集す。此れ國仁慈多きに由るが故に、異類影附す。佛或は能く暫行して請を受く。或は能く神力適化して尋いで本所に還る。是を以て但だ舍衞と稱す。其の要を知るに足る。[9]祇洹孤獨二人の名を別稱する所以は、此の二人先に亡して今天上に在り。亦諸天を集めて說法教化す。時に心に念言すらく、「我等本と是れ衆僧の檀越、初め復我等の名字を稱せずや」。彼の所念に適はんと欲するが故に、復二人の名を別稱するのみ。「當に一法を修すべし」と云ふは、亦次第說に非ず。若し初成の說法を按ぜば當に[10]波羅奈、[11]鹿野苑に從ふべし。四諦を說くを始と爲す。次に摩竭三迦葉を降すに至る。其の精舍の主の名を稱するに因りて、便はち「當に一法を修すべし」と云ふは、其の一法の四法と其の理味異らざるを以ての故なり。一法も亦斷結、四法も亦斷結、俱に泥槃に至る。途を殊にするも歸を

【一】偈に云く、「彌勒善しと稱して快哉を說く。」
【二】偈に云く、「或は諸法の結使を斷ずる有り。」
【三】麗本「望」に作る。
【四】偈に云く、「或は諸法の道果を成ずる有り。」
【五】麗本「菩」の字缺く。
【六】偈に云く、「阿難說いて曰く此れ云何ぞ。我れ如來の此の法を演ぶるを見る。亦如來に從つて聞かざる有り。此の法豈當に疑有るべきに非ずや。設し我れ見ると言はゞ此の義非なり。將來の衆に於て便ち虛有り」。
【七】偈に云く、「正しく說經の處を得ざらしめば當に原本舍衞に在りと稱すべし。」
【八】祇樹精舍の光景。
【九】祇洹は Jetavana に當る。宜く祇陀に作るべし。孤獨は具には給孤獨と云ふべし。anāthapiṇḍada なり。
【一〇】vārāṇasī 現今のベナレス。卽ちヴァラナー河とアシ河との合流する地點に在るより名を得たり。
【一一】mṛgadāva

は寂に入りて[四六]泊然として動ぜず。「智慧」は塵數及江河沙數、億載不可計を知る。慧明の了する所窮盡すべからず。此の六度無極の事、盡く菩薩藏に在り。應に三藏と合せざるべし。阿難、大小をして因緣殊ならしめんと欲して彼相知らず。其の理自から空、明了すべきこと難し。大士疑空とは、證を取らざるが故に狐疑と云ふなり。

分別功德論卷第一

【四六】 前註に準ず。

に坐して比丘の儀を犯すを見、卽ち還りて佛に白す。「向に比丘女人と共に坐せるを見る」。佛は先に知るを以て便ち默然たり。比丘阿難の世尊に白すを知りて曰く、「念ふに我れ正にして往かずんば、恐らくは誹謗のもの罪に墮せむ。正しく變を現ぜんと欲す。佛の許さゞる所なるも、直に飛んで佛所に至る」。佛阿難に語る、「向に見る所の犯律の比丘とは今此の飛來の比丘なり。汝頗る犯欲の人の能く飛ぶを見るや不や。此の比丘向に女人と與に坐す。時に女人の心に是の比丘我れと與に共に坐せば我れ當に無上意を發すべしと念ぜしを以て、此の比丘女人の意を知りて便ち與に共に坐せり。卽ち與に空法を說き、眼空を分別せり。五情亦然り。女卽ち恐畏して便ち道迹を得たり。其の恐懼心生ずるを以て、生死を畏るゝが故に小乘を得たり。若し此の比丘向に與に有行を說かば還つて本心を成ぜむ」。此の事を以て知る、是の菩薩未だ不退を成ぜず。人心を見るに於て未だ善を盡さず。所謂金剛戒なり。所謂忍度とは罵られ、毀たれ、默受して報ぜず。菩薩忍を行ずる、常に慈等を以て彼を我に等しうす。彼我旣に齊し。怨親不二なり。故に經に曰く、「小乘の慈は慈猶ほ肌膚、大士の慈や骨髓に徹す」。何を以て之を明さむ。若し人菩薩の手足を割截するに變成して乳と爲るは卽ち是れ慈の證なり。[四二]羼提比丘便ち是れ其の事なり。喩へば母人の子を生ずるに、便ち乳有りて出づるが若し。此れ慈念の感ずる所、自然に變成す。大士も是の如し。慈三昧に入るが故に能く乳を感ず。慈を行ずる至なれば弓矢を執ると雖も、衆生反りて來りて己に附く。慈の徹せざる、杖を執らずと雖も見て皆捨てゝ走る。是を以て證するが故に、大小の殊、自ら來る有り。[四三]「善惡の行を作す」とは、謂く精進して諸の善功德を作す。惡行とは猶し昔[四四]火鬘童子迦葉佛を誹つて言へるが如し、「禿頭の沙門何ぞ道有らむ。」道は得難きも、能く道を得たり。是れに由りて後六年の勤苦を受けて方に乃ち道を得たり。遺法の中、諸比丘常に此を諍ふ。猶ほ口言ふべからず、而も報を言ふなり。六年苦行とは行ふべからずして而も報を行ふなり。是を菩薩身口の惡行と爲す。「禪定」と

【四二】 kṣānti 詳かならず。

【四三】 偈に云く、「諸有善惡の行を造作して、身口意の三厭足無し。」

【四四】 Jyotipāla か。傳說詳かならず。

又其の無畏を取る。阿難無量博聞、聲聞中に於て獨歩にして畏無し。故に無畏座と曰ふ。[三八]（阿難高座に昇ること此の如し）。「[三九]彌勒善と稱し快哉を說く。」[四〇]（彌勒下る所以のものは阿難菩薩法を合して三藏に在らしめ、大小別たず。）鍮金同貫ならんを（懼るゝなり。）是を以て慇懃に勸請して部を分つ。昔大天聖王四梵堂を具し、展轉相紹ぎ、乃至八萬四千王皆梵堂有り。唯大天一人是れ大士、其の餘皆是れ小節い是を以て之を言ふ。大乘は辨じ難し、多くは聲聞に趣く。彌勒亦阿難の三藏を部分するを知り、然も猶ほ後學の專ら空法を習ひて、斷結證を取るを懼る。是を以て大乘を顯揚し、分つて別藏と爲し、故らに六度の諸行を說く。大士の目要也。施と云ふは二種有り。信施有り。恐怖施有り。根を立てゝ忍を得るを則ち信施と曰ふ。威力に逼迫せられて本心に由らず。則ち恐怖施と名く。信ずれば則ち度を成じ、畏るゝときは則ち福を求む。道俗の殊言を待たずして自から別なり。[四一]其人云ふ。「頭目施」とは七住以上、財物施とは六住以下、此より退するものも生死に墮せず。要らず涅槃に至るのみ。何を以て之を明す。大品の本無說中に云く、六十の菩薩羅漢道を得と此れ其の事なり。「戒金剛の如し」とは大乘戒なり。「戒坏瓶の如し」とは小乘戒なり。何となれば、金剛は沮壞すべからず。※昔者菩薩比丘端正比無し。出行し乞食す。路に一端正の女人に遇ふ。女菩薩を視て便ち欲意を起し、夫婦爲らんことを願ふ。覆りて自から思惟すらく、「此れ同じく得叵し。但共に坐せば我れ便ち無上意を發さむ」。菩薩女の心を知りて便ち前んで共に坐す。頃有りて便ち前んで之を牽く。比丘默然として答へず。復重ねて之に近く。故の如く寂然たり。比丘卽ち與に空法を說く。「眼本と何より來り、去りて何所にか至る。父母より來ると言はんと欲するや。未だ會せざるの時、亦此の眼無し。後に至り壞する時、復何所にか到る。是を以て之を言ふ。眼に所有無し。五情亦然り」。豁然空を解して須陀洹を得たり。應に與に有を說き、乃ち更に空を說くべし。菩薩の法當に有に入りて空を說くべし。是を以て本意を全くせず。阿難時に此の比丘の女と與

【三八】麗本は括弧中の文を割註とす。
【三九】偈の文なり。
【四〇】麗本は括弧中の文を割註とす。
【四一】「其人」とは某人と解すべし。偈には「諸有勇猛は頭目を施す」とあり。
※菩薩比丘と女菩薩の說話。

所謂雜藏とは一人の說に非ず。或は佛の所說、或は弟子の說、或は諸天の讃誦、或は宿緣、三阿僧祇菩薩の所生を說き、文義一に非ず。三藏より多し。故に雜藏と曰ふ。佛在世の時、阿闍世王佛に菩薩の行事を問ふ。如來具さに爲に法を說く。[二八]設王佛に問ふ、「何をか謂て法と爲す」。答ふ、「法は卽ち菩薩藏なり」。諸の方等の正經皆是れ菩薩藏中の事なり。先に佛在し、時、已に大士藏と名く。阿難の撰する所は卽ち今の四藏是なり。合して之を言はゞ五藏と爲す。

[二九]「或は一法有り義亦深し。持ち難く、誦し難く、[三〇]憶すべからず。」[三一](一法とは卽ち空法なり。形無く像無し。護持すべからず。)寂として聲響無し。無心、無念、[三二]泊然として無想、最第一空なり。義無二の故に。容の測るべき無きが故に難持と曰ふ。言の訓ふべき無きが故に難誦と曰ふ。意の憶ふべき無きが故に[三三]叵憶と言ふ。所謂深義其の事此の如し。又復一法とは衆數の本、一は數の始、十は數の終、十に終り、復一より起る。正しく千萬に至るも、常に一より始まる。是の如く諸一窮盡すべからず。諸經の中、或は一義、一法、一行、一事、各各相從ひ、其の緖を失はず。故に「一一相從ひて緖を失はず」と曰ふ。

[三四]「二法二に就く」とは或は善惡と云ひ、或は止觀と云ひ、或は名色と云ふ。止は虛なり。觀は實なり。止とは三昧定、[三五]泊然として想を滅し、冥爾として懷を亡ず。故に虛と曰ふ。觀を實と言ふ所以は、其を以て分別して行有り。是非好惡、識別して明了に、意惑亂せず。故に實と云ふ。[三六]「三法三に就く」。三とは布施なり。功德なり。思惟なり。此の三行は世俗生天の法なり。三脫門の行は涅槃に至るの法なり。諸有三法、三行、三福、三分法身、三三相從ひ、喩へば連珠の如きなり。

[三七]「四法四に就き五亦然り。五法六に次ぎ六は七に次ぐ。八法義廣くして九次第し、十法十より十一に至る」。是の如きの諸數二三に同じく事類相從ふ。「阿難卽時座に昇る」。座とは師子座なり。經に師子座に喩ふる所以は、師子は獸中の王、常に高地に居して卑下に處せず故に高座に喩ふるなり。

【二八】阿闍世或は阿闍多設咄路と爲す。Ajātaśatru なり。今これを略して設王と云ふ。

【二九】此處原文分節せず。

【三〇】原文「不可憶」後に「叵憶」に作る。

【三一】麗本には括弧中の一文を割註とす。

【三二】心靜かにし欲うすき貌。

【三三】「叵憶」は「不可憶」に同じ。叵は不可を約したる音なり。「八」と云ふ。

【三四】偈に云く「亦二法有り還つて二に就く」。この處原文分節せず。

【三五】前註に準ず。

【三六】偈に云く、「三法三に就き連珠の如し」。

【三七】偈の文なり。

難獨り此の念を生ずるに、[二六]首陀會天密かに阿難に告げて曰く、正に當に三分を作るべきのみと。即ち天の告ぐる所の如く、判じて三分を作る。一分契經、二分毘尼、三分阿毘曇。契經は佛所說の法、或は諸天帝王の爲に、或は外道異學の爲に、事に隨つて分別し、各開解を得しむ。契經とは猶し綖の義理を連屬して行法を成ぜしむるがごとし。故に契と曰ふ。毘尼とは禁律なり。二部僧の爲に惡を撿し非を[二七]斂するを說く。或は二百五十、或は五百事、法を引き姦を防ぐこと、猶し王者の祕藏の外官所司に非ざるがごとし。故に內藏と曰ふ。此の戒律藏なるもの亦是の如し。沙彌、淸信士女の聞見すべき所に非ず。故に律藏と曰ふ。阿毘曇は大法なり。大と言ふ所以は四諦の大慧は諸法の牙旗にして、諸の邪見無明の洪癡を斷ず。故に大法と曰ふ。亦無比法と名く。八智十慧無漏の正見は三界の閡を越え、與に等しきもの無し。故に無比法と曰ふ。迦旃延子衆經を撰集し、要慧を抄撮し、佛に呈して印可せらる。故に大法藏と名く。阿難復思惟すらく、此の三藏、義三脫と相應す。何となれば契經妙慧の理は空と合す。毘尼惡を制して玄なること無相に齊し。大法正しく迹を見る無願に同じ。故に三藏と三脫冥迹玄會すと曰ふ。阿難復思惟すらく、契經、大本義四段を分つ。何となれば、文義混雜宜しく當に事理を以て大小を相從し相次すべし。第一增一、次を名けて中と曰ふ。第三を長と名く。第四を名けて雜と曰ふ。一を以て本と爲し、次で十に至る。一二三、事に隨つて增上するが故に增一と曰ふ。中とは大ならず、小ならず、長ならず、短ならず。事中適に處す。故に中と曰ふなり。長とは久遠の事を說き、歷劫絕えず。本末源由事七佛を經、聖王の七寶あり。故に長と曰ふ。雜とは諸經の斷結誦し難く憶ひ難し。事多く雜碎にして憙んで人をして忘れしむ。故に雜と曰ふ。阿難三藏を撰し訖りて、十經を錄して一偈と爲す。爾る所以は將來誦習するもの〻爲に其の忘誤を懼る。名を見て本を憶ひ、思惟して自から寤るが故に、十經を以て一偈と爲すなり。

【二六】 Śuddhāvāsa 淨居天。

【二七】 「斂」は恐らくは「歛」か。若し然らば「をさむ」「やめる」の義。

「此の樹葉何を以てか少きや。」又曰く、「幾枚か少なき」。答へて曰く、「少きこと六十枚なり」。梵志卽ち叉手して謝して曰く、「未曾有なり」。又問うて曰く、「君は是れ羅漢なりや」。答へて曰く、「非なり」。「是れ阿那含、斯陀含なりや」。曰く、「非なり」。「是れ須陀洹なりや」。曰く、「何を以てか問ふや」。又曰く、「師有りや」。答へて曰く、「有り。眞淨王の子出家して佛を得たり。卽ち是れ我が師なり」。心に念じて曰く、「此の[二二]假師の智己れの知る所に非ず」。卽ち隨て佛所に至り、沙門と爲らんことを求め、卽ち羅漢を得たり。是を以て阿難に等智有ることを知る。

阿難の迦葉を推先する所以は、旣に是れ上座、又是れ所尊たり。昔五百世常に其の父爲り。宿識尊仰し、憑仗情深きなり。迦葉の阿難に慇懃たる所以は其の蓄積の厚緣を以て恩を末嗣に遺す。加ふるに復多聞、等智、彊記にして衆に於て上爲り。遺典八萬を屬集するに先莫し。二人相須ふること、猶し盲跛の相賴るがごとし。互相に利爲り。若し二人卒に千斤の段金に遇はば、正に相幷んで力勝へざる所、正に分割せんと欲せば[二三]功を加ふべからず。是に於て共に議り、勢を幷べて持ち歸り、遂に大用を得む。倶智と謂ふべし。迦葉阿難其れ喩へば是の如し。二人齊しく契ひて、法寶長く存す。

[二四]「時に阿難、經を說くこと無量、誰か能く備具して一聚と爲さむ」。[二五](經無量とは十二部經浩漫にして甚だ多し。適時にして而も說く。次緒を論ぜず。或は一事を說き)、乃ち十事を云ふ。或は十事を說きて乃ち二事を論ず。或は三事を說きて乃ち十一事を說く。上下次ならず。一聚と爲すを得ず。或は說くもの有り。如來の說法、或は敎誡を說き、或は斷結を說き、或は天人中に生ずるを說く。是を以て之を言はば、復一聚と爲すを得ず。阿難思惟すらく、一は便ち一に從ひ、二は二に從ひ、三四五六乃至十、各事類をして相著せしむ。或は說くもの有り。一理爾るべからず。按ずるに佛語の如きは次比すべからず」。阿難復思惟すらく、經法浩大なり。當に分つて三聚を作るべしと、阿

ラ王の調馬の技術とこの術とを互に傳授し合ふ一節がある。

[二二] 「假」は「嘉」「佳」の音通にして假師とは蓋し是れ美稱なり。

[二三] 「功」は「巧」又は「工」の音通にして「功を加ふべからず」とは細工をすることが許されざるの義。

[二四] 增一阿含の偈なり。

[二五] 麗本にはこの括弧中の分を割註となす。

すかを知らんと欲す。而も何定中の三昧に在すかを知る能はず。是の如く、神足變現祕密の事は二乘の思議する能はざる所、豈に況んや復凡庶をや。

一四 阿難迦葉を推先して云く、「耆年衆の爲に法を演ぶるに 一五 堪任なり。然る所以は尊長舊學多識、世尊の委ぬる所、將來の衆生の爲の故に、正法をして久しく世に存せしめんと欲す。是を以て如來は 一六 半坐相命ず。仁尊既に是れ衆僧の上座、又復智慧包博なり。唯慈愍を垂れて時に法寶を宣べよ。」

一七 外國師の云く、「迦葉法を說かざる所以は、四辯中に於て辭辯有ること無し。」又云く、「本是れ辟支佛、但だ神足を以て化を現ず。初に法を演ぜず。迦葉答讓して自から云ふ、一八 朽邁、情閣忘るること多し」と。答へて曰く、「四諦の眞法豈 一九 衰亡すべけんや。喩へば金剛の虧損すべからざるが如し。生死の四大乃し增減有るのみ」。薩婆多家又云く、「九種の羅漢に退轉する者有り。幾事を以て退する。四事有り。年衰邁に在り、疾病苦逼、遠行遊を好む、服藥順ならず、此の四事を以て乃ち誤忘有るのみ。眞諦の妙慧豈忘るべけんや」。迦葉阿難を勸めて曰く、「汝今年盛時に在り。加ふるに復聞智、等智有りて總持强記なり。佛經を說く每に常に汝に囑累す。是を以ての故に汝當に經法を宣布すべし」。何を以てか阿難に等智有るを知る。*昔舍衞城の東、尼拘類大樹有り。五百乘の車を蔭す。城中に梵志有り。算術に明かに、九十五種中、最も第一と爲す。此の樹下に於て阿難と相遇ひ、阿難に謂て曰く、「人云ふ、瞿曇の弟子智慧第一なりと。頗る此れ有りや不や」。答へて曰く、「知る所 二〇 少少のみ」。曰く、「少らく一事を問はんと欲す。二一 此の樹の莖節枝葉凡そ幾枚か有る。阿難頭を擧げて樹を視、便ち之に答へて曰く、「此の樹の莖節枝葉各若干有り」。卽使捨てゝ去る。梵志後に在りて思惟すらく、「此の沙門必ずや數を知らじ。其の見に於て答ふること乃ち爾り。今當に之を試むべし」。卽ち處處に葉を取ること六十枚、之を土中に藏す。阿難乞食して還る。復問ふて曰く、「我れ向に數を忘る。更に我が與に說け」。阿難頭を擧げて之を視ること再遍し、答へて曰く、

河沙」に作る。今宮本に依る。

【一四】原文此處節を分たず。

【一五】偈に云く「今尊迦葉能く堪任なり。世尊法を以て耆舊に附す。」

【一六】偈に云く「如來在世半坐を請す。」

【一七】原文此處節を分たず。

【一八】偈に云く、「年衰へ朽老して忘失多し。」

【一九】麗本「亡」三本並に宮本「忘」に作る。

*阿難の等智樹葉の數を知る話。

【二〇】麗本「少耳」に作る。今三本並に宮本の「少少耳」に依る。

【二一】マハーバーラタのナラ物語(二〇)の中にリツパルナ王が驚くべき計數の力を示して、路傍の樹の葉と果實の數を一日で計算する。而してナ

なり」。又曰く、「梵天は是れ婆羅門種、今言く、剎帝利に由て出づと。是れ何の言なるか」。又曰く、「劫燒の時、粗ぼ別つを得べし」。「何を以て之を言ふや」。曰く、「劫燒の時、地際より以上、十五天に至るまで、蕩然として焦盡す。如似知るべし。然るに復十六以上三十三天在り。此の間燒くと雖も、他の世界在り。此を以て之を言ふ。復知るべからず。」[一〇]是を世界不思議と爲す。

何をか衆生不思議と謂ふ。或は云く、「劫燒の後、水火處を補ひ、隨嵐吹いて宮殿を造り訖りて、下に地肥有り。光音天上の諸天の輩、遊戲して地に至り、漸く地肥を嘗めて遂に便[一一]身重く、復還る能はず。食多きは化して女と爲り、輙滅して薄餅、粳米に至り、神足、光明を失ひて還つて復人と爲る。善行は天に生じ、惡行は三塗、五道に流轉して常准有ること無し。正しく一人の根本の所由を窮盡せんと欲せんも、尙ほ知る能はず。況んや復一切衆生を而も思度すべきをや。是を衆生不可思議と爲す。

何をか龍不可思議と謂ふ。凡そ雲を興し、雨を致すは皆龍に由る。雨の龍よりする眼耳鼻口より出づるや。身より出づとや爲ん。心より出づとや爲ん。須彌山に依りて止まる五種の天有り。亦能く雨を降す。何を以てか龍雨、天雨を別たん。天雨とは細霧の下るもの是なり。麁にして下るもの是れ龍雨なり。何をか五種の天と謂ふ。第一曲脚天、第二頂上天、第三放逸天、第四饒力天、第五四天王なり。阿須輪兵を興し、上天と鬪ふ時、先づ曲脚天と鬪ふ。勝つことを得て然る後に次に頂上に至る。次に放逸及び四天王乃至三十三天に至る。下の四天鬪はんと欲する時、雨を以て敵を却く。更に兵仗無し。二種の雨有り。歡喜雨有り、瞋恚雨有り。和調降雨する是れ歡喜なり。[一二]雷霹靂是れ瞋恚なり。阿須輪亦雨を降らし、天亦雨を下す。龍も亦雨を降らす。各各雨を致す、理定むべからず。故に龍雨不可思議と曰ふ。

佛不可思議とは昔時佛靜室に在り。諸の梵天[一三]恒河邊沙の如く、佛所に來至し、佛の何三昧に在

【一〇】散睒王明かならず。

【一一】麗本「睒」に作る。今三本並に宮本に依る。

【一二】麗本「霍」に作る。今三本並に宮本に依る。

【一三】麗本「恒邊沙」三本「恒

梵王、是を八部と爲す。凡て十二部有り。四部と言ふは粗ぼ其の要を擧ぐるのみ。「[七]諸法甚深」とは謂く十二因縁なり。佛阿難の爲に十二因縁の甚深微妙なるを說く。阿難の云く、「此の因縁何の深妙か有りや。」佛阿難に語りたまはく、「深妙ならずと言ふ勿れ。汝乃ち前世の時、亦深からずと言へり。*昔阿須輪王有り。身長[八]八萬由旬なり。上下の脣相去ること千由旬なり。王小兒有り。常に此の兒を愛し、抱いて膝上に在り。海の深きこと三百三十六萬里、阿須輪中に立てば正に腹臍と齊し。兒父を見て海を謂て海淺しと爲し、水に入るを得んと欲す。父語る、「不可なり。海深くして汝を沒せむ」。故に入るを得んと欲す。父卽ち之を放つに、海底に沒し、惶怖嚾嘅す。父卽ち手を申べて還つて執り、水より出でしめ、語つて曰く、「汝に不可と語れども、而も汝信ぜず」。今何にか似たる。爾時の王者は我が身是なり。兒とは汝是なり。昔日深きを信ぜず。今故に信ぜず。汝但だ無明、行を緣ずるを思ひて尙ほ了る能はず。況んや三十七品を了せんをや。」

*如來の說きたまふ所四不可思議あり。何をか四と謂ふ。衆生不可思議、世界不可思議、龍不可思議、佛不可思議なり。世界不可思議なる所以は、昔滿願子梵志と共に論ず。梵志自から云く、「我れ嘗て池水の上に至りて思惟するに、四種の兵衆有り、來りて蓮華の孔中に入るを見たり。卽ち自から驚き怪み、我が眼華の實有と爲んかを知らず。是に人に向て之を說くも、人皆信ぜず。遂に佛所に至り、所見を云ふこと是の如し。佛語る。此は是れ實事にして虛妄爲るに非ず。阿須輪四種の兵を興して諸天と鬪ふ。阿須輪如かず。退いて次の蓮華の孔中に入りて自から隱る。此れ思度の及ぶ所に非ずと」。故に曰く世界は不思議なり。世界は或は梵天の所造と云ひ、或は六天の所造と云ふ。梵志又云く、「梵天を誰か造れる。或は云く、梵天父有り。或は云く、自から造ると。父有りと言ふは、父は卽ち蓮華なり」。有が云く、「蓮華は何より出づる。」曰く、「[九]憂陀延の齊中より出づ」。「憂陀延何より出づる」。曰く「散[一〇]蹉王より出づ」。又曰く、「[一一]散蹉王何姓より出づ」。曰く、「刹帝利種

【七】增一阿含の偈に云く、「阿難便ち辭す吾れ堪へず。諸法甚深若干種豈敢へて如來の教を分別せむ。」

※阿修羅と其の子大海に立つ話。

【八】麗本「八千」に作る、今三本に依る。

※四種不可思議の解說。

【九】憂陀延は udayana なるべし。

那羅延 nārāyaṇa とあるべきが如し。

しむ。是の故に福田と爲す。何を以て之を明かにせむ。*昔日、天帝釋福盡きて命終りなんとす。時に[五]五瑞應に至らんとして心卽ち恐懼し、救護を求めんと欲す。正に佛前に至りて救を求めんと欲す。佛恩の寛緩を念ず。懼解けず命急なり。舍利弗目連等を念ずるも亦恐らくは命を濟ひ能はざらむ。唯大迦葉有り。滅盡定の力を以て尋いで危急を濟はむ。卽ち迦葉の所に往く。時に迦葉適貧家に至り、福をもて度せんと欲す。[六]諦念ずらく、「正しく天身を現ぜんと欲するも、恐らくは我が施を受けざらんを懼る」。便ち中路に於て草屋を現作し、羸病して中に在り。迦葉從ひ乞ふに、病人卽ち手を申べて食を施す。迦葉鉢を以て之を受くるに變じて甘露と成る。還りて天身を虚空の中に現ず。迦葉の曰く、「何ぞ妄語を以て我を誑かすや」。天答へて曰く、「妄語せず。我れ至誠をもて施す。我れは是れ天帝なり。五瑞至り命終らんとするが故に來りて求願す。願くは我が命を濟へ」。迦葉卽ち默然として之を可く。天、佛所に至りて法を聽くに、須臾にして便ち睡り、睡りて卽ち覺む。佛天帝に語りたまはく、「汝向に已に死し、今已に還活く。復命終せじ」。還つて本身に復す。此れ卽ち迦葉滅盡定の力の感ずる所なり。迦葉滅盡定の力を用て最勝なることは、迦葉本と是れ辟支佛なるを以ての故なり。夫れ辟支佛の法、說法敎化せず。專ら神足を以て感動し、三昧變現す。大迦葉復羅漢として證を取ると雖も、本識猶ほ存す。向に錄する所の八萬四千の衆德能く感功する所迦葉に齊し。難じて曰く、「迦葉本と是れ辟支佛なるを以ての故に其の勝を稱せば、此等の羅漢復是れ辟支佛なるや」。答へて曰く、「辟支佛に非ずと雖も遍ねく滅盡定を習ひ、其の力是れ同じ。是を以ての故に、迦葉と衆僧とは衆生の福田なりと言ふなり。」偈に「已に縛著を脫して福田に處す」と云ふは、謂く、迦葉の集むる所の八萬四千の衆、皆俱解脫を得、滅盡定を以て能く衆生をして現世に苦を脫し、後に涅槃を得しむ。故に福田に處すと曰ふなり。偈に「四部を集む」と云ふは略なり。理應に四部とは更に八部の人天有るを表はすなるべし。剎帝利、婆羅門、長者、沙門、四天王、三十三天、魔王、

*迦葉帝釋の命を救ふ話、

【五】五衰の相、天人の死に先だちて現ず。

【六】「諦」恐らくは「帝釋」か。

分別功德論

譯人の名を失す　後漢錄に附す

卷の第一

建初の[一]偈に說く所、「迦葉正法の本を思惟す」とは、謂く、經法を思惟するに、言教甚だ多し。何を以て之を知るや。迦葉即ち比較を以て其の多少を明かにす。※法を較ぶることは十驢より始む。云く、十驢の力は一の凡駱駝の力に如かず。十の凡駱駝の力は一の凡象の力に如かず。十の凡象は一の細脚象の力に如かず。十の細脚象は一の盜食象の力に如かず。十の盜食象は一の蓮華象の力に如かず。十の蓮華象は一の青蓮華象の力に如かず。十の青蓮華象は一の紅蓮華象の力に如かず。十の紅蓮華象は一の白蓮華象の力に如かず。十の白蓮華象は一の雪山象の力に如かず。十の雪山象は一の香象の力に如かず。驢より香象に至るまでを一分と爲し、是の如き八萬四千の香象、以て較べ、皮の表裏經を書し、[二]是の如きの數を滿ずるの香象の比載は、阿難の所聞所知の事なり。粗ぼ都較して大數を知るべし。一一其の文字を演べんと欲せば壽を畢るも暢ぶる能はず。經法を思惟するは甚だ浩大なりと爲す。[三]云何が當に天下千載の衆生に流布して法澤を蒙らしむべきや。至理を深思するに、[四]誰か能く法を撰ばむ。唯阿難有りて乃ち能く集めむのみ。迦葉即時に揵椎を鳴らして衆を集む。時に、尋で八萬四千の諸阿羅漢等有り。命を承けて來集す。此等無漏にして皆是れ俱解脫の人なり。此の諸の賢聖を召する所以は其れ盡く能く滅盡定に入るを以ての故なり。諸有滅盡定に入るものは能く衆生をして現世に福を得しめ、其の苦厄を濟はむ。大千世界の諸の無著等、其の數算り難し。諸の三道を除く。各各一倍す。今但だ利根俱解脫なるを錄す。能く滅盡定を以て衆生を度脫せ

【一】增一阿含最初の偈なり。
※阿難の所聞所知を香象に喩ふること。

【二】後段に「八萬四千象の所載の經」なる語あり。

【三】現行增一阿含の偈に云く、「云何が流布して久しく世に在らしめむ。」

【四】又云く、「誰か此の力有りて衆法を集めむ。(中略)。今此の衆中の智慧の士、阿難賢善にして無量の聞あり。即ち揵椎を擊ちて四部を集む。比丘八萬四千衆盡く羅漢を得して心解脫せり。已に縛著を脫して福田に處す。」

(49)優波先　二〇〇　(50)婆陀先　二〇〇
(51)摩訶迦旃延　二〇一　(52)優頭槃　二〇二
(53)拘摩羅迦葉　二〇四　(54)面王　二〇六
(55)羅云　二〇七　(56)般㘜　二〇八
(57)祝利般㘜　二〇九　(58)釋王　二一〇

以上列擧せし外、無慮六十人の弟子に就て其の特徵を詳說したことになる。而してこれらの說話の多くは他の諸經典に出づるものと重複せることは勿論なれども、其の傳說には多少の異あるものも認められ、或は殆んど他に見られない本書獨特の傳說も見られる。これらの點に就ては後賢の比較研鑽を切望する次第である。

昭和七年八月二十日

本書が大乘的の立場から解釋を施せるものなることは、念戒の下に膝上の花と頭上の花を以て比較せるが如き、婆陀先比丘の下、江河女神が羅漢を願はず、無上正眞道を求めて一切を度せんといふが如き、其他處々の口吻より明かに察せられる。本書の作者は增一阿含の如き、阿含としては最も大乘的傾向を有する經典を、全く大乘の立場から註したものであつて、未完成の憾はあるが、恐らく龍樹の智度論と相並んで興味ある敎學上の論書たるを失はない。

本書は失譯として後漢錄に收められたとなつてゐる。出三藏記集第二、開元錄第一に此の記事見え、歷代三寶紀第二によれば後漢中平二年（西紀一八五）以後に於て此の經の譯成れりとある。譯語から見てもこれは相當に古いものなることが知られる。「十二牽連」、「無擇地獄」、「三尊」、「衆祐」等の語は古經の俤を忍ばしむるものである。卷末の記には譯者を增一阿含のそれと同一人なるが如く思料せるも、現行の增一阿含の文とは必ずしも一致しない所を見ると、この推測には未だ遽かに贊同し難いものがある。

譯者　泉　芳　璟　識

分別功德論解題

本書は卷末の記錄の示す如く、增一阿含經を文に隨つて註釋せんと試みたものである。序品最初の偈頌より始めて、弟子品の過半、釋王比丘に至つて中止してゐる。解說丁寧懇切を極め、博引旁證甚だ努めたるは作者の學殖の凡庸ならざるを看取するに十分である。殊に弟子品に相當する所は、釋尊の主要なる弟子に關する逸事傳說を何くれとなく集錄してゐるから、一方から見れば、是れ全く立派なる佛弟子列傳である。題名の分別功德といふのも恐らく佛弟子の功績を列擧するといふ意味であらう。今便宜のため、左に其の要目を揭出する。(頁は本譯の通丁を表す)

するが故なり。(故に)生滅は現在に居ると云ふなり。寂滅を樂と爲すと言ふは、若し滅法を言ひて樂となさば此の義然らず。何を以ての故に。有は現在にして滅は是れ過去なり、已滅の法は殘となす、殘あるを以ての故に樂に非ざるなり。若し現在の生滅を滅するを樂となさば此の事然らず。何を以ての故に。未來の生あるは是れ現在世の殘の爲の故なり、殘あるが故に樂に非ざればなり。若し未來の生是れ常と言はば此の義然らず。生必ず滅あり、故に常に非ざればなり。若し能く未來をして應に法を生ずべくして而かも生ずるを得ざらしむるは、乃ち樂と爲すべきのみ。寂滅爲樂とは即ち其の義なり。上の三句は生死有爲の法を明すが故に無常なり。後の一句は涅槃を辯ず。是れ無爲の法なるが故に常住なり。

涅槃經本有今無偈論　終

なり。七には安樂清涼の故に常なり。八には世間に八法[二]を行ずるも能く染せざるが故に常なり。九には甘露寂靜にして[三]四魔を遠離するが故に常なり。十には性無生の故に常なり。因無邊とは無量劫より來かた、身命財を捨て正法を攝持するが爲なり。正法既に無邊際、無窮盡なり。此れ即ち無窮の因を以て無窮の果を得るなり。果は即三身なり。二に無起常とは前際、本無今有に非ざるに依り、意の生は身の所生と爲らざるが故なり。三に恒在常とは後際、不可思議死壞を離るるに依るが故なり。四に湛然常とは中際、無明煩惱病の所破壞と爲らざるが故に。五に無變常とは三際を過ぎ、無漏の業、果報の變異する所とならざるが故なり。第三の恒在は死を離れ、第四の湛然は病を離る。第五の無變とは、初地より如來地に至るを通じて無窮と名づけ、八地より如來に至るを無起と名づけ、九地より如來に至るを亦分つて名けて無變常と爲すことを得。正しく五義を論ずれば並びに佛地に在り。

『諸行は無常なり、是れ生滅の法なり、生滅、滅し已つて、寂滅を樂と爲す。』

[四]三藏闍梨旨を解して云く、諸行無常とは諸行は即ち是れ色心の諸行なり、三世の中に行ずるなり。無常とは自から五義あり。一には失滅無常、二には相離無常、三には變異無常なり、亦迴轉無常と名づく。四には有分無常、五には自性無常なり。言ふ所の失滅とは百年の報盡きて壽命失滅するが如きなり。二の相離無常とは即是れ骨肉離散なり。三の變異とは骨の色、初めは白く、後變じて[五]鴿色となるが如きなり。迴轉とは即ち白を轉じて鴿色となすなり。四の有分無常とは、根塵識の三事未だ和合せざる時は名づけて本無無常と爲し、已に有にして無に還るを名づけて滅壞となすが如し。即ち是の已有還無は無常なる根塵識の共聚なり。總じて名づけて有分と爲すなり。五の自性とは前の四義あるが爲の故に名づけて自性無常と爲すなり。是の生とは是れ未來世の生なり、滅法とは是れ過去世、已に滅せる法なり。生滅とは是れ現在世なり。而して現在に生滅を攝するは生じて即ぐ滅

【二】八法とは此場合は次の如く解するがよい。即ち
一教、教法の意なり。
二理、敎に現れる道理なり。
三智、行人所發の觀解なり。
四斷、眞智所斷の煩惱なり。
五行、行法なり。
六位、次第趣入の位次なり。
七因、正しく證果を感ずるものなり。
八果、所得の證果なり。

【三】四魔は左の如し、
一、煩惱魔、三毒等の煩惱なり。
二、陰魔、色等の五陰なり。
三、死魔、人の命根を斷つ故。
四、他化自在天子魔、第六天の魔は人の善事を害す。

【四】三藏闍梨とは恐らく、眞諦三藏の事で、三藏が「諸行無常乃至寂滅爲樂」の講釋をしたのを弟子が附加しておいたのが三藏闍梨已下、末文迄で、それが後に本文の如く取扱はれたらしい。是の部分と、是れ已前とは調子が違つてゐると思ふ。

【五】鴿に鳩なるも野鴿の意で暗黑色なり。

思惟を過ぎて說くべからず、思惟すべからず。因果を攝受して因に非ず、果に非ず。是の地、數量の能く一時に分別するものに非ず。是れ諸佛如來の境界なり。生地如來は是れ地、逆順の故なり。若し逆は是生死、若し順は是れ涅槃地なり。是れ前際、是れ後際、是れ發心地、是れ金剛後心地。一切の見を破し、一切の見を清淨ならしむ。一切衆生は應當に受用すべし。如來一體の最歸依處なり。一切寶を攝受する是れ大涅槃なり。

三世を過ぎるとは用の爲に涅槃の功德を說くなり。何となれば三世を過ぐとは、生となすが故に三世を分別するも、涅槃は生無きが故に分別すべからず。三世とは未生は生を得、已生は卽滅す。涅槃は滅することと無きが故に常住なり。是の故に自在なり。自在なるを以ての故に是の故に最樂なり。體の爲の故に清淨と說き、用の爲の故に常樂我と說く。自體の故に清淨、生死に對するが故に常樂我なり。

復次に二種の義あり。若し本有今有とは則ち是れ常見、若し三世を過ぐるとは則ち是れ斷見なり。若し二義待來して斷常を離るるは是れ中道なり。是くの如く俗諦と眞諦と相待するが故に、是くの如きの十二因緣有ること眞實なり。何を以ての故に、二邊を離るるは是れ眞の十二因緣なればなり。若し能く善解すれば卽ち如來の世に現在するを見ん。是の故に如來は十二因緣是れ如來身と說く。眞俗二諦に於て、不二なるを以ての故なり。是れ十二因緣眞の佛道なり。是くの如く偈に二義あり、一は則ち對因義にして邪道を斷じ、二は理得の義にして實を顯示す。是くの如きの二義、是れ如來の事なり、大智に依り、大慈悲に依る。

五常義とは一は無窮常、二に無起常、三に恒在常、四に湛然常、五に無變常なり。無窮常とは十有り。一には因無邊の故に常なり。二には衆生無邊の故に常なり。三には大悲無邊の故に常なり。四には四如意足無邊の故に常なり。五には慧無邊の故に常なり。六には恒に在りて定まるが故に常

し能生を具すれば一人の解脱を得る者無けん。若し過去未來を生ずる能はざれば誰か果報を斷ぜん。過去未來是れ有なりと言ふは體の爲の故に有と說くや、用の爲の故に有と說くや。若し體の爲に有と說かば云何んが破して三分と爲すべけん。若し用の爲に有と說かば、過去は滅して未來未だ生ぜず。云何んが起用せん。若し汝、三世是れ有り、能說と爲すと思惟するも、三世は能說と爲さず、三世は體說と爲さず。若し同じく體有らば、一は則ち能有り、二は則ち能無けん。是の義然らず。若し汝、時節能有りと思惟すれば能と說かず。芭蕉一たび果を生ずれば重ねて生ずる能はざるを知るなり。義も亦然らず。何を以ての故に、義不定の故なり。此三時は誰の所有なる。若し有因生なれば離則ち窮り無し。若し無因生なれば時節の義成就せず。若し汝、未來是れ前、現在是れ中、過去は是れ後なり、三世を作すとは、何を以ての故に、未來の力、逼出するが故に現在なり、現在の力は過去に逼出す。恒河の水の如く、未來の水は現在の水に逼り、現在の水は過去の水に逼る。若し一世成就すれば則ち三世成就すと思惟せば、是の義然らず。何を以ての故に、水は是れ同時なるも處所別なるが故なり。故に三時三世有の義を說くは是の故に然らざるなり。

是の處有ること無しとは、小乘に說く如く是の處無く、外道に說く如く是の處無きなり。小乘外道を破すること是くの如し。

偈の義、一は破邪の義、二は立正の義なり。破邪の義とは語言に依つて說き、立正の義とは義に依つて說くなり。言ふ所の正義とは本有今有にして三世を過ぎる。是れを正義と名づく。本有今有とは初發心より涅槃を得るに至り、一味にして異ること無し。生因に依らず、滅因に依らず。有則ち清淨にして、凡夫の法も染する能はず、聖人の法も清淨ならしむる能はず。若しくは四重五逆を起すも滅せしむる能はず。若しくは慧を修し、惡を斷ずるも增せしむる能はず。若しくは清淨眼を得るを見ること有り、若しくは毒惡眼を得るを見ることあるは方便に依るなり。則ち語言の道及び一切の

本無今有とは前の若く、無本にして今有なり。有なれば則ち解脱を得る者無し。前に煩惱未だ起らざれば則ち是れ解脱を離す。而かも後に煩惱を生ずれば解脱無し。若し前無今有ならば最極は無生にして當さに生を得べし。空が花を生ずるが如し。若し汝一は則ち無因なりと思惟すれば是の義然らず。何を以ての故に。空と花との二の如し。同じく是れ未だ有らず。何が故ぞ因緣、空を生じ、因緣、花を生ぜざる。等しく是れ無なるが故に、是の義道理無し。若し本、生無くして今、生を得れば本義を破る。是義然らず。何を以ての故に。初生は是れ本なるが故なり。若し汝因緣を思惟して、是の初生は則ち初に非ず、是の故に生是れ本に非ずとすれば、是れ亦然らず。何を以ての故に。汝が意は本有を破せんと欲するが故に。因緣の本を立てんと欲するなり、是の故に本を過ぎず。故に前未だ有らざる法因、云何んが生ぜん。若し其れ生とは具足生となすや、分分生となすや。若し具足生なれば一時生と爲すや、前後生となすや。若し一時生なれば因果同時にして分別すべからず。若し果後に生ずれば、因前に在りて滅す、誰か後果を生ぜん。煮熟鷄の如し、復聲をなし還生せんや。若し具足なれば何を用てか因を觀ぜん。若し分分生なるも亦前失に同じ。是の故に本無今有なれば安立の因を欲するなり。是の義然らず。

三時有りとは是の義あること無し。若し是の三世有らば一義三世に遍すとや爲ん。一一の義各各三世なりとやせん。此くの如きの二義並に皆然らず。何を以ての故に。若し一義三世に遍すれば、一世に三有るを得ず。何を以ての故に、相妨礙するが故なり。若し義、時に依らば過去未來は分分窮り無し。若し時、義に依らば義は一なるが故に、則ち三世は義を離るること無し、故に則ち別時無し。是の故に三時皆成就せず。若し一物三世に遍すれば、是の物は則ち說いて名づくべからず。何を以ての故に、一物二成就の故なり。若し爾らば生死涅槃は則ち是れ一ならん。若し各各の世有らば三世は各自から有ること現世能く果を生ずるが如し。過去未來、何の意か生ずる能はざる。若

佛は二乘の爲の故に偈を說きたまふ。煩惱は生得、聖は修得なり。凡夫性は生得、聖性は修得なり。煩惱の縛は生得、縛を解くは修得なり。生死は生得、涅槃は修得なり。本は生にして今は修なり。本は是れ生にして今は是れ修なり。二乘の爲に此の解說を作すも大乘を謗ぜず。大乘の爲に此の解說を作すは是れ大乘を謗ずるなり。此れは是れ大乘に相應せず。誰か能く大乘に相應せしむる。是の故に我等、義に依りて選擇し、義を思惟して語言に依らず。選擇せざる思惟語言は大乘を修行する者の爲に、三種の義を過ぎて別義を顯了することを說くなり。本有りて今無く、本無くして今有り、三時有りとは、是の三種の義有ること無し。是の處有ること無し。何が故ぞ三種の義、成就せざる。若し本有りて今無ければ一切の如來等則ち解脫無し。何を以ての故に。性、定住せざるが故なり、前有後無なるを以ての故なり。一切の眞は有にして亦無、眞有俗有なるも亦無なればなり。何を以ての故に。眞有は前後異る無きが故なり、俗有は本無きが故なり。是の故に眞俗の二義成就せず。此の二義に於て明了ならず。[一]僧佉外道も亦、是くの如く因中有果を說く。譬へば乳に酪生酥等有るが如し、是れ僧佉等の義を增益するなり。若し本、無礙なれば現在時中誰か能く障を爲さん。若し汝、妨礙を思惟し、因緣和合するを障と爲すとは是の義然らず、何を以ての故に。前後異り無きが故なり。若し今、不障なれば本時何故に不障なる。何の道理ありてか本、因緣生に依らずして、後那の因緣に依つてか滅する。言ふ所の本とは何法を以て本と爲すや。初起と爲すや、當と爲すや、相續を本と爲すや。若し初起を本と爲さば初は因緣所生と爲さず。後は初の如し、亦因緣所生と爲さず。若し是くの如く十二因緣法如如の義を說かば皆悉く已に破る。則ち、外道の無因の義を說くに同じ。若し相續を本と爲さば相續亦不定なり。何を以ての故に、分分不定なるが故なり。云何んが相續、本と爲さん。是の故に一切有生の法は本無因と說く。此くの如き說は道理無し。

【一】僧佉は數論と言ふ、六師外道の一なり。

涅槃經本有今無偈論　一卷

天親菩薩造　陳世眞諦三藏於廣州譯

涅槃經 三世義

純陀の疑問を解す。論じて曰く、多くの弟子、已に成熟し、純陀未だ成熟せず。佛は純陀の未だ成熟せざるが爲の故に、大般涅槃を顯示し、大經を講說し、大功德を授け、成熟の爲の故に拘尸那城に來れり。云何んが、純陀而かも疑心ある。二つの因緣あり。一には同相を見て別相を見ず（卽ち）疑心を生ず。二には別相を見て同相を見ざるが故なり。疑心を起すとは、遙かに杌を見て疑つて是れ人なりと爲し、是れ杌なりと爲すが如し。若し烏鳥、上に集り、鹿その下より過ぐるを見れば是れ杌にして人に非ずと知り、若し手を擧げて、衣を挑ぐる者を見れば人にして杌に非ずと知る。別相（を見て）同相を見ざれば疑心を生ずとは、空の不共相は是常住なるが如く、見地の不共相は是れ無常なるが如し。聲聞とは不共相なり。聲聞の不共相に於て疑を生ずるは、空を是の常住に同ずるが爲なり。地を是の無常に同ずるが爲なり。凡夫は同相の爲の故に疑心を起し、聲聞緣覺は別相の爲の故に疑心を起す。凡夫は有生法の爲の故に疑心を起し、聲聞緣覺は無生法の爲の故に疑心を起す。純陀は此の二種の爲の故に疑心を起さず、衆生を利益せんと欲するが爲の故に此の疑を生ず。此くの如き大菩薩、那んぞ佛に於て疑を生ずることを得ん。此の大會に於て大いに外道の聚集あり。有る外道は佛死して更に生ずと說く。復有るが說く、燈盡き火滅するが如しと。復有るが說く、佛の滅後、盡あり不盡ありと。此の疑を釋せんが爲の故に佛、偈を說きたまふ。

本有りて今無し、本無くして今有り、三世法有る、是の處有ること無し。

梁の武帝時代に於て、非常な發達をなし、教判も教理も完備してゐたらしいから、其上に倘、世親の説を取り容れる必要は、先づ無かつたと見られる。從つて本論は僅かに傳譯史上に其の片影を留むるに至つたのである。

二、本論の内容

本論は大涅槃經菩薩品第十六にある「本有今無　本無今有　三世有法　無有是處」なる偈を解釋する事に依つて、涅槃經の根本問題たる、佛性論、涅槃論、常住論に觸れてゐるのである。

本有今無と本無今有は外道の説で、三世有法は小乘の説であつて、論者は先づ是等を順次に反駁し了つて、「小乘外道を破すること是くの如し」と言つてゐる。

以上が破邪で、破邪其者には自から立正の義があるとて、本有今有説を高調し、是を正義と名づくと言つてゐる。本有今有とは何を意味するかと言ふに、其れは、涅槃（即佛性）なのであつて、次の如き句がある。

『初發心より涅槃を得るに至り、一味にして異ること無し。』

『凡夫の法も染する能はず、聖人の法も清淨ならしむる能はず。』

『四重五逆を起すも滅せしむる能はず。』

斯くして更に涅槃を説明するに、常樂我淨の四德を以てし、

『體の爲の故に清淨と說き、用の爲の故に常樂我と說く。』

とて、四德を體と用とに分けてゐる。

最後に常を說明して、無窮常、無起常、恒在常、湛然常、無變常の五常を以てし、無窮常に十種の意義を加へて、種種に解釋を試みてゐる。

諸行無常云云の偈迄は世親作、其下は眞諦の釋らしいとは註にも記しておいた通りであるが、全部が本文の如く扱はれてゐるから、今は其の儘に國譯しておく。

昭和七年八月十七日

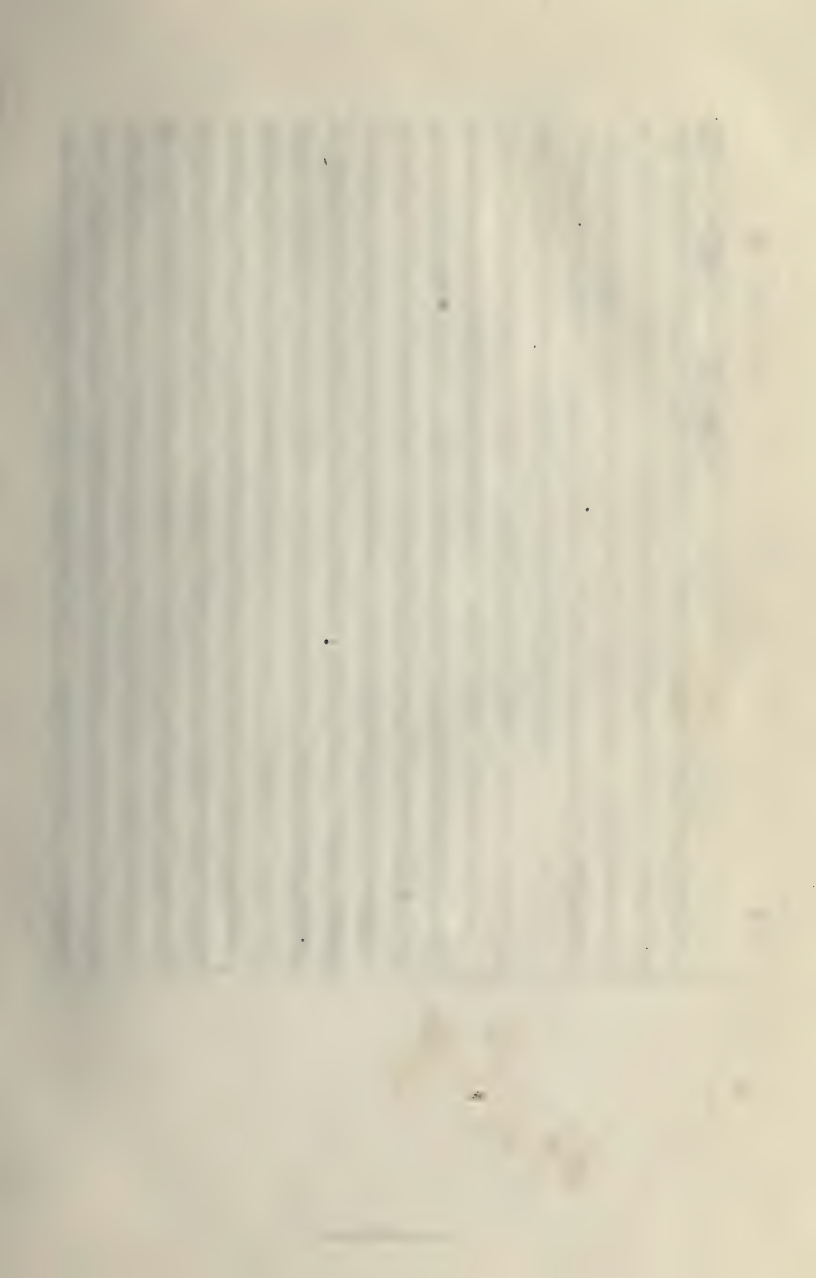
譯者　布施浩岳　識

涅槃經本有今無偈論解題

一、本論の傳譯

本論の譯されたのは歴代三寶紀に依れば梁武帝の太清四年であるが、それは簡文帝の大寶元年で西紀五五〇年に當つてゐる。隋の法經錄には大般涅槃經論一卷となつてゐるが、是は本論と同じものに違ひない。そして陳世眞諦が廣州に於て譯すと附け加へてゐる。隋の世、西紀六〇二年に出來た彥悰錄には大涅槃經本有今無偈論一卷、陳世眞諦於廣州譯と記し、其後の經錄は是を踏襲してゐる。

譯者眞諦三藏は梁の大同十二年八月十五日南海に達し、太清二年建業に赴き、寶雲殿に於て、武帝に面接したが、翌年武帝崩じて梁末の亂離に遭ひ、難を避けて廣州に還り、諸所を遊化してゐたが、本論の譯出は恐らく其の間の事である。眞諦は遙々、海を渡り廣州に上陸して已來、其の將來する佛法の弘傳に專心したが、眞諦の傳へし法は主として世親の教義卽ち唯識說であつて、支那南地の佛教徒は容易に其說に耳をかさなかつた。と言ふのは、其頃迄南地に傳播したるは龍樹系の佛法で、而かも眞諦の來支の頃は涅槃宗の最も榮えてゐた時分である。そして北地に唯識系の地論宗が傳つてゐたとは言へ、眞諦の時代には未だ南地へ傳らなかつたから、唯識說に親しみを持たぬ南地の佛教徒が新來の眞諦を餘り歡迎しなかつたのも無理からぬ事である。斯くして眞諦の傳へし唯識教は、師が陳の太建元年(西紀五六九年)七十一歲にて示寂する迄、二十餘年の長き歲月を通して、殆んど弘まることなく、極めて僅少なる弟子信者を得たるのみであつた。

師の眞諦と同樣、弟子達の一生も亦甚だ悲慘なものであつたが、周武の破佛に遭つて、北地の諸師、殊に地論系の學者が南地に避難するに到つて始めて、眞諦の教は急に傳播の緒に就いたので、やがて隋の一統となり都を長安に定むるや、是等の諸師は袂を連ねて長安に歸つたから、長安を中心として、こゝに眞諦の意志は實現せられたのである。主要の教義がこんな具合であつたので、假令、世親の作であつても傍依の教典と言はるべき本有今無偈論の如き、殆んど佛教史上に影響を及ぼさなかつたと言つてもよいが、それには本論の譯出が少し遲れたことも理由として考へられる。元來本論は涅槃教の根本問題を論じたものであるから、取つて以て涅槃宗徒が自家藥籠に收むべき筈であるが、涅槃宗の教義は既に

長あり短あり得あり不得あらば轉た迷ふ。涅槃は青黃赤白無く、得無く證無く長無く短無しと言ふが故に、名づけて聞となす。丈六の修道持戒布施に因るは是れ因ならず。佛性の得無く修無きに因るは是れを名づけて因となす。一切衆生は三乘の人を視て以て法と爲すも、三乘は淸盲と名づく。但、三乘の人のみに非ず、一切衆生も亦淸盲なり。法は可見不可見、可聞不可聞、可至不可至に非ず。教を以ての故に淸盲と道ふ。理は淸盲無淸盲と道はず。是の故に淸盲不淸盲と道ふも法相に乖かざるなり。若し此の二種の不曾有不曾無を道ふべきあらば、何を以てか、是れ有不有、無不無、聞不聞と說かんや。都べて乖かざるが故に聞と言ふ。

『云何んが多頭を示す、唯願くば大仙說きたまへ』とは、迦葉の問意は、如來初め種種多頭を敎ゆ、今涅槃は何を以てか、唯一にして二無きやとなり。如來答ふ、我れ多頭に非ず、衆生昔、多根を行ずるが故に多頭を說けり。故に多頭を示すと言ふなり。第二には法多なり。何を以てか多と名づくる。法相此くの如し、多頭を示す所以なり。第三には所由の說多なり。此法若し有なれば多說と名づくべきも、此の法曾て有ならず、是の故に多說ならず。第四には涅槃の理相は此くの如く、是れ多不多に非ず。第五には眞理は本是れ有無の法に非ず、是の故に說不說、妨礙する所無きなり。

涅槃論 終

るは正しく是れ無差別なり、更に異外無し。

『猶、樂未だ生ぜざるが如し、云何んが樂を受くると名づくる。』迦葉問ふて言く、衆生は樂を知らず、云何んが樂を受くと說かんやと。凡夫は苦あり樂無く、菩薩は樂ありて苦無し。何を以てか樂ある。菩薩は智通達し果に到るが故に樂を知る。衆生知らざるが故に苦なり、菩薩は果を知る。言く、菩薩の樂、是れ樂ならず、衆生の苦、是れ苦ならず、等しく是れ妄なるが故に。涅槃は苦無く樂無し、名づけて大樂と爲すが故に樂未生なり。云何んが受樂と名づけん。

問ふ、如來裟羅林に法を說く、何を以てか不純戒・持得福戒・不得福戒・外道是佛戒は非なる。佛の答意は向きの雜教是れ涅槃、更に外の道涅槃無し。

『云何んが諸の菩薩、衆を壞せざるを得る。』「一解、」聲聞緣覺六波羅蜜菩薩乃至外道は彼此有り得證有り、故に名づけて衆を壞すると爲す。第二、菩薩は密に行じ密に教ゆ。衆生の根性を知り、衆生相を壞せざるが故に壞と名づく。菩薩は壞せざる所の者(即ち)能壞なり。能壞ならざるは菩薩に非ず。能く作法すること此くの如くして法相に乖かざるが故に衆を壞せずと名づく。第三に、菩薩は涅槃の青黃赤白無く、彼此無きを知るが故に、衆を壞せずと名づく。第四に不壞とは涅槃の理は得に非ず證に非ず、造に非ず作に非ざるが故に衆を壞せざるを得。第五に眞理は衆生を壞せず、衆生亦理を壞せず。何を以てか此くの如き、衆生是れ理、理の外に更に衆生無きが故に衆を壞せず。
『云何んが生盲の爲に眼目となり導くや。』迦葉問ふ、云何んが眼目となり導くや。「一解、」前教の聲聞緣覺六波羅蜜、其の相に隨つて解するを生盲と名づく。「如來の解、」聲聞緣覺六波羅蜜、若し曾て有所得なれば闇なるべからず、此法曾有の故に闇なり。譬へば盲人の青黃赤白を知らず、若し人ありて青黃赤白を語れば轉た迷ひ、若し青黃赤白無しと道へば、所解に稱ふが如し。名づけて闇喩となす。三乘人、明かに因有り果有りて、得と不得とあることを差別す。今、涅槃を語るに、若し

我れ生ぜず死せず、蛇の故皮を脱するが如しと說く。次第の丈六の所說は是れ生死の法なり、今は涅槃不滅と說く。前、次第教は此の教、理無し、蛇の故皮を脫するが如く、利無く功德無し、今は涅槃、生無く滅無く亦教を破せず。第二に一切衆生乃至言說も不言說も形類有るは悉く空名あり、唯涅槃是れ眞實の理なり。

『云何んが三寶を觀ずるに猶天意樹の如き。』三寶とは軌則に名づく。如來出世して三寶有ることを示現す。三寶あるに由るが故に、三歸を受け、五戒を得、亦彈指を得、亦隨意の所修、隨意の所得を得。如來を亦、如意三寶と名づけ、亦如來如意衆生如意と名づく。云何んが衆生如意。意に隨つて三歸五戒を受け、乃至菩薩悉く果報を得るが故に衆生如意と名づく。如來如意とは衆生の根に隨つて感ずるが故に如意と名づく。今、涅槃如意と言ふは一切の苦樂善惡、是れ理ならざる無きが故に如意と名づく。故に三寶を觀ずるに猶天意樹の如しと言ふなり。他化自在天に一樹あり、能く天意の所得に隨ふが故に如意樹と名づく。諸天の行を行ずること久しきが故に此の樹を感得す。三寶も亦是くの如し。衆生行を行ずること久しきが故に丈六を感得す。故に三寶は猶天意樹の如しと名づくるなり。

『三乘若し性無くんば云何んが三乘を說くことを得ん』とは、如來は一法を說くに非ず、三乘とは衆生根の故に。一音の說、類に隨つて解すと言ふは、如來三乘を說くも說と名づけず、衆生の根に逐ふが故に小有り大有り。如來三乘を說くと雖、如來の本意に非ず。何となれば如來の本意とは涅槃是なり。迦葉の問意は三乘若し性無くんば如何んが說くことを得んとなり。如來の答意は一切諸佛は衆生の爲に三乘を說かずとなり。今は涅槃實相、小、小に非ず、大、大に非ず。當に知るべし、三乘の教は是れ一相にして大小あること無し。第三に涅槃の理を說く處、大と道はず、小と道はず。衆生の智差別するが故に教差別す。理、差別大小無きが故に大小と說くを得るなり。向きに差別す

ざるが如し。

如來出世して始め三歸五戒より、乃し菩薩戒に至り、彈指低頭、漸教を以て衆生の病を化治す。煩惱を知るが故に病の爲に汚されず、衆生は煩惱を知らざるが故に、恒に病の爲に汚さる。第二に次第教、亦衆生の病を治すると名づく。第三は力教と名づけ、神通變化身、一切を降伏す、亦衆生の病を治すると名づく。第四には今時涅槃を說き、前の別教の患を治す、亦衆病を療すと名づくるなり。云何んが患と名づく。一切衆生の未發心を患と名づく。丈六を見て發心するなり。又、解あり、丈六に非ずして發心せしむ。涅槃は平等に照して發心せしむるが故に、衆病を療すと名づく。『生死の大海中、云何んが船師となる。』三界を生死と名づく、如來出世するも亦生死と名づく。何を以てか、生死と名づくる。如來の法は衆生を度して生死せざらしむるが故に、生死大海中、船師となると言ふなり。第二に丈六、次第の法を說き乃し法華に至る、亦生死の法と名づく。今、涅槃を說いて、來無く、去無く、生無く、滅無し。前の生死を度する教なるが故に船師と名づく。初めには丈六生死せず、及び教生滅せずと解す。第二には丈六及び教亦生死なり、涅槃生滅無し。第三には佛滅度の後、誰か能く生死を度する。唯大菩薩能く生死を度す。第四に菩薩亦度する能はず、大涅槃の理能く生死を度す。世間の船師善く方便を解して、能く海難を知るに喩ふ。煩惱の大海に三界を船と爲し、如來種種に方便し、三乘の法を說いて船師と爲す。世間の船師は因を指し果を指し、衆生船に上る。如來は方便して三乘の法を說き、因を說き果を說くなり。初の次第教は生死を以て衆生を度するが故に名づけて船師と爲す。法華は萬行を以て船師と爲し、今涅槃は生死無きを以て船(師)と爲す。何を以てか病に汚さるゝことを示すや、復生死大海の中にありて、云何んが船師となるや。前には煩惱を去り、又煩惱大海中に船師となり、度して彼岸に到らしむ。『云何んぞ、生死を捨つること蛇の故皮を脫するが如き。』迦葉問ふ、如來は生死に出世して、今涅槃の道に入り、

るが故に殺を行ず、猶、〔一〇〕閻浮金の能く其の過を說くこと無きが如し。此れを解せんに是れ和衆の義なり。閻浮檀金に四種あり。其の四とは何ぞ。一は青、二は黃、三は赤、四は紫磨なり。靑は外道に喩へ、黃は聲聞緣覺に喩へ、赤は六波羅蜜の菩薩に喩へ、紫磨は如來に喩ふ。閻浮金亦青黃赤白あり、四種の諸色あり。二には世間の好物、復、端正なりと雖、猶、闕少あり。閻浮金は此くの如き物ならず、其の過を說くべからず。如來、涅槃を得て、亦種種に聲聞外道、六波羅蜜菩薩たるに喩ふ。猶、閻浮金其の過を說くべからざるが如し。紫磨金の衆色を具有するは、涅槃の、天魔外道・聲聞緣覺・六波羅蜜菩薩を具有するに喩ふ。何を以てか此くの如き。此の外更に異法無し。紫磨金は一切具足して諸色說くべからず。聲聞緣覺六波羅蜜外道、種種あるが故に說くべからず。涅槃の理は青黃赤白の法に非るも亦、青黃赤白なるが故に、說くべからずと言ふなり。若し、靑黃赤白あれば其の過を說くべきも、此の靑黃赤白、曾て有らざるが故に說くべからざるなり。

『云何んが濁世に處して汚れざること蓮華の如き。』濁世とは五濁なり。云何んが五濁なる。劫濁、煩惱濁(等なり。)釋迦は五濁に出で、王宮に生れ、妻子あり。金銀七珍種種の財物、皆名づけて濁となす。爲に染せられざるが故に、濁世に處して汚れざること蓮華の如しと名づくるなり。

『云何んが、煩惱に處して、煩惱染する能はざるは、醫の衆病を療して、病の爲に汚されざるが如き。』迦葉の問意は如來に據る。三界の煩惱〔一一〕九十八使、如來出世するも爲に汚されず。一切衆生は三界の煩惱、九十八使の所汚なり。第二に聲聞緣覺六波羅蜜は煩惱斷ずべく、佛果得べき有りと計す、是の故に煩惱の爲に汚さる。(第三に)十地の菩薩は行じて大智に通達するが故に煩惱の爲に汚されず。第四に大菩薩は果に望みて亦煩惱の爲に汚さる。今、涅槃は是れ因果の所得に非ず。是の故に爲に汚されず。第五に四諦敎乃至〔一二〕般若波羅蜜法華亦、煩惱所汚と名づく。今、涅槃の理は流動無く、得失無く、起滅無し。是の故に爲に汚されざること、醫の衆病を療して病の爲に汚され

提成佛、闡提と佛性等、種々問題を惹起してゐる。

〔一〇〕炎浮檀金、又は閻浮那提金とも書く、大智度論等の說に依れば河の底より出る金で、赤黃色なりと。

〔一一〕見思二惑の詳說なり。

〔一二〕こゝでは般若經を意味す。

は曾て王宮の生、雙林入涅槃を見ず。第三に日月沒するが故に太白歳星出づ。世人怪を生じ、如來涅槃に入り、聲聞緣覺出づ。法と如來と異るが故に星出づと言ふなり。衆生妄りに日月歳星出沒ありと見るも而かも實には出沒無し。衆は如來に生滅ありと見るも而かも如來實には生滅無し。

『云何んが未だ發心せずして名づけて菩薩となすや。』聲聞は發不發あり、緣覺亦發不發あり、菩薩も亦發不發あり。此の三種の菩薩を發心と名づく。如何んが發心とは、果異りて發心と名づくるを得べきや。如來は初より衆生に發不發ありと教ゆ。昔教、發あるも名づけて發となさず。云何んぞ、發と名づけざる。佛に可得可求の差別を異にするあるを見るは發と名づけざるなり。何者か發と名づくる。今は無相涅槃の理薫ずることを說くが故に、一切をして發せしむるを名づけて發となす。聲聞緣覺菩薩に發不發あること無きが故に、未だ發心せざるも名づけて菩薩となすと言ふなり。涅槃は平等、一切を照すが故に、一切未發心を皆名づけて菩薩となす。迦葉は何が故に、云何んが未發心にして而かも名づけて菩薩となすやと問ふ。發心とは日月を見、不發心とは日月を見ざるなり。二に發心とは常住を見、不發心とは見ざるなり。向きに如來出世して發不發ありとは、發とは見、不發とは不見なり。今は涅槃、平等に照せば、發亦是れ發、亦是れ不發なり。

『云何んが大衆に於て無所畏を得る。』菩薩は出世して慈悲平等にして、衆生相を壞せざるが故に無所畏と言ふ。菩薩畏るゝ無く、衆生も亦畏るゝ無し。云何んぞ、衆生畏れざる。菩薩出世して衆生相を壞せず、是の故に衆生亦畏れず、如來出世して慈悲喜捨の四無量心を以て平等にして差別あること無く、天魔外道乃至一闡提あること無し。一子の想の如し、畏るゝ所無し。何を以てか衆生、畏るゝ所無き、一切衆生、如來を視るに父母の如きが故に畏るゝ所無きなり。

何を以てか闡提と名づくる。佛を識らず、內外道を識らざるを[九]一闡提と名づく。問ふ、一闡提、內外を識らず、菩薩と何ぞ異らん。解して言く、菩薩は內外を識らざるも殺さず、一闡提は識らざ

【九】單に闡提とも言ふが、大涅槃經に依る涅槃宗では闡

に涅槃を漸教と言ふ。云何んが諸の菩薩、能く見難きの性を見るや、是れ或は但法を見るなり。又言く、云何んが滿字及び半字の義を解するや、今更に見不見無し。

『云何んが共聖行、娑羅娑鳥の如き。』如來王宮に在りて婦を取りて兒あり。或は出家すること聲聞と同じ。譬へば娑羅娑鳥の共に一群をなして分別すべからざるが如し。聖者如來は一切衆生と同じく修し、同じく行ずるが故に、云何んが共聖行、娑羅娑鳥の如しと言ふなり。第二解、色を聖人となし、聲聞色心を聖人となす、菩薩聖人は心色に非ず、心色ありと言ふは、故に(菩薩)聖人に非ず。聲聞聖人は形色共なり。菩薩聖人は青黃赤白心識無し。理は共に心識あり。凡夫は心識聖人無きが故に聖人と言ふ。

娑羅娑鳥と言ふは總名なり。譬へば如來の一切衆生と共に分別すべからざるが如し。[八]迦隣提とは涅槃の一切衆生に別つに譬ふ。還つて聲聞を去るの意なり。菩薩は如來の一切衆生と共に差別無きを知るが故に共と名づく。

相ひ捨離することあるを解せんに、如來未だ出世せず、凡あり聖あり、相ひ捨離す。如來出世して一切衆生相ひ捨離せずとは聲聞の意なり。菩薩は相ひ捨離せずとは、如來出世せざるも相ひ捨離せず、如來出世するも相捨離せざるなり。

世諦に苦空無常なく、第一義諦に常樂我淨なきを解せん。有る人の、世諦に常樂我淨あることなしと言ふは淺く義理を解するなり。又有る人の言く、有は是れ世諦、無は是れ第一義諦、亦有亦無は是れ世諦、非有非無は是れ第一義諦と。有に非ず無に非ざれば更に外法無きが故に共聖行と名づく。

『迦隣提日月太白と歲星』とは、如何んが日月と名づくる。此の日月は、凡夫の日月に出沒ありと見、聖人は曾て出沒を見ざるに譬喩ふ。第二に聲聞の人は佛の王宮に生じ雙林に滅するを見、菩薩

【八】迦隣提とは鳥の名にて、海の鳥なり、迦遮鄰地又は迦旃隣提とも書く。

じて、平等ならざる無きなり。是れを相中正善と名づく。菩薩の行は正善ならざる無く、聲聞は彼此あるが故に名づけて正善となさず。菩薩は彼此無きが故に名づけて正善となす。第二に正善とは昔教は正ならず、聲聞は具さに成就せず。今は涅槃の理正し、來無く去無く生無く滅無し。名づけて正善具さに成就すとなす。第三に歡喜より已上、法雲地に至る、是れを具成就と名く。四顚倒を演說するとは聲聞の人は、我れは常樂我淨なり、佛は苦空無常なりと言ふ、是れ倒なり。聲聞は苦空無常、佛は常樂我淨なり（と言ふ）も亦顚倒なり。佛は常樂我淨なり、衆生は苦空無常なり（と言ふ）も亦是れ倒なり。云何んが如來は四顚倒を說き、聲聞の爲に說くや。正しく四顚倒を說くは是れ不顚倒なり。更に外法の是は顚倒、不顚倒なること無し。是れを心喜說眞諦と名づく。經に云く法は有ならず亦無ならずと說く、是れを眞諦と名づくと。

『云何んが諸の菩薩は能く見難きの性を見るや。』迦葉に二種の意あり。一には一切衆生をして佛性あることを知らしめんと欲す。二には佛性を見せしめんと欲せず。何を以てか、如來深解の佛性を知見せしめんと欲せざる。何を以ての故に深と名づくるや。佛性は是れ、可作・可造・可修・可得に非るが故に深と名づく。聲聞は狹小にして究竟せず能く見ず。菩薩は慈悲を行じ、廣く濟ひて、見るを求めず、衆生の爲の故なり。被縛の故に見難しと名づく。第二には佛性は是れ可見の法に非ず、能見・所見・能知・所知・能修・所修の故に、と解するを、能く見難きの性を見ると名づくるなり。

『云何んが滿字及び半字の義を解せん。』半字とは漸教、滿字とは涅槃なり。滿足教の故に滿字と名づく。佛の教果功德を攝し盡すを滿字と名づく。聲聞緣覺教は滿足せざるが故に半字と名づく。涅槃は頓と名づけ、亦漸と名づく。今、涅槃の二諦相對中、滿を論ずるに、行に就ては滿、不滿あるが故に漸教と名づけ、理に就ては滿、不滿無し。是れ故に涅槃は漸教と名づけ、半字と形づけ、涅槃を頓教と名づく。第二に復次に半滿と言ふは是れ衆生の妄想なり。理は是れ滿不滿ならず。是の故

るなり。第二に蓮華藏世界の菩薩の化する、我と異ること無し。是の故に實に阿羅漢に非ず、羅漢と等しきが如きなり。若し我れ實に是れ羅漢なれば菩薩は我れと等しかるべし。我れ羅漢となると執するは此れ菩薩法相の化通に非ず、皆是れ實解ならず。四依とは歡喜地を初依となし、六地を二依と爲す。八地を三依となし、法雲地を四依となす。化の聲聞は聲聞を虛しく斷じて、曾て是れ阿羅漢ならず。云何んが等しからん。菩薩は名づけて法佛と爲し、亦緣佛と名づく。云何んが法佛なる。法中より生じて法を行ずるが故に、見ることを得るが故に法佛と名づく。云何んが緣佛なる。緣あるが故に見るゝを緣佛となす。

迦葉の意を問ふ。若し自から解すれば此くの如き問を須ゐず、若し曾て聞かず、曾て見ざれば、云何んぞ、此くの如き問をなさん。答ふ、迦葉は是十二童子、如來の威神力、教を加ふるが故に能く問ふなり。迦葉の問ふ所は正しく是れ涅槃なり更に異外無し。

『云何んぞ、天魔の衆の爲に留難をなすことを知るや。』此れを解するに迦葉は正に如來身を問ひて未來を問はず、何を以てか知ることを得る。衆生身は自から、如何んが外魔あり、來りて留難をなすかを信ぜず。如來は今道樹の下にあり、始めて成佛し、正法將さに興らんとす。魔、其の徒衆を失ふを畏るが故に留難をなすなり。

『云何んが、諸の、調御心喜して眞諦を說くや。』云何んが調御と名づくるや。凡夫衆生は知る所無く、大乘を聞けば是れ大乘、小乘を聞けば是れ小乘、苦を聞けば是れ苦、樂を聞けば是れ樂なり、何を以てか調御と名づけん。苦に非ずして苦と說き、樂に非ずして樂と說き、常に非ずして常と說く。昔日小と說き、今大と說く、亦、心喜說眞諦と名づけず、名づけて調御となさず。今は、無常無常に非ず、苦樂苦樂に非ず、來無く去無しと說く。是れを眞諦を說くと名づく。

『正善具さに成就し、四顚倒を演說す。』正善具さに成就するとは菩薩の[六]四無量心、[七]十波羅蜜を行

【六】慈悲喜捨の四無量心なり。

【七】十波羅蜜とは次の如し。

一、施波羅蜜
二、戒波羅蜜
三、忍波羅蜜
四、精進波羅蜜
五、靜慮波羅蜜
六、般若波羅蜜
七、方便善巧波羅蜜
八、願波羅蜜
九、力波羅蜜
十、智波羅蜜

『云何んが廣大にして衆の爲に依止となることを得るや』。何を以ての故に廣大と名づくる。識相あること無く是れ佛ならざる無し。行に不淨無く德滿たざる無し。故に衆の爲に依止と作ると言ふなり。釋迦の依止を見るとは依止と名づけず、小乘の義を解するに慈の故に衆生をして依止せしむ、實には阿羅漢に非ず。『羅漢と等しきが如し』とは、昔は王宮に生じて阿羅漢を得ると敎へ、今は王宮に生ぜるに非ず、雙林に滅するに非ずと說く。云何んぞ。羅漢に非ず。羅漢と等しきが如しとは迦葉未だ佛の敎を蒙らず、[四]四依止を問はざれば、如來若し王宮に生ぜるに非ず、雙林に滅するに非れば自然に戒を得て[五]四果に由らず、實に阿羅漢に非ず、云何んぞ如來、羅漢に等しきやと問ふなり。解に云く、若し如來實に是れ阿羅漢なれば、四依は羅漢と等しかるべし。佛實に羅漢に非ず、那んぞ羅漢と等しきが如しと言ふを得んや。釋迦身に二名あり。一は應來と名づけ、二は菩薩實行と名づく。應と言ふは蓮華藏世界よりす、是れ大莊嚴佛なり。太子と作りて王宮の生、雙林の滅を現ず、是れ菩薩の遊戲法なり。第二に眞は從來する所無し、云何んぞ羅漢と等しからん。佛に二種の名あるも、一眞佛は化して聲聞阿羅漢に同ずるなり、佛は實の聲聞に非ず、云何んぞ四聲聞と等しからん。向前に實に羅漢あれば我れ羅漢と等しと言ふ可く、又、前きに曾て羅漢有らず、羅漢と言へるは我身の自作なり、云何んが等しと解せん。又釋迦の身を阿羅漢と名づくれば性地の菩薩は云何んが羅漢と等しと解せん。第二の實行菩薩とは應に來りて亦能く化して佛と作るべくば、釋迦實に是阿羅漢なり。等と言ふ可く、釋迦は曾て是れ羅漢ならず、云何んぞ等しからん。是の故に正しく性地の菩薩是れ阿羅漢なり。阿羅漢は此れ菩薩なり、實には佛に非ず、羅漢如何んぞ佛に等しからん。釋迦實に是れ阿羅漢なれば等と言ふ可きも、釋迦は曾て是れ羅漢ならず、云何んぞ等しからん。是れ故に正しく實行菩薩是れ阿羅漢なり。是の故に王宮の生、雙林の滅、皆是れ遊戲なり。菩薩の現作なれば前きには實に阿羅漢無し。我が化に由るが故に衆生阿羅漢を得、是の故に我れ阿羅漢と作

【四】四依止とは諸說區々なるも、ここでは、世親の意に隨つて、十地に配當するがよい。卽ち、左の如し。
初依――初地
二依――六、七地
三依――八、九地
四依――第十地

【五】羅漢の四果。須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢なり。

涅槃論[1]一卷

婆藪槃豆作　沙門達磨菩提譯

淨覺海を頂禮し、甘露門に住持し、亦不思議自性淸淨藏を禮す。世を救ふ諸の度門は正しく實諦の道に趣かん。及び如學にして學し、如法に實義を證せん。長へに迷へる蒼生を愍れみ、悲を含んで世間に傳へん。

[2]初の『如是』より『流血灑地』に至るを不思議神通反示分と名づけ、純陀哀歎の二品は成就種性遺執分と名づく。三の『告』より以下大衆問品に訖るを正法實義分と名づけ、五行十功德を方便修成分と名づく。師子吼品を離諸放逸入證分と名づけ、迦葉品を慈光善巧住持分と名づけ、憍陳如品を顯相分と名づく。

[3]『云何んが長壽金剛不壞の身なる』。迦葉は衆生と共に聞かんと欲するが故に問ふ。答の意は我れ三業を修するが故に長壽を得るとなり。云何んが金剛不壞身とは、一切衆生皆敗壞するに云何んぞ不壞を得んと問はゞ前の所行の如くにして不壞を得るとなり。『云何んぞ堅固力なる』。心に分別無きが故に堅固を得。來無く去無きが故に長壽なり。說く可からざるが故に壞せず、流動無きが故に堅固なり。云何んぞ長壽を得る。金剛不壞の身なるが故に長壽を得。云何んぞ壞せざる。堅固力を得るが故に壞せず。迦葉は衆生一に非ざるが爲に問ひ、答を了す可き法相盡きざるが故に問ふなり。

『願くば佛、微密を開き廣く衆生の爲に說きたまへ』とは、云何んが微密なる。身外に佛有るも亦密ならず、身內に佛有るも亦密に非ず、有に非ず無に非ざるも亦密に非ず、衆生是れ佛なるが故に微密なり。云何んぞ衆生是れ佛なる。衆生は有に非ず無に非ず、非有に非ず非無に非ず、是の故に衆生是れ佛なり。

【一】涅槃經論又は大般涅槃經論とも言ふ。

【二】婆藪の七分と言はれ、大涅槃經を七類に分てり、解題參照。

【三】『』印の中は經の文なり、已下同じ。

あるが、今の南京に傳來するや、間もなく南本涅槃經の製作となり、北地は北本を南地は南本を使用するのが一般であつた。支那に於ける涅槃宗は道生に端を發して、先づ南地に榮え、建業を中心として陳朝に及び、少くとも南北朝時代にあつては、南地佛教の主流をなしたと言つてよい。北地は然しながら南地に比して戰亂相次ぎ、餘り振はなかつたけれど、菩提留支等が無着世親系の教義を傳へて、地論宗是に依つて起るや、此宗の人人に依り、涅槃經の鑽仰を見るに至つたが南地程には榮えなかつた。實に南地建業に於ける梁代の佛教は涅槃宗門の黃金時代で、其の餘勢は朝鮮に伸び、遂には日本に傳はり、日本の佛教と多大の關係を持つてゐる。斯かる梁代に勅撰されたる涅槃經集解には道生已來、其の頃迄の巨匠の涅槃經觀を集錄してゐるが、世親の涅槃論は引用してゐない。此の勅撰は梁の武帝の天監八年（西紀五〇九年）で、恰も、北魏の永平二年に當り、菩提留支等が洛陽に來た翌年になつてゐて、時代が早いから涅槃論の引用されざる、蓋し尤もではあるが、從つて梁の天監八年迄には涅槃論は支那に傳譯も撰述もされてゐないと見てよからう。本論中の所謂、婆藪七分說の引用は文献的には章安灌頂の涅槃疏に始り、是れ已後は折々引用されてるのが事實である。章安に從へば北方地論師が世親の七分說を用ゐたと言ふが、隋の慧遠の義記には見えぬ。何づれにしても地論宗は、五三〇年頃から始まるので、北地師が引用したと章安が言つても、それは、左程古い事ではなく、略ぼ五五〇年前後の問題である。そして南地涅槃宗は陳を以て、北地のそれは唐初を以て亡びるから、涅槃論と涅槃宗との關係が緊密であつたとは言はれない。

昭和七年八月十七日

譯者　布施浩岳　識

で、經錄上、內容上共に論據薄弱であり、無理にこじつけた觀がある。且つ又、內容と言つても、論の眞の內容には少しも觸れておらず、冒頭の科文に依つただけであり、尙又、印度撰述の論書には少しも觸れず、支那の古い經疏類にも餘り觸れてゐないから、論據薄弱なるも無理は無い。

とは云へ我等にしても本論を印度撰述と言ひ張る程の材料を持ち合せないので、實を言へば境野氏と同樣に支那撰述ではないかと思ふものである。理由は種種あるが、其の主要點は本論の中に、教判的思想が餘りに濃厚に織り込まれ、支那に發達した教判に類するものがあつて、其他に於ける世親の態度に合はないやうな氣がする。其中でも特に困るのは滿字及半字の解釋をする折に、頓漸二教判を說き、大涅槃經は頓教にして且つ漸教なりと言つてゐることである。それ故、本論を世親造とすれば教判史上の大問題を惹起し、印度に於て既に頓漸二教判があつたことゝなる。それにしても本論が印度撰述の論書中、何處かに引用されてをれば問題は簡單だが、吾人の知る限りに於ては遺憾ながら其の引用されたるを記憶しない。が然しながら、引用無しと何人か斷言し得やう。それ故、支那撰述のやうな氣はするが、こゝには何づれとも斷言を差し控へておく。

二、本論の內容

本論は大涅槃經第三卷中の左の偈文を解釋すると同時に涅槃經全部の意味を織り込まんとしたものである。

云何得長壽　金剛不壞身　、、、、、　得大
堅固力　願佛開微密　廣爲衆生說　云何得廣
大　爲衆作依止　、、、、、　、、、、、
云何知天魔　爲衆作留難　、、、、、　、、
、、、　云何諸調御　心喜說眞諦　正善具成
就　演說四顚倒　、、、、、　、、、、、
云何諸菩薩　能見難見性　云何解滿字　及與
半字義　云何共聖行　如婆羅婆鳥　迦隣提日
月　太白與歲星　云何未發心　而名爲菩薩
云何於大衆　而得無所畏　、、、、、　、、
、、、　云何處濁世　不汚如蓮華　云何處煩
惱　煩惱不能染　如醫療衆病　不爲病所汚
生死大海中　云何作船師　云何捨生死　如蛇
脫故皮　云何觀三寶　猶如天意樹　三乘若無
性　云何而得說　猶如樂未生　云何名受樂
云何諸菩薩　而得不壞衆　云何爲生盲　而作
眼目導　云何示多頭　唯願大仙說

已上、○印を附せる偈の解釋中に種々教判的語句、思想が織り込まれ、例せば前揭頓教漸教の他に次第教、力教、別教の語があり、般若法華を煩惱所汚と言ひ、法華を次第教として難ずる如きである。其の他の點では本論中、特に目立つ思想は無い。因みに、此の偈文も南北兩本に於て全同である。

三、本論と涅槃宗

曇無讖が涅槃經を傳譯したのは涼州で

於廣州譯、

斯く達磨菩提譯出の涅槃論と眞諦譯本有今無偈論とは明かに並記されて居り、それから內典錄と略ゞ同年に出來た靜泰錄は右の通りに記し、尙其の下に前者には「十一紙」の三字を、後者には「六紙」の二字を加へてゐる。そして眞諦譯の涅槃論を記してゐない。それ故、達磨菩提譯涅槃論の記錄は內典錄に始て出てゐるのではない。又、內典錄が疑故附此と言つてるのは年代が判然しないからと言ふ意味で、菩提の譯出を疑つたのでない事は同錄の六卷及九卷に靜泰錄を踏襲してゐる事實で分る。尙又、前揭開元錄の記錄は、三卷の涅槃論の註釋があつて、菩提譯と言つてるが、恐らく、菩提の釋であらうと言つてるだけである。そして、開元錄の十九卷には、やはり靜泰錄の儘を受けて、涅槃論と本有今無偈論とは並記してゐる。

それ故、境野氏の經錄に依る論據は薄弱であると言はねばならぬ。別な言ひ方をすればともかく、あの儘では僞作の論據として物足らぬ憾がある。

次に內容よりする僞作理由を言はう。氏の說は涅槃論の冒頭にある涅槃經の科文に就いてのみ言つてゐるものではあるが、要するに涅槃論は南本涅槃經を見て書いたものである。南本涅槃は支那で出來たもの、從つて涅槃論も支那製なりと言ふのである。其の理由の中、涅槃論に「從初如是至流血灑地」と記せるは、南本に依つて本論を書きながら、つい、北本に依つてしまつた作者の失であると言ふが、「從初如是云云」の文は南本でも同樣であるから、氏の言ふ如く『誤つて北本を取つたことを暴露してゐないし、又、「從三告」の三は氏の言ふ如く、北本に依れば三卷の首に「佛復告諸比丘」とある所から「三告」と言つたのに相違ない。

然るに氏は南本では「此の卷は長壽品第四になつてゐるから、之を「三告」と言ふことは出來ない』と言つてゐるが、なぜ斯うも無理な見方をするのか不可解である。なぜなら、北本に卷數で合せたなら南本にもさうしたら、よからうと思ふ。若し氏が南本に於てせる如く品數でゆくなら、北本に於ても壽命品第一になるから、「三告」の讀みやうがない。南本にあつても、卷數でゆけば長壽品第四は三卷なのであるから、「三告」は「三卷の告」と北本同樣に讀み得る。それ故「三告」も氏の言ふ如く、過失の暴露にはならぬ。次に、涅槃論に「純陀哀歎二品」とあるのも、原本に其通りあつたものか、或は分り易くする爲にさうしたものか、種々考へ得る餘地があるから、是だけを證據に僞作呼ばはりは先づ困難である。

要するに境野氏の僞作說は氏の記す如き論據にある限り我等の贊同しかねる所

涅槃論解題

一、本論の著者並に譯者

本論は大般涅槃經論とも言ひ、世親造、達磨菩提譯として傳へられ、國譯大藏經の大般涅槃經解題中には「文義頗る晦澁にして初學解し難じ」と、故島地大等師も言つて居られるやうに、可なり難解な論である。其の故か知らぬが、本論は古來餘り讀まれなかつた。世親の著書中、涅槃經に關係深いものでは佛性論の如き、昔も今も能く人の知る所であるが、涅槃論は餘り注目されなかつたので、是が著者又は譯者に就て云云されたのも少いやうである。故木村博士にしても、又は故島地師にしても、其の著書中、本論に觸れてゐる所はあるが、其の著者譯者に就ては少しも疑を挾んでゐない。

然るに境野黃洋博士は其の著支那佛教史講話上卷二七一頁已下に於て、可なり詳細に本論の著譯者に觸れてゐるので、今、本論の解題を書くに當り、どうしても是に就て一言せざるを得ない。

境野博士の說に依れば「涅槃論は支那に於ける僞書』なのであつて、其の理由として、氏は經錄並に內容の兩方面から論じてゐる。詳しくは支那佛教史講話を見て貰ふとして、其の理由を要約しやう。

先づ經錄を見ると、此の涅槃論は長房錄には未だ見えず、內典錄に始めて現れて、大涅槃論一卷として是を揭げ、

右檢ニ唐前錄一云、達磨菩提譯、不レ顯ニ帝代一、疑故附此、

と記し、開元錄は是を踏襲して更に之に註し、

復有ニ涅槃論三一卷一、亦題ニ達磨菩提譯一、尋レ文乃釋ニ前論一、或疑是人造也、

と述べて疑を存し、且つ內典錄が唐以前の錄と言ふのは何錄なるか不明である。經錄上の記錄は是だけで、從つて極めて疑はしいと言ふ意味を述べ、更に二七八頁已下には眞諦譯の本有今無偈論と涅槃論との關係を述べて、『此の本有今無偈論は涅槃經中の論題を解說した涅槃論の一部を抄出したものらしく』と言つてゐるが、どうも解し難い。本有今無偈論が涅槃論の抄出と言へば涅槃論の傳譯を肯定する事とならう。加之、此の涅槃論はなる程、隋代の錄中、法經錄並に長房錄には眞諦の廣州に於て譯出せる大涅槃經論を傳へるのみで、記錄されてゐないが、やはり隋錄である彥悰錄には次の如く記してゐる。

大涅槃經論一卷　達磨菩提譯
大涅槃經本有今無偈論一卷　陳世眞諦

支佛位に墮せずして菩薩位に入るなり。是の故に如來は方便を說いて後次に般若波羅蜜を成就するを說くなり。又復略して深心乃至は方便を成就するを說くは助道功德を成就するを示現し、究竟して般若波羅蜜を成就すとは助道の智慧を成就するを示現するなり。

又深心乃至方便を成就するは菩提の功德道を成就するを示現し究竟して般若波羅蜜を成就するは菩提の智慧道を成就するを示現するなり。

又深心乃至迴向を成就するは戒身を成就するを示現し、慈悲の二法は定身を成就するを示現し、方便般若は慧身を成就するを示現するなり。

又深心を成就するは即ち是れ直心を成就するを示現し自餘の七句は修行を成就するを示現するなり。

又深心を成就し行心を成就するは戒家を示現し、捨心を成就し迴向を成就するは施家を示現し、大慈を成就し大悲を成就するは滅家を示現し、方便を成就し般若波羅蜜を成就するは智家を示現するなり。是の如きの有礙無礙等の一切諸法は諸餘の一切修多羅の中に廣く說けり、應に知るべし。此の修多羅は諸の菩薩摩訶薩の學する戒の義に依て說けるなり。是の如くして諸の菩薩摩訶薩の八萬四千無量無邊の諸法門等は皆應に類知すべし。

彌勒菩薩所問經論終

〔八〕此の經は舊は六卷と爲し、開元錄は五卷に作り子注して或は七卷或は十卷とす。今は初卷を開いて二と爲し總て七卷と爲す。即ち大寶積經第四十一會を釋せるが是れ也。

〔八〕卷末の記は元本明本に依て載せたるものなり。されば「總て七卷と爲す」と云へるは彼の元明二大藏經所載の本經論の七卷本を指せるなり。

彼の處所有の相應の貪心を是れを名づけて愛と爲す。彼の處所有の不捨愛心を是れを名づけて取と爲す。彼の處所有の身口意の業を是れを名づけて有と爲す。彼の處所有の是の如きの法所起の法を是れを名づけて生と爲す。彼の處所有の諸法の變異を是れを名づけて老と爲す。彼の處所有の諸法の散滅を是れを名づけて死と爲す。次第有りとは、無始の義の故なり。此れ何の義を以てなる。彼の因果は斷絶せざるを以ての故なり。是の義を以ての故に其の始めを知らざるなり。斷絶せずとは彼の因は斷絶せざるに因るが故なり。此れ何の義を以てなる。遠來の義を以ての故なり。又復但十二有支は能く因緣を生ずるに非ず彼の一切の有爲の諸法を名づけて因緣と爲すなり。

問ふて曰く深心等の法は何の次第有るや。答へて曰く一切の勝功德を成就するを以ての故に、一切の法中にて菩提心を失はざるを以て、以て根本と爲すが故なり。此れ何の義を以てなる。諸の菩薩摩訶薩の修行の功德中に彼の深心を說いて以て根本と爲す。諸の菩薩摩訶薩は深心を成就するを以て、以て菩提心の因を失はずと爲す。深心の如く諸行も亦爾なり。自然に一切衆生を利益せんと欲するが爲に修行す。是れを以て如來は如實に修行の次第の義を示現せんと欲するが爲の故に深心を說いて後次に行心を說くなり。

又菩薩は深心を成就し行心を成就するを以て然して後に他利益の修行に於て是の如きの勝義を示現せんと欲するが爲に修行を說いて後次に捨心を成就するを說く。又菩薩は持戒布施等の如實の修行相を勝法に迴向す。是の如きの義に依る修行は菩薩道を助くるを示現す。是の故に次に迴向を成就するを說くなり。又持戒從り乃至迴向は定善根に非ざるなり。次に勝三昧法を示現せんと欲し、衆生をして慈悲等の諸善根中に住せしめんと欲す。是の義を以ての故に迴向を說いて後次に大慈悲等を說くなり。已に定法妙樂の善根を置き彼の貪著心を離れんと欲するが爲の故に慈悲を說いて後次に方便を說くなり。方便有るを以ての故に智慧有て諸法を明見す。是の義を以ての故に聲聞、辟

は有時の十二因緣なり。二には刹那。三には次第。四には不斷絶なり。時とは到るの時に名づけて因緣の時とす。此れ何の義を以てなる。無明の時とは過去の時を謂ふ。煩惱を生ずるは是れ無明の時なり。行の時と言ふは過去の時の業、是れを行の時と名づく。識の時とは謂く託生の心眷屬と共に生ず是れを識の時と名づく。名色の時とは未だ和合して成ぜず。即ち〔六〕歌羅邏安浮陀枇尼堅支等是の如きの時の中には未だ眼等の五情諸根を生ぜず六入未だ滿ぜず彼の時に體を生ずる是れを名色の時と名づくるなり。六入の時とは眼等を生ずるを以て諸根滿足するも未だ力有て彼の心心數の法の依止を作る能はず是れを六入の時と名づくるなり。觸の時と言ふは何等の時に隨て諸根は彼の心心數の法に於て能く依止を作り苦樂の分別を作す能はず好惡の諸事を作る能はずして未だ勝行有らず是れを觸の時と名づく。受の時と言ふは苦樂を受けて苦樂を分別し好惡の事を攝し愛食非愛欲の資生等未だ取るの力非ず是れを受の時と名づく。愛の時と言ふは愛欲資生の行は有無を分別するに非ず是れを愛の時と名づく。取の時と言ふは有無の分別を知り是の如きの起を求む是れを取の時と名づく。有の時と言ふは此の世未來の世の中にて五欲の境界を求め追求推覓して未來の爲に種種の業を生起す是れを有の時と名づく。生の時と言ふは此の生已に退き卽次の後生所託の生處なり。是れを生の時と名づく。老死の時とは此れ自り以後諸根を破壞するを老死の時と名づく。刹那と言ふは名色等の支を名づけて刹那と爲す。一念中に一切の十二有支を具足するを以てなり。此の義云何。人の貪心に依止して殺生するが如し。彼の處の所有の迷愚癡等を名づけて無明と爲す。彼の處所有の相應の思心を是れを名づけて行と爲す。彼の處所有の相應の意法を是れを名づけて識と爲す。彼の處所有の識と共に法相を生ずる等の四大及び四大所生の〔七〕四塵に依る是の如きの法を名づけて名色と爲す。彼の處所有の入に依りて業を作り而も人を離るるに非ざるを名づけて六入と爲す。彼の處所有の相應の對法是れを名づけて觸と爲す。彼の處所有の相應の覺者是れを名づけて受と爲す。

【六】歌羅邏は羯邏藍とも書く、胎內五位の一にして、受胎の刹那より七日間を言ふ。阿浮陀は頞部曇ともかく、漸く增長して瘡疱の形をなす位にて、二七日迄を言ふ。等、

【七】四塵とは色香味觸の四なり。

猶彼の雨は雲有るが故に雨り雲無ければ雨無く亦雲有るも雨有ること無きこと有るが如し。彼の處も亦爾なり。

問ふて曰く何が故に有爲の三相法中の一處に唯生を說いて生支と爲し、一處に老を說いて老支と爲すや。答へて曰く隨順の義の故なり。法は生ぜんと欲するの時、生に能く隨順し、法は滅せんと欲するの時は老支に隨順す。又老死支は壞法に隨順す。生支は彼の老死と相違す。老死の二法は迭に共に隨順するなり。隨順と言ふは隨順して破壞するが故に名づけて老と爲し死も亦是の如し。是の故に老死は合して一支と爲す。生は支を別にするなり。

問ふて曰く何が故に憂等を說いて支と爲さざるや。答へて曰く一切諸衆生に遍ねからざるが故なり。此れ何の義を以てなる。憂等の諸法は三界に遍ねからず。是の義を以ての故に說いて支と爲さざるなり。

問ふて曰く無明滅せば則ち行滅すとは何の次第有るや。答へて曰く如來は次第して十二因緣は能く有を生ずるを說くは諸の衆生は十二因緣を識知する能はざるを以て斷見に墮するが故なり。如來は次第して無明滅せば餘も亦皆滅するを說くは諸の衆生は能く無明の因緣を見知する能はざるを以て常見に墮するが故なり。又先に說くが如き云何んが世間有るやとは十二因緣を見知せざるを以て無邊に墮すればなり。是の義を以ての故に如來說くなり。云何んが世間の滅なるとは何等の法を見知せざるを以ての故に有邊に墮すればなり。是の義を以ての故に如來次に說くなり。如來迦旃延經中に說くが如し。又已に身見の集諦道諦を說き未だ身見の苦諦滅諦を說かざるを以て是の故に說かんと欲す。又已に染諦を說き、未だ淨諦を說かず、又已に縛諦を說き、未だ解脫諦を說かず、今說かんと欲するが故に是の故に說いて無明滅せば行も亦滅すと言ふなり、是の如し等。

問ふて曰く此の諸の因緣は幾種有るや。答へて曰く略說するに四種なり。何をか四と爲す。一に

故なり。有爲の行は刹那にして不住なるを以てなり。若し有爲の行、念念不住ならば云何んが變異を老と名づくと言はん。又復過有り。法若し變ぜば便ち應に第二刹那中に住すべし。法若し第二刹那に住すとせば佛法の義に非ざるなり。又復過有り。變異と言はば實體を捨つるなり。若し卽ち前法に變異有らば彼の法は便ち應に本體を捨てるなるべし。又若し彼の法不變異ならば則ち變有り異有りと言ふを得ざるなり。若し法、彼の本體を捨てざるも亦變異を老と名づくと言ふを得ず。是の故に轉變有るを名づけて老と爲すと言ふを得ざる也。先に老相を說ける彼れは是れ老の義なり。

問ふて曰く[三]心心數の法は云何んが老を知るや。答へて曰く心法依止の法異るを見るを以てなり。所謂諸根の四大損減し思惟の念薄くして有らゆる諸の法門等を忘失し聲を聞きて了見せず境界見難し。是の如き等は心に老有るを知る。問ふて曰く死は何の義有るや。答へて曰く死とは命を捨て終に亡し謝へ滅し異世に去る等を是れを名づけて死と爲すなり。是の如くして此の死及び先に說ける老の此の二は合するが故に老死支と名づくるなり。又復言有り。根の四大等は後時に損減し微細に別ち難し。是れを名づけて老と爲し破壞するを死と名づく。[四]柯の漸盡するが如し。又四大の破壞する是れを名づけて老と爲し散盡するを死と名づく。朽故車の破壞し散盡するが如し。又五陰に於て隨順し滅するが故に是れを名づけて老と爲し滅するを名づけて死と爲す。[五]故舍の壞するが如し。

問ふて曰く生は老死に緣たりとは此れ何の義有るや。答へて曰く彼の法を壞するが故に此の法有るを得。若し彼の法無くんば亦此の法も無し。此れ何の義を以てなる。初めに瓶を作り後時に朽るが如きの故なり。又先に作れる瓶後時に破壞す。此れも亦是の如し。衆生の生有りて後に老死有るなり。是れ不生に非ず是の故に生に依て老死に緣たるを說くなり。問ふて曰く若し生念中に卽ち時に死せば彼の中には云何んが生は老死に緣となるや。答へて曰く命滅すればなり。此れ何の義を以てなる。彼の處に命あるも現前して命を損ずるは五陰滅するが故なり。是れを名づけて老と爲す。

【三】心心數とは心心所とも言ふ、心は心意にて、心數とは心作用なり。

【四】柯とは枝葉なり。

【五】故舍とは古い家屋なり。

生の我は見取の生を愛し戒取の受を愛し欲取を愛す。一切の取に於て見取に貪著す。又四取の中に於ては欲取と戒取の二取は是れ愛の餘の二にして以て無明を根本と爲すなり。

問ふて曰く有の義は云何。答へて曰く此れ能生の故なり。此の能生に依て此れ能く勤修し此の法に依るが故に能く餘法を生ず是の故に有と名づくるなり。

問ふて曰く有に依て生に緣たりとは此れ何に因るや。答へて曰く業に依て生有ればなり向前に說くが如し。行に依て識有り、此の中も亦爾なり應に具足して說くべし。

問ふて曰く煩惱も亦是れ生支の因緣たること經の中に愛は能く生に因たりと說くが如し。何が故に唯有は生に因緣たるを說き取は緣たるを說かざるや。答へて曰く勝れたる生因に依るが故に是の如く說くなり。此れ何の義を以てなる。此の中には唯生法の勝因を說けばなり。云何んが勝なる。此れは是れ地獄此れは是れ人此れは是れ天と是の如き等の種種の身業は近因と爲し而して煩惱には非ざるなり。彼の種種の因は復已生有り。同類の生中には各各差別有り。謂ゆる家力色長壽短壽有病無病受用資具一切差別す。此の中も亦爾なりと業は種種なり。故に知ぬ是れ近因にして煩惱に非ざる也と。是れを以て有の因緣は生に有りて取の因緣に非ざるを說くなり。

問ふて曰く若し有能く生の因緣を作らば何を以ての故に有は生に因緣なるを說き而も生は有に因緣なるを說かざるや。答へて曰く有の定不定を以ての故なり。此れ何の義を以てなる。有支有れば必ず生支有るも生支有れば必ずしも有有るに非ざるを以てなり。猶彼の二諦に依るが故に必ず初諦有るも、必ずしも初諦有るが故に二諦有らざるが如し。若し爾らずんば畢竟して解脫の因緣有ること無し。是の故に有支の因緣に依て必ず生支有り、生は有に緣たるに非ざるを說くなり。

問ふて曰く老とは何の義なる。答へて曰く消皺力滅、之れを名づけて老と爲すなり。人有て說いて言く所謂老とは變異を以ての故なり、と。此の義成ぜざるなり。何を以ての故に。不住を以ての

ず。受の勝因と爲るは色香等の法に非ざるなり。是の故に但受は愛の因と爲るを說いて色等を說かざるなり。

問ふて曰く取は何の義有るや。答へて曰く近に取して染著するを皆名づけて取と爲す。有支及び資生等の一切の染著を求め染著を得るを以て相を捨離せざるを以て名づけて之を取と爲す。此れに四種有り。何等をか四と爲す。欲取・見取・戒取・我取なり。又欲取とは五欲の境界の功德を貪るなり。戒取觸とは謂く持戒して三種の見を取るを以てなり。見は身見及以我見を取るなり。又我に執著するを名づけて我取と爲す。彼の人は我に著し我の爲に樂を求む。是の故に彼の五欲の境界を求め諸天の樂を求め、或は取て諸天の苦行を見んと欲す。是の如きの法は是れ見取と名づく。若し已に五欲の境界を求め得て彼の法に貪著せば是れを欲取と名づく。是の如く持戒する是れを戒取と名づく。又已身に著し二邊に隨順する是れを見取と名づく。此の義云何。若し斷の邊に墮せば即便五欲の境界に堅著す是れを欲取と名づく。若し常の邊に墮せば五欲に貪著し勝生處と爲る、是の如く持戒する是れを戒取と名づく。問ふて曰く愛は取に緣たりとは此れは是れ何に因るや。答へて曰く不足の愛なるが故に更に增長を求むればなり。鹹水を飲むに轉て渴を增長するが如し。又愛に依るが故に四種の取有り。此れ何の義を以てなる。愛の緣に依るが故に現在に五欲の境界を求むるなり。經中に說くが如し。愛の因緣に依るが故に諸欲を求むる是れを欲取と名づくるなり、と。又愛に依るが故に未來世に五欲の境界を求むるなり。彼の愛の爲の故に持戒を起す是れを戒取と名づくるなり。彼は但五欲の境界を求むるを以て若し已に五欲の境界を求め得ば捨離を欲せずして諸天を求むるが故に好日に祭祀す、是れ我の欲する所なり。是の如く我に著するを名づけて我取と爲し是れを愛に依て取に因緣なりと名づくるなり。問ふて曰く何等の愛を以て何等の取に緣たるや。答へて曰く愛せんと欲し取らんと欲して愛は能く戒取我取を取り有支を離る。愛は能く見取を取る。又復樂

へて因と作る能はざるが如し。又芽は(影と)共に生じ芽は影の因と作るも影は芽の因に非ざるが如し。觸も亦是の如し。受と共に生ずと雖も觸は受の因と爲るも受は觸の因に非ざるなり。是の疑は已に斷ぜり。復異義有り我が此の法中にては觸は共生次第の因緣に非ざるなり。此れ何の義を以てなる。我此の法中にては受は觸と一時に俱に生ずるに非ざれば云何んが生ぜん。過去の時に依て卽ち後時の受法に與へて因と作り次第に緣生するなり。此れ云何んが知らん。一因を說くを以てなり、此れ何の義を以てなる。觸の因緣に依て受を生ずるを說き受の因緣に依て觸を生ずるを說かざればなり。此れ何の義を以てなる。若し此の二法共俱に生ぜば應に迭の因を說くべし。是の義を以ての故に次第の緣を說いて一時を說かざるなり。

　問ふて曰く受に依て愛に緣たり此れは是れ何に因るや。答へて曰く受を以て因と爲し樂を取らんと欲するが故に愛を生ずるなり。

　問ふて曰く若し是の如くんば苦は應に生ずべからざるならん。答へて曰く離を求むるを以ての故なり。問ふて曰く樂受を求むる者は樂を見るを以ての故に求むるなり。苦を求むべからざるは不用なるを以ての故なり。答へて曰く苦を求めずと雖も而も亦愛有り。彼の苦受を得るを欲せざるを以ての故なり。苦を離れんと欲するを求むる彼は卽ち是れ愛なり。是の故に苦受も亦愛の因緣なり。又樂受とは愛を欲する因緣なり、苦受は愛有るを遠離する因緣なり。此れ何の義を以てなる。人の苦有て苦に依て逼惱せられ、無力にて身を殺害する事を爲し、苦を求めざるを以て樂を求めざるを以て而も愛の因緣なるを知らざるが如し。又無明の盲に依るが故に苦を取るなり。彼の渴したる人闇夜に糞和合せる水を飲むが如し。此れも亦是の如し。問ふて曰く色等の境界は皆是れ愛に緣たり、何が故に但受は愛に緣たりと爲すを說くや。答へて曰く樂受の爲の故に彼の色等を求むるなり。此れ何の義を以てなる。樂受の生は必ず伴侶有り。是の義を以ての故に色等の法に於て皆愛心を生

を説くこと六入を説くが如し。又六入を説くと雖も而も三法の和合を攝得して觸を成ずるなり。入の名を説くを以て卽ち六識を説く。彼は相隨するを以て眼等の入は卽ち色等の入を攝するを説くなり。何を以ての故に、色等の入を離れて眼等の入有らざればなり。是の義を以ての故に六入を説くが如し。此れも亦是の如し。

問ふて曰く六入は觸に緣たれば此れは是れ何の因なる。答へて曰く盲等の人は眼等の觸無きも餘は有るを以ての故なり。此れ何の義を以てなる。眼等の根有り、眼等の觸有るも眼等の根を離れ眼等の觸無きを以て盲等の人の如きは唯意識有るのみなり。此れも亦是の如く六入は觸に緣たり。

問ふて曰く觸に依て受に緣たり此れは是れ何の因なるや。答へて曰く樂受等の境界和合して樂受等有るを以てなり。此れ何の義を以てなる。人の熱を患ひ熱に依て逼惱せられて雪冷摩尼珠等及以蔭凉を求むるが如し。又人有て寒に依て逼惱せられ火を求め衣を求め溫水等の一切の暖觸を求むるが如し。

問ふて曰く觸は受に緣たりとは此の義然らず。何を以ての故に。觸と共に生ずるが故なり。此れ何の義を以てなる。觸は受と共に生ず。是の義を以ての故に觸は受に緣たりとは此の義成ぜざるなり。兩角共に生ずるは右角が左角の因緣を作らず左角も右角の因緣を作らざるが如く此れも亦是の如し。是の故に應に餘の因緣に依て生じ觸の因緣には非ざるべし。又若し共に生じて觸が能く受の因緣を作らば何の義を以ての故に受は能く觸に與へて因緣と爲らざるや。受と觸は相應因を生ずるを以ての故なり。答へて曰く復共に生ずると雖も一は是れ因にして一は是れ因に非ざればなり。此れ何の義を以てなる。二種の法有て復共に生ずると雖も一法は能く彼の因と作ること有るも第二法は彼の法の因を作るに非ず。明と焰とは復共に生ずると雖も焰は是れ明の因にして明は是れ焰の因に非ざるが如し。又日と光との二法は共に生じ而も日は能く光明に與へて因と作るも光明は日に與

故に唯內入を說きて外入を說かざるなり。

問ふて曰く何が故に觸と名づくるや。答へて曰く到に對して觸と名づくるなり。問ふて曰く此れ何の義を以てなる。答へて曰く念の境界中に於て識相對の法なるが故なり。眼識等は彼の色等の諸の境界中に於て彼此相對するを以て是れを名づけて觸と爲すなり。復觸有らば近對和合して一處に到るは名を等しくして義を異にするなり。一又和合して意地の法を生ずるが故に名づけて觸と爲すなり。

問ふて曰く觸の因緣を說いて猶ほ滿足せざるなり。三種の法の和合せる因緣を以て而して觸を生ずるが故なり。此れ何の義を以てなる。三法の和合する有るを以て觸を生ずと佛是の如く說けばなり。此の中には唯六入の因緣あつて觸を生ずるを說く。是の故に此の中には具足して觸の因緣を生ずるを說かざるなり。此れは是れ過咎ならん。答へて曰く內因緣は外を攝得するを說くを以ての故に彼の鼓聲の如し。此れ何の義を以てなる。人は鼓と桴【二】と和合して聲を生ずるも唯鼓の聲のみを說くが如く是の如くして三法和合して觸を生ずるに內に依て說くと雖も外をも攝得するなり。是の故に過無きなり。又不同の義は種子の芽の如し。此れ何の義を以てなる。時及び地水等の和合する有て能く芽を生ずるの因緣を作ると雖も而も種子を說いて名づけて勝因と爲すが如し。子能く芽を生ず是の芽は勝因たり。此れは是れ稻の芽、此れは是れ麥の芽なりとして共因を說かず。觸も亦是の如く不同の義有り。三法和合するが故に生ずる有りと雖も唯內入を說きて共因を說かざるなり。又勝因を以ての故なり。此れ何の義を以てなる。三事和合して觸を生ずる有りと雖も根に依て能く生ずるを以て內因を說くなり。彼れ勝れるを以ての故に、根に依るを以ての故に諸識能く生ず。盲聾等は識等無きを以ての故に、(又)色等の法は識の境界なるを以ての故に、是の故に根と三法の和合に依て能く彼の法を生ずるなり。三法生ずると雖も而も根は是れ勝なり是の故に如來は唯勝法

【二】 桴とはばちのこと。

が故なり。此れ何の義を以てなる。唯聲入を除き名色等の緣は六入と共に生ず、若し是の如くんば但六入の因緣を說くのみにて具足して名色の因緣を說かず、此れは是れ過失ならん。答へて曰く彼は說くを須ひず。何を以ての故に。二處の見なるを以ての故なり。此れ何の義を以てなる。彼の外入は二處の見なるを以ての故に衆生攝に依り非衆生攝に依る。此れ何の義を以てなる。此の中には但衆生の次第に依て彼の十二因緣を說きて、彼の非衆生に依て十二因緣を說かず。是の故に但衆生所攝の入に依て說き、非衆生に依て說かず。是の義を以ての故に、是の中には但衆生所攝の內因緣に依て說き、彼の外因緣に依て說くに非ざるなり。

問ふて曰く若し爾らば應に名色を說くべからず。此れ何の義を以てなる。若し是の如くんば名色は支中に有るも應に名色を說くべからざるは色は二處の見なるを以ての故なり。答へて曰く實に難ずる所の如し。然りと雖も若し彼の處に名色を說かずして但名を以て六入に緣たりと言はば是の如きは五種の色入を說かず。彼の六入中色も亦清淨にして但名色入清淨なるに非ず。此れ何の義を以てなる。應に可見の色等の入緣を說くべし。是の故に彼の處にも亦色の名を說くなり。是れを以ての故に識は名に因緣たり名は意入に緣たりと說くなり。是の如し等。是の如きの三時は分別有ること無し。是の故に如來此の中に於て說いて是れを正說と名づくるなり。

問ふて曰く何が故に外入の因緣を說かざるや。答へて曰く眼等を說かば是れ卽ち[一]成就するなり。此れ何の義を以てなる。此の修多羅の中には具足成就して衆生の體を說く。此れ復何の義なる。何等の處の眼等の諸入に隨て彼の處には必ず色等の外入有り。何を以ての故に。色等の境界を遠離して眼識等有らざるを以てなり。是の義を以ての故に眼等の入を說かば則ち已に外色等の入を攝得するなり。是の故に別に外入等を說かざるなり。又內入に依て名字を得るを以ての故なり。此れ何の義を以てなる。內入に依るが故に衆生の名を得、外入に依るには非ざるなり。此れ是の義を以ての

【一】成就は大正大藏經には成說に依るも今は宋元明三本宮內省本に依て成就とす。

ざるなり。

問ふて曰く彼の諸の因緣は云何んが具足する。答へて曰く煩惱業名色和合淳熟するを以ての故に成ずるなり。

問ふて曰く云何んが煩惱も亦是れ六入の因緣なるを知るを得るや。答へて曰く阿羅漢は復生ぜざるを以ての故なり。此れ何の義を以てなる。阿羅漢は復業有りと雖も而も煩惱無きを以て是の故に生ぜず。生ぜざるを以ての故に六入有ること無し。是の故に知るを得、煩惱も亦是れ六入の遠因業にして亦是れ彼の六入の因緣たるを。何を以ての故に。盲等を成ずるを以ての故なり。是の故に復實には煩惱有りと雖も種類に隨て生じ六種の業を具して盲聾等有るなり。是の故に業も亦六入の因なるを知る。又十二入は種種有るを以ての故なり。此れ何の義を以てなる。入の種種は迭に共に不同なるを以て但一衆生の一身體中にても種種不同なるを以て何に況んや種種の衆生の身中の諸業は不同なり。家力色命皆悉く不同なり、是の如し等。諸の衆生の家力色等の一切差別するは皆業に依るを以てなり。是の義を以ての故に、彼の業も亦是れ六入の因緣なり。名色も亦是れ六入の因緣なり。彼の六入は種子に依るを以ての故なり。此れ何の義を以てなる。復煩惱、業等有りと雖も名色の種子は六入を生ずるを以て名色を離れずして能く六入を生ずるなり。子を離れずして能く芽を生ずるが如し。是の故に近因たる名色は六入を生ずるを知るを得るなり。亦彼の業に依ても六入を生ず。何を以ての故に。彼有りと雖も而も彼無きを以ての故なり。此れ何の義を以てなる。復煩惱、業等有りと雖も而も名色は具に成就せざるを以てなり。歌羅邏等の時の中の如し。眼等の入無くして而も彼に依るが故に六入を成就す。始めに子を結び終に能く果を成ずるが如し。是の故に知るを得、煩惱、業等名色は淳熟して能く彼の六入の因緣を作るを。

問ふて曰く汝の說ける因緣は猶具足せざるなり。何を以ての故に。是の中には外因緣を說かざる

ぜる焰に隨つて何等の處何等の因緣を以て彼の生處に卽し彼の因緣に卽し先生の焰に卽し時に卽し倶に謝す。是の故に餘焰餘因緣を容るゝを得。又復過有り、前の燈焰滅して後の燈焰生ずるは火無きの因緣に從て生ずるに非ず。此の義然らず。何ぞ燈炷の焰を以てせん。前後次第して斷ぜず絕せず相續して生ず。是の如くして識名色等は次第に生滅して能く因果を成ずるなり。應に知るべし。是の義を以ての故に識の因緣に依て能く名色を生じ因果の義成ずるなり。問ふて曰く名色の因緣には六入有りとは何等の因を以てなるや。答へて曰く彼の因を以ての故なり。何を以ての故に。色清淨は五入に因緣たるを以て、(又)名清淨は意入に因緣たるを以ての故に名色は六入に因緣たるを說くなり。

問ふて曰く若し名色を以て六入に緣たりとせば此の義成ぜざるなり。何を以ての故に、彼有りと雖も而も彼無きを以ての故なり。此れ何の義を以てなる。歌羅邏等の時は名色有りと雖も六入等無し。是の義を以ての故に。是の義成ぜざるなり。又復此の義成ぜざる所以は衆生に盲聾等有るを以ての故なり。此れ何の義を以てなる。若し名色能く六入の因を作らば則ち應に盲聾の衆生有るべからず一切悉く應に諸根を具足すべきならむ。答へて曰く此の義然らず。何を以ての故に。彼を離れて成有らざること猶雲雨の如し。此れ何の義を以てなる。汝の天雨の如く先に雲有て後時に雨るは雲を離れて雨亦有るに非ず。雲有て而して雨有ること無し。是の如くして六入は若し名色有らば六入有りとは名色を離れずして復名色有り而して六入無きなり。

問ふて曰く何の義を以ての故に彼の名色有て而して六入無きや。答へて曰く諸の因緣具足せざるを以ての故なり。此れ何の義を以てなる。猶眼識の如し實に眼有るが如し。諸の因緣具足せざるを以ての故に眼識を成ぜず。又復猶實に種子有るも諸の因緣和合せざるを以ての故に芽を成ずる能はざるが如し。此れも亦是の如し。歌羅邏等の時は中に因緣具足せざるが故に眼等の諸入も亦具足せ

し識の因緣母胎に託せずば諸の心數法は則ち有るを得ず。識、胎に託するを以て諸の心數法も皆亦隨從するなり。又根本心に因つて歌羅邏を成ず。赤白等を以て和合すれば則ち能く歌羅邏を成ず。衆生を成ずるが爲に彼の處の識心は根本因と爲す。大因緣法門中に說くが如し。佛阿難に告げたまはく、若し彼の識心、母胎に託せずば彼の歌羅邏及び名色等も亦成就せざるなり、と。是の故に識は諸苦の種子爲り。根本義を示現せんと欲するが爲の故に是の故に唯識は名色に緣たるを說き名色は識に因緣たるを說かざるなり。

問ふて曰く人有つて說いて曰く十二因緣は時節有り、と。彼の人は識は名色に因緣たるの義に依れば則ち成ぜざるなり。何を以ての故に。因緣無き故なり。此れ何の義を以てなる。識滅し已つて然して後に名色の因緣を作ると爲し、識滅せずして能く因緣を作ると爲す。若し識滅し已つて名色の因緣を作らば此の義成ぜざるなり。何を以ての故に。種子を滅しては芽に生を作るの因緣を與ふる能はざるを以ての故なり。

又復過有り、中間に衆生の體を斷絕するが故なり。若し識滅せずして能く名色と因緣を作らば一衆生身は一念中に於て並に二識有るなり。是の義を以ての故に識は名色の因緣を作る能はざるならん。答へて曰く相續して斷ぜず絕せざればなり。因緣は燈焰の如く體は相續して斷ぜざるなり。此れ何の義を以てなる。焰は相續して斷ぜず絕せずして而も能く用有るが如し。先の焰滅して而して後の焰生ずるに非ず。又復過有り。後の焰生ずるの時は因無くして而して生ず。又復過有り。若し因無くして生ぜば則ち應に常に生ずべし。又亦是れ先に生ぜる焰住して後に餘焰生ずるに非ず。若し先の焰住して後の焰生ぜば先の焰は便ち應に第二念住なるべし。而して佛法中には是の如きの義無し。又復過有り。焰應に增長すべし。又復過有り。應に多焰生ずべし。又亦先の焰住するの時更に餘の焰を生ずるに非ず。何を以ての故に。容受せざるの故なり。此れ何の義を以てなる。先に生

卷の第九

問ふて曰く行は名色の二因緣識を以て重說せば此れ何の勝有るや。答へて曰く初めに託胎の識行を因緣と爲すは彼れ能く種子の義を作るを以ての故なり。已種の種子の名色を因緣と爲すは、能く和合して事を成就するを以ての故なり。二因緣を以て住持・成就・依止し能く境界の觀を取るを以ての故なり。又行因緣して業の名を得。是の故に經中に諸業の因を能生の因と爲すを說くなり。名色因緣して愛の名を得。是の故に經中に愛の緣は能生の緣と爲るを說くなり。二因緣は境界中に於て境界住に依るを以て又行因緣初生心の名を得。名色の因緣は已に生ぜば六入未だ成就せざるも六入の名を得。又行因緣は一門行に依る。此れ何の義を以てなる。彼の行因緣は唯意門行なればなり。名色の因緣は二門行に依る。此れ何の義を以てなる。名色は身根意根の二門に依つて行ずればなり。二因緣を以ては六門行に依るなり。又行因緣は唯惡道中にて罪業の能攝住に依るを以ての故に經中に說くが如し。彼の諸の衆生は惡道中に於て乃至惡業未だ盡きざれば死なず。業盡きれば乃ち死す。是の如き等の名色の因緣は人及び天道、欲色界中にて彼の處にて名色の二事有るを以て無色界中には二因緣無きなり。

問ふて曰く如來彼の城喩經中、大因緣等の修多羅中に於て名色に依つて識に因緣たるを說く。何が故に此の修多羅中に於ては識に依つて名色に因緣たるを說くや。答へて曰く名色の因緣は識に依つて有ればなり。此れ何の義を以てなる。實に識有るを以て名色と識とは迭に共に相因たり而して識有に依つて名色有有ればなり。依所依の如し。是の故に依有るなり。此れ何の義を以てなる。王及び臣は迭に共に相依りて而して王を勝と爲すが如し。王去るの時は臣も亦去る。此れも亦是の如し。識と名色とは迭に共に相依りて而して識を勝と爲す。是の故に識に依つて名色有るなり、若

有力無力を見るを以ての故なり。此れ何の義を以てなる。何が故に行と名づくるや。能く事を辨ずるが故なり。過去世の生の所作の諸業は彼の有力を見て以て能く果を成す。是の故に彼の業は行の名を以て說くなり。現在世の生の所作の諸業は未だ彼の力を見ず未だ果を成ぜざるを以て彼の業の果報は未來に在るが故に是の故に彼の業は行と名づくるを得ず有の名を以て說くなり。

問ふて曰く何の義を以ての故に名づけて不動と爲すや。答へて曰く異地には果報を與ふる能はざるが故に名づけて不動と爲すなり。此れ何の義を以てなる。欲界の業は異地中に於て能く果報を與ふるが如く何等の善根業道に隨て應に人中に生ずべし。即ち彼の善業は願求心に依て乃至他化自在に生ずればなり。如來依功德生修多羅に說くが如し。又惡不善業に隨て應に地獄に生ずべし。果報を受くる者は卽ち彼の業に依り人中にて苦を受くるなり。如來依鹽喩經に說くが如し。色無色の業は是の如くなるを得ず。此れ何の義を以てなる。初禪地の業は二禪を生ぜず。二禪地の業は初禪を生ぜず。是の如くして餘地も亦是の如し。應に知るべし。是の故に佛說いて色無色の業を名づけて不動と爲すなり。又諸の蓋障は動ずる能はざる所なるが故に不動と名づく。密室の燈の如くなればなり。

彌勒菩薩所問經論卷第八

是の故に唯因緣の名に依て說くなり。能く四因緣を攝取するを以ての故なり。問ふて曰く行も亦能く無明の因緣と作る。若し是の如くんば何故に但無明は行に緣たりと說いて而して行は無明に緣たりと說言せざる。答へて曰く二義の定不定有るを以ての故なり。此れ何の義を以てなる。無明の因は定んで行に緣たるも業行は定んで無明に緣たるに非ざるを以てなり。何をか以て之れを知らんや。阿羅漢は復業有りと雖も而も無明無きを以て是の故に業は定んで無明に緣たるに非ざるなり。是の故に行は無明に緣たりと說かざるなり。又無明の因緣は業有るに依ることあり。此の義を以ての故に彼の無明の因緣は業有るにも依るなり。若し是の如くんば、唯無明の因緣は業有るに依て應に無明は業有るを遠離すべからず、而も實には無明は業有るを遠離するなり。是の故に無明に依て行に緣たりと說き、行に依て無明に緣たりとは說かざるなり。問ふて曰く何の義を以ての故に已に果業を受くるを行の名を以て說き、未だ果業を受けざるを有の名を以て說くや。答へて曰く未だ果業を受けざれば但有爲分有るのみなり。是の故に有を說く。畢竟有なるを以ての故なり。未來世に畢竟して果を得るを以て業體は滅すと雖も畢竟して得るなり。必ず能く未來世に果を與ふを以て是の故に有と名づけ有の名を以て說くなり。已に果業を受け已に有爲分を受く是の故に行を說く。果を受くるを得るを以て是の故に有と名づけ有の名を以て說くなり。又復義有り。何が故に有と名づくるや。此の法に依て能く生ずるを以て有と名づくるなり。此れ何の義を以てなる。何等の業に隨つて能く畢竟して未來世の果を生ずるを有の名を以て說くなり。何等の業に隨て是れ畢竟して未來世有るに非ず、鴦瞿離摩羅等の業は未だ曾て有らざるが如きの故に行の名を以て說くなり。是の故に經中に行は業果に緣たるを識の名を以て說き生の名にて說くには非ざるなり。何を以ての故に。彼の行業は是れ畢竟して有支を生ずるに非ざるを以ての故なり。此れ何の義を以てなる。現身中に果報の業を受くるを以てたり。彼の業行の緣は能く識支を生じ、彼の生支を生ずる能はざる故なり。又

爲す。無明轉起して後有の因たる福業罪業不動業等を取るを名づけて行と爲す。行因有るに依て分染意を生ず是れを名づけて識と爲す。彼の識の爲に住するを名づけて名色と爲す。彼の清淨識の所依止を名づけて六入と爲す。根識の境界の三事和合し意地の法に對するを是れを觸と爲す。觸に依て愛不愛の二を生ずる顚倒の念愛を是れを名づけて受と爲す。受等を見著して樂を集むるを愛と名づく。愛に依止して有を求め有を斷じて我を取して諸の煩惱に依止し樂しみて煩惱に隨順する是れを名づけて取と爲す。能く轉起を取り後生の因たる身口意の業を取る是れを名づけて有と爲す。行有に依止して後世身を取る是れを名づけて生と爲す。生身に依止して增長熟變する是れを名づけて老と爲す。先に得たる身の壞する是れを名づけて死と爲す。離れざる愛不愛の事を遠離し供養等を求め意地に從て生じ自心を焚燒す、是れを名づけて憂と爲す。憂を懷くの心に依て愛の功德を說き內心種種の悲言に愁縛さるるを名づけて啼哭と爲す。色識身は共意相應に依て悲愛の樂を受く是れを名づけて苦と爲す。唯、意識身意地相應する是れを名づけて愁と爲す。愛不愛の二種の境界に於て或は有を求むる有り、或は有を求めず資生を求むるが故に種種の苦を受け其の心逼惱す。是れを名づけて極と爲すなり。

　問ふて曰く無明は行に緣たりとは云何んが行と名づくるや。答へて曰く容受に依止し覲を伴侶し隨順して共生を起すを名づけて行の義と爲すなり。問ふて曰く應に因緣の名を釋すべし。云何んが因緣と名づくるや。答へて曰く能く果を成就する是れを名づけて因と爲し、此の法に依るが故に能く彼の法を顯し此の法に因るが故に能く彼の法を生ず是れを名づけて緣と爲すなり。問ふて曰く何故に但無明は行に緣たりと說いて而して無明は行に因たりと說言せざる。答へて曰く一切の諸の因緣を攝するが爲の故なり。若し無明は行に因たりと說かば但因の因緣を攝するのみにて因緣を攝せされば是の故に無明は行に因たりとは說かざるなり。四因緣を以て無明等は共に能く行に因緣たり

切の境界に遍く、愛は是の如くならざるを以てなり。此れ何の義を以てなる。彼の無明は一切處に遍く、愛は遍からざるを以ての故なり。又有爲、無爲を緣とするを以てなり。此れ何の義を以てなる。彼の無明は有爲法及び無爲法を緣とし、愛は是の如くならず唯、有爲を緣とするを以てなり。又同不同の地を緣とするを以てなり。此れ何の義を以てなる。無明は同不同の地を緣とし、愛は是の如くならず唯同地のみを緣とするを以てなり。又一切の煩惱に相應するを以てなり。此れ何の義を以てなる。彼の無明は一切の煩惱に皆共に相應し、愛は是の如くならず唯愚人にのみ起り智者には起らざるを以てなり。又一切の苦は因を斷絕せず。此れ何の義を以てなる。無明は一切の苦聚に於て以て根本と爲すを以てなり。是の義を以ての故に、初分中に於ては唯無明のみを說き、彼の第二煩惱門中に依ては唯愛のみを示現す。是の故に彼の未來分中に於ては唯愛をのみ說いて無明を說かざるなり。

問ふて曰く何の義を以ての故に、過去世中所攝の諸業は何の煩惱に隨て能く與に因を作り彼の諸の煩惱は無明の名を以て說くや。現在世中所攝の諸業は何の煩惱に隨て能く與に因を作り彼の諸の煩惱は愛取の名を以て說くや。答へて曰く現見に非ざるを以てと現見を以てとの故なり。此れ何の義を以てなる。過去世中の有らゆる煩惱は是れ遠きを以ての故に現見す可からず。是の故に彼の中の煩惱の差別は示現す可からず、彼の麤相は說き得可からざるを以て是の故に皆無明の名を以て說くなり。現在世生の所攝の煩惱は現見す可きが故に彼の諸の煩惱の差別は說く可く、此れは是れ愛取なり此れは是れ欲取なり此れは是れ見取なり是の如し等と示現し得可し。是の故に現在の有らゆる煩惱は愛取の名を以て說くなり。

問ふて曰く此の說は是れ妙說なり。煩惱、業に因て世間の生死有り自在天微塵等の故に非ず、と。而らば無明等の十二有支は其の義云何。答へて曰く如實に三界中の事を知らざるを名づけて無明と

異因にも非ざるなり。問ふて曰く若し無因に非ず顚倒因に非ずして世間を生じ而も業煩惱に依て世間有れば此れ云何んが知らむや。答へて曰く生過を知らずして作業行を爲せばなり。此れ何の義を明せる。諸の世間の人は生過を知らざれば彼の人則ち五欲の境界一切種種無利益の事に著し、爲に世間一切種種無利益の事を生ず。是の故に修行して世間の果報を得ると爲すなり。作業は煩惱の作業を除斷する爲に非ず。此れ何の義を以てなる。一切世間の愚癡の凡夫は智慧無きが故に觀察する能はずして無明の闇智を以て無量百千の種種の苦惱の中に於て功德の生有るを見、未來世に樂の果を受くるを求むるが故に功德行を行じ戒施等の諸の功德行修するなり。又復、人有て心顚倒するが故に現在世の五欲の境界に著し未來世を見、福德有ること無し。是の故に修行するも福德無く殺生等の業を行ずるなり。又復人有て三昧に著し愛禪見禪慢禪疑禪增上禪等を樂しみ一切諸の通等の行を修行す。是の故に彼の三界中に於て生は斷ぜず絕せず、生に從て復一切の煩惱を起し煩惱に從ふが故に一切の業を起す。是の如くして世間は無始以來斷ぜず絕せざるなり。

　問ふて曰く若し一切の煩惱に從て世間行を生ぜば、如來此の修多羅の中に於て何が故に唯無明に從てのみ世間を生ずるを說くや。答へて曰く無明を說くと雖も貪等の一切の煩惱を攝得すればなり。此れ何の義を明せる。無明を說くと雖も貪等の一切の諸過を攝得すればなり。此れ云何んが知らむ。愚癡の人は貪等を起すを以てなり。無智を以ての故に貪等の一切の煩惱を起す、無過の起に非ざるなり。經の中に說くが如し。無明の因緣は貪過を起し瞋過を起し闇過を起す、と。是の故に彼の無明は根本にして其の餘の煩惱諸過を攝得するを說くなり。猶、世間の王來り王去れば諸臣兵衆も亦來り亦去るが如し。

　問ふて曰く何の義を以ての故に過去分の中に唯無明のみを說いて愛を說かざるや。未來分の中に但愛のみを說いて無明を說かざるや。答へて曰く大境界の故たり。此れ何の義を明せる。無明は一

從還稻を生ずるを見る。是の故に稻を種ゆるなり。火も亦是の如し。鑽燧に從て牛糞中に火を生ずるを見るを以て・火を見ずと雖も鑽燧等に從て中に火を求む。是の如くに智從智を生ずるを見るを以て、智を見ずと雖も而も智は過去智に從て生ずるを知るなり。是れを以て汝は先に火無くして能く火を生じ、先に智有ること無くして能く智を生ずるが如く說き、一切の物は唯現在因に從てのみ生じ過去因に從て生ぜずと說くは是の義然らざるなり。是の義を以ての故に煩惱、業に從て世間法を生ずるなり。此れ云何んが知らん。聖人の論は世間の人に說くを以てなり。此の義云何。煩惱を離れたる一切の聖人諸佛如來及び佛弟子聲聞の人等は彼の如く煩惱、業の因に從て世間を生ずるを說くを以て是の如きの言を作す。若し人、貪に著し身に惡行を作り、口に惡行を作り意に惡行を作らば彼の人、惡行の因緣に依りて此の身壞し已て惡道の中に生ず。一切の諸論も亦是の如く業に從て生有るを說く。是の故に經に言く明に從て明に入り闇に從て闇に入る。世間の人亦是の如く業に從て生有るを說き是の如きの言を作す。一切の樂はざる生處を畏るるを以て一切種種の惡行を遠離し、一切の樂ふ可き生處を求むるを以て一切種種の善行を修行す。是の義を以ての故に諸聖人に依り一切の論に依り世間の人に依りて我れ是の如く業因に從ふが故に世間を生じ無因生に非ざるを知るなり。

問ふて曰く因念不住何ぞ能く果を生ぜん。此れ何の義を以てなる。諸の煩惱、業は刹那にして不住なれば煩惱業は刹那にして卽ち滅するを以て是の故に諸の業煩惱に從て世間を生ずるに非ざらむ。答へて曰く我れ因滅して能く果を生ずるを見る。此れ何の義を以てなる。因滅して彼の滅因に依て能く果を生ずるを見るを以てなり。摩多隆伽果中に於て酢味有るを見るが如し。而して彼の子芽莖枝葉及び華等は中に悉く皆見ず。而も彼の子芽莖枝等の相續に依て後時に果中に見ゆ。而して彼の摩多隆伽果中所有の酢味は卽ち彼の因に非ず亦異因にも非ず。是の如く外因果和合の生なるを見る。如是の法、如是の比智の知なり。因滅し已て彼の滅因に依て世間の生有り、無因生に非ず又

ての故に無因果に非ざるなり。又復答へ有り。應に變異無かるべし。此の義云何。若し一切の物、因に從て生ぜずは變異せざること猶虚空の如くならむ。而るに此の義然らず。何を以ての故に。變異を以ての故なり。云何んが變異なる。先に無にして後に有なり、已に有にして還無なり、生を異にし滅を異にするなり。無因の法中には是の如きの果法の轉變を見ず。是の故に諸法は因に從て生じ無因生に非ざるなり。又復過有り。一切所作の諸業は空なるが故なり。此れ何の義を明せる。若し無因にて一切の物を生ぜば諸の所作の業は空にして利益無く而して實に此事の如き有るを見ず、是れを以ての故に因無くして果有るに非ざるなり。

問ふて曰く我れ智從り智を生ずるを見る。此れ何の義を明せる。現見する外物有爲の法中の種子は因と爲るも過去の因に非ず。是の如く現見する內有爲の法、赤白等の和合に因て生ずるは過去の因に非ず。答へて曰く此の義然らず、何を以ての故に。現在智は過去智に從て生ずるを得るを以ての故なり。此れ何の義を明せる。智の生は過去智の因に從て有り無智の生に非ざるを見るを以てなり。若し智、前智に從はずして生ぜば應に土塊に從て木石等生ずべし。亦異相續に從て生ずるに非ず。何を以ての故に。若し異相續、智を生ぜば父母も亦應に能く兒智を生ずべし。是れを以ての故に我れ彼の胎等の諸の衆生の智は相續に從て生ずるを知る。此れ何の義を明せる。胎等の智は前に更に智有るを以て彼の胎等の智は先智の相續を離れずして生ずるなり。是の故に過去世の因有るを知るなり。問ふて曰く此の義然らず。何を以ての故に。鑽燧[三]の人の功は牛糞の衆緣和合に從ふが如く先に火有ること無くして能く火を生ず。智も亦是の如く、先に智有ること無く、因緣和合して能く智を生ずるなるや。答へて曰く此の義然らず。何を以ての故に。餘法を見るには比智の知を以てするが故なり。此れ何の義を明せる。何等の法中に生ずる法を見るに彼の法相似なるを以て能く法を生ずるは無相似に異生中に見れるに非ず。稻從稻を生ずるを見るが如し。稻を見ずと雖も而も稻

【三】鑽は大正大藏經には攅に作るも元本明本に依りて鑽とす。鑽燧とは石と石、木と木をすり合せて火を取ることなり。

ばなり。是の義を以ての故に世間は始有らむ。答へて曰く、此の義然らず。何を以ての故に。常法は世間を生ずる能はざるが故に一法として自在天微塵等從り生ずるを見ず、無常の因緣中從り生ずるを見る。常法中從り生ずるを見ざるを以て無常の因緣中從り生ずるを見る。而して汝の法中の自在天等は皆悉く是れ常なり。是の義を以ての故に自在天等は法を生ずること能はざるなり。又現に異異の因中に種種の果を生ずるを見るを以てなり。何を以ての故に。象馬牛羊驢駝は人天等に至て差別有るを見るを以ての故なり。是れを以ての故に自在等の作に非ざるなり。問ふて曰く因緣に從て一切の法を生ずるに非ず。何を以ての故に。棘刺及び孔雀等は異異不同たるを見るを以ての故に無明の因緣に從て世間の生有るにあらざるを知ればなり。此れ何の義を明せる。無因緣にて世間の生有るを以てなり。何を以ての故に。我れ棘刺及び孔雀等を見るに因緣に從て差別有るに非ず。是の如くんば世間は無明の生に非ざらむ。答へて曰く此の義然らず。何を以ての故に。我れ現、果は因に從て生じ無因の生に非ざるを見るを以てなり。猶種子と地水と時に熟し和合して芽を生ずるが如し。此れ等の種種の因緣を離れて芽の生有るに非ず。若し因を離れて無因にて萬物の生有りとは此の義然らず。何を以ての故に。異異の法を見、異異の法に於て比智を以て知ればなり。世間も亦爾なり。未だ曾て因を離れ無因にて法生有るを見ず。此の義を以ての故に因に從て果を生ずるなり。是の故に世間の一切の諸法は無因生に非ざるなり。又過咎有り。若し爾らば應に種種の果を生ぜざるべし。種種の因に從て種種の果を生じ、種種の因を離れては種種の果を生ぜざるなり。而るに汝、果は無因にして而も有なりと說く。若し是の如くんば萬物は應に等しかるべく世間は應に種種の果を生ぜざるべし。我れ現に種種の因に從て種種の果生ずるを見るを以て是の義を以ての故に無因生に非ざるなり。又復答へ有り。若し一切の物無因生ならば應に一物中より一切法生ずべし。爾らずば便ち應に一切の物の中の一一に各一切の物の生有るべし。而るに此の義然らず。是の義を以

餘處に去るなり。又此の法に依て此の法を生ずとは謂く彼彼の因緣和合に依て彼彼の法を生じ彼彼の法を見、彼の法は因緣にして生じ無因緣に非ざるを示現するなり。又此の法に依て此の法を生ずとは觀念に依るが故なり。又此の法に依て此の法を生ずとは過去の無明行分を示現するなり。此れ何の義を明せる。過去の無明等の二に依て現在の識等の八分有るを得るを以て現在の有分を示現するが故なり。又此の法に依て此の法を生ずとは現在の有分を示現するなり。此れ何の義を明せる。現在の有分に依て速かに生老死分有るを示現すればなり。又此の法に依て此の法を生ずとは、無明、愛、取、を以て煩惱道を示現し此の煩惱道に依て行を生じ業道有るなり。又此の法に依て此の法を生ずとは業道に依て餘の有支を生ずるなり。謂ゆる苦道等なり。又此の法に依て此の法を生ずとは卽ち七分の苦諦の法に依るが故に無明等の五分の集諦を生ずるなり。又此の法に依て此の法を生ずとは如來、修多羅の中に說きたまへり。無明、行に依て識等を生ず、と。復修多羅の中に說く有り。行の因緣に依て無明を生ず、と。此れ何の義を明せる。相を生ずるの時無明等の法は共に心に相應するを以て、及び心不相應の法たる身業口業も皆共に生ずるなり。後時の生に非ざるなり。又此の法に依て此の法を生ずとは卽ち念を生ずるの時、無明の闇智は共に同時の生にして先時の生に非ざればなり。

問ふて曰く無明の因緣を說いて以て初の因緣と爲さば若し是の如くんば十二因緣は則ち始有りと爲すや。何を以ての故に。無明の前に更に餘の因緣有るを說かざるを以ての故なり。諸の世間の有爲法の中に於て彼の無明を以て最初と爲すが故なり。答へて曰く煩惱、業は迭に共に因緣を生ずるが故なり。此の義云何。生に從て煩惱を生じ、煩惱に從て業を生じ、業に從て生を生ず。是の如く無始より輪生するなり。是の義を以ての故に世間は始め無し。

問ふて曰く自在天等の作る所ならん。此れ何の義を明せる。自在天及び微塵等從り世間を生ずれ

依止し能く彼の法を生ず。彼法生ずるの時能く與に因と作るを共生因と名づくるなり。又此の法に依るとは先生因を說くなり。此の法を生ずとは共生因を說くなり。問ふて曰く此の法に依て此の法生ずとは此の義然らず。何を以ての故に。共生の法は定因無きが故なり。因果の差別無きが故なり。此れ何の義を明せる。共生の法は此の法是れ因にして此の法是れ果なれば、是の如き定因の差別有ること無けん。是の法は是れ因にして此法は是れ果なりと說く可からざるが故に定因無く因果差別せん。答へて曰く見を以ての故に說くなり。此れ何の義を明せる。亦世間の共生の法を見るに一法は是れ因にして一法は是れ因に非ざること猶燈炷共に照し倶に生ずるが如し。而して此の燈炷は能く照因と爲るも照は燈炷と與に因と作る能はざるなり。何を以ての故に。此の照法は燈炷に隨順するを以てなり。此れ何の義を明せる。照法は燈炷に隨順し而して燈炷は照に隨順するに非ざるを見るを以て、(又)燈炷に增有り減有れば照も亦是の如く增有り減有るを見るを以て、(又)燈炷滅せば照も亦隨て滅するを以て、又燈炷異處に去るの時は照も亦隨て去るを以て是の如く共に眼識等の法を生ず。眼身等に依り身眼等に因て眼識等を生ず。眼識等に因て眼身等を生ずるに非ざるなり。又此の法に依るとは諸の菩薩等は是の如く觀察す、先の時の生ぜる法は作有ること無ければ唯共に因緣和合して生ぜるなり。此の法有るを以て此の法を生ずるが故に。又諸の菩薩は是の如きの心を生ず、因既に無常なり云何んが此の法を生ずるを得ん、と。是の故に菩薩は是の如きの心を生ず、此の法に依るが故に此の法を生ずるは、先に有る法が後時に生る法に非ず、と。若し先に有て後時に生ぜば是れ常法なり。是の義を以ての故に卽ち法生ずるの時は因緣和合するなり。一法として是れ定實なる者有ること無く、定實なる眼識境界照了等の法有ること無し。是の義を以ての故に、此の法生ずるの時は決定して彼の處從り來らず。又卽共の因緣を以て滅す。若し法が、卽共の因緣滅なれば諸の因緣離れては念時も不住なり。是の義を以ての故に此の法滅するの時は此處を離れずして

に、是の故に如來、無盡意所問經の中に說けり。滿足して菩薩行を行ずるを波羅蜜の義と名づけ、快深智滿足するを波羅蜜の義と名づく、と。是の如し等。

問ふて曰く應に般若波羅蜜の義を說くべし。云何んが般若波羅蜜の義なる。答へて曰く、佛菩提の大慈悲心を求め所起の方便智慧を攝取し能く如實に一切諸法の同相別相の勝義を知るを名づけて般若波羅蜜の義と爲すなり。

問ふて曰く應に成就の義を說くべし。云何んが成就の義なる。答へて曰く、究竟の義と成就の義とあり。一切の凡夫を遠離するを名づけて般若波羅蜜究竟の義と爲し、般若波羅蜜に依て世間を遠離して究竟の義を得るを名づけて般若波羅蜜成就と爲すなり。此れ何の義を明せる。般若波羅蜜に依て究竟の無畏處を得れば り。問ふて曰く若し是の如くんば初地を證するの時、卽ち名づけて般若波羅蜜を究竟し成就すと爲すを得るや。答へて曰く彼の分の如く次第するなり、應に知るべし。此れ何の義を明せる。初地從來、佛菩提を得、以て對治の法現前するを得。對治の法を得るを以ての故に又初地の方便は方便般若を攝取し一切の惡道を離れ及び聲聞、辟支佛地を離るるなり。是の如くして餘地は分に隨ひ分の處に相應するなり、應に知るべし。菩薩若し能く是の如く知らば如實智般若に隨順し有爲の行は他力の相依にて自體有ること無きを觀ずるなり。

問ふて曰く此の法に依て此の法有り。此の法に依て此の法生ずと重ねて說くは何の勝義有るや。答へて曰く二種の因の義を示現せんと欲するが爲の故に二種に說くなり。此れ何の義を明せる。有爲の行は生因に二種有り。何をか二と爲す。一には先生因。二には共生因なり。先生因とは眼識等の生を欲するの時先に意識を生ずるが如し。相似隨順し前心滅せざれば後心を容れず、要ず前心滅して後心生を得、前心滅すと雖も後と與に因と爲るを先生因と名づくるなり。共生因とは諸識の相應なり、謂く受等の法及び心不相應の法は彼の法と共に生ず。眼等の法は能く因緣を作り彼の法に

り。問ふて曰く但善く世諦を知り第一義諦を知るを說かば便ち足らん。何が故に復善く二義を知るを說くや。答へて曰く菩薩の勝義は方便を知るを示現せんと欲するが爲に是の故に復善く二義を知るを說くなり。此れ何の義を明せる。外道は如實の般若の智を遠離し唯世智有るのみにて出世智無し。聲聞辟支佛は世間智を捨て唯涅槃智有るのみにて世間智無し。菩薩摩訶薩は一切衆生を利益せんと欲する爲に妙法を求むるが故に世諦の中、及び第一義諦の中に於て方便智を修行するなり。如來は菩薩の勝れたる方便智を示現せんと欲するが爲に是の故に復善く二義を知るを說くなり。

　般若波羅蜜を成就すとは問ふて曰く何が故に如來は方便を說いて後次に般若波羅蜜を成就するを說くや。答へて曰く方便攝取の般若を示現するが故なり。又諸の菩薩等の所證の位義を示現するを以て是の故に如來方便を說いて後次に般若波羅蜜を成就するを說くなり。此れ何の義を明せる。能く菩提分の法、淸淨の善根を成ずるを觀ずるを以て菩薩は眞如法體を見んと欲して而も未だ能く眞如實智を見る能はず、先の觀察に於て聲聞、辟支佛位所對治の法を出過し、大慈悲等を觀察して根本大慈悲等を成就し然して後に彼の眞如の法を見るを得るなり。是の義を以ての故に眞如の法を見て聲聞、辟支佛地に墮せず、是の故に如來、修行次第の義を示現するが故に先に方便を說いて次に般若波羅蜜を成就するを說くなり。

　問ふて曰く般若波羅蜜を成就すとは應に般若の義を說くべし。如實に知見するを名づけて般若と爲すや。能觀所觀の境界を名づけて般若と爲すや。如實に深淺數量を知るを名づけて般若と爲すや。是の義應に說くべし。答へて曰く到彼岸の故に名づけて波羅蜜の義となす。又諸佛如來は已に彼岸に到るが故に波羅蜜と名づく。初地の菩薩は其れ畢竟して彼岸に到るを以ての故に波羅蜜と名づく。諸の菩薩は畢竟して彼岸の行を得るを以て波羅蜜と名づく。是の故に如來、經の中に說いて言はく、彼の行に隨順するを波羅蜜と名づく、と。彼の處は未だ彼岸の義を決定せざるを以ての故

行を攝取し心に隨て果を受くるを示現し無量を說いて後次に方便を說くなり。

問ふて曰く應に方便の義を說くべし。云何んが方便の義なる。答へて曰く次に方便の義を說くに二種有り。一には異義を求め、二には二義を捨てざるなり。心に諸行の智慧、觀察を修するを名づけて方便と爲す。此れ何の義を明せる。諸の菩薩等は現前に聖道の果を證する爲に非ずして、亦世間の苦惱を厭ふが爲に世間心を捨つるに非ずして、一切衆生を利益するが爲にし及び自身に大菩提を取るが爲にし、方便して衆生に菩提方便を教へ、及び大悲等の行を淸淨にし菩提の法を取らむと欲するが爲にし聲聞、辟支佛等の所證の位、(及び)道功德等の所對治の法を出過し、菩薩所證の聖道の現前するを異義を求むと名づくるなり。二義を捨てずとは謂く菩薩は心に[一]世諦、第一義諦を捨てざるが故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は實に一切有爲の諸法は皆悉く無常なるを見るを以て衆生を觀察して一切有爲の諸法を捨てざるなり。有爲の法を離れず、無爲の法を捨てず、是の如きの菩薩摩訶薩の般若は不退轉の因を行ずるを說いて方便と名づくるなり。聖者文殊師利、經の中に於て說くが如し。天子。菩薩摩訶薩の般若の智は、菩薩摩訶薩は有爲智を行ずるに非ず、無爲智に墮せざるを知る。是の如きの菩薩摩訶薩を名づけて無畏菩薩と爲す。復次に天子。若し諸の菩薩、衆生を觀察して有爲行を捨てず、諸の佛法を觀察して無爲行に墮せざれば是の如きの菩薩摩訶薩を名づけて無畏菩薩と爲す、と。是の如き等の又心所求の義に隨順し心所求に稱て能く行を成就するを名づけて方便と爲すなり。又畢竟して智を具足するを以ての故に名づけて方便と爲すなり。

問ふて曰く、善く世諦を知るとは是の如き等の句は何等の義を說くや。答へて曰く善く世諦を知るとは善く自相を知るが故なり。

善く第一義諦を知るとは同相を知るが故なり。善く二義を知るとは善く自相同相を知るが故な

【一】世諦とは俗諦、第一義諦とは眞諦なり。

卷の第八

善知方便を成就すとは、問ふて曰く、何の義を以ての故に無量を說いて後次に善知方便を成就するを說くや。答へて曰く、方便力を以て所修の四無量行を攝取するを示現せんと欲するが爲に自心に隨順して果報を受くるが故なり。四大隨順を說くが如し。此れ何の義を明せる。略して說くに菩薩には二種の善巧の利益方便あり。外道等の一切は第一義諦の巧なる方便有ること無きを以ての故に無量を修行するも愛の所潤と爲り色界の果を成ずるたり。又諸の聲聞、辟支佛の人は涅槃を取るの心の爲に取るを以て究竟の善根と爲し、一切衆生を利益することを棄捨し、世諦所作の諸業を棄捨し其の心專ら自身を利益するが爲に如實に四無量を修する能はず、究竟して諸の煩惱を斷つ能はず唯能く一切の煩惱を折伏するのみなり。諸の菩薩摩訶薩等の如きは能く如實に二種の法たる有爲、無爲を知り、衆生を觀察して有爲を捨てず、如實に寂靜無爲を知ると雖も、一切佛法を成就する爲に有爲に墮せざるを以て、(又)諸の修する所は他を利益するが爲なるを以て、如實に自相同相を知るを以て、能く心に隨て自在定を得るも色界淸淨の果報を得ざるを以て、四無量の行は彼の愛心の潤す能はざる所なるを以て、心に隨順して果報を成就するなり。四大に隨順するが如し。此れ何の義を明せる。四大の相の如きは是れ第一義諦を成就するに非ず。禪定の人の如きは心力に隨順して四大の自相を捨離す。此れも亦是の如し。復有爲法の相を成就すると雖も諸の菩薩は淸淨に持戒する諸の功德衆きを以て四無量を修し心力に隨順して果報を成就し而も四無量心に隨順せさるなり。此の義を以ての故に聖者思益梵天所問修多羅の中に如來說いて言く、諸の菩薩摩訶薩等の若きは四法を成就し四禪を修行し欲界に生ず。何等をか四と爲す。一には心自在を得。二には諸の善根力を具足す。三には一切衆生を觀察す。四には方便般若を修行するなり。是の故に方便は無量の修

何の義を明せる。慈悲心を修して樂を與へ苦を拔き、慈悲に依るが故に起心修行す、捨布施等は無量の福を得るも而も喜捨等は是の如くなる能はず。此の義云何。彼は喜心に他衆生を見るを以て自ら善業を修し自ら樂を受くるを得て彼の人喜を生ず。是れを以ての故に喜捨も亦是の如し。他衆生は自心に瞋心愛心及び無害心を分別するを以ての故に名づけて捨と爲す。是の義を以ての故に、喜捨の福は少にして慈悲の福は多し。慈悲心を以てせば他に無量の利益を與ふることを成就す。是れ喜心捨心の成就するところに非ず。瞋を對治するを以て名けて慈心と爲す。不瞋の善根を以て體と爲す故なり。最勝の義を以て瞋を對治す。何を以ての故に。瞋心を以ての故に諸の衆生を捨て、一切衆生に利益を與ふるの事に相違すればなり。是の故に菩薩は一切衆生を利益せんと欲するが爲に衆生を利益せざるの事に對し此の經の中に因て對治を修行する慈悲心等を說くなり。

又菩提心を發して諸の善行を修するは皆慈悲心を以て根本と爲す。此れ何の義を明せる。即ち此の修多羅の中に不退轉心は發菩提心の因を成就するを說くなり。彼の菩提心を發して初始に生を欲するも慈悲心を以て根本と爲せば則ち能く無量の功德を修習す、喜捨等はせざるなり。是の義を以ての故に此の修多羅の中には唯慈、悲、のみ多くの功德を生ずるを說きて喜、捨、は言はざるなり。是の故に十地修多羅の中に說けり、彼の菩薩は菩提心を發し是の心は大悲を以て本と爲す、と。是の如き等は畢竟して大慈大悲の身口意の業を成就するを以ての故なり。

又是の三昧の身口意の業は慈悲心に依て起り、樂と相應するを說いて慈心と名づくるなり。世間の因中に果を說くを見るを以て譬へば世間の本、藍を作して、因中說果と作すが如く、無害の身口意の業を成就す。悲を以て害心に對すれば他惱亂の身口意の業を生ぜざるが故なり。

彌勒菩薩所問經論卷第七

せば彼の人則ち衆生を攝取するが爲に無量の利益功德を成就するが如く此れも亦是の如し。若し人彼の器世間の中に於て未だ塔有らざる處に舍利塔を立て僧に園林を施し、破僧を和合せば彼れ能く無量の福德を成就す。是れを以ての故に四無量を修すると塔を立つるの三とは相似の義有るなり。

問ふて曰く、梵行の功德は其の量幾何なるや。答へて曰く人有て說いて言く、何等の業に隨て轉輪王となるを得、王の四天下の勢力は自在なり。梵行の功德其の量是の如し。復人有て言く、何等の業に隨て帝釋王となるを得、勢力自在なり。梵行の功德其の量是の如し。復人有て言く、何等の業に隨て魔王と作るを得、欲界の中に於て勢力自在なり。梵行の功德其の量是の如し。復人有て言く何等の業に隨て梵天に生ずるを得。梵行の功德其の量是の如し。復人有て言く、梵天、佛に請ふて法輪を轉じ隨所に福を得。梵行の功德其の量是の如し。

問ふて曰く復其の餘の修多羅の中に如來說言する有り。若し人有て能く慈心を成就せば彼の人の功德は火燒く能はず、水も漂はす能はず、刀も割る能はず、毒も害する能はず、〔二〕命夭に中らず。何の義の爲の故に是の如きの說を作すや。答へて曰く諸佛如來の所有の境界は思議すべからざればなり。一切の禪定は思議すべからざればなり。一切の諸業は思議すべからざればなり。是の如し等。復人有て言く、若し人能く無量の衆生に無量の安隱を與ふれば是れを以ての故に彼の外の因緣は傷害する能はずと說くなり。

又、彼の人、色界の〔三〕四大を憶念す。此れ何の義を明せる。彼の慈心を修習せる人は慈心に入るを以ての故に色界に依て色界の四大の身を成就す。是の義を以ての故に外の諸の因緣は傷害する能はざるなり。

問ふて曰く、何の義を以ての故に此の修多羅の中に唯慈心悲心を修行して多くの功德を得るを說くのみにて喜、捨、を言はざるや。答へて曰く他を利益するに多くの修行あるを以ての故なり。是れ

【二】命、夭に中らずとはわかじにせざるなり。

【三】四大とは一切の色法を構成する四種の成分にして地水火風の四なり。

又時節を以ての故なり。此れ何の義を明せる。如是の時、有て、多く衆生善道處に生ずる有り。何かに況んや復無量の衆生、無量を修行するをや。又如來の弟子惡道に入ると言ふは如來の過に非ざるなり。

復餘の修多羅の中に說く有り。三種の行有り。梵行・天行・聖行なり。梵行とは四無量を謂ふ。天行とは所謂四禪なり。聖行とは三十七菩提分法を謂ふ。何の義を以ての故に四無量を說いて名づけて梵行と爲すや。答へて曰く四無量は梵天の因なるを以ての故なり。又修行者の身中に得べきを以ての故なり。又非梵行を對治するを以ての故なり。

問ふて曰く、何が故に色界の諸善根中、唯無量を說いて以て福事と爲すや。答へて曰く、他利益行を起す爲を以ての故なり。此れ何の義を明せる。世人多くは他利益の中に於て功德の相を生じ、餘の利益の中には多く生ぜざる故なり。

問ふて曰く、復餘の修多羅の中に說く有り。四種の人有て能く梵功德を生ず。何等をか四と爲す。一には器世間の地未だ塔有らざる處に、中に於て塔を立つるなり。二には園林に種植して四方の僧[一〇]に施す。三には先に破壞せる僧を和合するなり。四には能く四無量心を生ず。問ふて曰く、若し四無量を修せば梵天の果を得。梵天の果を成就すと言ふを得ば塔を立つる等の三も梵天の果を得るや。此の義云何。答へて曰く梵行に依て是れを說く故に過無し。此れ何の義を明せる。塔を立つる等は梵果を成就するに非ず。若し人有て梵如來に依て舍利塔を立つれば彼の人能く梵行の功德を生ず。又梵行を修する者に園林を施與するに依て是の如きの施者は梵福を成就するを得るなり。又聖道に依て梵行を修習し破僧を和合せば梵天の果を得るなり。

又彼に相似するを以ての故なり。是れ何の義を明せる。塔を立つる等の三は梵天の果報を成就するも功德は一向に四無量の果に同じからずして彼は少分相似の義あるが故たり。人、四無量心を成就

【一〇】僧とは僧伽にて、衆園の意なり。

世尊彼の外道の善眼を師とし、世尊は神通を獲得し欲界の煩惱を離れたり。諸の比丘は彼の外道の善眼を師とす。世尊多くの無量聲聞弟子有り。無量百有り、無量千有り、無量萬有り、無量百千萬有り。諸の比丘は彼の外道の善眼を師とす。世尊所有の聲聞は持戒を具足し彼の外道の人は四梵行を修す。欲界の煩惱を離れ四梵行を修し梵世間に生ず。諸の比丘は彼の外道の善眼を師とす。世尊所有の弟子は具足して四梵行を修する能はず。彼の弟子の中に或るものは他化自在天に生じ乃至は人中なり、是の如し等。爾の時、外道の善眼を師とせる世尊は是の如きの心を生ず。我今是れ云何んが乃ち弟子に與へて一處去一處生ぜざらん。是の思惟を作す。我れ慈心に依て第二禪を修し少光天に生ぜん。諸の比丘は彼の時、外道の善眼を師とせば世尊は上大慈を修して第二禪に入り第二禪に生ぜん、是の如し等。

問ふて曰く、諸の菩薩摩訶薩等の若きは他を利益せんが爲に諸の衆生に於て平等心を起す。何が故に自ら勝心慈心を生じて第二禪を修し少光天に生ずるや。而も弟子の爲に少光天に生ずるの法を說かざるや。又復難有り。彼の外道の師善眼世尊の所說の法有つて佛法に勝る。何を以ての故に、彼は皆、上善道に生ずるを以ての故なり。而して如來の聲聞は亦惡道に入る者有ればなり。答へて曰く、此れ過失無きなり。何を以ての故に。菩薩は[一九]機を觀じて說法するが故なり。此れ何の義を明せる。彼の外道、婆羅門等は長夜に思惟するを以て初めに梵天處にて、是れ究竟處なり、と。樂心に隨順して彼の處に生ずるも第二禪を生じ四無量行を修行する能はざるなり。是の義を以ての故に。菩薩は善く彼の弟子の心を知るが故に第二禪を生じ四無量行を說くことを爲さず。又無力を以ての故なり。此れ何の義を明せる。人有て說いて言く佛の出世を除かば外道は能く具さに二禪無量を修行して第二禪に生ずること有ること無し。唯大力の諸菩薩等を除く。又、外道の法、佛法に勝ると言ふは此の義然らざるなり。何を以ての故に。外道は世間の果を取るを以ての故なり。

【一九】機とは機根にして衆生の根性なり。

薩行を行じ已行を觀ずるが故に名づけて法觀と爲す。菩薩摩訶薩は甚深の無生法忍を得るを名づけて無觀と爲す、と。

問ふて曰く四無量とは衆生を觀ずるなり。云何んが復、法を觀じ無を觀ずるを言ふや。答へて曰く他の利益の爲の一切の行等は慈相似の法なるを以ての故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩摩訶薩は諸の衆生の爲に一切行を修するに皆般若を以て本と爲す。是の故に般若は慈の名を以て說く。彼の慈は能く樂他の相なるを以ての故に是の如きの菩薩は自身の樂を捨て般若波羅蜜をもつて他に樂相を與ふるなり。是の故に般若は慈の名を以て說くなり。是の故に法を觀じ無を觀ずるは皆是れ慈悲の般若なり。復人有て言く、無觀の慈心は慈の名を以て說く、と。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は衆生を觀察するを以て復自身の爲に推求して煩惱を遠離し方便して有爲の行を觀ず。甚深の無量心を得るの時、卽ち畢竟して般若の力を得て是の思惟を作す、此の諸の衆生は無智の覆ふ所となり如實に法界を知見する能はず。我當に彼の諸の衆生をして漸漸に次第して正道に入るを得せしめん、と。

復、餘の修多羅の中に說く有り。佛、諸の比丘に告げたまはく、過去七年慈心を修行し、世界の成壞經由すること七返にして此に來生せざるも乃ち無量百千萬劫に至り轉輪聖王と爲る等、と。問ふて曰く、若し四無量の所得の果報欲界に非ざれば云何んが如來、經の中に說いて無量を修行せる所得の果報は乃ち百千萬劫に至りて轉輪王と作ると言ふや。答へて曰く、彼の經の中には三地の無量に依て是の說を作すなり。此の義云何。欲界地の果報無量有れば轉輪王と作り。初禪地の果報無量有れば梵天王と作り、二禪地の果報無量有れば少光天に生じ、又欲界起心の[一八]三摩跋提所有の果報は帝釋王及び轉輪王と爲り、根本地禪所有の果報は梵天王と爲り少光天に生ず。

復餘の修多羅の中に有り。佛、比丘に告げたまはく、過去世の時、外道の師有り善眼と名づく。

【一八】三摩跋提 (Samāpatti) は定の別名なり。

故なり。又苦根は欲界に從ひ初禪に至るが故なり。喜は欲界乃至第二禪を觀ず。何を以ての故に。彼の喜心勇悅の相を以ての故なり。又喜根は欲界に從ひ乃ち第二禪に至るが故なり。捨は欲界乃至四禪を觀ず。何を以ての故に。捨捨相觀を以ての故なり。又捨根は欲界に從ひ乃ち第四禪に至るが故なり。又人有て言く、一切無量は唯欲界の衆生を觀ず、と。

云何んが相應するとは初禪二禪地には喜根・捨根、相應す。第三禪地には樂根・捨根、相應す。未來禪・中間禪・第四禪地には捨根相應す。

云何んが得とは若し第三第四禪を生ぜば三無量を得るも喜無量を除く。何を以ての故に。三禪已上には喜根無きが故なり。又欲界に生じ煩惱を離るる者は、及び初禪二禪に在て生ずる者は四無量を得。如來修多羅の中に說くが如し。慈無量は遍淨處に至り以て邊畔と爲る。悲無量は虛空處に至り以て邊畔と爲る。喜無量は上つて識處に至り以て邊畔と爲る。捨無量は無所有處にて以て邊畔と爲る。何を以ての故に。根本初禪の所攝なるを以ての故なり。此れ何の義を明せる。無量は無邊の虛空處に從ひ以て邊畔と爲るを以ての故に是の如く說くなり。又、人有て言く彼の處の聖道は無量の名を以て說く、と。何を以ての故に。可化の衆生は是の如きの根有るを以て無量の名を聞きて來て聖道に入るが故なり。復人有て言く、彼の對治の覺分菩提分に依て說く、と。此れ何の義を明せる。第三禪は覺分を對治するを以て卽ち彼の覺分は慈の名を以て說く。是の如くして乃ち無所有處に至り彼の對治に依て捨の名を以て說く。又人有て言く彼は相似の法なり。此れ何の義を明せる。慈を以て樂を觀じ而して受を樂む。乃ち第三禪中に至り悲を以て苦を觀じ而して無邊の虛空處には共に色に相違す。喜を以て無樂を觀じ而して無邊の識處には識、喜住するを以ての故に、捨を以て捨を觀じ而して無所有處には捨として捨する所無きを說いて名づけて捨と爲す。復、餘の修多羅の中に說く有り。大德舍利弗・初發心の菩薩の四無量を以て衆生を觀ずるを衆生觀と名づく。菩薩摩訶薩は菩

此れ何の義を明せる。四無量は害等の法を對治するを以ての故なり。是の義を以ての故に經中に說いて言く、慈心を修行し下中上の害を離るゝ心を成就す。悲心を修行し下中上の瞋を離るゝ心を成就す。捨心を修行し下中上の貪欲害等を離るゝ心を成就す。色無色界等には貪欲害等は皆悉く有ること無し。是の義を以ての故に欲界の中に在りて色無色には非ざるなり。欲界に在りと雖も唯三天下のみにして、欝單越[一六]には非ざるなり。

何の境界をか觀ずとは謂く慈は樂を觀じ悲は拔苦を觀じ喜は喜境界を觀じ捨は捨境界を觀ずるなり。

何の法をか觀ずとは謂く欲界の衆生の五陰の身を觀じ、或は二陰を觀ず　又若し共心同類なれば彼れ則ち五陰なり。不共心同類なれば彼則ち二陰なり。或は無心衆生を觀じ或は一陰衆生を觀じ或は二陰衆生を觀ず。

問ふて曰く、經中に慈悲喜捨は一方虛空法界に普遍するを說く有り。是の如くんば乃ち十方法界を遍覆するに至らん。是の中、唯衆生を觀ずるを說くは其の義云何。答へて曰く、十方に遍しとは謂く一切の世界に依て住する有らゆる衆生を觀ずるが故なり。十方世界を遍覆すと言ふは彼の器[一七]世間を遍覆するを謂ふに非ず。普遍と言ふは彼の器世界に依りて住する有らゆる衆生を示現するなり。

又初禪地無量は欲界の衆生を觀ず。二禪地無量は欲界及び初禪を觀ず。是の如くして乃ち四禪地無量に至り欲界乃至第三禪を觀ず。又初禪地無量は欲界及び初禪を觀じ、是の如くして乃ち四禪地無量に至り欲界乃至第四禪を觀ず。又慈は欲界乃至三禪を觀ず。何を以ての故に。慈心は樂の境界を觀ずるを以ての故なり。又樂根は欲界に從ひ乃ち第三禪に至るが故なり。悲は欲界を觀じ初禪に至る。何を以ての故に。悲心は苦の境界を觀ずるを以ての故たり。欲界の衆生は苦惱多きを以ての

の上にある天界にして欲界の穢惡の色を離ると雖も尙淸淨の色質あり。無色界とは三界の一。この界には形色なくたゞ識のみありて住す。

【一六】欝單越(Uttarakuru)は須彌山を中心とする四洲の中北方の洲にして前世に十善業を修したるもの此の地に生る欲樂多く人凡て悅樂に醉ふといふ。

【一七】器世間とは三世間の一にして器世界ともいふ。有情を受け入るゝ世間にして山河大地等なり。

捨つるの心は是れを名づけて慈と爲し、對治するに衆生を打つの心は是れを名づけて悲と爲す。是れ功德を求むるを以ての故に能く無量を生じ、過を求むるに非ざるを以ての故に能く無量を生ず。何を以ての故に。諸の菩薩乃至斷善根の人は若し功德を求むれば淨業の過を見る、乃至阿羅漢の邊に若し過失を覓むれば惡業を見るなり。何を以ての故に。羅漢は現身中に不善業の果を受くるを見るを以て過去の餘業不盡なるを見ず。謂ゆる阿羅漢は今身に惡を作ればなり。是の義を以ての故に阿羅漢に於ては慈悲無量を發起する能はざるなり。喜心の體とは謂く喜根是れなり。捨心の體とは不貪の善根是れなり。問ふて曰く若し是の如くんば則ち貪欲及び[一四]害根等は對治の法に非ざるや。答へて曰く、然らず。不瞋の善根相應の法なるを以ての故に、故に是の如く說けるなり。問ふて曰く若し捨心能く貪法を對治せば不淨觀も亦貪法を對治するや。答へて曰く汝、何等の貪法は捨能く對治し、何等の貪法は不淨對治するを知らん。問ふて曰く、知らず。答へて曰く汝、色貪の不淨能く婬貪を斷じ捨心能く斷ずるを聽く。此の四無量は共に心に展轉し五陰を體と爲す。

云何んが相なるとは衆生に樂相を與へ衆生を安隱にす。是れを慈相と名づく。衆生の苦相・滅相・寂滅相を拔き衆生を憐愍す。是れを悲相と名づく。不樂の心相、嫉妬對治の法を離る。是れを喜相と名づく。愛不愛の相、利益一切衆生の事因相違の法を捨て自然縱任す。是れを捨相と名づく。

云何んが地差別なるとは喜無量を除きて餘の三無量は六地の中に在り、應に知るべし。何等をか六と爲す。謂く未來禪及び中間禪と四根本禪なり。是れを六地と名づく。初禪二禪には喜無量有り。餘の三無量は四禪の中に遍し。喜無量は喜根を體と爲すを以ての故なり。

何の處にか依止するとは、欲界に依止するなり。欲界の中に四無量現起するを以て是の餘處に非ず。何を以ての故に。欲界の衆生は苦惱多きを以ての故に衆生の苦起るを見て樂心を與へ、衆生の苦起るを見て苦心を拔く。[一五]色、無色界は苦惱無きを以ての故なり。又是の惱害等の對治の法の故なり。

【一四】害根とは他を害せんとする根性なり。

【一五】色界は三界の一。欲界

の義を明せる。慈心の後次に[一三]擇法覺分を生ずるが如きを說いて慈と名づく。是の如く慈無量の後次に平等觀の般若を得るを說いて慈無量と名づけ、是れを無觀無量と名づくるなり。

又諸の菩薩摩訶薩等は他に樂を與ふるが爲に慈心に從ふが故に一切行を起す。此れ何の義を明せる。諸の菩薩摩訶薩等の所起の諸行は一切皆慈心に從て生ずるを以て、他の衆生を利益する爲を以ての故に、他の衆生を安隱にする爲を以ての故に、無生法忍を得るを以て、菩薩摩訶薩の般若は慈心に從て起り、一切衆生に安隱の樂を與へ、慈心に似たるを說いて名づけて慈と爲すなり。

又世諦の境界の法と第一義諦の法は迭に共に相依り增長して力有り、能く廣く修行して無觀を成就するを說いて善清淨と名づけ、說いて慈心とも名づく。云何んが名づけて世諦の境界と爲し般若の因と爲すや。諸の菩薩は諸法の體を見、慈悲心に依て衆生を觀察し、所作の事は聲聞辟支佛地に墮せず。是の義を以ての故に衆生の所作の事を捨てざれば是れ則ち名づけて世諦の境界と爲すなり。慈悲等の法は般若の因と爲す。云何んが名づけて第一義諦の境界と爲すや。般若は世諦の境界の慈悲等の因爲り。諸の菩薩は世諦の慈悲等の法を清淨にせんと欲するを以て、衆生の行相に依止するを知るを以て、諸の煩惱を起し煩惱深き衆生の行相を觀察し、如實に煩惱を知り衆生の行相に從て起すを以て、是の故に菩薩は慈等の不清淨の因なる一切の煩惱を遠離す。是れを般若と名づけ能く世諦の境界の法の因と爲す。諸の菩薩等は是の如きの般若方便を修行し廣く諸行を修す。是の故に無生法忍を成就す。彼の時無觀にして衆生所作の事の因を捨てず清淨究竟せる慈心を名づけて慈心と字し、說いて慈心と名づけ是れを無觀と名づく。云何んが世辯なるとは彼の無量の名を釋して能く無邊の衆生を觀察するを以ての故に無量と名づくるなり。云何んが體なるとは慈悲心の體は不瞋の善根なり。是れ何を以ての故なるや。瞋の法を對治するを以ての故なり。又可瞋の處を對治するを是れを名づけて慈と爲し、不可瞋の處を對治するを是れを名づけて悲と爲す。又對治起て衆生を

【一二】覺分とは覺に順ずる支分なり。
【一三】擇法覺分とは七覺分(或は七覺支)の一にして智慧を以て法の眞僞を簡擇するなり。

の初禪地所有の無量厭は欲界の得なり。是の如くして乃至は第四禪中所有の無量厭は三禪の得なり。而して後時に方便を作り後時に現前す。問ふて曰く何等をか名づけて無量の故に方便を修行すと名づくるや。答へて曰く、慈は親に依て起ればなり。此れ何の義を明せる。菩薩若し四無量を修せんと欲せば彼の時、心一切衆生に於て三種に分別す。一には親分。二には怨分。三には非親非怨分なり。親分中に於て復三分と爲す。三分を作り已て彼の三分中、上親に於て起す所は上親に安隱の樂心を與ふるなり。所謂、父母及餘の尊重、諸師僧等なり。無始より來、極惡を習ふを以て心、平等にすべきこと難し。是の故に是の如く分別して報恩す。親分中に於ては平等に轉轉修習する能はざるなり。

又乃し平等にして若し心彼の增上親、中の如く、若しくは怨分中に心平等に住して父母に樂を與ふるの心に異り無きが如くんば爾時名づけて慈心を成就すと爲すなり。悲・喜・捨、の心も亦復是の如し、應に知るべし。而して捨無量は非怨非親分中に從て起り乃ち成就するなり。

又諸の菩薩は煩惱を離れずして禪地に方便無量を修集す。若しくは煩惱を斷じ初禪に無量を攝取す。是の如くして四無量次第に成就するなり、應に知るべし。

又四無量は說いて三種有り。一には衆生觀。二には法觀。三には無觀なり。初め菩提心を發すも菩薩は未だ衆生相を知らず、外道・聲聞・辟支佛の觀無量に同ず。是れを衆生觀無量と名づくるなり。

又諸の菩薩は彼の衆生觀無量に卽して次第に漸漸に增長勝上し如實に衆生相を知りて菩薩行を修するも未だ一切有爲法の相を知らず、假名の衆生の有爲の諸行に依て衆生相に戲論を起す。卽ち此の有爲の行を取て以て衆生の爲にするを名づけて法觀無量と爲すなり。

又諸の菩薩は能く如實に有爲の行相を知り[一]無生法忍を得、慈心に從て後次に平等觀の般若を生ずるを說いて慈心と名づく。名づけて無觀無量と爲すなり。共に慈心相應の三分の如し。此れ何

【一】無生法忍とは不生不滅の眞如法性を忍知して決定安住する位なり。

轉じて一切衆生に施す。慈悲心を以て戒施等を起し一切衆生を利益せんと欲するが爲に世間の極惡過患の逼惱する所と爲ると雖も諸の衆生を捨てざる爲を以ての故に一一の衆生の苦惱を滅するが爲に、畢竟して一切の苦惱を寂滅するなり。無量の諸衆生の身は一一の身に無量の種種の苦惱の差別有るを觀察し、復、如實に一一の方便を知り、彼の無量の苦惱の衆生を救ひ、無量時に涅槃界を見、無量の衆生を觀ずるを以て無量の佛法を成就するを得るなり。是の義を以ての故に、名づけて菩薩無量を成就すと爲すなり。

又、遍く果を取るを以ての故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩摩訶薩等は無量無邊の行を修行するを以ての故に慈等も無量なり。是の故に菩薩は無量を成就す。無盡意修多羅の中の如し。聖者無盡意、舍利弗に告げたまはく、大德舍利弗、菩薩の修する慈も亦不可盡なり。何を以ての故に、菩薩の慈は無量無邊なり。是の慈を修すれば限り有ること無く衆生界に齊等し。菩薩は慈を修して發心し普覆するなり。舍利弗、譬へば虛空の普覆せざる無きが如く、是の菩薩の慈も亦復是の如し。一切衆生、普覆せざる無し。舍利弗、衆生界は無量無邊にして窮盡すべからざるが如く菩薩の修する慈も亦復是の如く無量無邊にして窮盡すべからず。虛空無盡なるが故に衆生界無盡なり。衆生無盡なるが故に菩薩の修する慈も亦不可盡なり。是の如し等。

又他を安隱にする爲に功德を與ふるが故に起心修行す。此れ何の義を明せる。菩薩摩訶薩は四無量を修して自身の爲にせず一切衆生の爲にす。畢竟して一切衆生を安隱にするが爲に功德を與へ、心是の故に成就するなり。無盡意修多羅の中の如し、無盡意菩薩舍利弗に告げたまはく、大德舍利弗、是の慈は能く自ら己身を擁護し、是の慈は亦能く他人を利益す。是の慈は〔一〇〕無諍なり。是の慈は能く一切の瞋恚嫌恨を斷ず。是の如し等。

云何んが行なるとは所厭有るを謂ふなり。此れ何の義を明せる。厭所得の四無量に依るとは、彼

【一〇】無諍とは諍は煩惱の異名にして煩惱を增長せしめざる義なり即ち無漏法なり。

能善薩道を修習するが故なり。又持戒布施は是れ三昧心修道の功德決定して禪地の果報を感ず。菩薩は迴向方便を以て決定して禪地の果報を攝取し、轉じて大菩提を求めて彼の果を示現す。不定示現して善能善薩道を修習するが故なり。是の故に如來は迴向方便を說いて復次に慈心を成就するを說くなり。此れ何の義を明せる。諸の凡夫は如實に眞實の法界を知らざるを以て無始の世より來、無智を修習す。無智を以ての故に我、我所の法を遠離する能はず。其れ我、我所に妄執するを以ての故に、色の境界に爲りて愛心の所纒となる。是の故に心常に世間の果を求め極惡の行を作り、自然に世間の果報を成就し、戒施を修行して決定して同界の果報を成就するなり。而して菩薩は心に諸世間の有らゆる一切の種種の過患を見、涅槃の安樂利益を見、善能眞實の法界を覺知し、善く因緣有爲の諸行を知り、其の心唯無上菩提の爲に戒施等を修す。世間の有らゆる墮壓嶮難放逸の衆生を救度せんと欲するが爲に、持戒布施して彼の世間の果報を取らずと雖も、而も衆生の爲に一切行を修し自身の爲に果報を取らず、所修の大功德力を增長して心能く迴向方便を攝受し、隨順して求處の果報を成就するなり。

問ふて曰く、應に四無量を說くべし。云何んが菩薩は四無量を成就する。云何んが行なる。云何んが世辯なる。云何んが體なる。云何んが相なる。云何んが地差別なる。何の處にか依止する。何の境界をか觀ずる。何の法をか觀ずる。云何んが相應なる。云何んが得なる。云何んが成就の義なる。答へて曰く、云何んが菩薩は四無量を成就するとは、其れ外道等に同ぜざるを以ての故なり。是れ何の義を明せる。諸の外道の輩は復四無量の行を修行すると雖も愛心の潤著する所と爲るを以て、是の故に色界の果報を成就するなり。又聲聞、辟支佛等は、一切の善根は皆自身の爲にし、其の心常に自身の樂の爲の故に涅槃を求む。煩惱の熱を畏れ諸の結を伏するが爲に無量を修行するも衆生の爲にするに非ず。諸の菩薩摩訶薩等の若きは其の心常に一切衆生の爲に諸行を修行し皆悉く

【九】我、我所とは、我とは己我の自體にして自己主觀の中心なるもの。常、一、主、宰の四義を具ふ。即ち己が身を常に主宰する中心のものなり。我所とは我に附屬し我に依りて執着せらるゝ事物にして自身外の萬物を指す。

向せんと願ず。菩薩の布施は二種の事の爲にす。是の故に一切衆生に施與するなり。一には一切智地を求め、二には大菩提に迴向するなり。復次に善男子。菩薩摩訶薩は方便力を以て布施を施すの時[三]六波羅蜜皆悉く滿足するなり。何を以ての故に。諸の菩薩摩訶薩は乞索人を見るの時慳嫉心を攝伏して大捨心を增長するを以ての故に卽ち檀波羅蜜を成就するを得るなり。又菩薩は自身に持戒し、布施持戒の人、有らゆる破戒の人をして持戒を成就せしむるを以て、是れを菩薩摩訶薩の[四]尸波羅蜜と名づくるなり。

又諸の菩薩は慈心・不瞋心・定心に布施す。是れを菩薩摩訶薩の[五]羼提波羅蜜と名づくるなり。又諸の菩薩は[六]佉陀尼・蒲闍尼等の種種の飲食の身口意の業に去來進止するものを布施す。是れを菩薩摩訶薩の[七]毘離耶波羅蜜と名づくるなり。又諸の菩薩は布施を施すの時、專心一念に歡喜し散亂せず餘事を求めず。是れを菩薩摩訶薩の禪波羅蜜と名づくるなり。又諸の菩薩は布施を施すの時、法相の誰か是れ能く捨し、誰れか是れ能く受け、誰れか果報を受くるを觀察す。是の菩薩は是の如く觀察して一法を見ず。一法を見ずして誰れか是れ能く捨し、誰れか是れ能く受け、誰れか能く果を受くるを以て是れを菩薩摩訶薩の[八]般若波羅蜜と名づくるなり。是の如き等が方便修多羅の中に明す所の迴向方便なり、應に知るべし。

問ふて曰く、應に淨、不淨の迴向を說くべし。布施の中に淨、不淨有るが如く此の迴向の中にも亦應に是の如きの淨不淨有るべきなり。云何んが淨なる。云何んが不淨なる。答へて曰く、修行の果に因るなり。餘の一切修多羅の中に廣く說くが如し、應に知るべし。

慈心を成就すとは、問ふて曰く、何が故に如來は善知迴向方便を說いて後次に慈心を成就するを說くや。答へて曰く、持戒布施は是れ散亂心修道の功德、決定して欲界の果報を感ず。菩薩は迴向方便を以て決定して欲界の果報を攝取し、轉じて大菩提を求めて彼の果を示現す。不定示現して善

【三】六波羅蜜とは波羅蜜は度とも到彼岸とも譯し原語は(Pāramitā)なり。生死の海を度りて菩提の彼岸に到るの義なり。これに布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六あり。是れ菩薩の修するの行なり。檀波羅蜜とは布施波羅蜜なり。

【四】尸波羅蜜とは戒波羅蜜なり。

【五】羼提波羅蜜とは忍辱波羅蜜なり。

【六】佉陀尼(Khādanīya)蒲闍尼(Bhojanīya)は共に食物の名にして、前者は咬嚼して食すべきもの、後者は噉食すべきものなり。

【七】毘離耶波羅蜜とは精進波羅蜜なり。

【八】般若波羅蜜とは智慧波羅蜜なり。

せしむるが故なり、手脚等の一切の肢節及以諸根を捨てゝ一切衆生をして諸根手足等を具足せしむるが爲の故なり。是の如き等の廻向は一切修多羅の中に廣く說けり、應に知るべし。又諸佛の國土を清淨にせんと欲するが爲に是の故に廻向す。此の義云何。菩薩は清淨の四種の義を欲するが爲の故に檀等の諸白法を佛菩提に廻向す。何をか四種と謂ふや。一には諸佛の國土を清淨にせんと欲するが爲なり。二には菩提の心を清淨にせんと欲するが爲なり。三には敎化淳熟して衆生の心を清淨にせんと欲するが爲なり。四には一切佛法を清淨にせんと欲するが爲なり。而して菩薩は世間の位を得る爲の故に廻向せず。自身の樂を求むるが爲の故に廻向せず。聲聞辟支佛地を取るが爲の故に廻向せず。又施等の布施は盡く因廻向を遠離す。諸の菩薩は一切種智の因を取るを以て是の故に菩薩は善く廻向方便を知るなり。又菩薩は四種の事の施等の功德の盡くる有り、何等をか四と爲す。一には阿耨多羅三藐三菩提に廻向せず。二には世間人天の生處を求む。三には廻向方便無し。四には惡知識に親近するなり。是の如きの菩薩の一切の施等の善根は盡く滅するなり。若し菩薩、布施等を行じ、若し三種の法常に現前せば菩薩爾時施等の功德は盡因を遠離し能く一切種智を成ず。何等をか三と爲す。一には正遍知菩提心なり。二には衆生を憐愍するなり。三には如來の言敎に違せざるなり。

又、攝受方便を以ての故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は乃ち微少の善根を攝受して能く廣果を成就するに至るを以て、卽ち彼の布施等の世間の衆生は天、人の果報を取り、卽ち彼の布施等の諸の菩薩摩訶薩は佛菩提を取るを以て、是の故に菩薩は廻向方便を成就す。如來方便修多羅の中に說くが如し。善男子。菩薩摩訶薩は方便智を以て乃至、一口の食を捨して一人に施與せば則ち能く一切衆生に遍滿するなり。何を以ての故に。菩薩は方便の智慧有るを以ての故に一口の食を以て乃ち畜生に施與するに至り、而して心常に一切衆生と共なるなり。彼の善根を以て皆一切種智に廻

巻の第七

問ふて曰く應に廻向の義を說き及び方便の義を說くべし。云何んが廻向の義なる。云何んが方便の義なる。答へて曰く若し餘處に善根功德を廻して佛菩提に向はゞ是れを廻向と名づく。又、佛菩提に依り修行の心を起し無量種門に一切時に於て一切處に於て諸の善根を集め、一切種智を證得せんと欲するが爲に世諦境界の般若の廻向方便に依り、普く轉來せしむるが故なり。是れ何の義を明せる。諸の菩薩は世諦境界の般若に依り因似果を知るを以て有量因を修し深心に菩薩不共道の功德等を成就し勝法を增長して無量果報の中に置く。是の故に名づけて廻向方便と爲す。

又、同勝廻向を以ての故なり。此れ何の義を明せる。略して說くに菩薩摩訶薩には二種の廻向有るを以てなり。何等をか二と爲す。一には同廻向。二には勝廻向なり。同廻向とは一切善根皆悉く薩婆若智に廻向するなり。勝廻向とは無盡意修多羅の布施の果の中に說くが如し。食を須るものには食を與へ、命辯色力樂を具足するが故に、飲を須むるものには飲を與へ渴愛を離れるが故に、是の如く衣を施して色を得、乘を施して樂を得、燈を施して眼を得、音樂を施せば淨き天耳を得。是の如くして乃ち髓腦を施すに至れば金剛身を得て堅固不壞なり。是の如し等。又同廻向とは一切衆生に樂を與ふるが爲の故なり。勝廻向とは、未だ信心を生ぜざる者には信心を生ぜしむるが故なり、若し戒を破ること有らん者には戒を持つことを得しむるが故なり、若し聞慧無き者には聞慧を得しむるが故なり、若し懈怠有らん者には精進を得しむるが故なり。若し惷忘有らん者には憶持を得しむるが故なり。若し心散亂する者には禪定を得せしむるが故なり。若し智慧無き者には智慧を得しむるが故なり。若し慳惜有らん者には捨を成就しむるが故なり。是の如し等。又同廻向とは六波羅蜜を滿ずるが爲の故なり、一切衆生をして大富資生を具足

【一】一切種智とは一種の智を以て一切諸佛の道法に了達し一切衆生の因種を知り種々の法門を觀じて無明を破する智慧にして佛智なり。

【二】世諦とは眞諦に對する稱にして、世とは世間、諦とは事實、道理等の義にして世間の事實、或は世俗の人の知れる道理なり。

の法を修行し卽ち彼の時に於て復未だ貪等の煩惱を離れずと雖も而も戒施等を修し貪等の煩惱は心を染むる能はず。又疑を斷ずる爲に、是の故に如來は戒施を說いて後次に善知廻向方便を說くなり。此れ何の義を示現するや。世間の有る人は菩薩の煩惱を離れず戒施等を修し利根を以ての故に有爲の法の一切皆悉く苦、空、無常なるを觀じ、戒施を修するの時貪等の煩惱は菩薩を染すと爲るや、菩薩を染せざるやを疑ふ。彼の疑を斷ずるが爲に、菩薩は爾の時に一切衆生を利益せんと欲するが爲に自らの利益を捨て乃至は轉輪王處の樂果報の事をも求めず、唯一切衆生の樂の爲の故に佛菩提を求め所有の善根を涅槃に廻向す。是の義を以ての故に菩薩は復未だ世間を離れずと雖も一切世間所有の過患は菩薩を染せず。又清淨の戒の廻向は淸淨なるに依るが故なり。此れ何の義を明せる。淸淨の持戒の力に依るを以て是の故に能く捨し、捨力を以ての故に諸の所求の法は皆悉く成就す。是の故に如來は戒施を說いて後次に廻向方便を說くなり。是の故に如來修多羅の中に說けり、持戒の人の所願所作は皆悉く成就す。何を以ての故に。戒淸淨なるが故なり、と。

彌勒菩薩所問經論卷第六

有るに他物を持して施すは是れ能く施主なり。自物を持して施すは是れ能く捨主なり。又人有て來り乞ふに、自物を持して施すは是れ能く施主なり。若し人心を發して貴重の物を求めて而も口に言はざるを心に知て即ち施すは是れ能く捨主なり。又物を布施する時慳心數數中間に隔起せば是れ能く施主なり。若し慳心數數起ること無くば是れ能く捨主なり。又他に物を施すと雖も慳心を以てするが故に自ら果報を求むるは是れ能施主なり。若し他に物を施すも慳心を以てし專ら自果を求めざるは是れ能捨主なり。又喜等の心を離れ而して布施を行ずるは是れ能施主なり。歡喜心と共に三時の中に於て不悔心に施すは是れ能捨主なり。又若し未來の勝果報を求むる者は是れ能施主なり。世間の報を離れ涅槃の果を求むるは是れ能捨主なり。又若し施して現在未來及び涅槃の果を求むるは是れ能施主なり。若し發心して大菩提の果を求め唯大悲心にて衆生に施與するは是れ能捨主なり。

善知廻向方便とは、問ふて曰く何が故に戒施を說いて後次に善知廻向方便を說くや。答へて曰く異道の功德を示現せんと欲する爲の故なり。此の義云何。外道の人等は自樂を求むるが故に施戒等を修し[一四]三有に廻向す。又聲聞の人、辟支佛等も亦自ら身の爲に涅槃の樂を求め戒施等を修し涅槃に廻向す。諸の菩薩摩訶薩は他を利益する爲に大涅槃を求め慈悲心、一味等の心を以て衆生に樂を與へ戒施等を修し無上大菩提果に廻向す。戒施等は彼の外道聲聞辟支佛に同ずるを以て是の故に如來は勝道功德に廻向するを示現し戒施を說いて後次に善知廻向方便を說くなり。又戒施等を修して世間の樂果報に貪著せば心防護す可きこと難し。是の故に如來、施戒を說いて後次に善知廻向方便を說くなり。是れ何の義を明せる。戒施等は三昧の行に非ざるを以て唯、欲界天人の中の淨妙の色等の境界の果報を取る。而も彼の淨妙の色等の境界は作心して貪等の煩惱を護ると雖も離ることを得る可からず。何を以ての故に。過去無始の世に於けるより來、貪愛等を習ひ境界に染著するを以て、心、彼の色等の境界を取り防護すること難きを以ての故なり。而も諸の菩薩は彼の時、地方便

は此處に欠けども本論最初の經文には是の字有り、又宋元明三本宮內省本も共に是の字有れば是を加へたり。

【一四】三有とは三界の異名なり、即ち欲界、色界無色界なり。有は因果空しからずして存在する義なり。

の果を得るなり。是の義を以ての故に勝心に依つて勝果報を得。是の故に勝心を重しと爲すことを知るを得るなり。此れ復何の義なるや。若し施事是れ重くして施事に依るが故に清淨の施の果を成就するならば重施事を離れて慈悲心を以て畜生に施與し福田に施與すること佛に布施する如くなるも清淨の施の果を成就すべからず。又若し快勝尊重心等を離れて如來に布施するに清淨の施の果を成就すべきも而も實には成ぜざるなり。是の義を以ての故に清淨の布施の果報を成就するは心を勝因と爲し、而して施事福田は能く勝心を生ず。此の義に依るが故に、如來、經の中に福田を讃歎するなり。復有る人の言く勝福田に依り重施事に依て清淨の果を成ず、と。何を以ての故に。布施を聞くを以て福田を知らざるも勝果報を得。此れ何の義を明せる。佛等の功德の福田を識らずして佛等に布施するに勝果報を得ればたり。獼猴有て如來に蜜を施し、及び[一]婆私咜[二]加尸迦等の如し。又女人の愛念の心の如き故に諸の幡蓋及び華鬘等を以て本心より實に兒塔に供養せんと欲し、而も實には辟支佛塔を供養し是れ兒塔なりと謂ひ辟支佛に從て無量の福を得、本心に從ひて兒邊に福を得ず。是の如き等は是の義を以ての故に勝福田及以重事に從て勝果報を得、心に從て得ず。故に知りぬ、福田施事を重と爲す、と。又有る人の言く福田を知らざれば福田無く清淨の施の果を成就するを得ず、と。一人有て尼乾子に施し羅漢の想を生じて而も清淨の果報を成就せざるが如し。又有る人の言く、心は福田及び施事等を以て三種和合す。此れ何の義を明せる。若し布施せば尊重せらるゝに從て布施の心を起し福田等の無量の功德を知り諸佛如來の福田に値遇す。或る時は如來の弟子に値遇し、尊重の心に從て布施の心を起し、施す可き所の物は是れ捨て難きの事も能く捨てて布施し、三種和合して方に清淨の果報を成就するを得、而して心を重と爲す。是の義を以ての故に、此の三種の中にて唯心の一種を重と爲し勝と爲すなり。

是れ能く捨主、[三]是れ能く施主とは、問ふ捨主と施主とは何の差別有るや。答へて曰く乞求の者

【一】婆私咜とは婆羅門の名、此婆羅門の母、六子を失ひて、狂亂し裸形馳走せるも世尊を見て本心に還り、三歸戒を受けたり。
【二】加尸迦は比丘の名なり、迦尸迦十法經を見よ。
【三】是れ能く施主の是の字

て布施す可き無し。是の故に起心して資生大富を成就して衆生に施與せんと欲するが爲に此の故に怨親平等に利益を攝取す。是の故に菩薩は布施に依るが故に無量の福德を成就するを得るを見るたり。一には能く怨を攝取す。二には恒常に一切衆生に衣食等の物を〔一〇〕給濟す。三には心怯弱ならず。四には餘親を欺むかず。五には常に衆人の爲に敬信尊重せらる。六には一切の眷屬。其の語を信受す。七には大衆のなかに入る時、心に怖畏無し。八には一切の怨敵、傷害する能はず。九には親屬歡喜す。十には現果資生常に有にして空ならず。十一には常に他の求むる所と爲る。十二には所作已に辨ず。十三には情の愛敬する所は常に自ら圍遶す。十四には愛敬せざる所は皆悉く遠離す。十五には所有世間出世間の利益の勝事を成就して常に一切親屬の慶する所と爲る。十六には若し一切の諸親を利益すること無ければ則ち憂惱を懷く。十七には一切の惡を護る。十八には自ら諸の善法の中に安住せしむ。十九には他の神通を見て心欣尙せず。二十には恒常に一切の功德を讃歎す。二十一には諸の過を覆藏す。二十二には一切の丈夫に非ざるの相を棄捨す。二十三には一切の大丈夫の相を成就す。二十四には貧窮下賤乞人の施主を看るの眼有ること無し。二十五には一切、心に求めて事を稱ひ滿足す。是の故に菩薩摩訶薩は深く布施の是の如き等の無量の功德有るを見て一切衆生を利益せんと欲するが爲に、自ら能く是の如きの力を成辦するが故に布施を信憙す。信憙して布施を行ずるに依るを以ての故に則ち能く檀波羅蜜を滿足するなり。

　問ふて曰く勝心に從て清淨の布施の果報を成就すると爲すや。勝福田に從て清淨の布施の果報を成就するや。答へて曰く有る人の言く勝心に從ふが故に清淨の布施の果報を成就す、と。何を以ての故に。現見の施の事は是れ一にして而も果報差別すること猶、種子の如し。此の義云何。猶、種子の地等の如きは是れ一にして而も種子に依つて勝果有るを見る。是の如く施物は是れ一にして而も勝心に依て乃ち畜生等に施すに至り、心力を以ての故に人天の果、轉輪聖王聲聞辟支佛菩提

〔一〇〕給濟はあてがひすくふなり。

惡、平正非平正、顚倒非顚倒を示導す。是の故に施さば勝れたる果報を得るなり。又諸の菩薩等は悉く能く衆生を利益することを攝取するが故に、快心を以ての故に、因緣無くして而も能く慈悲心を發起するを以ての故に、三寶を攝取して因を絶斷せざるを以ての故に、是の義を以ての故に菩薩に施さば勝れたる果報を得るなり。

復五種の果有つて卽ち現身に得。何等をか五と爲す。一には入慈[八]三昧。二には入無諍三昧。三には入滅盡定。四には見道。五には阿羅漢果なり。若し布施せば卽ち果報を得るなり。入大慈定とは能く發心して無量の衆生に安隱の樂を與へ、無量の衆生に樂を與ふるを以ての故に名づけて慈心と爲し是の慈心を以て自體に[九]熏修す。是の故に初めに慈心三昧を起して卽ち布施せば現に果報を得るなり。又入無諍三昧とは悉く能く一切衆生の諸の煩惱心を防護し廣く衆生を利益することを攝取するを以て自體に熏修す。是の故に初めに無諍三昧を起して布施せば現に果報を得るなり。又入滅盡定とは則ち能く無量の功德を攝取し無量の功德を取るを以て自體に熏修す。此の三昧は涅槃に似たるを以て是の故に初めに滅盡三昧を起して卽ち布施せば現に果報を得るなり。又見道とは見道の煩惱を離れ聖道力を以て自體に熏修す。是の義を以ての故に初めに見道を起して布施せば現に果報を得るなり。又阿羅漢果とは修道の一切の煩惱を遠離して心自在を得。是の故に初めに阿羅漢果を起して卽ち布施せば現に果報を得るなり。又菩薩摩訶薩の布施の果は無盡意修多羅の中、及び餘の一切の修多羅の中に廣く說くが如し應に知るべし。而して諸の菩薩摩訶薩等の修行する布施は餘人の施に勝る。自ら樂を取ることを離れ他の衆生を利益せんと欲するが爲の故に布施を行ずればなり。又復略して說くに菩薩は二種の法を求むるが故に布施を行ずるなり。一には大富資生を求むるが故なり。二には波羅蜜を成就することを得るを求むるが故なり。

又復菩薩は是の如きの心を起す。我若し多く資生有ること無くんば施心有りと雖も而も財物の以

【八】三昧(Samādhi)とは定と譯し心を一處に定めて動かざるなり。

【九】熏修とは德を身に熏じ行を修すること。

無き施と名づく。又復略說するに諸の菩薩摩訶薩には四種の施有りて、悉く能く一切の善根を攝取す。何等をか四と爲す。一には平等心施。二には對治施。三には迴向大菩提施。四には依寂滅施なり。是の如くして諸の菩薩摩訶薩は檀波羅蜜を滿足するが故に是の如く布施す。應に知るべし。問ふて曰く應に布施の果を說くべし。云何んが布施の果なる。答へて曰く略して說くに布施には一種の果有り。所謂受用なり。復二種の果有り。所謂、現在受果と未來受果となり。復三種の果有り。卽ち是の二種に復般若を加ふ。復四種の果有り。何をか四種と謂ふや。一には有果にして而も無用。二には有用にして而も無果なり。三には有果にして亦有用なり。四には無果にして亦無用なり。有果にして而も無用とは謂く不至心に施し不自手に施し輕心に布施するなり。彼是の如く施し無量種種の果報を得ると雖も而も受用する能はず。舍衞の天主、無量種種の珍寶を得ると雖も而も受用する能はざるが如し。有用にして而も無果とは謂く自ら施さず、他の施を行ずるを見て隨喜の心を起すなり。是の義を以ての故に受用を得ると雖も而も自ら果無し。天子の物の如く一切の沙門、婆羅門等は衣食、及以受用を得ると雖も而も自ら果無し、又轉輪聖王の[五]四兵は衣食を得ると雖も而も自ら果無きが如し。有果にして亦有用とは謂く至心に施し不輕心に施すなり。[六]樹提伽の諸長者等の如し。無果にして亦無用とは、謂く布施の已因は卽ち滅盡するも或は出世の聖道の障と爲るが故に猶、煩惱を遠離せる[七]聖人の如し。復五種の果有り。謂く命、色、力、樂、辯等を得るなり。如來修多羅の中に說くが如し。食に因て命を得、是の故に施食は卽ち是れ施命なり。是の因緣を以て後に長命を得るなり。是の如くにして施色、施力、施樂、施辯才等皆亦是の如し。復五種の勝果有り。所謂、父母、病人、法師、菩薩に施與するは勝れたる果報を得。父母の恩養によりて身命を生長す。是の故に施さば勝れたる果報を得るなり。又病人は孤獨愍む可し。是の義を以ての故に慈悲心を起して病人に施さば勝れたる果報を得るなり。又說法は能く法身を生じ法身を增長し善

【五】四兵とは轉輪聖王の出遊する時隨從する象兵馬兵車兵步兵の四種の兵なり。

【六】樹提伽(Jyotiṣka)の長者のこと涅槃經師子吼品第十一に出でたり。

【七】聖人(Ārya)とは見道以上、斷惑證理せし人なり。

くるが如し。此の怖畏も亦復是の如し。無畏對治の法を與ふるを以ての故に復四種の施有り。即ち向の三種と復大施有り。謂く五戒を受持するなり。此れは是れ如來所說の大施なり。能く無量の衆生を攝取するを以ての故なり。無量の衆生の樂を成就するが故なり。資生飲食の用に布施するは廣く衆生を利益する能はず。五戒を受持すれば能く利益を作る。能く盡形して五戒を受持するを以て念念に種種の功德を增長す。彼の根本心に依止するを以ての故に諸の功德聚乃至命根は斷絕せずして住す。復四種の施有り。此の四種の施は略して二種有り。一には不淨。二には淨なり。不淨の中に二種の差別有り、何等をか二種と爲す。一には怖畏施。二には求報恩施なり。何の義を以ての故に名づけて不淨と爲すや。世間の因の如きは荊棘惡草等の覆ふところ爲るを以ての故に不淨と名づく。此れも亦是の如し。怖畏を以ての故に、報恩を求むるを以ての故に不淨施と名づくるなり。淨の中にも亦二種の差別有り。何等をか二と爲す。一には敬重心施。二には慈悲心施なり。此の四種を除いて更に上上の勝施有り。偈に言ふが如し。

　下は資生有るを求め、下の下は怖畏施なり。智者は敬重施、勝智は慈悲施なり。

　復四種の施有り。何等をか四と爲す。一には自らの利益の施にして他の利益に非ず。二には他の利益の施にして自らの利益に非ず。三には倶に利益の施。四には倶に利益無き施なり。自らの利益施にして他の利益に非ずとは謂く凡夫聖人は煩惱を伏離し或は是の煩惱を伏離するに非ざる有り。或は諸佛如來に施與し、或時は形像塔廟に施與す。是れを自らの利益の施にして他の利益に非ずと名づく。他の利益の施にして自らの利益に非ずとは謂く阿羅漢阿那含等は果を現す爲にするを除き衆生に施與す。是れを他の利益の施にして自の利益に非ずと名づく。倶に利益の施とは謂く煩惱を伏離せる凡夫、或は未だ煩惱を伏離せざる凡夫に施すなり。是れを倶に利益の施と名づく。倶に利益無き施とは果を現す爲にするを除く。阿羅漢阿那含等の塔廟の爲に施すを謂ふ。是れを倶に利益

淨と名づく。又如實に有爲の行體を知るを以ての故なり。是れ何の義を明せる。諸の凡夫は虛妄の戲論、我相、に取著して心顚倒するを以ての故に唯五欲の樂、境界の事を求め、慧眼を離るゝを以て、愛等の煩惱諸垢の染汚する所と爲るを以て捨不清淨なり。菩薩摩訶薩は如實に有爲の行體の虛妄不實なるを知見す。是の故に我見等の相を遠離す。及び能く五怖畏を遠離するが故に內外に可施の物有ること無し。能く捨せざれば他に利益を求めて縛せらるると爲し、及び能く自ら樂等の垢汚の法を求むることを遠離す。是の義を以ての故に捨清淨と名づくるなり。又空觀を以て所起を觀ずるを以ての故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は空觀等の觀を以て施等の法を觀ず。是の義を以ての故に捨清淨と名づくるなり。無盡意修多羅の中に如來說言するが如し。空觀を觀ずるを以て布施を起すを觀ず。是の義を以ての故に施は盡す可からず、是の如き等なり。

問ふて曰く、應に布施差別の相を說くべし。答へて曰く略說せば則ち一種の布施有り。謂く不貪心相應の心施なり。復二種有り。一には見受者。二には不見受者なり。不見受者とは物を火中及び恒河の中に置くが如し。又見施主とは施有り布施有り彼にも亦二種有り。謂く染と不染となり。染とは家法餘食及び婬女人に莊嚴の具を施すなり。是れを染施と名づく。不染施とは謂く貧窮孤獨の人等に施すは是れ不染施なり。復二種の施有り。謂く法施と資生施なり。法施とは謂く供養恭敬等の心を離れ法中の法の想に於て愛心及び顚倒心を遠離し修多羅等を說く。是れを法施と名づくるなり。復三種の施有り。卽ち是の二種に無畏施を加ふ。無畏施とは是の如きの言を作すなり。汝怖畏すること莫れ、汝怖畏すること莫れ、と。又無畏施とは諸の衆生の種種に怖畏するを見て無畏を施與するなり。此の義云何。謂く他の畏起るを見て現世及び未來世に無怖畏心を與へ而も口に說いて言く、汝怖畏すること莫れ、汝怖畏すること莫れ。我汝が爲に如是如是の方便を作り、何等の方便に隨つて汝に無怖畏の處を與ふ、と。(これを)無畏施と名づく。彼の怖畏とは貧窮の人の苦惱を受

に說くが如し。菩薩摩訶薩は顚倒、邪命、追求資生等無くして布施す。と。

問ふて曰く應に清淨不清淨の捨を說くべし。云何んが清淨なる。云何んが不清淨なる。答へて曰く菩薩摩訶薩は自身の清淨に依て布施清淨なり。如來修多羅の中に說くが如し。四種の清淨の布施有り。何等をか四と爲す。謂く布施有れば施主の清淨に從ひ是れ受者に非ず。是の如き等は彼の四種清淨の施の中に於て、所謂、施主清淨にして是れ受者に非ざるなり。是れを菩薩摩訶薩清淨の施と名づく。又施者受者の清淨に從ふも亦菩薩清淨の施と名づく。何を以ての故に。諸の菩薩は他に物を施與して果報を求めず卽ち能く一切衆生に施與す。又布施の果報を求むれば彼の人受者の邊に於て清淨を求む。而も菩薩は果報を離るゝ故に一切時に自身の心清淨なり。心清淨なるを以ての故に施清淨なり。又忽然として施等を遠離するを以てなり。此れ何の義を明せる。如來修多羅の中に九種の施有るを說くを以てなり。一には植施。二には畏懼施。三には報恩施。四には求恩施。五には學父母施。六には爲生天施。七には爲名稱施。八には爲莊嚴心施。九には眷屬法施なり。修行の功德の爲にし、上義の施を得る爲にす。植布施とは謂く福田に植るを得て多く果報を求むるが故なり。又植施とは謂く近眷屬を植布施と名づくるなり。畏懼施とは一切の物の無常敗壞を見て寧ろ布施を用ふるが故なり。報恩施とは謂く報恩相施なり。彼先に我に施す、我應に還施すなり。求報恩施とは謂く、後時に報恩を求むるが故に施すなり。學父母施とは謂く過去の修行に著して是の如きの心を起す。我父母精進して常に布施を行ぜり。我亦是の如く布施を行ずるが故なり。爲生天施とは謂く天の中に五欲の境界を求むるが故なり。爲名稱施とは四方の沙門、婆羅門等をして知らしむるが爲に而も施す故なり。是の如きの七種の施は智者の呵する所と爲す。不清淨なるを以ての故なり。又聲聞、辟支佛の人は世間の樂を離れて涅槃の樂を求む。是の如きの布施も亦清淨に非ず。又、菩薩摩訶薩は自らの樂に著せず、唯諸佛菩提の心を求めて施せば諸施の中に於て最勝清淨なり。是れを菩薩の施清

修集す。六には三寶を斷ぜざるを以て能く無量の果報を成就す。此れを菩薩の捨成就の義と名づくるなり、應に知るべし。他利益一味心の爲の故なり。此れ何の義を明せる。世間の衆生は多く自身の爲に一切衆生を利益することを棄捨し、自らの樂を求むる爲に、現り報を受くる爲に、未來の果の爲に他に物を施與す。諸の菩薩摩訶薩等の若きは他を利益して專心一味にして、諸の衆生の貧にして資財たる般若等の法無きを見るが爲に、是の義を以ての故に因果に著せず、法施財施に依り、現在世及び未來世に於て能く衆生に大利益の事を與ふるなり。是の故に菩薩摩訶薩の捨成就するなり。又復、捨隨順の義を以ての故なり。此の何の義を明せる。布施等の事は衆生行を攝取するに隨順するが故に則ち能く一切衆生を攝取し大利益の事を作る。他を利益するの事を爲すと雖も而も外道、聲聞、辟支佛等は一切衆生を利益することを棄捨し、唯自身の利益を成就する爲にす。菩薩摩訶薩は大慈悲心に依て他の衆生を利益するの行を起し樂しむ。菩薩の所求の如きは是の如く成就す。是の義を以ての故に捨成就と名づくるなり。又、取佛菩提起心の義に依るが故なり。此れ何の義を明せる。菩薩摩訶薩は一切衆生に樂を與ふる爲を以ての故に、自ら佛菩提を求めて捨心を起し、諸の衆生の惡處に墮墜せるを見ては我れ現在及び未來世に於て諸の衆生をして苦惱の事を離れしむ。是の故に菩薩は其の心日夜轉轉して衆生を利益せんと欲する爲に捨成就と名づくるなり。又能く種種の果を攝取するを以ての故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は一切衆生を利益せんと欲する爲に種種に布施するを以て現在世及び未來世に於て一切衆生を攝取せんと欲する爲に種種の果を取る。是れを菩薩の捨成就と名づくるなり。無盡意修多羅の中に說くが如し。飲食を求むる者には飲食を施與し、命の爲にし樂の爲にし辯の爲にし色の爲にし及以力の爲にする是の如き等に皆悉く施與し、又[四]邪命を遠離して自活し資生を求むるが爲の故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は、布施波羅蜜相違の法は資生を貪求するを以て邪命の自活等は皆悉く遠離す。無盡意修多羅の中

【四】邪命とは比丘乞食を以て如法に自活せず不如法の事を作して生活するを云ふなり。

殺生を離るゝが故に能く布施を起せば則ち大富資生破壞すべからざるを得、長壽の命を得、菩薩行を行じ諸世間所惱の惡事を過ゆ。是の如し等。龍王。十善業道も亦復是の如し。布施は十善業道を莊嚴し大利益を成就す。持戒は十善業道を莊嚴し一切佛法願を成就す。忍辱は十善業道を莊嚴し三十二相、八十種好、佛の妙音聲を成就す。精進は十善業道を莊嚴し佛法を成就し一切の諸の魔、怨、敵を降伏す。思惟は十善業道を莊嚴し聞慧、思慧、修慧の堅固清淨を成就す。般若は十善業道を莊嚴し諸の邪見を離るゝを成就す。慈心は十善業道を莊嚴し不害一切衆生心を成就す。悲心は十善業道を莊嚴し不捨一切衆生心を成就す。喜心は十善業道を莊嚴し修行佛法不怯弱心を成就す。捨心は十善業道を莊嚴し愛心憎心を遠離するを成就す。[三]四攝は十善業道を莊嚴し教化一切衆生心を成就す。問ふて曰く捨の義とは云何。答へて曰く五陰及以資生に貪著するを對治し慈悲心を起し、彼の他を利益するの行を攝受する爲に因果等の法に著せず、住持して修行するを名づけて捨の義と爲す。問ふて曰く應に說くべき捨成就の義とは云何んが菩薩の捨成就なる。答へて曰く菩薩は自ら樂を取るを遠離して行ずるを捨成就と名づく。此の義云何。又外道の人は自ら樂を求めて布施を行ず。彼の外道の人自身に捨を爲し廣く施を行ずると雖も而も境界を愛する心の所纏となる故に果報微薄なり。又聲聞辟支佛の人は世間の樂、果報の事を求めずと雖も而も心畢竟して涅槃を取り、衆生を利するを捨て但涅槃の樂を取る。是の故に施等の業道の功德は、少は他の爲にすと雖も畢竟して自らの爲にし、畢竟專念して自身の利益果報を成就するなり。又菩薩摩訶薩は一切世間を出過し大士は他を利益する爲に堅固大力之心を發起し、大悲を起し、柔軟の所施最勝なるを畢竟して成就するなり。

　又捨を成就するには六種の因有り。何等をか六と爲すや。一には自身の樂を捨てるなり。二には無衆生を觀ず。三には無量の佛法を求む。四には無量の世住を攝取す。五には無量の種種の善根を

【三】四攝は四攝法と言ふ、布施、愛語、利行、同事の四攝なり。

卷の第六

捨心を成就すとは問ふて曰く何の義を以ての故に持戒を說きて後次に捨心を成就するを說くや。答へて曰く他利益力を作るを見るを以ての故なり。此れ何の義を明せる。菩薩持戒し持戒に依るを以ての故に善道に生ずるを得。捨心を成就すと雖も而も具足の資生無し。若し爾らば他利益を作る能はず。又復諸餘の一切功德を成就する能はず。何を以ての故に。他利益の爲に世間を攝取す。而も彼の菩薩は他を利益するの時財物を離捨し、成就する能はず。是の義を以ての故に、他利益に依て持戒を說き後次に捨心を成就するを說くなり。又復義有り。持戒と捨心は迭に共に相依て互に利益を爲す。彼の持戒を以て能く捨心を益し、捨心も亦能く持戒を利益す。是の義を以ての故に持戒に次いで後に捨心を成就するを說くなり。又持戒を離るゝが故に惡道の中に生ず。捨心は果報を受くる能はず、果に相應せば則ち具足して現前するを得る能はざるが如し。而も持戒の人は善道の中に生じ、捨心せば則ち果報を受く。果に相應し具足して現前するが如し。是の義を以ての故に持戒は捨に於て能く利益を作り、捨心も亦能く持戒を利益す。持戒の人、善道處に生ずるも資生無きを以ての故に則ち貧窮惱の所逼と爲り、善道に生ずと雖も卽ち惡道と名づくるなり。捨心を成就せば善道處に生ず、自利及び利他の因を作るに於て是の故に施能く持戒を利益す。又修行次第の義を以ての故なり。此れ何の義を明せる。菩薩は衆生を利益せんと欲する修行の義の爲の故に、是の如く次第に自ら勸等の口言の功德を取らんと欲して先に持戒に住し次後に不損害心に依て大慈悲心を起し、他の爲に利益を作り[一]法施し[二]資生施す。彼の衆生の可化なるを攝取するが如し。又施等の法は能く戒を莊嚴するが故なり。此れ何の義を明せる。菩薩摩訶薩は施等の法を以て持戒を莊嚴する故に能く種種の勝果を成就するなり。如來娑伽羅龍王所問經の中に說くが如し。菩薩摩訶薩は

【一】法施とは人の爲に法を說きて開悟得道せしむること。
【二】資生施とは衣食住等の資生の具を施すなり。

戒。四には遠離煩惱戒なり。波羅提木叉戒とは所謂世教を受くるの戒たり、〔一〇〕七衆所受の戒の如し。禪定戒とは謂く有漏所轉の戒と、無漏所轉の戒なり。無漏戒とは謂く學、無學の戒なり。遠離煩惱戒とは所謂欲事を厭ふ中間道の所轉にして彼の戒破戒せば彼能く破戒の因緣の煩惱對治を起すを以てなり。又有漏と言ふは禪定戒に依て說く。無漏と言ふは無漏定戒に依て說く。又五種有り。欲界色界無色界作不作無漏不作なり。復六種の不貪等有り。〔一一〕作戒の三種差別、無作の三種差別なり。復七種有り。謂ゆる殺生乃至綺語を離るゝなり。即ち此の七種は不貪等の起に依て二十一種有り。即ち此の七種は作無作の差別に依て四十種有り、刹那展轉の差別に依つて無量種有るなり。

問ふて曰く何者か是れ戒果なる。答へて曰く有漏定戒と無漏定戒は彼は界に屬す。界に屬するに依て即ち是れ果に相應す、應に知るべし。無漏戒は煩惱を離るゝを以て二種の果有り。諸の菩薩は薩婆若の持戒の爲に佛菩提の果を取り殺生等を離れて十善業道の勝果あり。諸の修多羅の中に如來廣く說けり。彼の一切修多羅の中の如し應に知るべし。娑伽羅龍王所問經の中の如し。如來說いて言く、龍王、善男子善女人を殺すことを離れば十種の煩惱の熱を離れたる清涼の法を獲得す。何等をか十と爲す。一には一切衆生に施與して無畏なり。二には大慈念の中に安住するなり。三には諸の煩惱過患の習氣を斷ずるなり。四には無病の果を取るなり。五には長壽の種子を種ゑるなり。六には諸の非人等常に守護する所となる。七には睡寤安隱なり。八には惡夢を見ず怨恨の心を離る。九には一切外道を畏れず。十には退いて天中に生ずるなり。是れを十種の煩惱の熱を離れたる清涼の法と名づくるなり。龍王、若し不殺の善根を阿耨多羅三藐三菩提に迴向せば彼の人菩提を得るの時心自在を得、是の故に壽命無量なり。乃至正見道の中に皆應に廣說すべし。一切修多羅の中の如し應に知るべし。

彌勒菩薩所問經論卷第五

[illegible])とは別解脫と譯す別々に身三口四の惡を解脫する戒なり。身三口四とは殺生偸盜邪婬の三身業と妄語綺語惡口兩舌の四口業なり。

【一〇】七衆とは比丘、比丘尼、式叉摩那、沙彌、沙彌尼、優婆塞、優婆夷なり。

【一一】作戒とは受戒の時身口に發表する作業を作戒と云ひ其時身内に領納する業體を無作戒と云ふ。

何れの義を明せる。少しく喜樂を受くと雖も、少しく憂惱を受くと雖も而も善不善の業は卽時に受けて盡き乃ち少しく頭痛等の苦を受くるに至る。此の少罪を受くるは彼の相似の果なり、向に修多羅に相違すと言ふは此の義然らざるなり。何を以ての故に。不定の果報に依り、未治所治の業に依るを以て修多羅の中に是の如きの說を作せばなり。若し畢竟定心に作業せば果報を受けざること是の處に有ること無し。此れ何の義を明せる。阿羅漢の人は生後の報なる罪福等の業を斷ぜば現身の中にて受報の因緣復和合せず。若し是の如くんば、彼の阿羅漢は此の業道に依て涅槃に入らざる可し。是の義を以ての故に知ぬ、汝如來所說の修多羅の意を解せざるなり。

問ふて曰く、應に淸淨、不淸淨戒を說くべし。云何んが淸淨戒なる。云何んが不淸淨戒なる。答へて曰く戒を同くして淸淨なる有り。聲聞、辟支佛、菩薩同じく五種の淸淨の戒法を修す、應に知るべし。何等をか五と爲す。一には根本淸淨。二には眷屬淸淨。三には覺觀不亂。四には攝取念。五には廻向涅槃なり。根本淸淨とは根本業道の罪を遠離するが故なり。眷屬淸淨とは殺生等の方便行を遠離するが故なり。覺觀不亂とは欲害瞋恚等の〔八〕覺所有の惡行を遠離するが故なり。攝取念とは念佛、念法、念僧等の諸念を攝取するが故なり。廻向涅槃とは涅槃護戒の爲にし世間資生の爲にせざるが故なり。此れは是れ少分の同戒なり。諸の菩薩摩訶薩の勝戒とは初め菩提不損害心を發すに依て所起の戒聚、乃至、八地に無量時に修する一切の戒聚は他を利益するの心に依て薩婆若智に廻向し一切の習氣を離れ大涅槃を得。是れ諸の菩薩摩訶薩の一切戒善淸淨なり。應に知るべし。自餘の師の敎に依つて持つ戒等は皆不淸淨なり。

問ふて曰く持戒に幾種有りや。答へて曰く、略して說かば則ち一種の持戒有り。不損害心、不顚倒心に依て身口の業を起すなり。又二種有り。一には受戒。二には法戒なり。又三種有り。謂ゆる學、無學、非學非無學、なり。又四種有り。一には〔九〕受波羅提木叉戒。二には禪定戒。三には無漏

【八】覺とは受の異名にして覺受卽ち感覺のことなり。

【九】波羅提木叉（Pratimo-

縁に依つて現身の中に應じて果報を受け、罪業は後身の中に受く、後身に應じて果報を受け罪業は現在身に受く、而して勝義有り。若し業樂の果報を應受せば則ち樂果を受け、苦の果を應受せば則ち苦果を受く。是れ不定業に依るを以ての故に是の如く說くなり、又不定相似の業に依るを以ての故に是の如きの說を作るも亦定果に依るに非ず。何を以ての故に。解脫の果を得ること無きを以ての故なり。阿羅漢は波羅提木叉戒、禪定戒、無漏戒の業を受くるを以て乃至、命未盡より來(このかた)常に不斷に、波羅提木叉戒等有り。若し果報有れば則ち解脫を得ず。是の故に現に不定業の果を受くるなり。

問ふて曰く若し是の如くんば諸業不定にして亦修多羅と相違せん。何を以ての故に。如來修多羅の中に說くを以ての故なり。業を作習して果報を受けざること是の處に有ること無し、と。而れば彼の業を習はゞ若しは現身の中にても若しは後身の中にても畢竟して定んで受けん。答へて曰く此の義然らず。何を以ての故に。諸の因緣未だ和合せざるを以ての故に未だ果報を受けず。此の義云何。諸業を作習して實に能く現身に果報を受くると雖も而も現に受けざるなり。何を以ての故に。諸の因緣未だ和合せざるを以ての故に猶種子の如ければなり。此れ何の義を明せる。猶種子は地等の因緣の和合に依つて能く芽等を生ずるが如く、此も亦是の如し。識住の因緣の和合に依て業不淨識の種子は能く名色の芽等を生ずるなり。此れ何の義を明せる。若し如實に修行し如實に般若に隨順することに依つて如實に有爲の行を知り諸の煩惱を斷ずるの時、聖道力に依るが故に諸の功德を修集し能く善根の芽を生ず。彼の時、後生の業を受くること有りと雖も其れ煩惱の伴侶(はんりょ)有ること無きを以て、是の故に後生の果を受くる能はず。煩惱を斷ずるを以ての故に復後身の果報を受けずと雖も而も猶、彼の不善業道に依つて現身の中に於て少しく果を受習するが故に畢竟して惡道の中に受けず。修多羅の中に如來說言(せつごん)するが如し。是の如きの受に應ず、と。是の如きの受に應ずとは此

善業道に依て一切の外物氣勢有ること無し、所謂、土地高下し雀鼠雹棘塵土臭氣多く蛇蠍有り穀少く、穀細に果少く果細なり及以果苦し、是の如きの一切を増上果と名づく。復相似果有り。殺者の故に所害の衆生と種種の諸苦を與にす。彼の苦に因るが故に地獄の中に生じ種種の苦を受く。他命を斷ずるを以て後に人中に生じ短命の報を得、他の煖觸を斷つ。是の故に一切外物資生に氣量有ること無し、是の如き一切の十業道の中、義に隨つて相應して解釋し應に知るべし。他物を劫奪し他妻を邪婬せば他に重逼の惱苦を生ぜずと雖も而も心を破壞す、是の故に罪を受く。破壞せず、瞋らず、惡口せずと雖も而も惡心に由る、是の故に罪を得るなり。

問ふて曰く故心に一切の惡行を起作せば決定して不善惡業を成就すと爲すや、決定して彼の惡道の苦果を受くるや。決定して惡業を成就せずと爲すや、決定して惡道の苦果を受けざるや。若し諸の惡業決定して受くれば惡道の罪業は過ゆるを得るべからず。此れ何の義を明せる。畢竟して惡道の罪業を成就せば惡道等に墮するを以てなり。五逆の業を除いて無始の世より來、所習の作業は惡道の罪を取るなり。畢竟して定なれば一切の惡道は過ゆるを得るべからず。又空の梵行を修し、又、修多羅と相違す。如來修多羅の中に說くが如し。人有つて不善業道を修習せば所得の罪報は地獄の受に應じ、彼の人卽ち現身の中に於て、受くるなり。是の如き等若し彼の五逆罪等の果報は畢竟して地獄の中に在つて受く。何が故に說いて惡道の罪業は迴轉するを得べしと言ふや、云何んが惡道等の罪は現身の中に受くと言ふや。又復過有らむ。若し地獄等の惡道の罪業現身の中に受くれば、若し是の如くんば因果雜亂なり。何を以ての故に、時果輕重悉く不定なるを以ての故なり。

答へて曰く、人有つて言く、現身の中に地獄の罪を受くとは此の人實諦を見るを以ての故に現身の中に於て少罪果を受く、と。而も此の義然らず。何を以ての故に。業、自在無きを以ての故なり。此れ何の義を明せる。一切所作の罪業福業は自在力無くして何等かの因緣に隨つて和合し、彼の因

常に柔軟に語るが故に惡口無し。歌舞有るを以ての故に綺語有り。[二]餘の意業は畢竟して有なるを以て是れ現有に非ず。又欝單越を除ける[三]餘の三天下は十業道を受くるなり。北欝單越も亦不善業道を離る。畜生、餓鬼、欲界中の天は無受戒不善業道を離る。天は天を殺さずと雖も而も天亦、餘道の衆生を殺す。又人有つて言く、天の中にも亦手足等を截ちて卽時に還生する有り。若し其の頭を斷ち、若しくは中間を斷絕せば卽ち死して生ぜず。亦、他を殺し他物を盜む等の不善業道有り。色、無色天の中には不善業道無し。

問ふて曰く、不善業道は諸道の中に於て各幾種有りや。答へて曰く地獄北欝單越は貪無く瞋無く亦、邪見無し。畢竟して有なるを以て是れ現有に非ず。餘の三天下及び欲界天は受法を離れ受法有り。又欲界天は善無漏の受法有り應に知るべし。畜生餓鬼も亦受法無し。色界天の中には受法有り。現前に善法を受けて攝取するが故なり。又彼の處所有の聖人生ずれば無漏に依る善業道有り。無色界の中には唯、心業道のみ有り。業を成就するを以て是れ現有に非ず。色界天の中には復成就すと雖も是れ現有に非ず。彼の處所有の聖人生ぜば一切現有なり。無漏の持戒力に依るを以ての故なり。

問ふて曰く應に十不善業道の果及び隨順するの因を說くべし。答へて曰く三種の果有り。一には果報果。二には習氣果。三には增長果なり。一一の業道に皆三種有るなり。此の義云何。十不善業道を具足せば下中上は地獄の中に生ず。是れを果報果と名づく。習氣果とは地獄より退いて人中に生じ、殺生に依るが故に斷命の果有り、偸盜に依るが故に資生の果無し、邪婬に依るが故に妻を護る能はず、妄語に依るが故に他謗の果有り、兩舌に依るが故に眷屬破壞す、惡口に依るが故に好聲を聞かず、綺語に依るが故に人を不信と爲す、本貪に依るが故に貪心增上し、本瞋に依るが故に瞋心增上し邪見に依るが故に癡心增上す。是の如きの一切を習氣果と名づく。增上果とは彼の十種の不

【二】餘の意業は、貪、瞋、邪見、三業なり。
【三】餘の三天下とは左の如し、
南閻浮提(jambudvīpa)
東弗婆提(pūrva-videha)
西瞿耶尼(apara-godānīya)

親屬を破す無時非實に、彼の物の中に於て貪心を生じ、即ち彼の人に於て復瞋心を生ず。彼の人を殺す爲の故に是の如きの邪見を生ず。邪見を增長して以て彼の命を斷じ、復其の妻男女等を殺さんと欲す。是の如く次第して十種の不善業道を具足す。是の如き等の業を前眷屬と名づく。一切の十不善業道も皆亦是の如し、應に知るべし。又善業道を離るゝは方便修行の善業道に非ず。是の方便は根本を遠離するを以ての故なり。及び遠離するの方便なる故なり。方便と言ふは、彼の沙彌、大戒を受けんと欲して將に戒場に詣で衆僧の足を禮し即ち和上に請ひ三衣を受持し始めに一白を作し第二白を作す。是の如きは悉く皆前眷屬と名づく。第三白從、羯磨に至り竟所に作業を起し及び彼の念の時無作業を起す。是れ等を皆根本業道と名づく。次に〔一〇〕四依を說き乃ち所受の善業、身口の作業及び無作業を捨てざるに至る。是の如きを悉く皆後眷屬と名づく。

問ふて曰く應に說くべき不善業道は五道の中に於ては何の道に具足し、何の道に具足せざるや。何の道の中に多く何の道の中に少なきや。答へて曰く地獄には五不善業道有り。兩舌、綺語、貪、瞋、邪見なり。此の義云何。他を殺害せざる故に殺生無く、他護の心無き是の故に盜無く、護の女人無き故に邪婬無く、正心無きを以ての故に妄語無く。常に正念の相有ること無きを以ての故に、破壞心無きが故に惡口無し。常に破壞するを以ての故に、苦惱の逼るに依ての故に兩舌有り。非時に說くこと有るが故に綺語有り。貪瞋邪見は畢竟して有なるを以ての故に有りと爲す。是れ現有に非ず。是の義を以ての故に一處には有と說き一處には無と說く。〔一一〕北欝單越の如きは前の六種無く後の四種有り。命定なるを以ての故に殺生有ること無く、守護無きを以ての故に偸盜無く護の女人無き故に邪婬無し。彼の人婬欲の樂を受けんと欲するの時女人を捉へて將に樹下に至らんとす、若し樹、枝を曲げて彼の人を覆へば則ち婬を行ず。婬欲の樂を受けんと欲するも若し樹彼人を覆はずば慚愧して即ち放ちて去る。他を誑はすの心無き故に妄語無く、常に定心なるを以ての故に兩舌無く、

〔一〇〕四依に種々の意あるも、ここでは行の四依ならん、即ち、左の如し、
一、糞掃衣。
二、常乞食。
三、樹下坐。
四、腐爛藥。
此の四依は入道の緣となるものなり。

〔一一〕北欝單越(Uttarakuru)。須彌山を中心とする四大洲の一つにして北方に位するなり。

邪婬の中に於ては決定して作有り。不作有るを得ず。何を以ての故に。此の邪婬は畢竟して自ら作るを以て他をして作らしむること無し。是の故に頗し非身の作業有らば殺生罪を成就するを得るや不や。答へて言く口は人をして作らしめて殺罪を成就する有り。又問ふ。頗し口業の作に非ずして而も妄語罪を成就するを得ること有りや否や。答へて言く有り。身業の作を以て口業妄語之罪を成就するなり。又問ふ。頗し身業の作に非ず、口業の作に非ずして身口の業を成就すること有るや不や。答へて言く有り。仙人瞋心に依るを以ての故に、唯欲界の色身善業道の中にて畢竟して作及以無作有るを以て禪無漏戒には 無作戒無し。何を以ての故に。心に依るを以ての故なり。中間の禪は不定なり。若し深厚心畢竟恭敬心にて身口の業を作らば作業及び無作業を成就す。若し深厚結使の心にて身口の業を起せば亦作業及び無作業を成就す。若し非深厚心、非畢竟恭敬心にて身口の業を造らば唯作業のみ有つて無作業無し。若し非深厚結使の心にて身口の業を發せば亦唯作業のみ有つて無作業無し。而して方便作業心は還悔すれば唯作業のみ有つて無作業無し。問ふて曰く業道の中に於て何者か是れ前眷屬なるや、何者か是れ後眷屬なるや。答へて曰く若し殺生方便を起さば屠兒の羊を捉へ或は物を以て買ひ、屠所に詣て始めに一刀或は二三刀を下すに、羊の命は未だ斷ぜざるが如きの所有の惡業を前眷屬と名づく。何刀かを下すに隨つて其の命根を斷ぜば即ち彼の念の時、所有の作業及び無作業は、是等を皆根本業道と名づけ、次後の所作の身行作業を是れを殺生の後眷屬と名づく。乃至綺語も皆亦是の如し、應に知るべし。自餘の貪瞋邪見等の中には前眷屬無し。初に起心し即時に根本業道を成就するを以ての故なり。又、身口意の十不善業道は一切皆前後の眷屬有り。此の義云何。人起心して此の衆生の命因を斷たんと欲するが如し。復更に餘の衆生の命を斷ず。天を祭らむと欲して衆生を殺害するが如し 即ち他物を奪ひ彼の人を殺し復彼の妻を婬せんと欲す。是の如きの心を生じ還彼の妻をして自ら夫主を殺さしむ。復、種種の鬪亂の言説を以て彼の

【九】無作戒とは身口意三業の緣に依つて心中に生ずる不可見の業體なり。

づくるなり。瞋心に依るが故に偸盜を起すとは瞋人の邊及び瞋人の所愛に於て彼の物を偸盜するなり。是れを瞋心に依るが故に偸盜を起すと名づくるなり。癡心に依るが故に偸盜を起すとは婆羅門の言ふが如し。一切大地の諸の所有の物は唯是れ我が有なり。何を以ての故に。彼の國王先に我に施せるを以ての故たり。我れ無力なるを以ての故に餘姓の爲に我受用を奪れしなり。是の故に我れの取るは卽ち是れ自の物にして偸盜と名づけず、と。而も彼の癡人是の心を生ずるが故に是れ偸盜有り。是れを癡心に依るが故に偸盜を起すと名づくるなり。貪心に依るが故に邪婬を起すとは衆生に於て貪染の心を起し如實に修行せざるを謂ふ。是れを貪心に依るが故に邪婬を起すと名づくるなり。瞋心に依るが故に邪婬を起すとは他の守護若しくは自の護、若しくは他の護の資生に於て瞋心に依るが故に如實ならざるの修行を起し怨家の妻の邊及び怨所愛の人の妻の邊に如ぶ。是れを瞋心に依るが故に邪婬を起すと名づくるなり。癡心に依るが故に邪婬を起すとは、有る人の言ふが如し。譬へば　碓臼、熟華、熟果、飲食、河水及び道路等の女人は、是の如きの邪婬は無罪なり、と。又波羅斯等の母を邪婬する等の如きは是れを癡心に依るが故に邪婬を起すと名づくるなり。妄語は貪心の生なりとは貪心に依て起ればなり。瞋心の生なりとは瞋心に依て起ればなり。癡心の生なりとは癡心に依て起ればなり。是の如くにして兩舌惡口綺語は皆亦是の如し。應に知るべし。貪は貪心に依て起るとは貪の結生ずるに依て次第に二心現前するなり。是の如きを名づけて貪心に依て起ると爲す。瞋の結生ずるに依て名づけて瞋心に依て起ると爲す。癡の結に依て生ずるを名づけて癡心に依て起ると爲す。貪瞋の邪見と與なるが如し。皆亦是の如し應に知るべし。

問ふて曰く何故に作、不作相、不作相を說かざるや。決定して何の業の中に有なるや。何の業の中に無なるや。答へて曰く唯、邪婬を除いて餘の六業道の中には悉皆不定なり。此の義云何。若し自ら作らば作業及び無作業を成就す。若し他をして作らしめば唯、不作のみ有つて作有るを得ず。

して他の與へざるものを取ることなり。

【八】碓とは米穀等を入れてうすつく具。臼とはつきうすなり。

衆生の邊には殺生を離れずば離の義成ぜざるなり。此れ復何の義ぞ。可殺の衆生の邊の罪を離れるを以て不可殺の衆生の邊の福を成ず。是の義を以ての故に、可殺の衆生の邊に於ても、不可殺の衆生の邊に於ても離殺生の福を成ずるなり。若し是の如からずば離殺生の事を言ふを得ず、捨殺生を成ぜざるなり。殺生の事を受けずして應に離殺生の事を得べし。若し是の如からずば不受は應に是れ離なるべく受は應に是れ不離なるべし。問ふて曰く要ず現在の[三]陰界入の邊に依りて離殺生を得ば過去未來には非なるや。答へて曰く若し向に問答せる如くならば離殺生の義成ぜざるなり。

問ふて曰く應に離殺生等を說くべしとは幾種の離あるや。答へて曰く、三種の離有り。一には成。二には依。三には起なり。依と成とは、殺生惡口は衆生に依つて瞋心を以て成ず。偸盜邪婬は資生に依て貪心を以て成ず。妄語、兩舌綺語は名字に依つて貪心を以て成ず。邪見は色に依つて癡心を以て成ず。

起とは十不善業道の一切は皆貪瞋癡に從つて起るなり。貪心に依るが故に殺生を起すとは貪心にて殺生し、或は皮肉筋骨齒角錢財等の爲の故に、衆生の命を斷じ或は自身の爲にし愛する所の者の爲にして一一に三事を具足す。瞋心に依るが故に殺生を起すとは、瞋心を以ての故に[四]怨家を殺害し及び所愛の人をも殺怨す。是れを瞋心に依るが故に殺生を起すと名づくるなり。癡心に依るが故に殺生を起すとは有る人の言ふが如し、[五]蛇蠍等を殺すは、殺すと雖も罪無し。何を以ての故に衆生に諸の苦惱を生ずるを以ての故なり。又、有る人の言く、若し[六]麞鹿水牛羊等を殺すも罪報有ること無し。何を以ての故に。是れ衆生の業の所感なるを以ての故なり。又波羅斯等の言く、老いたる父母及重病者を殺すも則ち罪報無し、と。是の如き等を癡心に依るが故に殺生を起すと名づくるなり。貪心に依るが故に偸盜を起すとは如是如是の物を須るを以ての故に如是如是の物を取り、或は自身の爲にし或は他身の爲にし或は飮食の爲にす。是れを貪心に依るが故に、[七]偸盜を起すと名

【三】陰界入とは五陰十八界十二入なり。

【四】怨家とは我に怨を結ぶ人なり。

【五】蠍はくも類の毒虫、長さ三寸許、八足にして二螯、尾端に刺ありて甚だ猛毒あり。

【六】麞とは鹿よりも小にして美しく角なく體は褐色、性善く驚ろく、その革は細軟なり。

【七】偸盜とは十惡業の一に

の如きの心を生ず、苦樂の果報は自然にして有りて因緣に從ふに非ずと。此の世、他の世無くんば彼の人心に卽ち此の世の滅を見て更に生ずるを見ざる故に此の人心を起して後世無しと言ふ。彼の人復是の心を生ず。實に我有ること無し。若し我有らば世間には則ち化生衆生無し。十二因緣を觀察せざるを以ての故なり。復疑心を生ず。一切の男女は自らの樂の爲の故に婬欲を行ず、我を生ずる爲にせざるなり。我は自業に依て此の中に於て生ず。濕生衆生は濕地に依て生ずるが如し。濕地は是れ衆生の父母に非ず、我も亦是の如し。又羅漢は冷を求め熱を求め飮食等を求むるを見る、便ち謂く世間には阿羅漢無し。何を以ての故に。阿羅漢は愛心有るを以ての故に、彼の人自ら修行等の力無し、是の故に諸の煩惱を斷ずること能はず。便ち世間には阿羅漢無しと謂ふなり。

問ふて曰く應に殺生を離るゝの義を說くべし何の義を以ての故に名づけて離と爲すを得るや。可殺の事有るが爲の故に名づけて離と爲すを得るなるや。可殺の事無き爲の故に名づけて離と爲すや。若し可殺の事有るが故に名づけて離と爲さば離の義成ぜず。何を以ての故に。作習の果成ずるを以ての故に云何んが殺生を離ると言はん。若し可殺の事無きを以て名づけて離と爲さば則ち殺生を離るゝの福無く、兎角の以て割截す可き無きが如くなれば則ち亦離に割截の義有ること無し。又殺生を離ると言ふは名づけて不殺生の事と爲し、衆生の事を捨擲せざるや。答へて曰く不殺生の法を受くるを以て本心に受けて力有るに依ての故に彼の殺生の惡事を作らず。離殺生の法を受くるを以て、善法を起すを以て、是の故に殺生を離れ衆生を攝取して離れざるなり。

問ふて曰く、可殺の衆生の邊に於て殺生を離ると爲すや。不可殺の衆生の邊に於て殺生を離ると爲すや。可殺不可殺の衆生の邊に於て殺生を離ると爲すや。答へて曰く可殺不可殺の衆生の邊に於て殺生を離るゝなり。何を以ての故に。惡心を起して休息せざるを以ての故に、是の故に名づけて殺生を離ると爲すなり。此れ何の義を明せる。若し可殺の衆生の邊に於て、殺生を離れ、不可殺の

打とは悲心無きなり、命を斷ぜんと欲するを以ての故なり。又、打とは鞭杖土石等は能く苦惱を生ずるを以て皆名づけて打と爲す。慈悲に相違すとは他の命を斷ぜんと欲するは慈心に相違し、打は悲心に相違す。是の如き等を是れを瞋相と名づく應に知るべし。

　邪見とは施等の中に於て施等無しと見るなり。此れ何の義を明せる。施の中に於て施無しと見、與の中に於て與無しと見、捨の中に於て捨無しと見る。是の如き等の見を名づけて邪見と爲す。問ふて曰く、云何んが是の如き等を名づけて邪見と爲すや。又、施與捨の三句は何の差別有るや。答へて曰く、施とは[二]正心に福田非福田に施與す。與とは亦、正心に福田非福田に施與す。捨とは但、正心に福田に施與す。又施無しと見ると言ふは所施の不清淨なるを見る故なり。又與無しと見ると言ふは施主の功德を無たりと謗するが故なり。又捨無しと見ると言ふは受者の功德を無なりと謗するが故なり。是の如きの不正見は皆慳人の相なり。富人は慳惜の貧者を見るを以て能捨す。此の人是の如きの心を起す。若し實に施有れば慳人は應に富むべからず、何を以ての故に。其の先の世に慳を習ふてより來(このかた)久しきを以ての故に復疑心を生ず。此の能施の主は應に貧窮すべからず。何を以ての故に。其の先の世に施を習ふてより來久しきを以ての故に。彼の人是の如き邪見を起すと雖も而も義は是の如くならず。問ふて曰く、若し爾らば此の義云何。答へて曰く、彼の人過去に久しく慳を習ふと雖も而も忽ちに清淨の福田に値遇し彼の田の中に於て少しく布施を行ず。是の故に今身に富の報を獲得す。習成の性、慳なるを以て猶捨せざるがごとし。貧にして能く施さば此れ復云何。彼の人過去に、非福田に於て信心無きが故に、至心ならざるが故に、名稱の爲の故に、求事の爲の故に、尊重を求むるが故に、彼の人能く施すも是の義を以ての故に富の報を得ざるなり。施を習ふてより來(このかた)故(ことさら)に今猶能く捨し、善行惡行無ければ此れ自身に常無常を見るに依て過相を起す。善惡の行業の果報無しとは彼の人善を行じて苦を受け惡を行じて樂を受くるを見て是の故に彼の人是

【二】正心とは諂曲を離れたる正直の心なり。

是れを兩舌と名づく。作、不作相、無作相とは前に殺生の中に說くが如し。一人有つて言く破壞無作業の兩舌の中にて破僧の兩舌と爲すが如き無し。而も如來の邊に於ては破壞する能はざるを說けば是れ則ち僧を破するの惡業を成ぜず、是の如く破壞せざるは不兩舌の業なり。

惡口を遠離すとは惡口に七種有り。一には依不善意。二には起惱亂心。三には依亂心。四には惡言他說。五には作。六には不作相。七には無作相なり。是れ等を名づけて惡口の口業と爲す。不善意に依るとは、口に惡言を說いて他をして聞かしむれば能く苦惱を生ず。惱亂心を起すとは但、惱亂心を起して安隱心を起さず。若しくは安隱心の爲に惡口して說くと雖も惱亂の罪無し。亂心に依るとは是の如きの心を起し他聞に隨ふの時、亂る。亂れても惡心を作らざるを以て說く。作、不作相、無作相とは前に殺生の中に說けるが如し。

綺語を遠離すとは綺語に七種有り。一には依不善意。二には無義。三には非時。四には惡法相應。五には作。六には不作相。七には無作相なり。一切惡口に遍くして是等を名づけて綺語の口業と爲す。不善意に依るとは欲界の修道、煩惱心相應なるに依つて說いて名づけて綺語と爲すなり。無義とは實義を離るゝが故なり。非時とは語に義有りと雖も而も非時に說けば亦綺語を成ずるなり。又時有つて說くも大衆中に於て自在人の爲に說かば亦綺語を成ず。惡法相應とは謂ゆる一切の戲話、非法の歌舞等は、一切善法と相應せざれば皆是れ綺語なり。作、不作相、無作相は前に殺生の中に說けるが如し。

貪とは愛心の所纒と爲す。他人の錢財を得むと欲して愛心貪心の繫縛する所と爲り他人自在を求む。是れを貪相と名づく、應に知るべし。瞋とは他の衆生に於て惡心を起し打害せん等と欲し大慈悲心に相違す。是れを名づけて瞋と爲す。衆生とは非衆生の事を離るゝが故なり。他とは自身の事を離るゝが故なり。他の衆生の瞋と言ふは他の衆生に於て惡心を起すなり。害とは慈心無きなり、

以ての故なり、病人の藥を服するが如し。藥を服するに因つての故に病を遠離し無病を生ず。病者は差ゆるを得、藥師の病は差へず。

妄語を遠離すとは妄語に七種有り。一には見等の事。二には顚倒非顚倒の事。三には疑心。四には起覆藏想。五には作。六には不作相。七には無作相なり。是れ等を名づけて妄語口業と爲す。見等の事とは謂く、見聞覺知を顚倒非顚倒の中に於てするなり。又顚倒の事とは聞の如く彼の事に如るなり。非顚倒とは彼の事に如るを謂ふ。疑心とは疑を生じて是の如しと爲し是の如くならずと爲し一向に是の如しと爲し一向に是の如くならずと爲すなり。覆藏の想を起すとは實事を覆藏して異相事の中にて異相に住して說くなり、作、不作相、無作相とは前に殺生中に說ける如し。人有つて曰く身相は[一]布薩中に及び默然として住す皆妄語不作相有り。身意の業を成ぜば以て妄語と爲す。と。此の言有りと雖も而も義是の如くならず。何を以ての故に。業は相を異にするを以ての故なり。相を異にすとは身口意の業は相を異にするを以ての故なり。是の故に口業は身意の業の體に非ずして而も本口業は世間の用事たるに依つて、而して口業の事は身業に示現し名づけて不作口業と爲し而も口業の名を得るなり。若し布薩の中に比丘說かざれば口業を成ず。何を以ての故に。口業立制なるに依つての故に。先に是の語を受くるを以て我佛法の中に於て如是の法を作らず如是の法を作る。而も彼の人先に要心有りて後時に說かず默然として住す、彼の人、本要心の所受を退す。是の故に妄語の口業を成ずるを得るなり。

兩舌を遠離すとは兩舌に七種有り。一には起不善心。二には實虛妄。三には破壞心。四には先破不和合意。五には作。六には不作相。七には無作相。是れ等を名づけて兩舌の口業と爲す。不善意とは不善の業は煩惱心相應なり。實虛妄とは他他の心壞するを知りて、若しは實に若しは妄に壞他心、破他心を語るたり。先に破するを以てとは、和合の心無く惡意を起し自身に不善の法を起すを以て

【一】布薩とは月中と月末とに佛教徒の間に行はれたる懺悔持戒の行事なり。

偸盜を遠離すとは偸盜に九種有り。一には他護。二には彼想。三には疑心。四には知不隨。五には欲奪。六には知他物起我心。七には作。八には不作相。九には無作相なり。是れ等を名づけて偸盜の身業と爲す。他護とは此れ他の護れる物を取ることを明す。彼想とは若し自想を生ぜずして是れ我が物と言はずば名づけて彼想と爲す。疑心とは心に疑有れば是れ我が物と爲し是れ他の物と爲し而も彼の物は他の物なり。知不隨とは他の物なるを知つて心を生じ他に我想に隨ふなり。欲奪とは損害の心を起し他の物なるを知つて我心を起さば若しくは見を異にせず若しくは闇地に取り、若しくは疾疾に取り若しくは餘物を取り若しくは他の物を取りて自の物の想を取るなり。作、不作相、無作相は前に殺生の中に說くが如し。業道を成じ業道を成ぜざること義に隨つて相應して解釋し應に知るべし。

邪婬を遠離すとは邪婬に八種有り。一には護女人。二には彼想。三には疑心。四には道非道。五には不護。六には非時。七には作。八には無作相なり。是れ等を名づけて邪婬の身業と爲すなり。護女人とは所謂、父護り母護る是の如し等なり。彼想とは若し彼の女は是れ父母等の護る所の女なるを知りて想ふも不護の想に非ざるなり。疑心とは若し疑心生ぜば自らの女と爲し他の女と爲し、父母の護と爲し不護と爲し我の女と爲し他の女と爲し而も彼の女人は父母の護と爲し彼の父母の所護等の女に於ては一一に邪婬なり。道非道とは道とは所有の道なり。非道とは道に非ざるを謂ふ。彼の護女の非道非時たるも亦邪婬と名づくるなり。又、非護とは自ら女を護り女を護らず彼は非道にして邪婬なり。又非護女とは一切の女を護らざる等は邪婬なり。作、無作相とは前に殺生の中にて說くが如し應に知るべし。不作相とは邪婬中是の如き不作の法は無く、要ず自ら作して成ずるを

於て害法を起すを以て是の故に使者の細なる相續の體は轉じて麁を生ず。是の義を以ての故に未來世中に能く多くの過を生ず。亦復但人をして惡を作らしめず自ら惡を作る者は惡事を作て竟に未來世中に亦多くの過を生ず。是の故に彼は未來に於て身體相續し轉生するを名づけて業道と爲す。因中に於て果の義を明すを以ての故なり。破戒の橋梁を離るとは汝今狂癲の病有るが爲に耶、而も是の說を作す。若し狂癲せば速に陳酥を覓めて服し除愈せしめ應に種種非法の言說をなすべからず。

問ふて曰く何が故に增して我れに無作法有るや。而も汝自ら心に從て細の相續體は增長の法有りと立つるや。答へて曰く我は汝を增さずして、汝は無作法有るなり。而も汝の所說の法は是の如きの義無し。此れ何の義を明せる。心に依るを以ての故に身口に事を行じ、事を行じ訖て竟に業道を成就するなり。汝所有の法は心身口を離れたり。佛法中に於ては是の如きの義無し。是れ[二七]尼乾子の微塵世性の時には方等の法に心を離れて而も有るあり。心に善惡無き是の如きの法は智者は受けざるなり。是の故に色心を離れ、身心の外に無作法有るを立てざるなり。

彌勒菩薩所問經論卷第四

【二七】尼乾子は尼犍子とも書く、六師外道の一なり。

て無作法有らん。復修多羅の中に如來說いて破戒の橋梁を離ると言ふ有り。若し無作法無くんば云何んが說いて破戒の橋梁を離ると言はん。是の故に當に知るべし無作法有るを。

答へて曰く此の難極めて繁く種種衆多の言說有りと雖も而も義皆然らざるなり。何を以ての故に。汝向に如來、修多羅の中に說ける色の三種を引くと雖も而も汝は如來の經意を解せず。此の義云何。一切聖人の禪定力は三昧の境界の色を見、三昧力に依て彼の色を生ず。彼の色は是れ眼根の境界に非ざるが故に不可見なり。餘の一切の物の障る能はざる所なるが故に不可礙なり。問ふて曰く若し是れ眼根の境界に非ずして障礙すべからずと言はゞ云何んが色と名づけん。答へて曰く汝、心意を離れて無作色有らば云何んが名づけて無作色と爲すを得ん。又答ふ、此の色は乃ち是れ無漏の境界聖智三昧の色なり。世間有漏の色と同じからざるなり。又無漏の色と言ふは即ち是れ彼の三昧禪定力に依て色を名づけて無垢と爲し、聖人は無漏三昧中に於て無漏法を說くなり。

又人有て言く阿羅漢の色及び以外の色を名づけて無漏と爲す、と。有漏法を離るゝが故なり。我れ此の義を受けざるたり。又功德を增長すとは此の義云何。法如是の故なり。如是如是の施主物を施して數數受用す。數數受用するは受用の人の功德力に依るが故なり。施主の心異ると雖本心念に依て修する相續の體細細轉勝するなり。轉勝を以ての故に未來世に於て多くの福德の果を成就するを得るなり。此の義に依るが故に如來說いて多く功德を生じ功德を增長すと言ふなり。心を離れ色を離れて無作法有るには非ざるなり。問ふて曰く云何んが身心を異にし異なる身心に依て異なる身心中に相續轉細し福德を增長するや。答へて曰く云何んが身心を異にして異なる身心に依て異なる身心中に無作法有らん。又答ふ、而も此の義然らざるなり。我れ心身業口業に依り善惡の功德有り。本心の作に依るも本心を失はざれば相續の體有りて、顚狂睡等、常に增長するを得。不作とは己に自ら作らず他をして作らしむるなり。云何んが業道を成ずるを得ん。此れ何の義を明せる。使者に依て他の衆生に

如く作し能く身口の業を生ずるを名づけて身業と爲し、身所作の若きを名づけて身業と爲し口所作の若きを名づけて口業と爲す。三業に異つて別に實法有らざるなり。

問ふて曰く、身口業に異つて實に別法有り。何を以ての故に。三種の無垢色有り、增長して業道等と作らざるを以ての故なり。此れ何の義を明せる。如來修多羅の中に色は三種を攝するを說くを以てなり。何をか三と爲す。一には有色可見可礙。二には有色不可見可礙。三には有色不可見不可礙なり。無垢の色とは謂ゆる無漏の色なり。無垢の色とは謂ゆる無漏の法なり。何者か無漏の法なる。謂ゆる過去未來現在の色中に於て瞋愛を生ぜざるなり。乃至識中にも瞋愛を生ぜざるなり。是の義を以ての故に無漏の法と名づくるなり。若し是の如くんば無作法を離れて何處にか色不可見不可礙有らん。是れ無漏なるが故なり。應に無作法は身口意の業を離れて增長有るべきを知れば如來修多羅の中に說きたまへり。有信の者。善男子善女人は七種の功德を修行し行住睡寤等日夜に常に功德を生じ功德を增長す、と。若し身口の業を離れて更に無作無くば云何んが心法に異つて增長するを得ん。是の故に當に知るべし、身口の業を離れて無作法有り。又自ら業を作らざるも他をして業を作らしむるは若し無作無くんば此れ云何んが成ぜん。又復人をして業を作らしむるを名づけて業道を成就すと爲すを得るに非ず。彼の業未だ成ぜざるを以てなり。復更に過有り。業を作ると雖も未だ實體の成就有らざればなり。如來經中に說くを以てなり。諸の比丘の外入は十一入にして不攝不可見不可礙にして非色を說かず。此れ何の義の爲の故に是の如く說くや。如來は見法入の中に無作色を攝するが故に是の如く說くなり。又復難有り。若し無作法無くんば亦應に八聖道も無かるべし。定中に正語正業及以正命無きを以てなり。當に知るべし決定して無作法有らん。又復難有り。若し無作法無くんば波羅提木叉を離れ亦無作戒も無かるべし。受戒竟て後に卽ち無きを以ての故なり。睡眠及び顚狂等の諸の失心に在る者を以て亦比丘比丘尼と名づくるが故に當に知るべし決定し

火界增上し彼の火力に依て水力漸微となり乃ち後時に至り水相續の體斷絕して起らず、是れ火の所作にして火の所滅に非ざるなり。是の故に一切の有爲之法は自然にして滅し因緣の滅無きなり。彼の滅法は刹那にして不住なるを以て是の故に卽ち滅す。是の如くして諸法の刹那にして不住なるを成就す。刹那にして不住なる是の故に此の法は彼の處に去らざるなり。問ふて曰く我れ餘處に於て猶此の法を見る。若し去らざれば云何にして餘處に於て見、餘處に於て識るを得るや。答へて曰く草火焰の如し是の故に去らず是の故に身威儀は身作法と名づく。此の義已に成じ身を異にし別に實法有りと謂ふに非ず。一方に色を生ずるを名づけて長色と爲すが如し。彼の長色に依て更に餘色を見るを名づけて短色と爲す。四方に依るが故に四方の色を見るなり。圓物に依るが故に名づけて圓色と爲す。是の如きの長短方圓高下の諸色は譬へば火の一廂に挑るが如し。直に去るも不斷不絕にして相續して見るを名づけて長火と爲し、四廂を周匝し不斷不絕なるを名づけて圓火と爲す。種種の轉に隨て種種の火を見る。是の如く火を離れて別に實の形相の法有ること無し。若し火を離れて外に形相の法有らば應に二根の所伺と爲すべきなり。眼根は長を見、身根は短を觸れ一色入は二根の見に非ざるを以て觸法の長短等の如し。是の如く色の中は應に知るべし。觸法は唯心なり。是れ根を現じて捉ふ可く知る可きに非ず。火を見て色觸中に生ずる念知の如し。鼻華香色中に生ずる念の如し。此の法應に是の如くなるべし。餘法に依り餘法を念じて一の觸法無し。威儀中に於て實に觸法に依て餘法を得る有り。是の故に實には身威儀の法無きなり。問ふて曰く此の義然らず。何を以ての故に。若し闇夜に於て遠く土牆等の色を見るに或は長或は短なり。此れは應に是れ實なるべし。答へて曰く但色を見て了せざるは虛妄にして長短等の色を分別するは蟻子等の行を見、圍を見るに異らざるが如く此れも亦是の如し。身威儀と異つて更に實法無し。唯身威儀を名づけて作法と爲す。身を離れて外に別に作法有らざるなり。向に說ける心思惟とは心中の分別なり。我の是の如く是の

るべし、有る法は因縁の滅に非ざることあるべからず。猶、生ずる法の一切は皆悉く因縁に從て生ずるが如し。法生ずるは因縁に從はざること有ること無し。心聲の焰は因縁の滅に非ざるが如し。彼は因縁を待たずして滅するを以ての故なり。問ふて曰く、此の義然らず、何を以ての故に、後心生じて前心滅し、後聲生じて前聲滅するを以て、彼の先法は後法を待つを以ての故に、是の故に因縁に從て滅するを知るを得ん。答へて曰く、此の義然らず、何を以ての故に。彼の心聲は相待たざるを以ての故なり。此れ何の義を明せる。疑ひて知ると、決定して知ると有るを以ての故に二法は倶ならず。苦樂貪恚等皆亦是の如し。又前の心聲は疾く、後の心聲は遲きを以て云何んが疾からざる心聲は而も能く彼の疾き心、疾き聲を害せん。是の故に法滅するは因縁に從はざるなり。問ふて曰く、燈と焰とは念念に住せずと雖も、因の住する無くして而も滅法及び滅非法有るを以て、彼の滅法に依て燈焰を滅す。是の故に應に因縁に依て而して滅すべきなり。答へて曰く、此の義然らず、何を以ての故に、無物の法を以て云何んが能く滅因を作らん、又生因と滅法、非法は刹那にして住せず。刹那心は刹那心の中にては終に生因滅因を作る能はず。是の如く一切の有爲の諸法は因に從はずして滅す、應に知るべし。又答ふ。火等の能く薪等の滅因を作るに依るに是の如きの生因は即ち是れ滅因なり。此れ何の義を明せる。何等の火焰に依て何等の色を生ず、即ち彼の火焰は能く熟勝を作り熟勝は滅因なり、是の故を以て卽ち生因は是れ滅因なり。更に異因無し。而も此の義、是の如くならずば、云何んが此の一法は能く法をして生ぜしめ能く法をして滅ぜしめん。又異異の火焰中に是の如きの因差別せば虛妄分別なり。灰汁苦酒雪日地水に因て穀米の能く熟異を生ずるが如し。熟異等の色は彼の處に云何んが分別せん。問ふて曰く然らざるなり。何を以ての故に。火は水を煎し水は火に由て盡くれば火は滅因爲らん。答へて曰く向の解釋の如し。云何んが水は火に因て滅するを知るを得ん。自然滅に非ざればなり。問ふて曰く若し爾らば火は何の所作なりや。答へて曰く

を身作業と名づくるなり。

問ふて曰く、身の去來動轉を以て名づけて身業と爲せば不去不來は名づけて業と爲さゞるや。答へて曰く、若し去來を是れ身業と言へば此の事然らざるなり。何を以ての故に。一切有爲の法は刹那にして住せざるが故なり。刹那にして住せざれば何の處にも隨て滅して不去不來なり。云何んが去來動轉を名づけて身業と爲すと言はんや。問ふて曰く此の義然らず、何を以ての故に。若し一切法は刹那にして住せざれば是の如く說くべきも亦有る法は刹那にして間く住するを見れば是れ住せざるに非ず。云何んが去無く來無しと言はんや。答へて曰く、此の義然らず、何を以ての故に。有爲の法は畢竟して住せざるを以てなり。此れ何の義を明せる。彼の一切有爲の諸法は因無く緣無く自然にして而して滅するを以ての故なり。此れ復何の義ぞ。可作の法は是れ因緣有つて而して滅するを以て法は卽ち是れ無物なり。若し無物なれば彼法は作らず。有爲の法は因無く緣無く自然に滅するを以ての故に、若の法卽ち生ずるの時滅せずして後も亦應に滅すべからず。若し滅せずば應に是れ定實なるべし。若し是れ定實なれば應に變異すべからず。若し是の如くんば應に彼の滅は因緣の滅に從ふべからず。問ふて曰く、我、有る法の因緣に從て滅するを見る。薪等の法は彼の火等の因緣に從て而して滅するが如し。一切の量中にて現見の量勝れたれば此の義を以ての故に一切の法の滅するは因緣に從ふならん。答へて曰く、云何んが薪等の法は火等の因緣に依て而も滅するを知らん。我は因無くして自然に滅すと言ふなり。此の義應に思ふべし。火等に因て薪等の法滅するが爲の故に見へざる耶、因緣無くして自然に滅するが爲の故に見へざる耶、此の義云何。本より相續の因緣滅せば餘は更に生ぜず、是の故に見へざるなり、因緣の滅は風の燈を滅し、手の鈴聲を滅するが如くに非ず。是の如き等を知るは[二六]比智を知るなりや。答へて曰く已に非可作の事を說くが故なり。此れ何の義を明せる。若し一法有つて因緣に從つて滅せば應に一切の法は皆因緣の滅な

【二六】比智とは又、類智とも譯す、色界無色界の四諦を觀ずる智なり。

是れ常に殺生の義無し。問ふて曰く何等の[二四]陰を害せば之を名づけて殺と爲すや。過去を害すと爲すや。未來を害すと爲すや。現在を害すと爲すや。若し過去を害すとせば過去は已に滅す。若し未來を害すとせば未來は未だ到らず。若し現在を害すとせば刹那にして住せざるなり。答へて曰く、人有つて說いて言く、現在世に住して未來世和合の陰體を壞る。と。復、人有つて言く、未來現在を壞る。と。此れ何の義を明せる。現在の陰中には刀杖能く到るを以て能く害事を作る。復人有つて言く、五陰自ら滅するは因緣滅に非ず。と。復人有つて言く、現在の陰中には唯、色陰を壞る、と。刀杖等は能く割り能く觸すも[二五]餘の四陰は割觸すべからざるを以ての故なり。復、人有つて言く五陰を殺害す、と。自餘の四陰は觸す可からずと雖も而も色陰に依て住す。色陰壞るが故に彼も亦隨て壞る。瓶破るが故に水乳も亦失ふが如し。復人有つて言く、唯、無記の陰を害す、と。無記の陰中には刀杖も能く觸すを以て、觸す無き陰を以て共れに二種有り、一切の業には三種有り、向に說く所の如し、應に知るべし。

問ふて曰く如來修多羅の中に說いて二種の業有り。一には起業。二には作業なり。此の二種の業は廣く說くに三有り。謂ゆる身口意の業なり。此の三種の業は云何んが差別するや。依に從つて說く爲なるや。體に從つて說く爲なりや。起に從て說く爲なりや。若し依に從つて說かば即ち是れ一業ならむ。一切の業は身に依止するを以ての故なり。若し體に從つて說かば即ち是れ一業ならむ。一切の業は唯、口業なるを以ての故なり。若し起に從て說かば即ち是れ一業ならむ。一切の業は心に從て起るを以ての故なり。答へて曰く三の次第に依て三種の業有るなり。此れ何の義を明せる。心に由て思惟するは即ち是れ心業なり。彼の心業に依て身口の業を起す。心に依るを以ての故に身口の業を起すなり。是の如く次第す、應に知るべし。彼の作、無作も應に知るべし。彼の身口の業の差別をも應に知るべし。又、身業の作とは身の威儀に依り、身に依止して彼彼の形相を作る、是

【二四】陰とは色聲等の有爲法を云ふ。

【二五】餘の四陰とは色受想行識の五陰の中の最初の色を除ける餘の四陰なり。

を成就するを得」と。此の殺生の業は是れ口意の業にして是れ身業に非ざれば此の言有りと雖も是の義然らず。何を以ての故に。若し卽ち口に說き心に念ずるの時、殺生を成就せば是れ口業なるべく、是れ意業なるべし。此れ何の義を明せる。若の口と意とは是れ殺業の體なり。自在人動して某の衆生を殺し、仙人心に念じて某の衆生を殺す、卽ち動し、念ずるの時、彼の命應に斷ずべし。而るに此の事然らず。彼の使人と仙を信ずるの夜叉の身業成ずるの時を以て殺生の事成ずるなり。若し是の如からずば、彼の自在人、口に殺を言ふの時、及び仙人瞋心を起すの時應に卽ち殺を成ずべきなり。而るに實には成ぜざるなり。又復、過有り。彼の自在人、殺生を口勅するも使人未だ殺さゞるに彼の自在人見道を證するを得ば受勅の使者は後方に殺生す。若し殺を口勅し已つて殺を成ぜば見道を證し已つて然る後に殺生するなり。而るに此の義は然らざるなり。彼の殺生の因、破戒等の惡心を遠離するを得るを以て是の故に口意の二業を以て殺生の體と爲さず。何を以ての故に。業は無差別なるを以ての故なり。此れ何の義を明せる。善・不善・無記等の業相は各異るを以ての故なり。無差別の相を以て、是の如きの身口意の業は則ち無差別にして而して遠近の方便身口意等は殺生の業を成ず。此れ則ち遮せざるなり。

問ふて曰く、口に殺を言ふは畢竟して成ずと爲すや成ぜずと爲すや。答へて曰く、成ぜざるなり。何を以ての故に。時等を過ぐるを以ての故なり。此れ何の義を明せる。何等の時を以て何等の方便を以て何等の處を以て彼人殺すの時、自在人の說ける時處等を過ぎれば殺者は罪を得るも教者は罪無し。身業は身の作業に依つて名づけて身業と爲せばなり。此れ何の義を明せる。身の作業に依り、身の所作に隨つて名づけて身業と爲せばなり。

問ふて曰く、命の殺す可き無くば云何んが命を斷つて殺生罪を得るや。答へて曰く、實命無しと雖も和合體を斷てば名づけて殺生と爲す。樹林を斷ち燈炷を滅するが如し。若し神我有ろも神我は

捨つるを以ての故に殺に隨つて罪を得。彼の處にては衆生の相を離れざるを以ての故なり。疑とは疑心に殺生するも亦殺罪を得、彼是の衆生を以て既に衆生を捨て、其の心疑ふと雖も慈悲心を捨てて衆生を殺すを以ての故に殺生罪を得。捨命方便を起すとは此れ何の義を明せる。若し殺者、彼の事の中に於て不善の心を起し必ず彼の衆生の命根を斷ぜんと欲せば非慈悲心・無護罪心・捨衆生心にして殺方便を作る。是れを名づけて起すと爲すなり。

又、作・不作相・無作相とは、作とは所作の事なり。不作とは所不作の事なり。彼の作の事と共に起る。作業滅すと雖も而も善く無記の法は相續して斷ぜず。問ふて曰く、云何んが不作にして而して名づけて業と爲すや。答へて曰く能く作の事と與に因を作り、作の果の事と與に因を作るを以てなり。此れ何の義を明せる。處處に亦、因中に果を說き、果中に因を說く有り。如來經の中に說くが如し。可見、可觸を無作色と名づく。と。作は不可見、不可觸なるを以て而も作を名づけて可見可觸と爲すは、彼の不作を以て說いて可見、可觸と名づくるなり。是の如く彼處に若しくは身、所依の身事、刀杖等の殺生は名づけて作、不作と爲し身業とも名づくるを得。又、自在人[三二]、口に勅して仙人の瞋心にして衆生を殺さんと欲するを殺せしむるが如し。受勅の使者は自在人の口勅に依て而も仙を信ずる夜叉の仙の瞋心に依て而も衆生を殺すものを殺す。彼の自在人及び仙人等は殺生の因を作り、使人と夜叉の身業成ずるの時、彼の自在人及び仙人は倶に成就するを得て身業を作らず。又、受戒の人の如し、受戒に臨むの時は身動口說するも受戒の時に及びては默然として而して住し身口不動なり。[三三]師羯磨し已つて彼の人無作の身業を成就す。此れも亦是の如し。又、口業の事の如きは口に言はずして但、頭を動かし、目を瞬き、眉を奮げ、手を擧ぐ、是の如きの相は前事を表はすも亦不作の口業を成就するを得。又、身の業を作るに應じて而も身動かずして口に種種の身業の方便を說き、彼の事成ずるの時、亦不作の身業を成就するを得。人有つて言く、口、意、も亦殺生

【三二】自在人とは如來所持の我德に八大自在を具すれば佛を稱して自在人と言ふ。

【三三】羯磨（Karma）。授戒懺悔等の業事を爲す一種の宣告式なり。

得ざるなり。又、火の如しと言ふは此の義然らず。何を以ての故に。悪業の中にては無悪の心は隔つるを以ての故なり。明す所は何の義なるや。猶彼の火の如しとは薪炭等は隔觸して而も燒けず。是の如く彼の悪業の中にては無悪の心は隔てあれば、復、殺生すと雖も能く與に報ゐざるなり。是の故に火の喩の義は相應せざるなり。問ふて曰く、云何んが死者は苦を受け、而も殺生者は罪報を得ざるや。答へて曰く、心不壞なるを以ての故に又此の義然らざるなり。何を以ての故に。逼惱を離れたる衆生にも罪有り、利益を離れたる衆生にも福有り。斷善根・慈悲・無諍・滅盡定の如き等なり。

問ふて曰く、何が故に他と名づくるや。答へて曰く自らの命に非ざる故なり。問ふて曰く、何の義を以ての故に自ら命を斷ずる者は罪報を得ざるや。答へて曰く、殺す可き無き殺者なるを以ての故なり。此れ何の義を明せる。若し他人の是れ殺す可き者有りて能く人を殺生せば殺生罪を得るも自殺者は殺す可きの境無きを以て卽ち更に殺すもの無し。殺す者無きを以ての故に自ら命を斷ずるは罪報を得ざるなり。又過去の陰は殺生等の陰に續かず。是の故に自殺は殺罪を得ざるなり。問ふて曰く、自ら身を殺す者は殺心を起して人の命根を斷ち五陰を破壞し人趣を捨離し殺業を成就す。何が故に殺生の罪報を得ざるや。答へて曰く、若し爾らば阿羅漢の人は應に殺罪を得べし。此れ何の義を明せる。死相の羅漢は自ら其の身を害し己命を斷ずるを以ての故に、彼の阿羅漢は亦應に斷命の罪を獲得すべきなり。而も彼は罪無し。何を以ての故に、瞋心等を離るゝを以ての故なり。是の故に自殺は殺罪を得ざるなり。

又、定不定衆生相とは定衆生相と不定衆生相となり、彼の衆生相を名づけて定不定衆生相と爲す。又、定衆生相とは百千人有りて心の中に於て定んで某人を殺さんことを作る。是れを名づけて定と爲し、若し彼の人を殺せば殺罪を成ずることを得。若し餘人を殺せば殺罪を得ず。不定とは一切を

解せば一切の法は心に於て皆、應に業道と名づくべし。若し爾らば何が故に但、十種の業道を說いて無量の業道を說かざるや。答へて曰く勝重なるを以ての故なり。此れ何の義を明せる。諸の惡行及び善行の中にて十業道は重く、餘は重からざるを以ての故に無量を說かざるなり。問ふて曰く此の義然らず、何を以ての故に、業不定なるを以ての故なり。此れ何の義を明せる。或るものは遠近の方便有るを重しと爲し正業を輕しと爲す。是の故に但、十業を說いて以て業道と爲すべからず。無量を說かざるべからず。答へて曰く然らざるなり。何を以ての故に。十業は多くは重く、近遠の方便は多くは輕し、又世間の衆生は多く十業を畏れ近遠の方便を畏れず、又、十業の道は能く深重に逼るところの惱を作り、餘の者は能はざるなり。是の故に汝の說ける業不定は是の義已に答へたり。又、汝向に言へる、一切の法は心に於て皆應に業道と名づくべしとは此の義然らざるなり。何を以ての故に。七業は一向に極重なり。[一九]意の三は亦輕く、亦重し。飲酒等は爾らず。是の義を以ての故に。但、彼の十を說いて名づけて業道と爲し、餘の者を說くも名づけて業道と爲さゞるなり。問ふて曰く殺生を遠離すとは殺生等の相を應に說くべし。答へて曰く、殺生に八種有り。一には故心。二には他。三には定不定の衆生相。四には疑心。五には捨命方便を起し。六には作。七には不作相。八には無作相たり。是れ等を名づけて殺生の身業と爲す。身口意の業も名づけて殺生と爲す。故心とは問ふて曰く、有る人の言く、[二〇]不作心に殺すも殺生罪を成ずること譬へば火に觸れるが如し。と。此れ何の義を明せる。火の能く燒くこと若し[二一]故心に觸れるも不故心に觸れ　も皆能く人を燒くが如し。殺生も亦、爾なり。若し故心に殺すも不故心に殺すも皆應に殺生の罪報を得べし。答へて曰く、然らず。何を以ての故に。若し無心に殺して罪報を得ば則ち阿羅漢は涅槃を得ず。此れ何の義を明せる。阿羅漢は世間の因を斷ずるを以て不作心にして而も衆生を殺すこと有り。是の如くにして亦應に世間に還生すべきも而も實には然らざるなり。是の義を以ての故に不故心に殺すも罪報を

【一九】意の三とは十業の中、後の三業なり。

【二〇】不作心とは無意識の意。

【二一】故心とは故意、不故心とは無意識の意。

行を成就すと爲すなり。

又、修行を成就すとは不共の果を成ずるを以ての故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は十善業道を修行することを成就するを以て菩提心を攝取す。是の義を以ての故に菩提を得るの時、不共の果を成ず。是の故に名づけて修行を成就すと爲すなり。應に知るべし。聖者娑伽羅龍王經の中に說くが如し。龍王、殺生を離れたる人は十種の淸淨の法を得。殺生を遠離して一切の善根を阿耨多羅三藐三菩提に迴向せば彼の人、菩提を得るの時、心自在なるが故に壽命無量なり。と。是の如き等なり。

問ふて曰く、應に業道の義を說くべしとは云何んが業道の義なる。答へて曰く、次に說かん。云何んが說なる。造作するを以ての故に名づけて業相と爲す。業に卽して道と名づけ、能く地獄に趣むくが故に業道と名づくるなり。又、[一六]身口の七業は卽ち自體の相にして名づけて業道と爲し、[一七]餘の三は意、心に相應するなり。又、彼の業に卽して能く道を作るが故に業道と名づく。此れ何の義を明せる。唯、心は是れ業にして彼の心に七業、共に起るを道と名づけ餘の三の共に相應するを名づけて業道と爲すなり。問ふて曰く、若し業に卽して道と名づけ皆悉く能く地獄に趣く等とは、何故に餘の三は是れ業道に非ざるや。答へて曰く、彼の七業の如きは此の三、能く彼の根本を作るが故に、相應するを以ての故に、能く彼の業の如からざるが故に、業道と名づけざるなり。問ふて曰く、一切の美味・飲酒・食肉・[一八]捲手摑打・一切の戲笑、是の如き等の惡行、一切の禮拜・供養・恭敬・遠離飲酒等、是の如き等の善行は何故に說いて以て業道と爲さゞるや。答へて曰く遠離飲酒等は唯是れ心業の能く七業を起せるのみにして身口の業に非ず。是の故に業道に非ざるなり。若し作つて心と相應せば亦是れ業道なり。

問ふて曰く、若し彼の業に卽して能く道を作るを名づけて業道と爲すと、是の如きの相を業道と

を修して心を一境に安住せしめて動かざるなり。

【一六】身口の七業とは十業の中、前七にして一殺生。二、偸盜。三、邪婬。四、妄語。五、兩舌。六、惡口。七、綺語。にして身口に關するものなり。

【一七】餘の三とは、卽ち八、貪欲。九、瞋恚。十、邪見。の三にして意に關するの業なり。意とは思量の義なり。心とは萬法集起の根本を云ふ。

【一八】捲手とはにぎりこぶしなり。

を持つて他意を求めざるが故に。三十三には威儀戒を持つて一切の善根自在なるを得るが故に。三十四には如說戒を持つて人歡喜せざること無きが故に。三十五には慈心戒を持つて衆生を護るが故に。三十六には悲心戒を持つて能く諸の苦を忍ぶが故に。三十七には喜心戒を持つて懈怠せざるが故に。三十八には捨心の戒を持つて[11]愛恚を離るるが故に。三十九には自省の戒を持つて心善く分別するが故に。四十には短缺を求めざるの戒を持つて他心を護るが故に。四十一には善攝の戒を持つて善く守護するが故に。四十二には慧施の戒を持つて衆生を教化するが故に。四十三には忍辱の戒を持つて心に罣礙無きが故に。四十四には精進の戒を持つて退還せざるが故に。四十五には禪定の戒を持つて諸の禪支に長ずるが故に。四十六には智慧の戒を持つて多聞の善根[12]厭足すること無きが故に。四十七には多聞の戒を持つて博學にして堅牢なるが故に。四十八には善知識に親近するの戒を保つて菩提を助成するが故に。四十九には惡知識を遠離するの戒を持つて惡道を遠離するが故に。五十には不惜身の戒を持つて無常の相を觀ずるが故に。五十一には不惜命の戒を持つて善根を勤行するが故に。五十二には不悔戒を持つて心清淨なるが故に。五十三には不邪命戒を持つて心行清淨なるが故に。五十四には不焦戒を持つて畢竟清淨なるが故に。五十五には不燒戒を保つて善く行業を修するが故に。五十六には無慢戒を持つて心下りて憍せざるが故に。五十七には[13]不掉戒を持つて諸欲を遠離するが故に。五十八には不高戒を持つて心平直なるが故に。五十九には柔和戒を持つて心に抵突無きが故に。六十には[14]調伏の戒を持つて惱害すること無きが故に。六十一には寂滅の戒を持つて心に垢穢無きが故に。六十二には順語の戒を持つて說の如く行ずるが故に。六十三には化衆生の戒を持つて攝法を離れざるが故に。六十四には護正法の戒を持つて如實に違せざるが故に。六十五には頌の如く成就するの戒を持つて諸の衆生に於て心平等なるが故に。六十六には佛に親近するの戒を持つて佛の[15]三昧に入り一切諸佛の法を具足するが故に。是の故に名づけて修

がしきなり。

【一一】愛恚は愛することゝ恨み怒ること。

【一二】厭足とは十分に滿足するなり。

【一三】掉とは心を高擧せしめ安靜せしめざる煩惱なり。宋元明三本は淫に作り宮内省圖書寮本は始に作れり。

【一四】調伏とは身口意の三業を調伏して諸の惡行を制伏するなり。

【一五】三昧(Samādhi)とは定

又、修行を成就すとは一切種清淨を成就するを以ての故なり。是れ何の義を明せる。諸の菩薩は善業道を修行して一切種一切眷屬清淨なるを以て彼の時に菩薩、善業道の修行を成就すと名づく。應に知るべし、彼の修多羅の中に說くが如し。無盡意の言く、唯、舍利弗、菩薩の戒は衆くして六十六事清淨なり。修治も亦盡すべからず。何等をか名づけて六十六事と爲す。一には他の衆生に於て[三]惱害を起さず。二には他の財物に於て竊盜を生ぜず。三には他の婦女に於て終に邪視せず。四には諸の衆生に於て欺誑有ること無し。五には初、兩舌ならずして自の眷屬に於て止足を知る故に。六には惡口有ること無くして[四]麁獷を忍ぶが故に。七には[五]綺語有ること無くして常に善く說くが故に。八には他の樂事に於て貪嫉せざるが故に。九には初より瞋恚無くして惡言を忍ぶが故に。十には[六]正見にして餘の道をも邪賤せざるが故に。十一には深く佛を信じて心、濁らざるが故に。十二には法に信順して善く法に法るが故に。十三には僧を信敬して聖衆を尊重するが故に。十四には[七]五體を地に投じて佛を志念するが故に。十五には五體を地に投じて法を思惟するが故に。十六には五體を地に投じて僧を宗敬するが故に。十七には禁戒を堅持して一切犯すこと無く乃至小禁をも放捨せざるが故に。十八には不缺戒を持つて餘乘に依らざるが故に。十九には不穿戒を持つて惡處生を離るるが故に。二十には不荒戒を持つて諸の[八]結に雜はらざるが故に。二十一には不汚戒を持つて專ら白法に長ずるが故に。二十二には是の深戒を持つて隨意に迴向し自在たるを得るが故に。二十三には讚歎の戒を持して智者呵せざるが故に。二十四には純善の戒を持つて[九]正念にして知るが故に。二十五には不可戒を持つて一切の戒を散ぜざるが故に。二十六には善堅の戒を持つて諸根を防護するが故に。二十七には名聞戒を持つて諸佛の念ずる所となるが故に。二十八には知足戒を持つて厭せざる無きが故に。二十九には少欲戒を持つて貪惜を斷ずるが故に。三十には性淨の戒を持つて身心寂滅するが故に。三十一には阿蘭若の戒を持つて[一〇]憒鬧を離るるが故に。三十二には聖種戒

【三】大正大藏經は惱苦とするも宋、元、明三本及宮內省圖書寮本は惱害とす今は後者に依る。

【四】麁獷とはあらあらしきこと。

【五】綺語とは一切婬意を含む不正の言詞なり。

【六】正見とは諸の邪倒を離れたる正觀なり。

【七】五體とは五輪とも言ふ、右膝、左膝、右手、左手、頭首の事なり。故に五體投地とは敬禮の最上なり。

【八】結とは煩惱なり。

【九】正念とは邪分別を離れて法の實性を念ずるなり。

【一〇】憒鬧とは心みだれさわ

なり。又、十地修多羅の中に說くが如し。是の菩薩は復、一切の衆生の中に於て、安隱心・柔軟心・慈心・悲心・憐愍心・利益心・守護心・我心・平等心・師心・世尊心を生ず。又、菩薩は復、此の念を作す、是の諸の衆生は邪見に墮し、惡意惡心にして惡道稠林に行ず、我、應に彼の衆生をして眞實の道を行じ正見道の如實の法の中に住せしめむ。と。是の如き等なり。是の故に名づけて修行を成就すと爲すなり。

又、修行を成就すとは、善業道を修行して畢竟して無盡なるが故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は三寶を斷絕せざる爲に修行斷絕せず、常に善業道を修行して無盡なるを以て是の故に名づけて修行を成就すと爲すなり。無盡意修多羅の中に說くが如し、大德舍利弗、諸の菩薩摩訶薩の尸波羅蜜は無盡なり。常に修行するを以ての故なり。何を以ての故に、凡夫の戒は所受生に在り、是の故に有盡なり。人中の十善は盡きることある故に有盡なり。欲界の諸天の福報功德は盡きることある故に有盡なり。色界の諸天は禪無量を以て盡きることある故に有盡なり。無色界の天は諸の定に取入して盡きること有る故に有盡なり。外道仙人、所有の諸戒は神通を退失して盡きることある故に有盡なり。一切の聲聞、學無學[二]の戒は涅槃に入るの際盡きるが故に有盡なり。辟支佛の戒は大悲心無くして盡きるが故に有盡たり。舍利弗、菩薩の淨戒は皆、盡きること有ること無し。何を以ての故に。是の戒の中に於て一切の戒を出せばなり。種無盡なれば果も無盡なるが如く是の菩提の種は盡きる可からざる故に如來の戒禁も亦盡きること有ること無し。

又、修行を成就すとは身見の煩惱の垢を遠離する故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩の十善業道は我見等の垢を離るゝを以て、彼の時に名づけて清淨の業道と爲す。是の故に菩薩は修行を成就するなり。即ち彼の修多羅の中に說く、清淨の戒とは所謂、我相戲論に著せざるなり。と。是の如き等を是の故に名づけて修行を成就すと爲すなり。

【二】學無學とは眞理を研究して妄惑を斷ずるを學と言ひ眞理究り妄惑斷じ盡くして、更に修學すべき無きを無學と云ふ。

卷の第四

又、修行を成就すとは一切種の修行清淨なるを起すを以ての故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は一切種の清淨なる十善業道を起すを以て是れを菩薩、修行を成就すと名づく。十地修多羅の中に說くが如し。是の菩薩、復、深く思惟す。十不善業道を行じて因緣を集むるが故に則ち地獄・畜生・餓鬼に墮ち、十善業道を行じて因緣を集むるが故に則ち人中に生じ乃至有頂處に生ず。又、是より上の十善業道は智慧の觀と和合し修行するも其の心狹劣なる故に、心、三界を厭畏する故に、大悲を遠離する故に、他の聲を聞きて而して通達する故に、聲聞意解して聲聞乘を成ず。又、是より上の十善清淨の業道は、他に從て聞かざる故に、自ら正覺する故に、大悲方便を具足する能はざる故に、而も能く深因緣の法に通達して辟支佛乘を成ず。又、是より上上の十善業道は清淨具足し、其の心、廣大無量なる故に、諸の衆生の爲に悲愍を起すが故に、方便所攝の故に、善く大願を起す故に、一切衆生を捨てざるが故に、佛智の廣大を觀ずる故に、菩薩地清淨、波羅蜜清淨にして深廣の行を成ずるなり。又、是より上上の十善業道は一切種清淨の十力に力むる故に一切の佛法を集めて、成就せしむるが故に、是の故に我應に等しく十善業道を行じ、一切種を修行して清淨具足せしむる故に是れを菩薩、修行を成就すと名づくるなり。

又、修行を成就すとは一切衆生を利益する爲に十善業道を修行するを以ての故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は自の樂に著せざるを以て十善業道を修行し、衆生を利益せん爲に我能く衆生を利益するを見し、慈悲心は直に自利に非ずして能く自ら己を利し復、能く他をして十善業道に住せしむるを以て、是の故に菩薩は修行を成就するなり。是の義を以ての故に十地修多羅の中に說く、是の故に我當に先に善法に住し亦、他人をして善法に住せしむ。と。是の故に修行を成就する

【一】有頂處は有頂天、即、色界の第四、色究竟天なり、形ある世界の最上に位する故、有頂天と言ふ。

たり。又修行を成就すとは諸地の謂はゆる歡喜地・離垢地・明地・焔地・難勝地・現前地・遠行地・不動地・善慧地・法雲地を說くなり。是れを菩薩修行を成就すと名づくるなり。

又、修行を成就すとは諸の菩薩は深心に勝妙の法を攝取する故なり。是れ何の義を明せる。菩薩は深心に妙法を攝取して三寶を斷絕せざる爲に、衆生を敎化する爲に菩提の行を行じ、一切種智の爲に善業道を修す。是の故に菩薩は善業道を修行することを成就するなり。菩薩は五種の法、有つて妙法を攝取す。何等をか五と爲す。一には諸佛の恩を報ぜんと欲する爲に。二には自身の爲の故に妙法をして常住せしむ。三には佛を供養する故に。四には無量の衆生を利益せんと欲する爲に。五には得難き妙法なる故なり。彼の法に復五種の法有るが故に名づけて妙法を攝取すと爲す。何等をか五と爲す。一には自ら如實に修行し。二には他をして如實に修行せしめ。三には諸の魔惡刺を降伏し。四には黑阿波提舍を捨て。五には大阿波提舍を攝取するなり。諸の比丘、是れを菩薩修行を成就すと名づくるなり。

又、修行を成就すとは所作の業は譏呵す可き無きを以ての故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩の一切の所作は善業道等を修行することに住持するを以て、皆、譏呵す可からず。是れを菩薩、修行を成就すと名づくるなり。五種の法有りて諸業譏呵す可からざることを成就す。何等をか五と爲す。一には爲作する所、有れば一切能く成る。二には能く大果を得。三には善法に違はず。四には淸淨の法に隨順す。五には德稱名聞なり。是れを菩薩修行を成就すと名づくるなり。

彌勒菩薩所問經論卷第三

中に於て應に是の如く入るべきを知り、如實に是の如く迴轉するを知り、如實に安樂の中に置くを知り、如實に是の如く佛法の中に置きて復、迴轉して外道の法たる彼の處の非十二因緣觀を取らざるを知る。是の迴轉觀(ゑてんくわん)を是れを迴轉入智と名づくるなり。合智(がつち)とは諸の衆生に隨て何等何等の門相を以て善に合し、彼彼の門を知り、彼彼の門に依り、彼彼の衆生に合し、信の如く、力の如く、分の如く敎化す。是れを合智と名づくるなり。得意智とは衆生の意を知り、衆生の信を知り、衆生の求を知る、是の如きを知りて菩薩は彼の修行に入り、信に入り、求に入り、言語に入りて彼に隨順するが故に可化(かけ)の事を起し、是の如きを起して迴轉せず。是れを〔一〇〕得意智と名づくるなり。次第智とは衆生の業の次第に覺し展轉して覺するを知る。所謂、聲聞乘の中にては布施、持戒の人天の果報を說き、諸の欲過を說き、在家の染過(せんくわ)を說き、出家の利益を說き、又、〔一一〕苦集滅道を說き、次に須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢果を說き、次に不可壞の解脫を說き、次に無礙を說く。辟支佛乘の中に於ては過を貯積せば用の利益を散ずるを說き、在家の過、出家の利益を說き、戲論の過、靜默の利益を說き、聚落の過、〔一二〕阿蘭若の利益を說き、多欲にして足るを知らざるの過、少欲にして足るを知るの利益を說き、諸根の門を護り食に於て量を知り、初夜、後夜に修行に精勤し觀中の念想は空閑處を樂しむに過るを說き、戒重・三昧重・般若重を說き譏訶せられず、自の利益を讚歎し、深法は他知に非ずと讚歎す。是の如き等、大乘中に於て憂波提舍(うぱだいしや)布施持戒忍辱精進禪定智慧と次第し、次に實に慧を捨滅することを說く。是れを次第智と名づくるなり。又修行を成就すとは十句願十句盡、十句遠離退轉法なり。不退轉法を修行し、堅固精進を讚歎し、堅固心を讚歎し、安住智を讚歎す。是れを菩薩修行を成就すと名づくるなり。又修行を成就すとは住地法を讚歎し、一向畢竟地法を讚歎し、染退地法を說き、清淨地法を讚歎し、能進趣地法を讚歎し、住地中間可得の法を讚歎し、地退の法を說きて地果の法を讚歎し、地の習氣果法を讚歎す。是れを菩薩修行を成就すと名づくる

〔一〇〕得意智は大正大藏經には合智と作るも宋、元、明、三本及び宮内省圖書寮本は得意智となす。今は得意智の說明なる故に後者に據る。
〔一一〕苦集滅道は四諦と言ひ、佛敎の根本敎義なり。
〔一二〕阿蘭若は靜處の意。

若し指鉗、或は一指節を以て能く三千大千世界を擧げて無量劫に住すとも此の事は難に非ず、發心して能く阿耨多羅三藐三菩提を取る、是の事を難と爲すなり。是の故に菩薩は善業道を修行して希有を成就するなり。精進とは、菩薩、是の思惟を爲す。衆生能く大勇猛心を發し無量無邊に精進に勤むれば少は言ふに足らず。若し能く精進して菩提を求むれば是れ最も希有なり。と。是の故に菩薩は若し第一希有無量の功德を求めむと欲せば大精進に依て善業道を修す。是の故に菩薩は善業道を修して希有を成就するなり。堅固とは、諸の菩薩は大精進を發して善業道を修行するを以て第一希有堅固の力の中に住する故に能く進趣して精進を究竟す。是の故に菩薩は善業道を修行して希有を成就するなり。慧とは菩薩は是の思惟を爲す。勇猛・精進・堅固等の法は皆、般若の根本に依て而して有るなり。是の故に般若は希有の法なり。何を以ての故に。般若に依るを以て勇猛・精進・堅固有るを得。是の故に菩薩、是の思惟を作す。般若希有の法に依て善業道を修行す。是の故に菩薩は般若を成就するなり。果とは善業道等を修行するに依るを以ての故に能く果を生じ、無量無邊の一切の佛法を證得す。是の故に希有の法を成就するなり。

又、修行を成就すとは方便攝取の故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は方便力の攝取に依て善業道を修行するを以ての故に聲聞、辟支佛等に同ぜず。是の故に菩薩は修行を成就するなり。菩薩は五種の法有りて方便を攝取す、應に知るべし。何等をか五と爲す。一には時處智。二には迴轉入智。三には合智。四には得意智。五には次第智なり。時處智とは、何等の時を以ては應に是の如きの法を說くべし。何等の處を以ては應に是の如きの法を說くべし。何等の時に隨つては應に是の如く衆生を化すべし。何等の處に隨つては應に是の如く衆生を化すべし。彼は一切を如實に知り、如是如是の時處智に依るを以て、如是如是に衆生を教化す。是れを時處智と名づくるなり。迴轉入智とは菩薩は如實に諸の衆生、外道の法の中に於て應に是の如く迴轉すべきを知り、如實に佛法の

【九】指鉗とは指ではさみつかむなり。

て十善業道を修行するを以て、是の故に菩薩は無量時に於て十善業道を修行するなり。無量の善法とは諸の菩薩は無量の善法を修行するを以て、彼の善法は無量なるを以て、是の故に菩薩は無量の善業道の修行を起すなり。如來清淨毘尼大乘修多羅の中に說くが如し。迦葉、四大海の中に滿てる生酥は一切衆生の受用する所なるが如く、菩薩摩訶薩の一切の有爲の善根を修集せるも亦復是の如し。諸の菩薩は迴向して彼の無漏智を取るを以ての故に、能く一切衆生の受用に與ふ。無量觀とは無量の衆生を觀ずる爲の故なり。諸の菩薩は有量の衆生の爲に十善業道を修行するに非ざるを以て是の念を作さず。我、若干の衆生の爲に善根を修集し、若干の衆生の爲に善根を修集せず。と。是の故に菩薩の善業は無量なり。無盡とは、如來清淨毘尼修多羅の中に說くが如し。諸の天子。譬へば長者の財富無量なるが如し。是れ大捨者なり。大慈を行ずる者なり。大悲を行ずる者なり。大商主なる者なり。一切の諸の衆生を憐愍する故なり。而して修行者、不退心者は是の如きの心を起す。我、能く彼の一切衆生に無量無邊の安隱の樂を與ふ。と。諸の天子。菩薩摩訶薩も亦復、是の如し。深心に住するを以て諸の衆生の爲に、安隱の心に住して大精進を起し是の思惟を作す、我、當に無量無邊の苦惱の衆生を教化して皆悉く涅槃の樂の中に安置す。と。是の故に菩薩の修行は無盡なり。無量迴向とは初地の中にて無量の願行たる十[八]盡句等を起すが如く、菩薩は彼の十盡無量なるを以て、修行する善業道も亦復無量なり。先の迴向無量なるに依るを以ての故に菩薩摩訶薩の一切の善業道を修行するの果も亦復、無量なり。是れを無量迴向と名づくるなり。

又、修行を成就すとは眞實を以ての故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩摩訶薩は眞實、希有なる十善業道を修行するを以て、是の故に菩薩は修行を成就するなり。菩薩、五種の法有りて希有を成就す。何等をか五と爲す。一には大勇猛心を起し、二には精進、三には堅固。四には慧。五には果なり。大勇猛心を起すとは、發心して能く阿耨多羅三藐三菩提を取るなり。假使、人有つて、

【八】十盡句とは、衆生界盡、世界盡、虛空界盡、法界盡、涅槃界盡、佛出現界盡、如來智界盡、心所緣界盡、佛智所入境界盡、世間轉法轉智轉界盡にして一切を成佛せしむる爲の願行なり。

善業道を修行して諸の世間に勝るを以て、是の故に名づけて修行を成就すと爲すなり。應に知るべし。菩薩、五種の法、有つて十善業道を修行し能く一切世間に過ゆるなり。何等をか五と爲す。一には願、二には安隱、三には深心、四には善く清淨なり。五には方便なり。願とは菩薩摩訶薩の凡て發す所の願にして、一切の凡夫、聲聞、辟支佛には是の如き願無し。是の故に菩薩は願に依て十善業道を修行せば則ち能く一切世間を出過するなり。摩訶衍修多羅の中の如し、無垢德女所說經に言く、尊者目連、諸の菩薩摩訶薩は初發心、從乃ち道場に至り、常に一切の世間、天人の爲に而も福田を作す。諸の聲聞、辟支佛に勝るが故なり。安隱とは諸の菩薩は一切世間の極めて深重なる苦の惱の逼る所と爲ると雖も能く迴轉せずして阿耨多羅三藐三菩提心を取り、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に專心に十善業道を修行す。是の故に菩薩は安隱の心に依て、十善業道を修行せば則ち能く一切世間を出過するなり。深心とは最勝の修行なるを以ての故に諸の菩薩は最も深愛の心を以て十善業道を修行す。是の故に、菩薩は深心に依るが故に十善業道を修行せば則ち能く一切世間を出過するなり。清淨とは二地已上の清淨の菩薩は除く、何を以ての故に。諸の菩薩摩訶薩等は三種の清淨有りて十善業道を修行するを以て是の故に菩薩は清淨に依て十善業道を修行せば則ち能く一切世間を出過するなり。方便とは菩薩は何等の法の中に於ては何等の方便を以て十善業道を修行す。餘の世間の衆生には是の如き方便無し。是の故に菩薩は方便力に依て十善業道を修行せば則ち能く一切世間を出過するなり。

又修行を成就すとは時等無量なるを以ての故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は無量世に於て十善業道の無量の行等を修行するを以て是の故に菩薩は修行を成就するなり。又諸の菩薩は五種の法を得るを以ての故に無量の十善業道を修行す。何等をか五と爲す。一には無量世。二には無量の善法。三には無量觀。四には無量盡。五には無量迴向なり。無量世とは諸の菩薩、無量世を過ぎ

二には常に修行する故なり。三には自身を安隱と爲す故なり。四には他身を安隱と爲す故なり。五には善く清淨なるが故なり。專心に修行すとは畢竟して一味の心を離れざるが故なり。常に修行すとは不斷、不絶、不休息の故なり。自身を安隱にすとは、身に人天の安隱及大菩提を取るが爲の故なり。他身を安隱にすとは一切衆生に安隱を與へる爲に畢竟して大菩提に迴向するが故に、無數の衆生を救過するを以ての故なり。善く清淨なりとは不破の故なり。不黠の故なり。不汚の故なり。無所屬の故なり。善く究竟するが故なり。不食の故なり。智者、讃歎するが故なり。破とは少分は修治し、小分は修治せざる故に名づけて破と爲す。是の故に菩薩、具足して修治するを名づけて不破と爲すなり。黠とは自ら修行せず他をして修行せ敎むるが故に名づけて黠と爲す。是の故に菩薩、自身に修行し、他をして修行せ敎むるを名づけて不黠と爲すなり。汚とは自ら修行せず、他をして修せ敎めず、他の修行するを見て而も心隨喜するが故に名づけて汚と爲す。是の故に菩薩、具足して修行するを名づけて不汚と爲すなり。屬とは他智に依て而して能く修行せんことを要むるが故に名づけて屬と爲す。是の故に菩薩、他智に依らずして而して能く修行するを無所屬と名づくるなり。善く究竟すとは、專念に欲心を畢竟し、專念に愛心を畢竟し、專念に恭敬心を畢竟し、專念に信心を畢竟し、專念に畏心を畢竟し、專念に無常心を畢竟するなり。此の義を以ての故に善く究竟すと名づくるなり。食とは有取に迴向して資生有るが故に名づけて食となす。是の故に菩薩、有を取せざるを名づけて不食となすなり。智者、讃歎せずとは、聲聞、辟支佛乘の中にては世間に迴向し、大乘の中にては聲聞、辟支佛乘に迴向するが故に、知者讃歎せずと名づく、是の故に菩薩は聲聞、辟支佛乘の中にて世間に迴向せず、大乘の中にて聲聞、辟支佛乘に迴向せず、是の故に名づけて智者讃歎すと爲すなり。

又、修行を成就すとは一切の諸の世間に出過するが故なり。是れ何の義を明せる。諸の菩薩は十

而して彼の深心は見るを得可からず。深心に依るを以ての故に眼耳等の識は境界の中に於て損害等の心を發起する能はず、他を利益する爲に殺等の行を離れ、彼の心を示現す。是の義を以ての故に深心を說いて後に次に修行を說くなり、應に知るべし。又復、次第の義をも示現する故なり。此れ何の義を明せる。一切の諸法は應當に是の如く次第に生ずべきが故に先に深心を說き後に修行を說くなり。

問ふて曰く、云何んが修行の義なる。答へて曰く、他を利益する爲に不損害の深心を起し、身口意の業は自利の行及び利他の行に攝す。是れを修行と名づく。問ふて曰く、云何んが菩薩は修行を成就せる。答へて曰く、外道、聲聞、辟支佛と共せざるが故なり。此れ何の義を明せる。諸の外道は世間の樂を求めて善業の道を修し、世間の樂の果報に貪著するを以ての故に、所修の諸の行は世間の果を成じ、其の世間の果を成就するを以ての故に彼は修行を成就するを得る能はざるなり。又聲聞、辟支佛等は涅槃の樂を求めて善業の道を修し、大悲心を離れ小乘の涅槃の果を成就するを以ての故に、彼の聲聞の人は菩薩の果に於て名づけて修行を成就すると爲すを得ざるなり。菩薩は一切世間を過へて、諸の世間の種種の過失を見、乃ち轉輪聖王の樂の果報等にも著せざるに至り、復能く小乘の涅槃を證すると雖も、大慈悲勇猛心に依るが故に、涅槃の樂を捨てゝ佛菩提を求めて十善業を修す。一切の諸の衆生を救ふ爲の故に大勝願を攝び、其の心唯、一切種智を以て、以て究竟と爲す。是の故に菩薩は一切の外道、聲聞、辟支佛等に同ぜずして十善業道を修行す。是の故に名づけて修行を成就すと爲すなり。

又、修行を成就すとは增上の十善業道を受持するが故なり。此れ何の義を明せる。菩薩の修行は聲聞、辟支佛等の十善業道に過るを以て、是の故に名づけて修行を成就すと爲すなり。諸の菩薩摩訶薩は五種の法有りて聲聞の十善業道に勝る。何等をか五と爲す。一には專心に修行する故なり。

十六、智慧知過去世無礙。
十七、智慧知未來世無礙。
十八、智慧知現在世無礙。

諸の菩薩は畢竟して深心を成就し得るを以て能く慳嫉等の菩提道に相違するの法を降伏す、彼の時に菩薩を名づけて深心を成就すと爲す、應に知るべし。聖者無盡意經の中に說くが如し。大德舍利弗。諸の菩薩の深心とは嫉妬を降伏し慳嫉の衆生を敎化する故に、是の如き等を名づけて深心を成就すと爲すなり。と。應に知るべし。又、深心を成就すとは、因果不盡を以ての故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩の深心は因果不盡なるを以て、彼の時に名づけて柔軟菩薩と爲す、應に知るべし。因不盡とは修行廣大にして無量無邊なるが故なり。果不盡とは一切の佛法は無量無邊にして三寶の因を斷絕せざるを以ての故なり。又、無盡意經の中に說けり。菩薩、深心に施等を修行し其の能く一切の物を捨つるを以ての故に、是れを菩薩、修行を成就すと名づくるなり。是の如き等なり。又言く。大德舍利弗。諸佛如來の十力四無所畏、(七)十八不共法、略して說くに、乃至、一切の佛法は皆盡す可からず。是の故に深心も亦盡す可からず。修行の果も盡す可からざるを以ての故に、故に菩薩深心を成就すと言ふなり。又、深心を成就すとは此の經の說に依つて應に知るべし。此の經の中に說くを以てなり。

彌勒、若し菩薩摩訶薩、佛を讃歎し及び佛を毀呰するを聞くも、其の心、畢竟して阿耨多羅三藐三菩提に於て堅固にして動ぜず、是の如く若し法、僧を讃歎し、法、僧を毀呰するを聞くも亦、是の如し。菩薩是の如く如實に十二因緣を見知するは卽ち諸佛如來の法身を知り、三寶の中に於て堅固の心を成ず。無漏智は畢竟して深心を得るを以ての故に一切の外道、諸の魔怨敵は退轉する能はざるなり。是の故に菩薩は深心を成就するなり。

問ふて曰く、何の義を以ての故に先に深心を說き、次に修行を說くや。答へて曰く、彼の修行は是れ證智の因なるを以ての故なり。此れ何の義を明せる。修行の心は能く深心と與(とも)に證因を作るを以ての故に、大慈大悲の心を起すを以ての故に、是の心、卽ち是れ佛果を護持す、應に知るべし。

陀(Dhūta)は衣食住に對する執着を離るるの行なり。

【七】十八不共法とは佛に限りて二乘菩薩に渡らざる十八種の德法なり故に不共法と言ふ。左の如し、

一、身無失。
二、口無失。
三、念無失。
四、無異想。
五、無不定心。
六、無不知已捨。
七、欲無減。
八、精進無減。
九、念無滅。
十、慧無滅。
十一、解脫無減。
十二、解脫知見無減。
十三、一切身業隨智慧行。
十四、一切口業隨智慧行。
十五、一切意業隨智慧行。

は善根尸羅を得るが如く、一切の善法の無量の差別は悉く尸羅と名づけ、而も身口意の三業、成就するを名づけて尸羅と爲す。何を以ての故に。身口意の業は諸の善法と與に根本と爲す故なり。深心も亦爾なり。佛菩提の因なる一切の善行と與に根本と爲すを以ての故なり。是の故に伽耶山頂經の中に、月淨光德天子、文殊師利に問ふて言く、諸の菩薩摩訶薩の深淨の心は何を以て本と爲すや。文殊師利答へて言く、天子、諸の菩薩摩訶薩の深淨の心は阿耨多羅三藐三菩提心を以て本と爲すなり。と。是の義を以ての故に、此の修多羅の中に說く所の深心は菩提心の本と爲すなり。金剛密迹經の中に諸の菩薩摩訶薩の深心の功德は世間を誑はさずと說くが如し。是の故を以て說いて菩提の因と爲すなり。應に知るべし。

問ふて曰く、何の義を以ての故に菩薩は深心を成就すると言ふを得るや。答へて曰く、一切所治の法は動轉する能はざるを以ての故なり。此れ何の義を明せる。種種の苦惱は動轉する能はざるを以て、一切の菩薩は菩提心を求む。彼の時に菩薩を名づけて深心を成就すと爲す。應に知るべし。又、諸の菩薩は他身の樂心に力を有して自身の樂心を降伏する故なり。此れ何の義を明せる。彼の菩薩の自ら樂心を求むるは他と與に樂しむ爲なれば深心に降伏す。彼の時に菩薩を名づけて深心を成就すと爲すなり。應に知るべし。又、深心を成就すとは究竟に至るを以ての故なり。此れ何の義を明せる。深心に依つて下中上の法、次第に增長し、乃ち畢竟して堅固となるに至るを以て名づけて深心を成就すと爲すなり。應に知るべし。又、深心を成就すとは捨て難きを能く捨てるの心を起すを以ての故なり。此れ何の義を明せる。若し諸の菩薩、檀等の難行の布施を修行し、深心に修行等の心を發起せば彼の時に菩薩を名づけて深心を成就すと爲すなり。應に知るべし。聖者無盡意經の中に說くが如し。[六]頭陀等の捨て難きを能く捨つるを以て名づけて深心を成就すと爲すなり。應に知るべし。又、深心を成就すとは能く慳嫉等の心を降伏するを以ての故なり。是れ何の義を明せる。

【六】頭陀は大正大藏經には頭施に作るも今は宮內省圖書寮本に依りて頭陀となす。頭

の道を攝する故に彼の經の中に說くが如く復、二種の略道有り。何等をか二と爲す。一には有量道なり。二には無量道なり。有量道は相の分別を取り、無量道は相の分別を取らず。又深心、從乃ち方便等に至る七句は相の分別を取り有量道に攝す。應に知るべし。是の如く般若波羅蜜を成就するは相の分別を取らず無量道に攝す。應に知るべし。是の如く四家、四攝、四無量、[四]三十七品の諸の菩薩摩訶薩の一切功德は義に隨つて八法に相應し皆攝る、應に知るべし。

問ふて曰く、應に深心の義を說くべし云何んが深心の義なる。答へて曰く、深心の義とは、心、實に非心相應に任せず、慢使の異の相、五陰相應の起業の修行は因果を增長するも深心の因に相違し涅槃の果に相違し、善根を修行するも心相應の行に非ず、陰聚に屬し、體は涅槃の果に隨順す。聞慧に因つて餘の慧等を生ずるが如し。是れを深心と名づくるなり。又、深心とは心、少時も離心相應に任せば、善根の行體は行に依て行を起すこと猶、流水の如く次第に法を生ず、是れを深心と名づくるなり。又、深心とは種子生に依るなり。猶、乳等の一切の白法の因緣に隨順するが如く善法を修行す。是れを深心と名づくるなり。又、深心とは、久しく卷ける物は暫らく[五]牽舒すと雖も放てば還つて本に依るが如く、深心も亦爾なり。本因に隨つて法を作るも、還り續くこと本の如し。一なりと說くべからず、異なりと說くべからず。是を深心と名づくるなり。又深心とは白法を修學するを名づけて深心となすなり。又、深心とは一切の諸の善根の法を修行して不失、不增、不減の大涅槃の法を成就するを名づけて深心と爲すなり。

問ふて曰く、毘摩羅吉利致所說經に說くが如く、菩薩摩訶薩は無量の行を修して無量の心あり。此の深心は何の行をか起すと爲す。答へて曰く、此の深心は悉く能く佛菩提を求めて一切の諸の行を發起す、是れを深心と名づくるなり。何を以ての故に。此の深心を發せば一切の菩提の因を生ずるを以ての故に悉く能く諸の功德力を增長す。譬へば尸羅の如し。此れ何の義を明せる。持戒の人

【四】三十七品は三十七道品、三十七分法、三十七菩提分法とも云ふ。涅槃に到る道の資糧に三十七あるなり、卽、四念處四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八聖道なり。

【五】牽舒とはひきひろげること。

を攝せるを以ての故なり。此れ何の義を明せる。略して說くに、菩薩に二種の道あり。一には方便差別道。二には慧道なり。深心を成就して乃ち方便等の諸句に至るは、方便差別道を示現し、般若波羅蜜を成就するは慧道を示現するなり。是の故に文殊師利問菩提經の中に聖者文殊師利の言はく、諸の天子、菩薩摩訶薩は略して道に二有り。此の略道を以て速かに阿耨多羅三藐三菩提を得、何等をか二と爲す。一には方便道、二には慧道なり。方便道とは攝善の法を知るなり。智慧道とは如實に諸法を知るの智なり。又方便とは諸の衆生を觀ずるなり。智慧とは諸法を離るゝの智なり。又方便とは諸法の相應を知るなり。智慧とは諸法の不相應を知るの智なり。又、方便とは因道を觀ずるなり。智慧とは因道を滅するの智なり。方便とは諸法の差別を知るなり。智慧とは諸法の無差別を知るの智なり。又、方便とは佛土を莊嚴するなり。智慧とは佛土を莊嚴して平等無差別の智なり。又、方便とは衆生の諸根の行に入るなり。智慧とは衆生を見ざるの智なり。又、方便とは道場に至るを得るなり。智慧とは能く一切の佛菩提の法を證するの智なり。此の義を以ての故に、但、八法を說いて多からず少なからざるなり。

又、復、但、八法を說く所以は助道、斷道、を攝するを以ての故なり。此れ何の義を明せる。即ち彼の修多羅の中に說く、復次に、天子、諸の菩薩摩訶薩に復、二種の略道あり。諸の菩薩摩訶薩は是の二道を以て疾く阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。何等をか二と爲す。一には助道なり。二には斷道なり。助道とは五波羅蜜なり。斷道とは般若波羅蜜なり。深心、從乃ち方便に至るは助道と爲すを以て五波羅蜜を攝す。捨心を成就して檀波羅蜜を攝し、行心を成就して尸波羅蜜を攝し、深心を成就して羼波提羅蜜を攝し、善知迴向方便心を成就し、善知方便を成就して毘離耶波羅蜜を攝し、大慈心を成就し、大悲心を成就して禪波羅蜜を攝し、般若波羅蜜を成就して斷道を攝するなり。是の如く有礙の道、無礙の道、有漏、無漏等は皆、類して解す可し、應に知るべし。又、有量と無量

ぐるが如し。唯　精進波羅蜜のみ能く大菩提を得、と。是の故に菩薩は諸の世間に於て、心、疲惓せざるなり。又、疲惓せずとは、[二]自然智を證するを以ての故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は疲惓の因を過ゆるを以て、是の故に疲惓せざるの心を成就し、善く一切の諸の因緣の法は、法に依て法を生じ次第に增長すること猶、[三]梯隥の如くなるを知り、般若の根本に依て精進を成就す。是の故に速かに阿耨多羅三藐三菩提を證す。

又、不退不轉等の諸句は、餘の一切の修多羅の中に廣く說く、應に知るべし。又、復、義有り。不退と言ふは、深心の法を成就するを得るを以ての故なり。又不退とは、行心、捨心を成就するを得るを以ての故なり。不轉とは深心の法を成就するを得るを以ての故なり。一切の諸の魔怨敵を降伏すとは、善知迴向方便心を成就するを得るを以ての故なり。如實に一切の法の自體の相を知るとは、善知方便を成就するを得るを以ての故なり。諸の世間に於て、心疲惓せずとは大慈大悲の心を成就するを得るを以ての故なり。心疲惓せざるが故に他智に依らずして速かに疾く阿耨多羅三藐三菩提を成就するとは、般若波羅蜜を成就するを得るを以ての故なり。是の故に、佛、彌勒菩薩に告て言はく、菩薩摩訶薩は畢竟して八法を成就し阿耨多羅三藐三菩提において退せず。是の如き等なり。

問ふて曰く、何が故に如來は唯、八法のみを說いて多からず、少なからざるか。答へて曰く、此れ正問に非ず。何を以ての故に。若しは多く、若しは少くば俱に問を致すが故なり。然して佛世尊は因緣無くして此の八法を說くに非ず。此の八法を具足せば菩提の因を成就するを以ての故なり。此れ何の義を明せる。深心乃至般若波羅蜜を成就し、畢竟して此の八種の法を成就せば、菩薩の功德智慧を具足して速かに疾く一切種智を成就す。此の八法具足せば佛菩提の因を成就するを以て、是の故に如來、八法を說いて多からず少なからざるなり。又復、唯、八法のみを說く所以は菩薩道

【二】自然智とは功用を借りずして自然に生ずる佛の一切種智なり。

【三】梯隥とは、はしごなり。隥は大正大藏經は橙に作るも明藏は隥に作る今、後者に依る。

に著するを以ての故に、常に生死の苦箭の射る所と爲り世間を厭背し疲惓の心を生ず。是の故に菩薩は樂つて諸の衆生を利益するの事を作し、如實に身命を知る故に棄てゝ而も著せず。一切衆生を利益せんと欲する爲なり。是の故に菩薩は諸の世間に於て心疲惓せざるなり。菩薩能く五種の法を知るが故に自身に著せざるなり。何等をか五と爲す。一には身は過去世從、來らざるを知る。二には身は未來世に向て去らざるを知る。三には身は堅固の法に非ざるを知る。四には身には實に神我無きを知る。五には身には實に我所、無きを知る。是の故に菩薩は自身に著せざるなり。菩薩能く五種の法を知るが故に命に貪著せざるなり。何等をか五と爲す。一には智慧に依て活き邪命に依らず。二には一切の諸の不善の法を怖畏す。三には無始の世より來、未だ曾て死せざることを觀ず。四には等しく一切の諸の衆生と共に有り。五には常に保つ可からず。

又、疲惓せずとは、自らの樂に著せざる故なり。此れ何の義を明せる。諸の衆生は自身の樂に著するを以て種種の苦を受け疲惓の心を生ず。菩薩は自身の樂を捨てゝ衆生の苦を拔く。是の故に菩薩は諸の世間に於て心疲惓せざるなり。菩薩は如實に五種の法を知りて自らの樂を求めず。何等をか五と爲す。一には樂は水泡の如しと知る。二には樂は敗壞する時は苦となるを知る。三には世間の方便を得て諸の菩薩は善知識に依て正法を聽聞し、[一]繫念、思惟して以て根本と爲すを以て、身及衆生の出世の方便を得。四には他智に依らず。五には自智の力に依る。

又、疲惓せずとは、現、一切の諸の白法を見る故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は丈夫の力に依て果報を得るを以ての故に、諸の白法は丈夫の力に依るを以ての故に、無量劫の事は現見ること夢の如し、未來世に於ては他の力に依らずして自らの丈夫の力に依て諸の白法を修集す。是の思惟を作す、一切種智は他の能く與ふところに非ずして自力に依て得、是の故に菩薩は他に依らずして自ら精進を發し、諸の行を修集し、速かに阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。佛、阿難に告

【一】繫念とは念を一處にかけて他を思はざること。

を忍受するを以て、是の故に菩薩は諸の世間に於て心疲惓せざるなり。五種の法有りて諸の世間に於て能く苦惱を受く。何等をか五と爲す。一には諸法の無我を信じ、二には諸法の空を信じ、三には世間の法を觀じ、四には諸の業報を觀じ、五には諸業已に盡くることを觀察し、諸の衆生の爲に無量劫に於て而も苦惱を受くるなり。又、疲惓せずとは、深心に常に佛菩提を求むる故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は常に深心を以て涅槃を樂しみ佛菩提を求むるを以て、一切衆生に菩提の因緣たる善根種子を種へる爲に世間の行を行じ堅固に增長するを以て、是の故に菩薩は諸の世間に於て心疲惓せざるなり。復、五法有りて菩薩は常に無上菩提を求む。何等をか五と爲す。一には餘乘に同ぜずして智、餘乘に勝るが故に。二には世間の最上首なるが故に。三には自ら身を度するが故に。四には他人を度するが故に。五には一切功德藏を具足するが故に。又、疲惓せずとは、諸の衆生を教化する爲を以ての故なり。此れ何の義を明せる。菩薩は長夜に諸の世間の可化の衆生の爲に隨順して教化し、衆生世間の苦惱を斷ずる爲に種種の苦箭の射る所と爲ると雖も、而も世間に於て心疲惓せざるなり。又衆生を教化すとは、衆生の心を觀じ、諸の衆生に隨つて五乘の法に於て應に化を受くべき者には而も之を授與す。何等をか五と爲す。「一には應正遍知乘、二には辟支佛乘、三には聲聞乘、四には天乘、五には人乘、なり」。又、疲惓せずとは、勇健無畏たるが故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は大智慧の力に依るを以ての故に、勇健無畏の力に依るが故に、世間の苦箭の射る所と爲ると雖も而も世間に於て疲惓を生ぜざるなり。五種の法ありて菩薩の勇猛無畏なるを知るを得。何等をか五と爲す。一には衰損し敗壞するも、其の心、憂へず。二には一切の諸の利益の法を成就するも其の心喜ばず。三には諸の苦惱を受くるも、其の心慼へず。四には諸の勝樂を得るも、其の心欣ばず。五には瞋、喜の二相は測知す可からず。是れを菩薩の勇健無畏と名ずく、應に知るべし。又、疲惓せずとは、身命に著せざる故なり。此れ何の義を明せる。世間の人は身命

離れず、其の心、一向に不退、不轉にして、畢竟して大菩提心に安住す。是れを菩薩は諸の世間に於て心、疲惓せずと名づくるなり。又、疲惓せずとは、願、堅固なるを以ての故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は大慈悲等に依て衆生を利益するの行を起すを以て、畢竟して深心の根本の諸の行を得善く堅固の心を知る故に諸願に隨順し利益の行を作す。是の故に菩薩は諸の世間に於て心、疲惓せざるなり。問ふて曰く、何をか名づけて菩薩の堅固の願と爲すや。答へて曰く、五種の法、有り、名づけて菩薩の堅固の願と爲す。何等をか五と爲す。一には聲聞乘は動轉する能はず。二には辟支佛乘は動轉する能はず。三には諸の外道の論は動轉する能はず。四には一切の諸の魔は動轉する能はず。五には無因、無緣を以て自然に動轉せず。是の故に菩薩は諸の世間に於て心、疲惓せざるなり。復五法有りて諸の世間に於て心、疲惓せず何等をか五と爲す。一には若し利益を衰損するを見るも心に憂喜無し。二には所作、已に辨じ如實に道を知る故に。三には如實に道果を知る故に。四には自身に寂靜を得る故に。五には諸の衆生の苦惱の心を拔く故に。是の故に菩薩は諸の世間に於て心疲惓せざるなり。又、疲惓せずとは大慈大悲の心を得るを以ての故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は大悲心を得るを以て、諸の衆生の生等の極苦の淤泥に沒溺し無明に盲せられ、貪愛に縛せられ歸依する所、無きを見て、菩薩は慈悲の心力を得るを以て智慧を首と爲し勤行精進し衆生の苦を拔き、諸の衆生の爲に世間の中に於て苦惱の業を受く。是の故に菩薩は諸の世間に於て心疲惓せざるなり。復、五法有りて菩薩に大慈悲心有るを知る。何等をか五と爲す、一には衆生と安隱に樂しむ爲の故に一切の資生の物を惜まず。二には身命を惜まず。三には命を護惜まず。四には一切行を修するに多時を待たず。五には怨親等を悲しむ。是の故に菩薩は諸の世間に於て心疲惓せざるなり。又、疲惓せずとは、能く一切の諸の苦惱を忍ぶが故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は依緣の力を得るを以て、其の心勇猛にして無數劫を過ぐるも能く苦惱を受く。能く一切の苦惱

卷の第三

問ふて曰く、云何んが諸の世間に於て、心、疲惓せざる。答へて曰く、見道の時に於て身見等の疲惓の因を離るゝが故なり。此れ何の義を明せる。諸の凡夫は我相を取るを以ての故に、生死等の種種の諸の苦の逼る所の惱の爲に、世間の中に於て疲惓の心を生ず。諸の菩薩等は法の體を見るの時、皆、悉く我相等に著することを遠離す。是の故に菩薩は諸の世間に於て心、疲惓せざるなり。又、復、諸の世間に於て心、疲惓せざる所以は、五怖畏を遠離するを得るを以ての故なり。此れ何の義を明せる。世間の衆生は未だ不活等の五怖畏を離れざるを以ての故に、諸の世間に於て疲惓の心を生ず。菩薩は、不活等の五怖畏を離れ、我相等を離るゝを以ての故に、功德、知慧を具足し修集す。是の故に菩薩は諸の世間に於て心、疲惓せず、又、一味の利他心を得る故に心、疲惓せず。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は慈悲心に依て利他の行を起すを以て深心を善く修す。猶大海の同一鹹味なるがごとし。菩薩は亦、爾なり。他を利益して一味の心なる故に諸の菩薩の他を利益するの行は卽ち是れ自利なるを以て衆生を利する爲に諸の行を修集す。是の故に菩薩は諸の世間に於て心、疲惓せず。又、菩薩は心に安住するを得るを以ての故に諸の世間に於て心疲惓せざるなり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は乃ち、惡道、謂ゆる活地獄・黑繩地獄・合地獄・叫喚地獄・多波那地獄・波多波地獄・阿鼻地獄・究究羅地獄・死屍地獄・刀林地獄・劍林地獄・劈裂地獄・安浮陀地獄・阿波波地獄・阿吒吒地獄・憂鉢羅地獄・拘勿頭地獄・香地獄・分陀利地獄・波頭摩地獄に至り、種種の寒熱あつて諸の苦惱を受け、及び泥犁の中において畜生餓鬼修羅人天、互に相殺害し、共に相食噉、牽挽、追求し、或るものは生じ或るものは退き、我慢、嫉妬、瞋恨を起し、恩愛、別離、怨憎、合會し、老、病、死等に憂悲苦惱す、是の如き種種の諸の苦惱の相あるを以て、見聞して衆生を利益することを

如實に彼の諸法の體を知る。能く如實に諸法の體を知るとは、一切の有爲の諸行、依他因緣は常ならず、斷ならざるを見るを以て、是の義を以ての故に、斷、常の虛妄なる執著に著せず、有無不二にして中道を成就す。如實に諸の有爲の行の虛妄、不實なるを知見し、淸淨の心を得て有爲の行の虛妄なる分別を知るを以ての故に、破戒等の垢因を遠離し、淸淨なる戒を具足す。乃至、未だ成佛せざるより來、善根を修集し一切衆生に樂の因を與へ、一切種智を得しむるなり。

彌勒菩薩所問經論卷第二

を怖畏するが故に。六には不應入に入り而も常に上智を求めて衆生の爲にする故に。七には常に功德を修集し而も無常の相を信ずるが故に。八には常に智慧功德を修集し而も聲聞辟支佛智を求めざるが故に。

問ふて曰く、應に菩薩行を說くべしとは云何んが菩薩行なる。答へて曰く、菩薩行とは、菩薩、深く世間の過患、涅槃の利益を見て、智慧方便の所攝の大慈悲心を發起し、常に衆生を利益する爲に修行す、是の故に名づけて菩薩行を行ずと爲すなり。

如實に一切の法の自體の相を知るとは、一切の法を知ること、彼の法の相の如く如實に知る故なり。又、自體の相を名づけて相と爲す。彼の一切の法の自體の相の相の如く、是の如く如實に知るなり。

問ふて曰く、應に是の如く一切の法の相を知ることを說くべきも、一切の法の自體の相を知ることを說くべからず。答へて曰く、可見、能見の法は不二なることを明す爲の故に、是の故に如實に一切の法の自體の相を知ることを說くなり。此の義云何、諸法の自體の相は諸法を離れて更に相、有らざることを明す爲の故なり。問ふて曰く、若し爾らば應に諸法の體を知ることを說くべし。相を知るを說くべからず。答へて曰く、然らず。若し是の如く說かば向に說く所の過を離れず。此れ何の義を明せる。諸法の相は諸法を離れて更に體、有るが如し。恐らくは是の如く取つて彼の過を護る爲の故に二種に說く。此れ何の義を明せる。即ち、自體の相は體を離れて更に相、無く、自體と相とは名、異りて義、一なり。是の故に如實に一切の法の自體の相を知ることを說くなり。向に難じて說く所の如くならず。

問ふて曰く、何が故に名づけて自體の相と爲すや。答へて曰く、若し如實に一切の諸法の因緣を知らば無實體の相、有り。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は出世間の智慧に隨順するを以て、能く

一切の諸の魔、怨、敵を降伏すとは、魔を降伏し、怨を降伏し敵對を降伏するを以て、是の故に說いて一切の諸の魔、怨敵を降伏すと言ふなり。此の義云何。菩薩は煩惱の魔を降伏する故に、[一六]天魔伺求して少過をも得ざるが故に、一切の諸の魔を降伏すと言ふなり。[一七]聞、思、修、の慧力を得るを以ての故に、衆生を利益するに相違する怨等は障も能はざる所なるを以ての故に、一切の諸の怨を降伏すと言ふなり。一切の外道の諸の論師等は折伏する能はざるが故に、一切の敵對を降伏すと言ふなり。是の故に說いて、一切の諸の魔怨敵を降伏すと言ふなり。又、般若の力を以ての故に、煩惱の魔を斷ずるが故に、一切の諸の魔を降伏すと言ふ。方便力を以ての故に能く菩提の善根を修集し、二乘、所證の涅槃の怨敵を過ゆ、是の故に說いて、一切の諸の魔怨敵を降伏すと言ふ。又、復、深心等の法を成就し魔道の因を過ゆるが故に、一切の諸の魔を降伏すと言ふ。一切智の地を求め、心未だ斷絕せず敵對する所の疲惓等の法を伏し、一切智の地を求め、心已に斷絕して敵對する所の疲惓等の法を斷ずるが故に、一切の敵對を降伏すと言ふ。又、菩薩は十種の自在を得るが故に、能く陰等の四魔を降伏する故に、一切の諸の魔を降伏すと言ふ。正定聚に住し菩薩の怨敵たる聲聞、辟支佛地を過ゆるを以ての故に、是の故に名づけて怨敵を降伏すと爲す。又、能善、諸の魔業の事を知るが故に一切の諸の魔を降伏すと言ふ。諸の菩薩は善淨の諸の業を得て、能く一切の諸の惡道の因を過ゆるが故に、一切の怨敵を降伏すと言ふ。又、能善、所治等の法を諸の魔、怨敵より護る、是の故に名づけて一切の魔怨敵を降伏すと爲す。經の中に佛、說くが如し。龍王、菩薩摩訶薩は八法を成就するが故に、能く諸の魔怨敵を降伏す。何等をか八と爲す。所謂、一には、五陰の法は幻化の如しと知るが故に。二には、身見等の一切の煩惱を離れ、如實に空を知るが故に、三には如實に一切の有爲の行を知り不生にして而も諸の世間に生ずるが故に。四には、常に衆生を敎化し、常に菩提心を捨離せざるが故に。五には心、常に堅固にして修行に精進し、而も常に三界

【一六】天魔は第六天の魔王にして名を波旬と言ふ無量の眷屬あつて常に佛道を障礙す。

【一七】聞、思、修は三慧と呼ぶ。聞慧とは經教を見聞する事に依て生ぜし智慧。思慧は理を思惟するに依て生ぜし智慧。修慧は禪定を修することに依つて生ぜし智慧なり。

の餘の不退轉の法を修集す。此の八法に依て其の餘の不退、不轉の一切の功德を修集す。彼の不退轉の一切の功德は處處に經の中に廣く說く、應に知るべし。

問ふて曰く、但、阿耨多羅三藐三菩提において不退なるを說かば便ち足る。何が故に復、不轉を言ふや。不退を得れば卽ち是れ不轉なるを以ての故に。答へて曰く、不退の因を得るを以て、畢竟して深心を成就するが故に不退と名づくるなり。不轉と言ふは、不退の深心に依て餘の心行の上上勝進なるを起す故に不轉と名づくるなり。問ふて曰く、若し爾らば不退と不轉は更に異義なきなり。云何んが不轉は不退に於て勝れりと爲すや。答へて曰く、不退と言ふは、不損害の心の根本業道に依つて他を利益するの行を起し上上の勝義を證するが故なり。不轉と言ふは、修行、成るが故なり、又、不退とは永く一切を斷じ、勝法の障、身見等の煩惱の根本を盡す、を、得る故なり。不轉と言ふは、修道中に於て根本無明を斷滅する故なり。又、不退とは善く功德を集め具足する故なり。不轉と言ふは、善く知慧を集め具足する故なり。又、不退とは方便を成就する故なり。不轉と言ふは、[一四]般若を成就する故なり。又、不退とは聲聞、辟支佛地の因を過ゆるが故なり。不轉と言ふは善く菩提の諸の善根を集め得るが故なり。又、不退とは大力を成就するが故なり。不轉と言ふは修行を成就する故なり。又、不退とは十力の因を具足し成就する故なり。不轉と言ふは四無畏の因を具足し成就する故なり。又、不退とは檀等の白法に依て衆生を利益、爲る故なり。不轉と言ふは、檀等の善根を衆生の爲の故に大菩提に迴向し、常に樂んで衆生を利益する故なり。又、不退とは初地を得て菩提心の因を失はず深心等を成就する故なり。不轉と言ふは、二地已上は心に[一五]十善業道を起すも攝する所は十善業道と異りて檀等を修行して數數增長するが故なり。

問ふて曰く、勝進の法とは其の義云何。答へて曰く、諸の菩薩は心行、增長するを以て先に得たる所の白淨の法の中に於て上上勝進す。是の義を以ての故に勝進の法と名づく。

頭上火燃ゆるなり。急いで救ふべきもの。卽ち急速に譬ふ。

【一四】般若(Prajñā)慧、智慧、明、等と譯す。

【一五】十善の業行は善處に生ずる道なれば十善業道と言ふ。

に善く諸佛を供養する故に、と言ふなり。善く淸白の法を集むとは、諸の菩薩は無量の門を以て布施等の行を集めて諸の白法を修し、大菩提を取て一味心正迴向を成就する爲の故に、能く不退轉の法を成就する故に、善く淸白の法を集むるが故にと言ふなり。善く知識し善く護るとは、佛、如來は善く知識する爲に善く菩薩を護り、發心、增長せしめ不退不轉の法の中に安住せしむるが故に、善く知識し善く護る故にと言ふなり。善く心を淸淨にすとは、自ら樂を求めず專ら一味の心にて他を利益するを爲すを以て長夜に自愛等の門の煩惱の染むる所と爲らざる故に善く心を淸淨にする故に、と言ふなり。深廣の心に入るとは、大乘の法の中にて專ら廣勝なるを念じ畢竟して因を成就する故に、深廣の心に入る故に、と言ふなり。畢竟して大法を信樂すとは、大心を起して怯弱ならざるを以ての故に世間、一切の諸の苦を畏れず、小乘を求むる諸の衆生を見ては大悲心を起して一切衆生に樂を與へんと欲する故に一切種智の處を知り、方便力を以て衆生をして得せしむる故に、畢竟して大法を信樂する故に、と言ふなり。大慈悲を現ずとは、生死の種種、諸の苦、逼(せま)りて衆生を惱ましし、舍無く、洲無く、救者、有ること なき を見るを以て、彼の衆生の諸の苦を滅せんが爲に行捨、大捨、極難捨等をし、方便力を以て大苦の中に入り故(ことさ)らに慈悲を現ず。又慈と言ふは、初發心の菩薩は少力を以ての故に但、一切衆生を憐愍せんことを願ふ、是の故に慈と名づく。又、悲と言ふは、是の如く、是の如く一切衆生の爲に修行し、是の如く是の如く勝法の中に於て上上の心を起す、是の故に悲と名づく。故に、大慈悲を現ずるが故にと言ふなり。

又、不退轉とは、菩薩摩訶薩に八種の法有りて、能く不退轉の地を成ず。何等をか八と爲す。一には、大悲なり。二には、心、安住するなり。三には智慧なり。四には、方便なり。五には、不放逸なり。六には、精進を發すなり。七には、善く念に住するなり。八には、善知識に値ふなり。初發心の菩薩、速(すみや)かに此の八種の法を修行すること、〔一三〕頭然を救ふが如くすべし、後に方(まさ)に菩薩、其

つて善根慰喩す、是に親愛の心を生じ我に依附して道を受けしむるを云ふ。三に利行攝。身口意の善行を起して衆生を利益しこれにて親愛の心を生じ我に依附して道を受けしむるを云ふ。四に同時攝。法眼を以て衆生の根性を見其の所樂に隨つて形を分けて示現し其の所作を同じくして、利益に霑はしめ是に依りて道を受けしむるを云ふ。

【一二】 四家とは一に般若家二に諦家三に捨煩惱家四に苦滅家なり。

【一三】 頭然とは然は燃なり。

地の菩薩は畢竟因を成就する故に此の因に依るを以て畢竟して大菩提を證す。是の故に阿耨多羅三藐三菩提に於て、不退轉を得と言ふ。阿耨多羅とは、謂く一切の有爲法に勝る故なり。三藐三菩提とは、謂く一切、諸の不善の法、煩惱、〔九〕習氣を離るるが故なり。一切處に於て障礙、無きが故なり。一切種、一切法を如實に正しく知るが故なり。是の故に三藐三菩提と言ふなり。

問ふて曰く、應に不退不轉の功德を說くべし。云何んが不退不轉の功德なる。答へて曰く、不退不轉の功德とは、如來、處處に經の中に廣く說く、應に知るべし。十地經に說くが如し。諸の佛子。若し衆生、有つて、厚く善根を集むるが故に、善く諸の善行を集むるが故に、善く諸の功德行を集むるが故に、善く諸佛を供養するが故に、善く清白の法を集むるが故に、善く知識し善く護る故に、善く心を清淨にする故に、深廣の心に入る故に、畢竟して大法を信樂する故に、大慈悲を現ずる故に、是の如きの衆生は乃ち能く阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。厚く善根を集むとは、菩薩は初發心從り已來、能く聲聞、辟支佛の性を過ゆ、是の故に、能く不退、不轉の菩薩の位に與る。種子の貪等は善根の正種子に非ざる爲を以て久しく無量の諸の功德行を修するが故に、厚く善根を求むるが故にと言ふなり。善く諸の善行を集むとは、菩薩、正しく諸の行を修するを諸の善行を修すと名づく、行と修の生起は名、異なりて義、一なり。又、行と言ふは、身・口・意の業を清淨にし〔一〇〕正命を自活するなり。諸の菩薩は損害の心を離れ、一切の諸の衆生を利益することを成就するの行を起す爲を以て、一切の聲聞、辟支佛等は智慧の大海を度るを得る能はざるも而も菩薩は能く渡る故に、善く諸の善行を集むる故に、と言ふなり。善く諸の功德を集むとは、布施、忍辱、不放逸等の〔一一〕四攝、〔一二〕四家は衆生を化するの因なるを以て、諸法の種子を增長し正集するが故に、善く諸の功德を集むるが故に、と言ふなり。善く諸佛を供養すとは、他を利益するの因力を增長して卽ち是れ己の事と爲し正快無量にして種種に供養し種種に恭敬し、正法等を聞いては生生に諸佛を供養し恭敬する故

〔九〕 習氣とは煩惱の餘習なり。

〔一〇〕 正命(Samyagājīva)は八正道の一つにして出家としての正しき生活法をいひ、身口意の三業を淸淨にし正法に順ひて活命するを云ふなり。

〔一一〕 四攝とは一に布施攝。若し衆生財を求めば財を布施し、若し法を樂めば法を布施し是に因て親愛の心を生じ我に依て道を受けしむるを云ふ。二に愛語攝。衆生の根性に隨

中に說くが如し。龍王、菩薩摩訶薩は畢竟して八種の法を成就する故に名づけて不退、不轉の菩薩の數に入ると爲すを得。何等をか八と爲す。所謂、如說に修行するなり。一には自過を觀察し他過を觀ぜず。二には乃至、自らの身命の爲の故に惡を他人に施さず。三には若し利養を得るも其の心、高からず、若し利養を失ふも心、亦、下からず。四には諸の衆生に於て福田の想を起し、惡心を生ぜず。五には所有の財物、悉く一切衆生と之れを共にす。六には諸法の中に於て獨り解して他をして知らざらしむるを欲せず。七には他の樂を得るを見て歡喜の心を生じ、自らに由つて歡喜の心を生ずるを樂はず。八には愛、不愛に於て其の心、平等なり。菩薩、此の八種の法を具するが故に阿耨多羅三藐三菩提において不退不轉なり。

問ふて曰く、應に不轉の相を說くべし。云何んが不轉の相なる。答へて曰く、我れ正に說かんと欲して而して汝、復、問ふ。菩薩、不轉の相を成就すとは、如來、處處に修多羅の中に廣く說く、應に知るべし。智印三昧修多羅の中に說いて言ふが如し。彌勒、五種の法有らば名づけて菩薩、畢竟して阿耨多羅三藐三菩提の相に於て不轉と爲すなり。何等をか五と爲す。一には諸の衆生に於て平等の心を起す。二には他の利養に於て嫉心を生ぜず。三には乃至、自らの身命の爲に、法師比丘の諸の惡、過失を說かず。四には、終に、供養、恭敬、讃歎等の事に貪著せず。五には畢竟して甚深の法智の忍を得。彌勒、更に五法、有るが故に名づけて不轉の菩薩と爲すを得。何等をか五と爲す。一には自身を見ず、二には他身を見ず。三には心に分別して妄りに法界を說かず。四には菩提を見ず。五には相を以て如來を見ず。是の如き等なり。又般若波羅蜜經の中に廣く不轉の相を說く。彼の經に說くが如し、應に知るべし。

問ふて曰く、云何んが異法の菩提心不退轉菩提心の因を得れば異佛菩提に於て阿耨多羅三藐三菩提に退轉せずと名づくるや。答へて曰く、決定因を得るを以ての故なり。此れ何の義を明せる。初

に第二の發心に辟支佛地を過ゆと言ふなり。第三の發心に不定地を過ゆるとは、初地の中に於て、不定因を離れ、定因を得る故なり。所有生の心、不定地を過ゆるが故に、第三の發心に不定地を過ゆと言ふなり。第四の發心に定地に安住すとは、二地已上は一切所治の法を遠離す、是の故に畢竟して定地に安住する故に、第四の發心に、定地に安住すと言ふなり。

又、阿耨多羅三藐三菩提において退轉せずとは、所謂、菩薩、發菩提心相違の法を離るるを得たるの時不退轉菩薩と名づく。寶女經の中に說くが如し。寶女、菩薩摩訶薩に、三十二の[四]罣礙塹路の發菩提心相違の法、有り。何等か三十二なる。一には聲聞乘を求むるなり。二には辟支佛乘を求むるなり。三には[五]釋、梵の處を求むるなり。四には所生に倚著し、梵行を淨修するなり。五には專一德本にして、是れを我所と言ふなり。六には若し財寶を得ば慳貪、愛悋するなり。七には[六]偏黨の心を以て而して衆生に施すなり。八には戒禁を輕易するなり。九には道心專精の行を念ぜざるなり。十には、瞋恚之を事として以て名聞と爲すなり。十一には其の心、放逸なるなり。十二には[七]馳騁するなり。十三には博聞を求めざるなり。十四には所造を察せざるなり。十五には貢高自大なり。十六には身、口、心、の行を清淨にする能はざるなり。十七には正法を護らざるなり。十八には師恩に背捨するなり。十九は[八]惡を棄捨せざるなり。二十には堅要の法を離るゝなり。二十一には諸の惡友を習ふなり。二十二には諸の陰種に隨ふなり。二十三には、助道を勸めざるなり。二十四には不善の本を念ずるなり。二十五には所發の道意に權方便、無きなり。二十六には慇懃を以て三寶に咨嗟せざるなり。二十七には諸の菩薩を憎むなり。二十八には未だ聞かざる所の法、之れを聞いて誹謗するなり。二十九には事を覺らざるなり。三十には俗典を習持するなり。三十一には衆生を勸化するを肯んぜざるなり。三十二には生死を厭ふなり。

又、復、不退不轉の所以は、諸の菩薩、畢竟して不退轉の法を受持する故なり。娑伽羅龍王經の

【四】罣礙とはささへさまたぐるなり。塹路とは路をほることにして同じくさまたぐるなり。
【五】釋、梵とは帝釋、梵天なり。
【六】偏黨とはかたよるなり。
【七】馳騁とはかけはしらすなり。
【八】大正大藏經は恩に作るも宮內省圖書寮本は惡とす、今は後者に依る。

ふ、喜根は何處にて滅するや。佛言はく、三禪の中にて滅す。又、問ふ、樂根は何處にて滅するや、佛、言はく、四禪の中にて滅す。と。是の如く、一切の色相等を過へ、初禪の時に厭ひて卽ち一切の色相等の諸相を過へ、而も第四禪の中にて因を厭過する故に第四禪に過を說くなり。菩薩摩訶薩は亦、復、是の如し。初地の中に於て已に不定地を過へ、二地已上、乃至七地以來、佛菩提大涅槃を求めて心、未だ斷絕せざる故に、所起の因行、功用を疲惓するを不定地と名づく。是の故に、彼の未だ滿足せざるの心を不定因と爲す故に、八地の中に、不定地を過ゆるを說き、相違せずと言ふなり。又畢竟して菩提心の因緣、具足して和合するを得る故に、初發心に聲聞地を過ゆと言ふなり。法印經の中に如來、說いて言ふが如し。彌勒、菩提心を發すに七種の因有り。何等をか七と爲す。一には、諸佛の敎化に菩提心を發す。二には法を見て滅せんと欲し菩提心を發す。三には、諸の衆生に於て大慈悲を起し菩提心を發す。四には、菩薩の敎化に菩提心を發す。五には、布施に因ての故に菩提心を起す。六には、他を學して菩提心を發す。七には如來の三十二相、八十種好を說くを聞いて菩提心を發す。彌勒、諸佛の敎化に菩提心を發し、法を見て滅せんと欲して菩提心を發し、諸の衆生に於て大慈悲を起して菩提心を發す。此の三の發心は、能く正法を護り、速かに疾く、阿耨多羅三藐三菩提を成就す。餘の四の發心は眞の菩薩に非ず、諸佛の正法を護持して、速かに疾く阿耨多羅三藐三菩提を成就する能はず。此れ何の義を明せる。若し菩薩、深心を成就して畢竟不退ならば、大悲心の大勇猛力を得、諸の世間の一切衆生は愚箭[三]に射らるるが爲に、而も衆生を觀じて大慈悲を起し、諸の善根を攝して聚集し增長する故に、初發心の時、聲聞地を過ゆと言ふなり。第二の發心に辟支佛地を過ゆるとは、辟支佛の人は聲聞の人に勝れるも、畢竟して他身の爲にせず。畢竟して自ら、身の爲に寂滅の涅槃を求む。若し菩薩、初めに法性の上上を觀察せば、無生法忍を觀ずる時、未だ不定道を過ゆるを得ざるも、所有生の心は皆、悉く、聲聞、辟支佛地に過ゆるが故

【三】大正藏經は過箭となすも宋、元、明の三本は愚箭と作る、今は後者に依る。

多羅の中に說くなり。是の義を以ての故に菩薩は無量の世住を攝取するなり。

問ふて曰く、此の義、然らず、何を以ての故に。初地の菩薩摩訶薩の若きは一切對治の法を遠離し畢竟して、阿耨多羅三藐三菩提において不退轉を得れば、何の義を以ての故に、文殊師利問菩提經の中に、初發心に能く聲聞地を過へ、第二の行發心に、能く辟支佛地を過へ、第三の不退發心に、不定地を過へ、第四の一生補處發心に、定地に安住すると說くや。答へて曰く、彼の經の中に、勝進地を證するに依り、遠中に所治の法を遠離するに依り、上上地に依り、不定地を過ゆることを說く。是の故に此の說は彼の經に違せざるなり。此の義、云何、初禪對治の法の如きは、此れ何の義を明せる。小乘の人の如きは未來禪の中において、不定因、欲界修道の煩惱を斷じ、乃至、第四禪の中にも亦、修道の煩惱を斷ずることを說く、遠中、遠勝の對治の法を以てするも而も相違せざるなり。何を以ての故に、對治の因等を以ての故なり。菩薩摩訶薩は亦、復、是の如し。初地の中に於て菩提心相違の退因、謂ゆる身見等の一切の煩惱を斷じ、深心等の修行を成就し、畢竟して退菩提心の因を遠離するを得るを以ての故に、乃至、八地の中にて勝進、遠中、遠勝の對治の法を得るを名づけて、不定地を過ゆると爲す。定地に安住すとは對治の法等を以ての故なり。定因を以ての故なり。不定地を過ゆると言ふ義に相違せざるなり。又、不定地を過ゆると言ふは、佛菩提、大涅槃を求めて心、未だ斷絕せざる故に、所起の諸行の功用に疲倦あるを不定因と名づく。是の故に八地以上を始めて不定地を過ゆと言ふ。此の義如何。彼の處に苦を過ゆる等の如し。此れ何の義を明せる。小乘の中に欲界の苦を厭過するが如し。欲界の苦を厭過すると雖も、而も初禪の地において未だ識等の苦の因を過へず、未だ所治の法を過へざるを以てなり、是の故に如來、經の中に說きたまふ、第二禪の中に苦を過ゆ。と。經の中に說くが如し。憂根は何處にて滅するや。佛、言はく、初禪の中にて滅す。又、問ふ、苦根は何處にて滅するや。佛、言はく、二禪の中にて滅す。又、問

の煩惱を伏せざるや。答へて曰く、一切の煩惱を遠離するを不退轉の因と名づく。若し無漏の道を離れて法を見、無漏の道を離れて一切の煩惱を斷ぜば是の如きの難ある可し。何が故に世間道は修道の煩惱を伏せざるや。若し(出)世間道と世間道と同じければ是の如きの力、無し。是の故に不退轉と言ふを得ず、而も此の菩薩は卽ち見道の時、永く一切の所治の法を斷じ、大悲等を得て畢竟して菩提心を生じ、不退轉菩薩と名づく。應に知るべし、是の故に菩薩は如實に法を見、方便を成就し、聲聞、辟支佛地を取らず。如實に、一切世間の種種の過患を知見し、一切衆生を利益せんと欲する爲に世間の行を行じ、世間を捨てず、世間の過患の染むる所と爲らざるなり。是の故に聖者文殊師利、天子に告げて言く、諸の天子、菩薩摩訶薩は有爲に住せず、無爲に住せず。是の故に菩薩を福田と名づく。何を以ての故に。菩薩は有爲の法を離れて無爲の法に住せず。有爲、有過を知り、無爲、無過を知り、一切過を知る故に有爲に住せず、無爲を知て無爲に住せざるなり。諸の天子、大力士、仰で虛空を射るに而も彼の射りたる箭は虛空の中に於て依住する所なく而も地に墮ちざるが如し。諸の天子、此の事は難と爲す。更に難、有りとは、天子、文殊師利に白して言く、是の如きの事は希有にして最も難なり。更に難、無しとは、文殊師利、天子に告げて言く、菩薩摩訶薩、作す所の難事は復、此れに過ぎたり。菩薩摩訶薩は有爲を捨てずして而も無爲を證するを以て、有爲に墮せずして而も能く有爲に墮する者を敎化す。

問ふて曰く、畢竟定とは如來、經に說きたまへり、若し畢竟定の聲聞の人は三結を遠離し、須陀洹を得て、惡道に墮せず、[二]人天の七反に永く諸の苦を離れ、畢竟して、阿羅漢道を證得す。菩薩も亦、爾なり、三結等を斷ず。何の義を以ての故に、聲聞に同じからずして而も無量の世に住するや。答へて曰く、此の義、然らず、何を以ての故に。畢竟定と言ふは聲聞乘の修多羅の說に依る。菩薩摩訶薩は無量の行に依り、一切種智、淸淨の出世間道、能淨の薩婆若を求むるに依て大乘の修

【二】預流果の聖者を七反生と言ふなり。

一切衆生の受用に隨順す。大徳須菩提、復、後時に於て、彼の娑羅樹、大風に鳴動し卽便、地に倒れ、更に復、生ぜず。大徳須菩提、菩薩摩訶薩は亦、復、是の如し。大智慧の猛風の吹く所と爲り、道場の地に在て、永く滅して生ぜず。是の故に菩薩摩訶薩は發心已來、一切の心行、聲聞、辟支佛等と同じからず。諸の菩薩摩訶薩の心行等の法は、本來より同じからざる故なり。若し一切、同じならば應に聲聞は菩薩と作り、菩薩は聲聞と作るべし。問ふて曰く、聲聞の人の如きは先に見道の煩惱を斷じ、然る後に修道の煩惱を漸斷す。菩薩は何が故に聲聞と同じからずして先に見道の煩惱を斷じ、然る後に、乃ち修道の煩惱を斷ずるや。又、問ふ、菩薩の如きは、無量の世住を取り、無量の善根を修集す。須陀洹等は何の故に、無量の世住を取らず、亦、無量の善根を修集せざるや。答へて曰く、須陀洹等は常に樂つて煩惱を斷ずるの心、有るが故に、無漏對治の明を得るを以ての故に、轉々して諸の世間を怖畏するが故に、是の如きの心を生じ、何時か當に一切の苦を離れて無餘涅槃に入るを得。故に修道の中に殘餘の煩惱は自然に漸盡す。是の義を以ての故に聲聞は無量の世住を取らず、亦、無量の善根を修集せざるなり。菩薩の人は無量世より來、諸の衆生の爲に利益の因を作り、諸の衆生の爲に利益の事を作す。是の如き等の畢竟の心を得、復、眞如、甘露の法界を見、一切、諸の衆生身を觀察し而も實には我が所求の處と異らず。是の故に菩薩は修道中、一切の煩惱を見れば、能く衆生を利益するの行に障るが故に、卽ち見道中に、一時に倶に斷ず。又、一切の諸の衆生を利益し、樂勝の涅槃の樂を觀察するを以て、是の故に菩薩は、無量の世住を取り、世間に住し一切の行を修するなり。謂ゆる、薩婆若智の故に能く明らかに見、無量の菩提の善根を修集し、大菩提の利を得るなり。是の故に、無量の善根を修集するなり。

問ふて曰く、菩薩若し修道の煩惱を見れば能く諸の衆生を利益するの行に障る。是の義を以ての故に見道中に於て、卽ち斷除すとは、何の義を以ての故に卽ち見道中において、世間智を以て修道

を名づけて、須陀洹、惡道に墮せず、とするが如く、菩薩も亦、爾なり。菩薩の位に入るを名づけて、不退轉菩薩、惡道に墮せずと爲す。龍王、聲聞の人は煩惱を斷ぜずして聲聞の位を取る。其れ未だ不自在の法を過へずして初果を得るを以ての故なり。龍王、菩薩摩訶薩は聲聞の位を過へて菩薩位を證す。是の故に聲聞の小果を取らず、乃ち、道場の大菩提の果を取る。是の義を以ての故に、聲聞は有量なり、菩薩は無量なり。龍王、二人、有つて倶に高山より墮つ、其の一人は勇健多力にして、先に已に種種の技能を習學せり、方便智を以て山頂に還り上れり。其の第二人は身力微少にして先に種種の技能を習學せず、方便智、無く、彼の山下に墮ちて還り上る能はざるが如し。龍王、是の如く菩薩摩訶薩は、一切法の空、無相、無願、無爲を觀察し、般若の力に依て衆生を觀察し、一切種智の山頂に住す。復、經に說くあり。大德須菩提、菩薩摩訶薩は身見等の無量の煩惱を斷じ、而も彼の聲聞の小果を取らず　乃ち諸佛の大菩提の果を取る。一切の佛法を觀察し、大慈悲心を以て一切衆生を憐愍し、菩薩行を修し、身見等の一切の煩惱を斷ず。是の故に聲聞の小果を取らずして乃ち諸佛の大菩提の果を取る。須菩提、文殊師利に白して言さく　文殊師利、此の事、希有なり。此の大方便菩薩の人は、身見等一切の煩惱を斷じ而も能く聲聞の小果を取らず。文殊師利の言く、大德須菩提、菩薩摩訶薩は大方便、所攝の智性、有り。是の故に菩薩は如實に彼の身見等の一切の煩惱を知ると雖も而も能く聲聞の小果を取らざるなり。大德須菩提、大力士、薄利の刀を持て娑羅樹を斬斷するも彼の娑羅樹、即ち住して倒れざるが如く、大德須菩提、菩薩摩訶薩も亦、復、是の如し、大方便般若の智性有り、是の故に菩薩は身見等の一切の煩惱を斷じて而も能く聲聞の小果を取らず。大德須菩提、彼の娑羅樹は復、異時に於て天雨の潤ふに値へば即便、還、枝葉華果を生じ、具足して本の如く衆生、受用す。大德須菩提、菩薩摩訶薩は、亦、復、是の如し。大慈悲心の雨の潤ふ所を得ば、身見等の諸の煩惱を斷つと雖も三界に還入し、方便示現して世間の家に生じ、

を觀じ、乃至、三界の結を離る。然して後に貪等の煩惱を除き、漸漸に微薄となりて三界を出過す。菩薩の人は深心を得るが故に、常に一切世間を利益することを樂み、諸の衆生の爲に利益の行を作す。世間の苦惱に逼らると雖も、方便智慧力を成就する故に、能く如實に聲聞の道を修行すると雖も、而も聲聞の道を證せず。先に所障を斷じて聲聞位の法を取るを以ての故なり。何か是れ、聲聞位の法を取るなる。大悲の心を捨てゝ、大悲等の行を增長する能はざるを謂ふなり。若し諸の菩薩、深心等を得て、菩提心、眷屬等の法を修行せば、能く菩提の位の因を作證す。彼の時、菩薩は一切の法を見るが故に、能く菩提心の力を增長し、方便して一切衆生を利益するの事を推求す。彼の時、即ち如實に法界を見る。法界を見る故に即ち時に[一]見道所治の一切の煩惱を遠離し、即ち畢竟して大菩提心を得。十地經に說く如し。菩薩摩訶薩は是の如き心を生ず、是の心は大悲を以て首と爲すこと是の如し等。彼の菩薩は是の如く見道を證し已て、方便して一切諸の衆生を利益せんことを推求す　因て善く、大悲、深心等の法を學び、我樂等を離れて煩惱の火の燒く所と爲らず。因、相似せざる故なり。菩薩摩訶薩は常に深心を以て、他を利益し而して修行を爲す故に、即ち見道の時、三界の中の一切の煩惱を斷ず。而して聲聞等は先に慈悲方便を修集せず、是の故に他を利益するの行、有ることなし、煩惱を漸斷して後に羅漢を得るなり。是の義を以ての故に、大海慧菩薩、經の中に說く。菩薩先に已に善根相應の煩惱を修集す。所謂、大悲波羅蜜等なり。此の諸の善法を名づけて煩惱と爲す。餘の煩惱に非ず。彼の煩惱に依て衆生を化せむが爲に世間に住す。其の求むる所、未だ究竟せざるを以ての故なり。是の義を以ての故に、復、倶に彼の身見等の一切の煩惱を離るゝと雖も、而も菩薩は、阿耨多羅三藐三菩提において退轉せず、聲聞は退轉するなり。阿耨大池聖者龍王經の中の如し、佛、龍王に告ぐ、菩薩摩訶薩、所證の位は、是れ出世間の法にして、而も世間を離れず、龍王、方便般若聖智三昧、有り。是れを菩薩摩訶薩の出世間の位と名づく。龍王、譬へば聲聞の、聲聞の位に入る

【一】見道とは行位の三道の一、三道とは見道、修道、無學道なり、見道に於て一切の見惑を斷ずるものとす。

卷の第二

問ふて曰く、何の義を以ての故に不退轉と名づくるや。答へて曰く、諸の菩薩、初地畢定の因を證得するを以ての故なり。乃至、未だ成佛を得ざるより以來常に深心を以て如實に修行し、次第に菩提の心を增長し、彼の所治の法は障をなす能はざる故に、不退轉と名づく。問ふて曰く、復何の義を以てか、阿耨多羅三藐三菩提において退せずと名づくるや。答へて曰く、不退轉の因、謂ゆる、深心等の八種の法を、成就するを得るを以ての故なり。又、不退轉の心に相違するの法、身見貪等の一切の煩惱は、見道の力を以て悉く遠離する故なり。又、身見等の一切の煩惱は無始の世より來、無智に隨つて生じ遠離すること能はず、我、樂等の因を取つて、方便、般若を離れ、諸の世間の苦惱の爲に逼られて一切衆生を利益することを棄捨し、涅槃を取するなり。是の故に菩薩は慈悲の深心を得て、我、樂等の因に取著することを遠離し、方便、般若あれば、世間の苦の爲に逼らると雖も、而も衆生所作の事を利益することを放捨せず、身見等の煩惱の根本を斷つなり。彼の時、阿耨多羅三藐三菩提において退せざることを得るなり。是の故に、聖者無盡意說いて言く、彼の心、一切の煩惱生を離るゝことと是の如し等と。

問ふて曰く　若し、身見等の煩惱を離るゝを不退轉の因と名づけば、菩薩及び須陀洹は、倶に身見等の煩惱を離る。何が故に、菩薩は阿耨多羅三藐三菩提に於いて退轉せずして而も須陀洹は退轉するや。答へて曰く、心行、差別するを以ての故なり。此れ何の義を明せる。菩薩と聲聞は發心以來、心行の相、一切差別する故なり。云何んが差別せる。聲聞の人は他を利益する因を修學する能はず。是の故に衆生を利益することを棄捨して自ら涅槃を求む。三界の中は貪等の煩惱の火に燒かれ、無常に逼られるを見て、三界を厭離すること身衣の火に燃ゆるが如し。無常等の五陰、有爲の行

譬へば月の初めて生じ　增長して卽ち滿月となるが如く、是の如く、歡喜地も　增長して卽ち是れ佛となる。

是の如き十句の義は、餘の論師、釋を異にす、應に知るべし、是の故に如來、不定聚の菩薩、定聚を求むる故に此の修多羅を說くと爲す。

彌勒菩薩所問經論卷第一

菩薩、煩惱を淨め、及び衆生の心を淨め、大慈悲を具足し　畢定して菩提を成ず。

菩薩、煩惱を淨むとは、此の義云何。初地に治する所の身見等の煩惱は見道の時の中に於て、皆悉く遠離するを以ての故なり。彼の見道の中にて煩惱を遠離するは向に說く所の如し。一切の法の三世平等を見るは如實の中に說く、及び、衆生の心を淨むとは、下の如く經に言く、一念の頃に於て、百の衆生を敎化す、乃至、若しくは願力の自在、勝上なるを以てす。是の如き等の敎化の力に依て諸の煩惱を淸淨するを得るが故に下の經に言く、是の故に我れ當に先に善法に住し、亦他人をして善法に住せしめん。と。何を以ての故に、若し人、自ら善を行ぜず、善行を具せず、他の爲に說法して善法に住せしむるも、是の處において大慈、大悲の心を得ること有ること無き故なり。是の故に上の經に言く、是の心、大悲を以て首と爲す。と。是の故に菩薩は自ら煩惱を淨め、衆生の心を淨め、大慈悲を具するを名づけて、畢竟して阿耨多羅三藐三菩提を得ると爲す。畢定して大菩提に進み趣くを以ての故に偈に言く、

佛子金剛藏、十法を說いて初心を卽ち佛菩提と名づく、佛道を畢成する故に。

此の義、云何。聖者金剛藏菩薩摩訶薩、此の十種の法を說いて菩薩の初地を以て無漏菩提心と爲す。卽ち此の十種の心を名づけて佛菩提と爲す故に、畢竟して阿耨多羅三藐三菩提と言ふなり。又、偈に言く、

譬へば好き種子の　能く莖葉等を生ずるが如く　是の如き菩提心は諸佛の法に異らず。

此の義云何。初めて法を證するの心を以て、一切の佛法に於て以て種子と爲す。初地の法を以て一切の佛法と與に因と爲すを以ての故なり。又、偈に言く、

初地の心、增長す　佛、爲に諸地を說く、最妙勝菩薩、初月を說いて喩と爲す。

此れ何の義を明せる。文殊師利問菩提經の中に說くが如し。偈に言く、

是の故に、菩薩、出世間道に入るなり。問ふて曰く、云何んが善く菩薩、法の中に住せる。答へて曰く、偈に言く

菩薩の諸地に入り、已の法の中に安住し、通及び自在に依て、一切衆生を化す。

菩薩の諸地に入るとは、下の如く經に言く、善く地地に、行を轉ずるを知る故に。と。一切衆生を化すとは、下の如く經に言く　百三昧、乃至、無量百千萬億那由他劫不可數の知を得る故に。と。自在を得とは、何等の時、何等の法、何等の自在、何等の成就の事、何等の行における種種の功德を說くが如く、諸の自在を得ば一切の佛法において退せず、種子の義、一切の佛法において成就する故に善く菩薩の法の中に住すと言ふ。問ふて曰く、云何んが善く菩薩の正處に住せる。答へて曰く、偈に言く、

一時(あるとき)諸佛の邊に聞持思修して說き解義を行じて正覺供養等を成就するなり。菩薩摩訶薩是の如きの法を修行する是れを名づけて菩薩正處中に安住すると爲す。

是の故に經に言く、善く菩薩の正處に住す。と。問ふて曰く、云何んが三世平等の眞如の法の中に入る。答へて曰く、偈に言く、

諸佛の菩提及び佛・菩薩の行を知り、佛の三世の空を知る、是れを善く意入すと名づく。

此の義云何。謂ゆる、一切三世の諸佛の法身平等を知り、又、復、能く一切の諸佛の依色身を知る故に、一切の佛菩薩の行を修行し、及び一切の過去、未來、現在の諸法は皆、因緣に依り和合して生じ其の實體、無きを知る。善く意入すとは、向(さき)に說く所の如く三世の諸法は平等無二なり、如實に一味、等味なるを知り、破壞せずして入る。是の故に經に言く、三世平等の眞如の法の中に入る。と。問ふて曰く、云何んが如來の種の中において畢定して阿耨多羅三藐三菩提を究竟せる。答へて曰く、偈に言く、

し蓮華の染まざるが如し　若し能く是の如く知らば諸の欲に染著せず。

是の如き菩薩摩訶薩は是れを眞の佛子と名づく、天等の異子に非ざるなり。是の故に偈に言く

菩薩は實際を知り　及び、波羅蜜を修し、無漏の道を得るを以ての故に世間を出過す。

菩薩は實際を知るとは、此れ何の義を明せる。一切の法は皆悉く寂靜なることを明す。是の故に如來、偈を說いて言はく。

一切の法は體、無く　實に諸事なく、不生、不滅なるを以ての故に、名づけて實際と爲すを得。

是の如く、般若波羅蜜は一切諸法の無體、眞實際を知り、般若波羅蜜は斷道の行を知るを以て、五波羅蜜は方便功德の道を知る。是の如き菩薩摩訶薩は此の功德の智慧を以て能く佛菩提を成じ、能く諸の煩惱を盡して、能く衆生を利益す。又、諸波羅蜜を修し　亦、如實際を知る。云何んが知る。施者、受者、財物の三種の法を見ざるが故に、清淨に諸の波羅蜜を修行す。菩薩、是の如く實際を修行す、是の故に無漏となる。無漏なるを以ての故に一切の諸の世間の道を出過す。是の故に偈に言く

世間の行を分別し、煩惱の稠林の中において、出世間の位を取るは、是れ出世の道に入るなり。

世間の行を分別するとは、略して二種の分別、有り。一には實分別なり。謂ゆる、色は是れ可見の相にして是の如し等なり。二には勝分別なり。卽ち彼の色の中、青、黃、赤、白、等なり。世間とは卽ち五陰なり。煩惱の稠林とは深嶮黑闇にして恐怖、畏る可し。觀察す可からず、見難く、知り難し。是の如き菩薩摩訶薩は自體分別、勝分別、五陰分別を觀察し、向に說く所の如き事の中に著せず、是の思惟を作す　我れ當に云何んが衆生をして解せしむべき。と。是の故に偈に言く

如實に諸法の實勝陰の一二を知り衆生の事を見ずして云何んが衆生を化せん。菩薩摩訶薩は無漏智、及び功德行を修行して、出世の道に趣く。

此れ最も希行の事　第一、不思議なり　菩薩、修行を爲して　而も衆生を見ず

如來、亦、說いて諸の菩薩摩訶薩の如實希有の功德を讃歎せんと欲す。經の中に說く如し。菩薩摩訶薩は、四種の眞實の功德、有り。何等をか四と爲す。一には、能く空を信解し、亦、因果を信ず。二には、一切の法は吾我あること無く、而も衆生に於て大悲の心を起す。深く涅槃を樂ひて、而も生死に遊ぶ。四には、所作の施行は皆、衆生の爲にして果報を求めず、若し是の如くんば卽ち佛家に生在するなり。是の故に偈に言く、

菩薩摩訶薩は、諸の煩惱を離るゝを以て　則ち菩薩位を證す、是の故に佛家に生ず。

此れ何の義を明せる。又、佛家とは、何等の法をか行じて如來の家に生ずるや。謂く、煩惱を離るゝ故なり。空の行を解する故なり。自らの位を知る故なり。又、衆生を利益する行を作す故なり。行を迷失せざる故なり、是の如きの法を得ば、名づけて菩薩摩訶薩、佛家に生在すと爲す。此れ何の義を明せる。偈に言く

佛、如來の家、と說くは　謂ゆる、方便、般若なり　菩薩は是の家に生ず　是の故に嫌ふ可からず。

此の義云何。方便と言ふは略して說くに、一切衆生を捨てざるなり。般若と言ふは、一切諸法を取らざるなり。此の二種の法は、是れ諸佛の家なり。是の故に菩薩摩訶薩は方便、般若に依つて生ず。方便、般若の二法の所攝と爲るを以ての故に、菩薩摩訶薩は、一切衆生を利益せんと欲する爲に、世間に生在するも、實には煩惱の業に依らずして生ずるなり。若し是の如くんば、菩薩摩訶薩は譏嫌すべからず　一切の天等の可呵の法は皆悉く遠離し、佛の勝れたる家に生ず。是の義を以ての故に、種姓の尊貴は譏嫌すべからず。是の故に如來、修多羅の中に婆羅門の爲に偈を說いて言く、

天、人、乾達婆、龍、夜叉、衆鳥、是の如き等の諸業、皆悉く已に滅盡す、彼の漏、散じて滅盡

佛地に墮し、及び聲聞位を取る。と。故に又復偈に言く、

空を知て、二邊を離れ、二染の涅槃無く、涅槃の染、無きを以て、佛、菩薩位を說きたまへり。

空を知つて二邊を離るとは此の義云何。如來法印經の中に說くが如し。舍利弗、言く、無差別の法は、卽ち名づけて空と爲す。舍利弗言く、世尊、言ふ所の空は此の言、何を謂ふや。佛、舍利弗に告げたまはく、言ふ所の空は說く可からず、說く可からざるに非ず。若し說く可からず、說く可からざるに非ざれば　彼は表す可からず。若し表す可からざれば、彼は世間に非ず、出世間にあらず、世間に非ず、出世間に非ざるを以ての故に說いて名づけて空と爲す。若し能く是の如く、空を了知せば二邊を離るゝと名づく。菩薩、若し彼の二邊を離れゝば、煩惱に墮せず、聲聞、辟支佛等の二種の涅槃を取らず。佛、煩惱の病を說くは異地の相を取る故なり。異地の相を取るとは、謂ゆる聲聞、辟支佛等は地の相を異にする故なり。亦、衆生を利益することを棄捨すと名づくるは、無爲の涅槃の樂を取るを以ての故なり、又、佛菩提を妨ぐるを以ての故なり。煩惱の病、無しとは、煩惱の病を離るゝ故に、二乘の涅槃を取らざるを以て、本願力に依つて諸の衆生を利益することを捨てざる故なり。是の如くんば、二乘の病なく、煩惱の病なし、如實に一切の法の空を修行す。是れを諸の菩薩摩訶薩、菩薩位に入ると名づく。能く一切の煩惱を遠離し、一切の對治の法を遠離するを以ての故に、是の如きの菩薩は無二の行を以て、本願力に依て諸の衆生の利益することを捨てざる故に、聲聞、辟支佛地に墮せず、世間の煩惱の爲に染められず、此れは是れ、菩薩摩訶薩等の最も難勝の事なり。一切衆生を見ずと雖も、而も衆生の爲に諸の行を修行す。是の如きの事は思議す可からず、一切の世間は覺知する能はず、第一希有にして、一切の聲聞、辟支佛等の見る能はざる所なり。此の義を以ての故に、龍樹菩薩摩訶薩、集菩提功德論の中に偈を說いて言く

を説けり。聖人の法を遠離し、身見等に染著し、五欲に住して生を資く。故に凡夫の人と名づく。

此れ何の義を明せる。地とは彼の處に凡夫の人を生ず、是れを凡夫地と名づく。此れは是れ、三界中、煩惱所縛の處にして、依止せば煩惱、生ず、是れを凡夫地と名づく。是の故に、彼の初心は、三界皆空を見、一法の相を起さず、一法の相を起さゞるを以ての故に、則ち一切處に生ずるを願樂せず。慈悲心は諸の衆生を敎化せんと欲する爲の故に除き、常に寂靜の法體を觀察す。是の義を以ての故に彼の菩薩は、凡夫地に過へたることを說く。是の故に偈に言く、

法體、無きが故に空なり、空なるが故に所作、無し、一切の相を離るゝ故に知者、求むる所、無し。

菩薩の位に入るとは、偈に言く、

卽空を菩提と名づく、佛、說いてのたまはく、煩惱の病あれば、辟支佛地に墮し及び聲聞位を取る。と。

卽空を菩提と名づくとは、如實に衆生の虛妄を覺知するを名づけて菩提と爲す。是の故に、聖者無盡意菩薩、四念處を說く、諸の菩薩摩訶薩、法觀を修する時、若し一切の法を見て、空、無相、無願、無行、無生、無起、を離れ、及び十二因緣を離るれば如實に覺せりと名づけず。若し少法を見ても、空、無相、無願、無行、無生、無起を離れず、及び十二因緣をも離れず、菩薩、若し能く是の如く、一切衆生、其の實體、無きことを覺知せば、是れを、如實に覺せりと名づく。是の故に、偈に言く、卽空を菩提と名づくるが故に。と。若し、初地の菩薩、一切の諸の衆生の空なるを覺知し一切衆生を利益せんことを棄捨して　而して聲聞辟支佛の位を取らば、是れ則ち名づけて、初地の菩薩　治する所の煩惱と爲す。是の故に偈に言く　佛、說いてのたまはく　煩惱の病あれば辟支

因緣、和合して生ぜる彼の法は實體なし。若し實體無くんば、云何むが有の法と名づけむ。

聖者無盡意菩薩摩訶薩、無盡經の中に說いてのたまはく、因緣を觀察する方便智は、一切の法は、因に依り、緣に依り、和合して生ずるを知る。若し、一切の法は、因に依り、緣に依り、和合に依つて生ぜば、彼の法は、我、人、衆生の壽命に依らざるなり。若し非我、非人の壽命によらば、彼の法は數へて過去、現在、未來と爲すべからず。菩薩、若し能く是の如く觀察せば、是れを菩薩摩訶薩、因緣和合を觀察して方便智をうると名づく、と。我に依らずとは此の義云何。種種の因緣に依つて、法、生ずるを以て、我に依らずして生ず。實我の體、無きを以ての故なり。衆緣に依て火、生ず。火の體に熱あり。熱は實體なし　而も因緣和合して火、熱ありと名づくるが如し。是の如く身根を離れずして外に更に實我、有るを知る。實體無きを以ての故なり。實體無しとは虛空に同ずとやせん。有爲に同ずとやせん。若し虛空に同じなれば卽ち是れ物、無し。若し有爲に同じなれば卽ち是れ無常なり。我、人、衆生の壽命等とは可化の衆生の爲に種種に名を說く、實我有るに非ざるなり。又、經の中の如し。

大海慧菩薩、聖者大悲思梵の爲に、一切の佛法を成就することを說く。問答品の中の偈に言く諸

法は因緣によつて生ず。彼の法は實體なし、法、若し實に體、無くんば、彼の法は實に生ぜざるなり、菩薩、衆生の是の如く實際なきを知り、彼の實際智に依て、諸法の虛實を知る。

是の義を以ての故に、菩薩は　一切の法は因緣和合して生じ、衆生には實體無きを知る。若し是の如くんば、一切世間の心識は皆、是れ虛妄の分別なり。彼の菩薩、心、一切の法に於て實際平等の無礙智を行ず、卽ち是れ初心なり。是の故に名づけて初めて阿耨多羅三藐三菩提の心を發すとなす。是の故に、偈に言く、

彼は凡地を見ず、彼の體、空なるを以ての故に。是の故に諸佛は　彼の凡夫地を過へたること

名付く。不動の法を以ての故に、五怖畏を過ゆ。所謂、不活畏、惡名畏、死畏、墮惡道畏、大衆威德畏、なり。彼を皆、遠離す。何を以ての故に。是の諸の菩薩は我、等の粗を離るゝを以ての故なり。凡夫地を過れば彼の過るもの九種あり。應に知るべし。菩薩の位に入るは、位、過る、初めに、出世間の心を成ずるは始めて胎に住するが如く、法に相似なるが故に。佛家に生在するは家、過る、方便般若の生ずるは家に生るゝと法、相似なるを以ての故に。種姓の尊貴、譏嫌すべき無きは種姓過る。大乘の行を以てするは子を生ずると法、相似なるを以ての故に。一切の世間の道に過るは、出、過る、世間の道は出る道を攝取すること能はず、生るゝと、法、相似なるを以ての故に。出世間の道に入るは、入、過る、出世間の道は入る道を攝取し、生るゝと、法、相似なるを以ての故に。善く菩薩の法の中に住するは、身、過る。大悲を以て體と爲し、他事を作して卽ち是れ己事となし、自身の體、法に相似なるを以ての故に。善く菩薩の正處に住するは、處、過る。世間の方便、不染の善巧を捨てず正しく住するは、生じて處に住すると法、相似なる故に。三世平等の眞如の法の中に入るは、業、過る。空の聖智に順ずるは生命、法に相似なる故に。如來の種の中において畢定して、阿耨多羅三藐三菩提を究竟するは、畢竟、過る、佛種は斷ぜずして涅槃の道を究竟するは成就と法、相似なる故に。是の如く、凡夫生じ、菩薩生じて、胎に入りて相似ならざるを示現す。有染、無染を以ての故なり。是の如く、次第して家、相似ならず。種姓、相似ならず。出、相似ならず。入、相似ならず。身、相似ならず。處、相似ならず。生業、相似ならず。成就、相似ならず。是の如く尊者、婆藪槃豆は畢竟成就心を說けり。餘の論師、更に法の釋を異にする有り。偈に言く

　菩薩摩訶薩何等の心を生ずるを以て世間の虛妄を見るを佛說いて彼の初心とす。

　此れ何の義を明せる。世間の虛妄を見るとは、一切の世間は唯、因緣によつて生じ、實體、有ること無きを以てなり。尊者、龍樹菩薩、偈をといて言ふが如し。

經典、路伽耶等を讀み、四には、一切の文辭を嚴飾することを習學するなり。此の四種に親近すること有らむ者は、但、世利を增し、法利を增さゞるなり。と。

復、經の中に、大德迦葉、文殊師利に白す、有り。[一四]五逆の人、能く、阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、諸の功德を修し、大菩提を證すること有るも而も羅漢は能はざるなり。譬へば、根敗の人は、五欲の境界に於て、能く爲す所無きをもつて增益する所、無きが如し。是の如く、聲聞辟支佛の人は諸の結使を離れ、一切の佛法に於て能く爲す所、無きをもつて增益する所、無く、是の如く、佛と法の力を觀察すること無し。是の故に、文殊師利、一切の凡夫の如來に恩を報ずるは聲聞に非ざるなり。凡夫の人は、佛の功德を聞いて三寶の種を斷絕せざるが爲の故に、能く阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。聲聞の人は復、身終るまで諸佛の法、[一五]十力、[一六]四無畏等を聞くと雖も、而も阿耨多羅三藐三菩提の心を發すこと能はざるなり。又、般若波羅蜜經の中に說いてのたまはく、諸天子、未だ、阿耨多羅三藐三菩提の心を發さゞる者は、彼の人、應に大菩提心を發すべし。已に聲聞、辟支佛の位に入るものは、復、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すこと能はず。何を以ての故に。一切の聲聞、辟支佛等は生死の流を斷ぜるを以て、數數、世間に生を受け、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すこと能はざればなり。諸の菩薩摩訶薩は初地の中に於て、實諦を見る故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、因を失はざる故に深心を攝得す、般若波羅蜜を以て如實に修戒の行を攝得し、身命に著せず唯、衆生を利益す。彼を修行する時、名づけて不退轉菩薩と爲す。應に知るべし。是の故に如來、十地修多羅の中に說いてのたまはく。菩薩、是の如き心を生ずれば卽ち時に、凡夫地を過へて菩薩位に入る。佛家に生在し種性の尊貴、譏嫌す可き無きは一切の世間の道に過れり。善く菩薩の法の中に住し、善く菩薩の正處に住せば、三世平等の眞如の法の中に入り、如來の種の中において畢定して、阿耨多羅三藐三菩提を究竟す。菩薩、是の如き法に住するを、菩薩歡喜地に住すと

路伽耶(lokāyata)。順世外道と言ひ、享樂主義の一派である。

【一四】五逆とは五逆罪にして、殺父、殺母、殺阿羅漢、出佛身血、破和合僧を言ふ。

【一五】十力とは左の如し。
一、知覺處非處智力。
二、知三世業報智力。
三、知諸禪解脫三昧智力。
四、知根上下智力。
五、知種々解智力。
六、知種々界智力。
七、知遍趣行智力。
八、知天眼無礙智力。
九、知宿命無漏智力。
十、知永斷習氣智力。

【一六】四無畏とは左の如し。
一、一切智無所畏。
二、漏盡無所畏。
三、說障道無所畏。
四、說盡苦道無所畏。

て、所修の行に隨ひ、皆、[一〇]毘離耶波羅蜜を增長し成辦するを以て、速かに疾く、阿耨多羅三藐三菩提を成就す。諸の菩薩摩訶薩は薩婆若を求むるを以て、無因、顚倒因を遠離し、正因果に隨順せることを示現す。是の故に、如來は此の修多羅を說きたまへり。問て曰く、復、何の義を以て如來、此の修多羅を說きたまへるや。答へて曰く、不定聚に依らずして菩薩は、定聚を求むる故なり。何等の行をか成就して正定聚に入ることを得むや。彼の菩薩は正定聚に入るために正因の行を修することを示現す。是の故に如來、此の修多羅を說きたまへり。此の義云何。

菩薩、未だ[一一]初地の正位を證せず、無量劫に善根を習集すと雖も、而も未だ能く不退轉の位を得ず、未だ畢竟して無怖畏の處を得ざれば、心未だ安隱ならずして常に世間の苦惱の爲に逼られて、未だ菩提心の根本の慈悲心の力を得ず。未だ增上する力を得ざるが故に、世間の道智を以て十二因緣を觀察し、如實に有爲の行を觀じて、以て世間の道に依る。寂靜の法界を觀じて大涅槃を求むるも方便智、無き故に、聲聞辟支佛地に墮す。若し聲聞辟支佛地に墮さば三種の失あり。何等をか三と爲す。一には、一切の大乘の善根種子を退失す。二には、能く一切衆生に與ふる樂の因を退失す。三には薩婆若智を退失す。是の義を以ての故に、如來、經の中に說て言く、迦葉、譬へば一切の世間の天人、復、僞の瑠璃珠を修治すと雖も、而も彼の僞の珠は終に眞の琉璃寶と作すこと能はざるが如く、是の如く、迦葉、一切の聲聞の、戒、定、慧、及び[一二]頭陀、等を修せる一切の功德は、終に道場に座して、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ること能はざるなり。迦葉、譬へば大毘琉璃を修治して、意に隨つて能く無量百千萬億の珍寶を得る如く、是の如く迦葉、菩薩の行を修するが故に能く、一切の聲聞、辟支佛等、及び人天より出生すと。此の義に依つての故に、如來、寶積經の中に說きたまへり。菩薩に四種の善知識に非ざるものあり。何等をか四と爲す。一には、聲聞を求むる人は但、自ら度せむと欲す。二には、緣覺を求むる人は、小事を喜樂す。三には、[一三]外の

【一〇】毘離耶とは精進の意。

【一一】菩薩の十地の中、第一地の歡喜地なり。

【一二】頭陀(Dhūta)。少欲知足の佛教徒たる修行の意。

【一三】外とは外道の意であり、

爲す。又、諸の世間に於て、心疲倦せずと言ふは、大慈、大悲の心、成就するを以ての故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩摩訶薩は、世間の一切の衆生、愚箭に射られて、心、苦惱を受くる爲を以て、大慈、大悲の心、成就せるを以ての故に、衆生の利を見て卽ち己のが利となし、是の故に大慈、大悲の心、生じ、則ち能く一切の衆生を利益す。是の故に名づけて、諸の世間に於て心、疲倦せずと爲す。又、如實に一切の法の自體の相を知ると言ふは、方便、成就するを以ての故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩は、善く世諦を知り、善く第一義諦の方便を知る。是の故に、有無の二邊に著せざるなり。此れ何の義を明せる。菩薩は、識の境界の事を見ると雖も、而も先に已に識の境界の事を觀察す。何を以ての故に。常に、第一義諦の深心の力を捨てざるを以ての故なり。是の故に、有の邊見に墮著せず。常に第一義諦を捨てずと雖も、而も常に善く、世諦の事を知る。何を以ての故に、常に明らかに諸の有爲の行を見て、世間の心念、言說を捨てざるを以ての故なり。是の故に、無の邊見に墮著せざるなり。善く此の二種の義を知るを以て、是の故に名づけて、如實に一切の法の自體の相を知ると爲す。又、心、疲倦せざるを以ての故に他智に依らずして、速かに疾く阿耨多羅三藐三菩提を成就すと言ふは、般若波羅蜜を成就するを以ての故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩摩訶薩は般若を以て有爲の法を觀察する故なり。此れ復、何の義ぞ。菩薩は諸の有爲の行を觀察して、人、無く、衆生、無く、主、無く、自ら在る事、無し。迭に共に相因て增長し、力、有り。本業に依つて一切の業を造ること、猶、幻師の作る所の幻人のごとし。往來、跳躑の種種の技術疲倦すること無ければ、是の故に名づけて、心、疲倦せざるを以ての故に、と爲す。又、心、疲倦せず、とは衆生の相を離るゝを以ての故なり。此れ何の義を明せる。有爲の諸の行は、一切、實、無く、唯、種種の諸の業のみ有つて、他力を行ぜしめて相依るが故に、能く有爲の諸の行を成就す。是の故に、菩薩は有爲の法は實には神我、無きことを知り、而して、他智に依らずし

羅蜜を成就するを以ての故に能く清淨の施等の功德は菩薩の道に住せしめ、深心等の四句を示現し、能く施等の四句を攝取す。これ菩薩、不同の法を以て能く一切種智を得るなり。是の故に如來、此の修多羅を說きたまへり。

問て曰く。復、何の義を以て如來、此の修多羅を說きたまふや。答へて曰く、無因、顚倒因、を遮て、正因果に隨順する爲に、是の故に如來、此の修多羅を說きたまふ。此の義 云何。阿耨多羅三藐三菩提に於て退せずと言ふは深心を成就するを以ての故なり。此れ何の義を明せる。諸の菩薩摩訶薩は法界を見る時、卽ち永く菩提心の障、謂ゆる身見等の一切の煩惱を離れ、聲聞辟支佛地を出過して菩薩位に入るを得るを以て、初地に於て菩提の心を起して因を失はざるが故に、深心を證得す。是の故に名づけて阿耨多羅三藐三菩提に於て退せずとなす。又、轉ぜずと言ふは、勝法を證するを以ての故なり。此れ何の義を明せる。施の行を成就するを以ての故なり。此れ復、何の義ぞ。無損害の心を起して、根本業道に上上の勝行を攝取す。是の故に、轉た根本の業道を離れずして、施等の行を修行し、一切處に於て退せざるなり。是の義を以ての故に名けて轉ぜずとなす。又、菩薩行を行ずる時、一切の諸の魔、怨、敵を降伏すと言ふは、善知迴向方便心を成就するを以ての故なり。是れ何の義を明せる。略して、四魔を說く、謂く、煩惱魔、陰魔、死魔、及び、天魔なり。唯、煩惱魔を以て根本と爲す。煩惱魔に依て、餘の三魔有り。何を以ての故に。諸の凡夫は、煩惱が心に纏るを以て、此の煩惱所纏の心に依て世間に於て彼處の樂を樂む。布施等の法は、天道に迴向す。此の義を以ての故に、彼の陰魔、死魔の爲に纏せられ、天魔に繫屬す。是の故に菩薩は、身見等の一切の煩惱を斷じて、復、能く不活等の畏を遠離し、自身の樂を捨てゝ、諸の衆生を利益せんと欲する爲の故に、慈悲、布施、等の行を修習し、善根功德を皆悉く、薩婆若[九]智に迴向し、一切の諸の魔、の惡道を遠離す。是の故に名づけて、菩薩行を行ずる時、一切の諸の魔、怨、敵を降伏すと

【九】薩婆若（Sarvajña）。一切知の事。

卷の第一

彌勒、世尊に歸命して問て曰く、何が故に、如來此の[五]修多羅を說きたまふや。答て曰く、捨等の四句は施戒修行の相、三種の功德を示現す。是れ菩薩、外道、[六]聲聞、辟支佛の共法なり。深心等の四句は卽ち彼の四法は唯、菩薩行なることを示現す。外道、聲聞、辟支佛と共ならず。是の故に如來、此の修多羅を說きたまへり。布施は施の功德を示現し、遠離殺生等は戒の功德を示現し、慈悲等の二句は修行の功德を示現す。此の義、云何。外道、凡夫有つて善知識を離れ、正法を聞かず、善く思惟せず、說の如く行ぜざる故に。常に見等の能集の業因に妄執し、諸の[七]結使、等相依り力を有して世間の因を增長する故に、妄執に堅著して、決定して世間の因を成就するが故に、實諦の見を離るゝが故に、他心を利益すること無きが故に、世樂に貪著する故に、彼の諸の外道は施等の善根種子、有りと雖も、疑悔あるを以ての故に、愛の水、識を潤ふし、[八]五取陰地に住し、無明の土に覆れ、時節和合し能く識芽を生じ、次第に增長して世間の果を成す。又、聲聞辟支佛の人は善知識に親近し、已に生死の海を渡つてより、生死の海の人を度せむと欲し、世間の過患を說くを聞き復、自ら少見し、世間の苦樂、涅槃の樂を厭ひ、世間を捨てんと欲して出る道を追求す、施等の功德を取らずと雖も而も亦、施等の功德を離れず、能く煩惱を伏し上勝の法を得。是の義を以ての故に復、施等の善法を修習すと雖も四法無きを以ての故に大菩提を得ず。又、菩薩の人は畢竟、具足して八法を成就し大事を建立す、重擔を荷負し眞の善知識に親近し、深く世間の過患を見、涅槃寂靜を知り、衆生の爲の故に世間の苦を厭はず、初め菩提心を發してより因を失はざるが故に深心成就す。自身の樂を捨てゝ衆生を利益せんが爲の故に、施、等を修行して功德を大菩提に迴向す、方便力に依て微妙の施、等の功德を增長し能く自身を護つて聲聞辟支佛地に墮せず、究竟して般若波

【五】修多羅(Sûtra)は經と譯す。
【六】聲聞(Śrāvaka)は四諦の法に依て單に灰身滅智するを理想とし自行のみにし化他の行無きもの。辟支佛は獨覺と譯し飛花落葉を見て獨り無常を悟り小乘の涅槃に入るもの。
【七】結とは煩惱の異名なり。
【八】五取蘊とも書く、煩惱に隨ひ、煩惱を生ずる五蘊の意。

竟して不可譏呵の身業を成就し、畢竟して不可譏呵の口業を成就し、畢竟して不可譏呵の意業を成就す。彌勒、是の如き諸の菩薩摩訶薩は畢竟して大悲心を成就せるなり。彌勒、云何んが諸の菩薩摩訶薩、善知方便を成就せる。彌勒、若し諸の菩薩摩訶薩、善く世諦を知り、善く第一義諦を知り、善く二諦を知る。彌勒、是の如き諸の菩薩摩訶薩は畢竟して善知方便を成就せるなり。

彌勒、云何んが諸の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を成就せる。彌勒、若し諸の菩薩摩訶薩、是の如く覺知す。此の法に依て此の法あり、此の法に依て此の法生ず。所謂、無明は行に緣たり、行は識に緣たり、識は名色に緣たり、名色は六入に緣たり、六入は觸に緣たり、觸は受に緣たり、受は愛に緣たり、愛は取に緣たり、取は有に緣たり、有は生に緣たり、生は老死憂悲苦惱に緣たり。是の如く、唯、大苦の聚集せるあり。彌勒、此の法、無きが故に、此の法なし。此の法、滅するが故に、此の法、滅す。所謂、無明、滅すれば則ち行、滅す、行、滅すれば則ち識、滅す、識、滅すれば則ち名色、滅す、名色、滅すれば則ち六入、滅す、六入、滅すれば則ち觸、滅す、觸、滅すれば則ち受、滅す、受、滅すれば則ち愛、滅す、愛、滅すれば則ち取、滅す、取、滅すれば則ち有、滅す、有、滅すれば則ち生、滅す、生、滅すれば則ち老死憂悲苦惱、滅す、是の如く唯、大苦の聚集して滅する有り。と。彌勒、是の如き諸の菩薩摩訶薩は畢竟して般若波羅蜜を成就せるなり。彌勒、是れを諸の菩薩摩訶薩、畢竟して八法を成就すと名づけ、阿耨多羅三藐三菩提において退せず、勝進の法の中に於て退せず轉ぜず、菩薩行を行ずる時、一切の諸の魔、怨、敵を降伏して、如實に一切の法の自體の相を知り、諸の世間に於て心、疲惓せず、心、疲惓せざるを以ての故に他智に依らずして、速に疾く阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり。佛、此の經を說き已つて、彌勒菩薩摩訶薩、及び餘の諸の菩薩摩訶薩、比丘比丘尼、優婆塞優婆夷、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽・人、非人等、一切大衆、佛の所說を聞いて、皆、大に歡喜し、信受し、奉行せり。

【四】 優婆塞優婆夷は、在俗の信者の男女なり。天より摩睺羅伽、迄を八部衆と云ふ、夜叉は鬼神の一にして地夜叉、虛空夜叉、天夜叉等あつて虛空と天の二夜叉は飛行す。乾闥婆は天の音樂の神。阿修羅は常に大海の底に住みしば〳〵帝釋と戰ふ驕慢な神。迦樓羅は金翅鳥にして翅及頭が金色で兩翅の長さ三百三十六萬里あり。緊那羅は人に似て一角あり天に居て音樂を奏するもの。摩睺羅伽は大蟒を象徵する神。

に於て、心、疲惓せず、心疲惓せざるを以ての故に他智に依らずして速かに疾く阿耨多羅三藐三菩提を成就す。何等をか八と爲す、彌勒、所謂、諸の菩薩摩訶薩は深心を成就し、行心を成就し、捨心を成就し、善知迴向方便心を成就し、大慈心を成就し、大悲心を成就し、善知方便を成就し、般若波羅蜜を成就す。

云何んが諸の菩薩摩訶薩は深心を成就せる。彌勒、若し諸の菩薩摩訶薩、佛を讃歎し及び、佛を毀呰せるを聞くも其の心、畢竟して阿耨多羅三藐三菩提に於て堅固にして動ぜず、法を讃歎し及び法を毀呰せるを聞くも、其の心、畢竟して阿耨多羅三藐三菩提に於て堅固にして動ぜず、僧を讃歎し及び僧を毀呰せるを聞くも、其の心、畢竟して阿耨多羅三藐三菩提に於て堅固にして動ぜず、彌勒、是の如き諸の菩薩摩訶薩は畢竟して深心を成就せるなり。云何んが諸の菩薩摩訶薩は行心を成就せる。彌勒、若し諸の菩薩摩訶薩、殺生を遠離し、偸盜を遠離し、邪婬を遠離し、妄語を遠離し、兩舌を遠離し、惡口を遠離し、綺語を遠離す。彌勒、是の如き諸の菩薩摩訶薩は畢竟して行心を成就せるなり。彌勒、云何んが諸の菩薩摩訶薩、捨心を成就せる。彌勒、若し諸の菩薩摩訶薩、是れ能く捨主となり、是れ能く施主となり、諸の沙門、及び婆羅門、貧窮、乞匃、下賤の人等に、衣食、臥具、及び病に隨て湯藥所須の物を施す。彌勒、是の如き諸の菩薩摩訶薩は、畢竟して捨心を成就するなり。彌勒、云何んが諸の菩薩摩訶薩、善知迴向方便心を成就せる。彌勒、若し諸の菩薩摩訶薩、修する所の善根、謂ゆる身、口、意、の業、皆悉く、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。彌勒、是の如き諸の菩薩摩訶薩は畢竟して善知迴向方便心を成就せるなり。彌勒、云何んが諸の菩薩摩訶薩大慈心を成就せる。彌勒、若し諸の菩薩摩訶薩、畢竟して大慈の身業を成就し、畢竟して大慈の口業を成就し、畢竟して大慈の意業を成就す。彌勒、是の如き諸の菩薩摩訶薩は畢竟して大慈心を成就せるなり。彌勒、云何んが諸の菩薩摩訶薩、大悲心を成就せる。彌勒、若し諸の菩薩摩訶薩、畢

彌勒菩薩所問經論

後魏天竺三藏菩提流支譯

是の如く我聞けり。一時、[一]婆伽婆、王舍城耆闍崛山の中に住したまひ、大比丘衆千二百五十人と倶なりき。幷に諸の[二]菩薩摩訶薩十千人等あり。爾の時に、彌勒菩薩摩訶薩卽ち坐より起つて偏に右の肩を袒にして右の膝を地に著け、合掌して佛に向ひたてまつつて佛に白して言さく、世尊、我今、少法を以て如來應正遍知に問ひたてまつらむと欲す、不審。世尊、聽許したまふや不や。爾の時に世尊、彌勒菩薩摩訶薩に告げて言はく、彌勒、汝の心念に隨つて如來應正遍知に問ふ。我當に汝が爲に分別し解說して汝をして心喜せしむべし。爾の時に彌勒菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、世尊、是の如く願樂して聞かんと欲す。世尊、諸の菩薩摩訶薩は畢竟して幾ばくの法をか成就して、[三]阿耨多羅三藐三菩提において退せず、勝進の法の中に於て退せず轉ぜず、菩薩行を行ずる時、一切の諸の魔、怨、敵を降伏し、如實に一切法の自體の相を知り、諸の世間に於て、心、疲惓せず、心、疲惓せざるを以ての故に他智に依らずして速かに疾く阿耨多羅三藐三菩提を成就せむや。爾の時に世尊、彌勒菩薩摩訶薩に告て言はく、善哉、善哉、彌勒、汝、今、乃ち能く如來に是の如き深義を問ふ。佛、復、彌勒菩薩摩訶薩に告て言はく、汝、今、應に一心に諦聽すべし。吾、當に汝が爲に是の如き深義を分別し解說すべし。卽ち時に彌勒菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、世尊、是の如く願樂して聞かむと欲す。佛、復、彌勒菩薩摩訶薩に告て言はく、彌勒、若し諸の菩薩摩訶薩、畢竟して八法を成就せば、阿耨多羅三藐三菩提に於て退せず、勝進の法の中に於て退せず轉ぜず、菩薩行を行ずる時、一切の諸の魔、怨、敵を降伏し、如實に一切の法の自體の相を知り、諸の世間

【一】婆伽婆とは佛陀に同じ。

【二】菩薩（Bodhisattva）とは覺有情、大士等と譯し、上、菩提を求め下衆生を敎化し人も自分も共に成佛せんとする積極的慈悲主義の人である。菩薩摩訶薩とは摩訶は大と譯し重稱したのである。

【三】阿耨多羅三藐三菩提（Anuttara samyak saṁbodhi）とは無上正遍智と譯し佛陀の無上絕對なる圓滿の覺りを意味するなり。

天、二乘に異る意味を、くど〳〵と說明した迄で、十二因緣觀にしても、三世に分け、且つ生理的解釋に重きをおいてゐる。

涅槃經との關係は明白でなく、勿論引用は無いが、論中、度々、涅槃を說明する場合に、涅槃樂とか、大涅槃と言ふ句を使用してゐるのは大涅槃經の影響かとも思はれる。

最後に本論中の塔觀を述べて解題を終らう。本論は世親已後のものなる故、說明する迄もなく、舍利塔(Stūpa)ならざる記念塔卽ち制多(Caitya)の盛に建立された時代の作である。從つて本論中には種々の塔が記されてゐる。例へば、六卷に、

○「又女人の愛念の心の如きの故に、諸の幡蓋及び華鬘を以て本心より實に兒塔に供養せんと欲し、而かも實には辟支佛塔を供養し、是れ兒塔なりと謂ひ辟支佛より無量の福を得。」

○「或は諸佛如來に施與し、或時は形像塔廟に施與す。是れを自の利益の爲にして他の利益に非ずと名づく。」

又、七卷には次の如き舍利塔を說いてゐる。

○「一には器世間の地、未だ塔あらざる處に、中に於て塔を立つるなり。」

○「若し人有つて梵如來に依つて舍利塔を立つれば彼の人能く梵行の功德を生ず。」と。

右の例に依り、本論中、舍利塔、記念塔の二種あるを知り、舍利塔の中には兒塔あり、二乘の塔あり、且つ、何處でも建塔には功德を伴ひ、塔を供養するも亦功德多きを述べてゐて、建塔功德等を否定せざるは明白である。尙形像供養を述べてる事を注意すべきである。

元來、塔は佛敎徒の間にあつては、舍利塔が古く、記念塔は新しいのである。そして兩者は構造も相違し、後者は後世の二重塔や三重塔の如き形式で、多くは中に佛像を安置したものである。從つて此種の塔は佛像が製作されるやうになつてからの事と見て差支へない。そして其始めは、中印度でなく、印度の西北、印度河の上流地方、卽ち古代の犍陀羅王國內に先づ發生し、漸次諸方面に傳播したものと見てよい。從つて是等諸種の塔を說く經論は其の成立が餘程、遲れることになり、本論の如きは世親已後の述作としての要素を遺憾なく示してゐるのである。尙、塔其他に關して書きたい事もあるが略す。

終りに本論の國譯に際し、文學士岩間滿良君の補助を得たることを記して其の勞を謝する。

昭和七年八月廿五日

譯者　布施浩岳　識

者不明の論書で、論末の註にある如く、寶積經の部分的註釋である。大體に於て、流支は世親の造書を多く將來し、又そこに流支の特色もあるので、本論も世親造ではないかと思はれるが、本論第一卷に、尊者婆藪槃豆說として尊稱を附して世親を引用してゐる已上、世親の作ならざるは明かである。内容から見ると、唯識說は餘り現れず、龍樹の說も引用してゐる。加之、流支は提婆の著書すら傳譯してゐる。右の理由から、本論は世親已後の作であつて、何づれかと言へば龍樹系人師の造ではないかと考へられる節もある。

二、本論の内容

本論は寶積經の部分的註釋で、内容としても、佛教史上から見ても大したものではない。けれども印度西域の佛教を凡ゆる方面から觀察するには、そして暗い佛教史に路づけるには、從來支那、日本に於て餘り鑽仰されなかつたものでも、案外役に立つ事がある。さう言ふ意味から、氣づいた事項を左に記して見やう。

先づ始めに本論に引用されたる經名を列記しやう。

（○印を附せるは最も多く引用せらる）

迦旃延經
大因緣經
城喩經
功德生經
鹽喩經
思益梵天所問經
方便經
○十地經
淸淨毘尼大乘經
無垢德女所說經
○無盡意菩薩經
毘摩羅吉利致所說經
伽耶山頂經
金剛密迹經
○文殊師利問菩提經
智印三昧經
娑伽羅龍王經
寶女經
法印經
阿耨大池聖者龍王經
般若波羅蜜經
寶積經

已上の他に未だ見落しがあるかも知れぬが、大體は右に於て盡きる。是れだけ澤山の經典を引用しながら、十地經は引用しても華嚴經を引用せず、其他、無量壽、法華、涅槃も見えぬなど注意を要する。

尙此の他に、論師としては世親が一回、龍樹が二回出てゐるが、左の如く尊稱が異つてゐる。

如是、尊者婆藪槃豆說
尊者龍樹菩薩說偈言
龍樹菩薩摩訶薩集菩提功德論

次に、本論中の唯識說は、前にも一言せる如く、菩提流支の譯出だからとて、必ずしも濃厚では無い。識の問題は出て來るが、七識、八識は姿を見せず、說明のあるは六識迄である。本論は菩薩の人

彌勒菩薩所問經論解題

一、本論の譯者及著者

本論の譯者、菩提流支は北魏宣武帝の永平元年(西紀五〇八年)に洛陽に來り、爾來二十餘年の間、傳譯事業に從事したとは歷代三寶紀や、序文等の記錄する所で、北魏が東西に分裂して後は鄴に赴いて相變らず傳譯に從事したもので、其譯出に就て費長房は次の如く記してゐる。即ち、「所翻の經論、筆受の草本、一間の屋に滿つ」と。道宣は此の錄を見て書いたものに相違ないが、續高僧傳に次の如く言つてゐる。

「凡て出す所の經は三十九部一百二十七卷なり。即ち佛名、楞伽、法集、深密等の經、勝思惟、大寶積、法華、涅槃等の論、是なり」。

是で見ると、菩提流支が、涅槃經論なる一書を傳譯してゐるやうに見え、そしてそれが、現存涅槃論と同じものではないかと言ふ疑問も起るが、道宣の言つてる「涅槃の論」とは恐らく、長房錄の流支譯出目錄中にある「破外道涅槃論」であらう。

此の論は現存しないから明言しかねるが、其の題目から觀て、恐らく眞諦譯出の涅槃經本有今無偈論一卷と同じものであつたらう。と言ふのは、標題のみを觀ると現存涅槃論と同じものではないかと思はれるが、現存涅槃論は涅槃經の部分的註釋ではあつても、其の內容に「破外道」の論旨を含まない。之に反し、涅槃經本有今無偈論は同樣に一卷であり、涅槃論の部分的註釋であると同時に、其の中には、特に「三世義」の中に、破外道の內容を充分に持つてゐるからである。

其他、流支の傳譯に就ては尙問題もあるが、略す事として佛教史上に於ける流支の功績を一言しやう。

支那北地の佛教は姚秦時代、羅什三藏を迎へて長安を中心に、急激の進歩を示したけれど、羅什の死後間もなく、北方は戰亂の巷と化し、やがて北魏の一統とはなつたが、羅什時代の隆盛は容易に見られなかつたと言ふよりは、北地の佛教は南地に比すれば殆んど滅亡に近かつたのである。然るに、菩提流支渡來して、主として世親系の佛法を弘傳するや、頓みに勢力を回復し、地論の研究より引いては華嚴研究を勃興せしめ、後世に非常な影響を及してゐる。流支の功績や偉大なりと言ふべきである。

次に本論の著者に就て一考する。本論は流支譯出經論中、大寶積經論と共に作

◇　◇

目次

釋經論部 八

布施浩岳
泉芳璟
譯

國譯一切經

大東出版社藏版